

小説 眠り姫 THE SLEEPING BE@UTY

つっかけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ねえ、知ってる？桜の樹の下には女の子が眠ってるんだってー」

劇場版『THE IDOLM@STER MOVIE 輝きの向こう側へ!』内での「生つつすか!?レボリューション」で予告された架空の映画作品。

その二次創作（想像）作品です。

あの予告で出たあのセリフやこんな場面もしっかり作って行く予定です。

出演

如月千早 天海春香 星井美希

水瀬伊織 我那覇響 三浦あずさ 四条貴音

秋月律子 高槻やよい 菊地真 萩原雪歩

双海亜美 双海真美 音無小鳥（特別出演）

目次

序 章	くすべての始まり	1
一章	—前編— 出会い	16
一章	—後編— 違い	32
第二章	—笑顔の底—	48
第三章	—世界の分岐—	64
第四章	—扉—	85
第五章	—脅威—	106
第六章	—開戦—	126
第七章	—涙—	137
第八章	—友—	158
第九章	—邂逅—	168
第十章	—幸せの意味—	182
第十一章	—素直な心—	198
第十二章	—激戦のカギ—	215
第十三章	—神の気まぐれ—	238
第十四章	—決意と覚悟—	258
第十五章	—最後の奇跡—	272
第十六章	—あの空見上げて—	285
エピローグ	—眠り姫—	305
眠り姫	THE @FTERS BE@UTY—紫—	310
眠り姫	THE @FTERS BE@UTY—桃—	321
眠り姫	THE SLEEPING BE@UTY—完結—	331
小説 眠り姫	THE DANKAI BE@UTY—質疑応答編—	347

序 章くすべての始まりく

ここは異能の能力を持つ者たちが集まる、とある学院。

丘の上に創設されたその学院は、西洋風の校舎で、周囲には自然に覆われた森や湖、川もあれば控えめではあるが草原もある。

少し離れた場所に人々が賑わう大きな街があり、街の北にある草原を4キロメートルほど進む。

その先には深い森があつてその入り口から更に3キロメートルほど真っ直ぐ進むと緑の木々から打って変わって満開の桜並木が姿を現す。その桜の木を抜けていくと開けた小高い丘の上にその学院が聳え立っている。

洋館のような校舎がある。

赤レンガの壁に覆われ屋根には青みがかつた木材が使われている。

この校舎は3階建てで空から見ると四角い形の建物になっている。

中央には縦40メートル、横が20メートルほどのフットサルコートとほぼ同等の広さの中庭がある。殆どが芝生で覆われていて建物の入り口から2メートルで芝生に変わり、芝生の間には補整された石の床が張られ、2階部分を支える石柱が何本も等間隔で並んでいる。壁際に大きな鉢に入った植物が等間隔で置かれ、各校舎へ入るための扉やガラス窓がある。陽気で長閑な中庭は学生に人気の場所で、芝生部分は何も置かれておらず広々とした空間で地べたに座つての談笑やレッスンは、能力の訓練なんかに使われている。

校舎の北東には約1ha（ヘクタール）程の大きさの円を描いた湖があり、畔に4人ほどが乗れる手漕ぎの小船が2隻置かれている。

そして校舎の北には、周りの桜とは比べ物にならないほどの立派な一際大きい桜の木が生えている。樹齢幾百年という太い幹に力強く咲き誇る白桃色の花からヒラヒラと花びらが宙を舞っている。

この学院は主に異能の力である『能力』を育てるための場所だ。国中から集められた能力者を選抜して、特に秀でた才能ある者だけが入

学することを許される。

世界では一般的に子供からお年寄りまで能力を使うことが出来る。しかし、自分の能力をしっかりと理解することも含めて能力を使うために必要な『魅力』と呼ばれる体内要素の違いや、修練の仕方がわからないなど多くの者は能力をうまく使いこなすことが出来ず、結果的に日常生活で使用することは殆どない。だがそんな中でも少しの可能性があるのならばと入学を希望する者が後を絶たない。

入学は3年に一度の少人数制で全員卒業できる年もあれば1人も卒業できないこともある。そして卒業生の中でも特に優秀な成績と実力の持ち主には3年次での特別受験資格『アイドル選定試験』を受けることが出来る。そのテストはこの世界の人間の誰もが羨む栄えある職業『アイドル』になるための試験で、それに合格することで卒業後にアイドルとしての資格が与えられるのだ。

3年前の春。入学したのは11名の将来有望な少女達。入学時の能力や実力を審査する、能力値試験によって選ばれた子供達だ。この11名の内卒業出来たのは8名。

そして中でも特に優秀な成績で卒業したのが今、校舎の入り口前に佇む二人の少女。

「こんなに朝早くから呼び出すなんて律子先生は鬼軍曹なの。」

「まあティーチャー律子も楽しみにしてたみたいだし、せっかくだから見せてあげないと悪いよ美希。」

美希と呼ばれた彼女は先日、優秀な成績で卒業した一人だ。

腰近くまである綺麗な金髪に少し眠そうな顔をした美少女で、フレッシュグリーンのリボンが付いた黒の大きな薔薇のヘアアクセサリーがついている。

黒い生地で、黄色いボタン留めのある袖から服の側面にかけて赤いラインが太めにひかれ、肩に付くエポーレットは黄色く軍装飾のような作りで、赤・黒・黄の三色のヒラヒラが付いたスカートを履いている。

見た目はそれこそ軍服に近いが、スカートの存在がこれは軍服とは言えないと主張しているようだ。

その美希が少しばかりふて腐れながら口を漏らす。

「だからって朝の6時は無いの。そんなに早くなくてもいいって思うな。春香だつてそう思うでしょ?」

春香と呼ばれた彼女は、もう一人の優秀成績者だ。リボンがとつても似合う見た目は普通の女の子。

「……ほんっ」

……可愛い女の子。

こちらも服の形こそ同じだが真っ赤な薔薇のヘアアクセサリーを乗せ、白い生地にピンクのラインで黄色の袖にボタン留め、エポレーットも同じく黄色で軍装飾のような仕様になっており、ピンク・白・黄色と美希の服とよく似たデザインになっている。

二人は入学当初からその才能を魅せた言わば天才だ。3年間の授業とそれ以上の成果をアイドル選定試験で発揮して魅せた。友人にも良く恵まれ歴代アイドル合格者の中では珍しい二人同期アイドル合格者として祝福された。

3日前の卒業式で学院を卒業し、寮の荷物も全て整理して苦楽を共にした学友達は一人一人と故郷に帰って行った。

そしてこの日、先日届いたばかりの『アイドルの制服』を着た二人の晴姿を是非見たいと言ったのが、二人の恩師である『律子』と呼ばれる学院唯一の講師だ。

学内ではティーチャー律子と呼ばれていて、とても人気がある。

3年間、誰よりも親身に能力や友人達の相談に乗ってくれていた彼女を二人はとても信頼していた。その人が自分達の晴姿を見たいと言ってきたのだ。そのくらいの気前を持たないでは律子に受けた恩など返せはしないだろう。

「美希ってば今更だけど本当にアイドルが務まるのか不安になってくるよ。」

「む、春香だつてよく転んだり忘れ物多いんだから人のこと言えないの。」

「……………ぷっ」

「……………あはっ」

「あはははははは」

二人は姉妹と言ってもいいほどの親友同士だった。親兄弟の居ない二人は幼い頃から施設で育ち、17歳になる春香は美希からすれば自分の面倒を良く見てくれるお姉さんのような存在だった。ドジでマイペースだけど、どんなことにも一生懸命な春香をとても尊敬していた。

春香にとつての美希は、14歳ながらもドジな自分を助けてくれる妹のような存在だった。すぐに欠伸をして中々やる気が起きないのが玉に瑕だが、本気になった美希は誰も敵わないほどの能力を持っている自慢の妹だ。

施設で出会ったときから衣食住を共にし、プライベートも難なく打ち明けられる仲だ。

才能に愛された美希と挫けない強い心を持った春香は二人同時に『Idol』の資格を得ることができた。

Idol（アイドル）とは専門の学院卒業生から特に秀でた能力を持つ者をアイドルに任命。国家公務のための資格を持ち、世界犯罪に對抗し得る組織の地位。

その所属と榮譽を半永久的に持つものとする。ただし、本人が死亡または10年間の消息不明や犯罪を犯した場合、剥奪するものとする。組織の自主的な退役は基本的に出来ないが、相当の理由がある場合は止むなし。というものだ。

アイドル本人が築いた地位、財産は他人（本人と直接の血縁関係者以外）が着手してはならない。つまり友人や親戚、孫より先の子孫に財産が受け継がせられないのだ。

二人は卒業式が終わり、友人と別れ二人で湖に向かうサクラ並木を歩いているとティーチャー律子に呼び止められた。

ティーチャー律子は8年前からこの学院の講師をしている。若干11歳でアイドルの資格を修得してからこの学院の講師を自ら志願した。厳しくもそれ以上に優しい性格から人望も厚く、彼女は友人や

生徒の親族からも信頼されてる。

ティーチャー律子というのは律子が生徒に友人扱いされることが多かったために自分でつけた呼び名だ。本人は気に入っているのだが、彼女のネーミングセンスの無さをからかう生徒もいたりする。

数ヶ月前、湖の畔で美希と春香は、律子に今までアイドルになった教え子の晴れ姿を見てきたことを聞かされていた。

それを毎回楽しみにしていると語った律子に春香が見せますと断言してしまった。美希は持ち前の面倒くさがりが発揮され、今日の呼び出しを拒否しようとしたのだが春香に押し切られてしまった。

「おっそーい律子先生！」

学院での思い出や律子への愚痴を零しながら、律子は時間きっちり姿を現した。

いつも通り、まるで財閥の家庭教師のような格好をしている。少し長い髪を後ろでまとめ、長円形のレンズを使ったリムレスのメガネはテンプルにチェーンをつけて首の後ろに回してぶら下げられる様になっている。

襟付きの純白ブラウスを着てその襟の繋ぎ部分には大きなエメラルドブローチを付けている。ブローチの下からは細長い赤のリボンの端が5センチほど伸びている。キュつとした腰から下は膝下くらいまで裾が伸びる抹茶色のロングスカートと、3センチほどのヒールがある茶色のブーツを履いている。

「待たせたわね二人とも。見せたいものがあるからついていらっしやい。」

「え？ この制服を見たかったんじゃないの？」

「ちよつとした贈り物を用意したのよ。取りに来てちょうだい。」

贈り物と聞いて美希は笑顔になったが、春香は逆に首をかしげている。

律子と美希の会話に違和感を覚えたからだ。いつもなら『律子先生』と呼んだ美希に『ティーチャー律子って呼びなさいっ！』と注意するのだが、今日くらいは多めに見ているのかと思った春香は特に追及せず歩き出した。

校舎の入り口から入ると、レッドカーペットが奥まで敷かれて中央で3方向へ分かれる。左右に分かれたカーペットはそのまま通路に消え、奥まで伸びたカーペットは中庭に続く扉で止まり、左右に広めの階段があつて左側の階段の裏に地下への入り口が隠されていた。この校舎がお気に入りだつた美希と春香は3年間、この地下の入り口にまつたく気付かなかつた。

螺旋階段を下りていくとまつすぐ20メートルほどの直線通路に出る。

この時、美希も春香も妙な感覚に囚われていた。一般的に『嫌な予感』と呼ばれる感覚だ。だが理由が判らない感覚に抗う理由が見つからずそのまま律子についていく。

壁にたいまつが灯つていてその先に一つの木で出来た扉が姿を現した。

「やあここよ。入って。」

扉を開いた律子に促され部屋に入っていく。そしてその部屋を見て春香と美希は頭の芯からサーツと冷えていくのを感じた。薄暗い15畳ほどの広さのこの部屋はさまざまな実験が行われているであろう機材と薬品、無数の本に埋め尽くされた不気味な空間だった。

壁の亀裂や地面の隙間から植物の根が這い出していてあまりにも不気味なその場所に春香は少し身震いした。呆然としていた春香たちの後ろからサツと二人の肩に手が置かれた。呆気に取られていた美希とは違い、春香はゆっくり振り向くと、そこには人に来るとは思えないほどの身の毛も弥立つ笑顔があつた。

その顔を見た春香は、今まで呆然としていた美希も石のように身動きができなくなつてしまった。

「ちよっ！ 律子先生!! 美希たちの行動を封印するなんてどういうことなの!?!」

自分達の後ろから前へと歩いていく律子を目で追う。春香は首が横を向いたまま動けなくなつたため前の状況があまり視界に入つてこない。目の端で何かをしているのだけを見るこゝろが出来た。

「.....あなた、誰?」

「・・・どういふことなの？」

「本来、攻撃型であるティーチャー律子がこれほど強力な補助型の封印術を使うことは出来ないはずだよ。つまりこのティーチャー律子は。」

「偽者・・・なの？」

ここでようやく春香の中での違和感と嫌な予感の正体がわかった。身動き出来ない二人は、こちらに向き直った不気味に笑う律子を見て恐怖した。何とかして封印術を解除しようともがく春香たちにゆつくりと近づくと律子の右手には机から取り出した注射器が黄緑色に発光していた。

律子の視線はまるで品定めをするように春香と美希を交互に見て、数秒の間のあとに美希の前へと歩き出した。金縛りのごとく動きを封印されてしまった美希は目で恐怖を訴えながら自分に迫ってくる注射器を見た。

その中に入っている黄緑色に発光する正体不明の薬品を自分に投与するつもりなのだと思察してしまった。春香もようやく視界にその注射器を捉えた。これがイタズラならばまだ良い。しかし、律子が先に使った封印術はどう言い訳しても『これは律子では無い』と証明している。正体不明の偽律子が持つ詳細不明の薬品など、無害とは到底思えない。

ゆっくり、ゆっくりと真つ直ぐに美希に向かって歩いていく。

「お願いやめてっ!! くっ、私の身体でしょ! 動いてよ・・・動けえっ!!」

「や・・・やだ。何するのティーチャー律子? 怒ってるんだよね？」

美希がちやんと呼ばなかったから。これからちやんと呼ぶから・・・ねえ、だから・・・美希、注射嫌い! やめてよっ。やめ・・・っ!」

美希の悲痛な声も聞かず、律子はどうとう美希の首に針を当てた。さっきまでとはうって変わり、まるで面をつけたような無表情の律子の顔は冷たいなどという表現を超越していた。

目の淵から涙が流れる美希は、ガタガタ震えたいほどの恐怖を感じているのに身動き出来ず目を見開き引きつる笑顔で最後のお願いを

した。

「……………」

そのお願いに声はなかった。頭も心も恐怖で埋め尽くされた美希は、ほんの少しの声も出すことを叶わず口だけが小さく動いた。

『助けて……』と。

1秒も無かった。美希がお願いしたのと同時に注射器の針が美希の喉に突き刺さった。

本意でない涙を流す美希の隣で、春香が涙を流してしやがれた声で美希の名前を呼び続けた。注射器の薬品を投与されてしまった美希は一気に力が抜けたようにダランとして動かなくなった。その姿を見て春香の声も小さくなり最悪の想像が頭をよぎる。

「み……美希……? 美…… ね……希……?」

力ない声で美希を呼ぶ中、突如として美希の身体が大きく跳ね上がったと同時に……

「あ……. ああああああああああああああつ!!!?」

喉がはち切れんばかりの叫び声を上げて美希の身体から電流のようなものが迸った。

身体全体を強張らせて白眼をむきガタガタと音がなるほど震えた。

放出されている電流は美希の魅力と同じ色のフレッシュグリーンから真っ赤になり、やがて真っ黒に染め上がっていく。美希から放つその電流は室内の机も本棚も研究の道具も何もかも大破させた。

「美希っやめ……美希っ!」

美希の眼はグリーンつと白眼をむいていたのが何時の間にか両の眼を真っ赤にギラつかせて息も荒くなっていた。震えが徐々に収まり、やがて静けさが戻る。

シーン……と静まった室内で春香は美希の顔を覗き込んで目が合った。それは春香の知っている美希の顔ではない。息をフーフーと獣のように荒げ、吸い込まれるようなフレッシュグリーンの瞳は純粋な赤になって春香の瞳を捕らえていた。

そして本当に唐突に、美希が春香に向かって襲い掛かった。右の肩で突進した美希の攻撃に、春香は守る動作が間に合わず突進を受けて

しまった。

春香は壁に叩きつけられ、かなりの勢いで吹っ飛ばされたためダメージが大きい。美希は更に勢いをつけて春香に攻撃しようとしている。何とか回避しなければと思っただけで身体を動かしてみると、これがあっさりと思いつ通りに身体が動く。何時の間にか封印術が解けて身体が自由に動くようになっていた。

すぐに律子を捕まえようと周囲を見回したが既に遅く、姿が影も形もない。偽物の律子は逃げ出した時に春香の封印術も解いたのだ。何のためにと訊くまでもない。

「私を・・・囿に、使った・・・？」

今の美希には偽律子の封印術でも抑えることは出来ないだろう。

偽律子は暴走した美希に春香が襲われること前提で、春香の封印術を解いて逃走した。

春香が抵抗するであろうことも計算した行動だ。ならば思惑通りに動かず逃げるのが一番なのだが、そんな時間も与えてくれないほどに美希は素早く襲い掛かってくる。

「美希っ！ ダメだよ!! 正気に戻って美希！」

荒れ狂い暴走する美希は全力で周囲を破壊していく。それは春香も例外ではなく、目に付くものは何でも壊すという無差別なものだった。その本気の攻撃を何とか掻い潜り続け、春香は旧校舎の1階であるホールへと逃げ延びていた。

だが息をつく暇も無い。美希がすぐさま追いかけて攻撃をしてくる。首を狙った手刀を避けて3メートルも離れた壁に亀裂が入り、階段の手摺りを背にした時に右足で繰り出してきた回し蹴りを回避すると手摺りの細い柱ごとそのまま階段を2、3段ほど削り飛ばしてしまった。距離をとって入り口側に飛び退くが、目にも留まらぬ速さのタックルに防御も空しく吹っ飛ばされて入り口から外へとはじき出された。

受身を取って着地してもすぐに追い討ちが来る。その場をすかさず右へ跳ぶとドシュツという音を響かせ、自分の居た場所に美希の手が突き刺さっていた。

息を切らせてその場から走った。方向も考えず桜並木を走って辿りついたのは朝日に照らされて舞った花びらが、まるで冬に起きる雪の結晶の輝き。ダイヤモンドダストの如く輝く大きな桜の木だった。桜の木に手をつけて荒い息を整える。急激に消費したスタミナは春香の呼吸を中々に整えてくれなかった。そして頭が冷静になり始める。美希の顔も目も動作も能力も、彼女自身の意思でないことは明白だった。見たことも無い彼女の暴走にどうしていいかわからず、涙がこみ上げてくる。

「二体・・・どうすれば・・・」

こんな状態の美希を放つては置けない。もしも浮遊術で街になど下りた日には地獄絵図とも遜色ない光景が広がってしまうだろう。無差別に破壊を繰り返す美希は今や簡単に命を奪ってしまうほどに凶暴化している。衣食住苦楽を長く共にした春香にすら容赦ない攻撃をするのだ。赤の他人だったら躊躇いなど塩の一粒分もありはしないだろう。

そして春香の頭の中には最悪のワードが繰り返されていた。

・・・・・・美希を・・・殺す・・・？

もはや止める手立てはそれしかないように思えた。だがそれは春香が一生苦しむことになる道だ。自分の最愛の義妹を手懸け、その罪と彼女の居ない人生を一人歩み後悔を背負って行かなくてはならない残酷な道だ。

『彼女を生かして世界の崩壊を見届けるか。』

『彼女を死なせて世界の崩壊を防ぐか』

今春香は、まさに究極の選択を迫られていた。

必死に他の方法が無いか。本当にそれしかないのか。何度も何度も考えて考えて、10秒にも満たない時間で考え抜いて、そして、

「ぐっ!!」

背後からの強烈な一撃。浮遊術で飛んできた美希の気配に気付かず、頭上から地面に殴りつけられた。地べたに沈んだ身体が言うことをきかない。

背中を殴られ地面に叩きつけられた春香は呼吸が出来ず、顔面を強打し脳震盪を起こして這い蹲る。真横に立った美希は右手で春香の首を掴んで持ち上げ、そのまま桜の木に押し付けた。

「うぐうううっ……はる……がああああっ!!」

「美……希っ」

出来るわけがない。例え正気を失っていても美希は美希だ。彼女の姿形を見て義姉である春香が美希を殺害することなど、どうして出来ようか。

首を持たれている今、頭に血液が廻らず徐々に身体感覚がなくなつて頭がボーッとしてくる。このまま何も出来ずに美希に殺されてしまうのか。

助けられない悔しさと近づく死の恐怖。偽者の律子へと怒りで様々な感情が一気に噴出する春香の心は目から流れる涙となって形を成した。

その涙が頬を伝い顎の先から滴つて首を掴む美希の手を濡らした。

「あ……るが……に……げ……」

ハッ！と春香は薄れる意識を無理やり引き戻した。美希の発した声に言葉を感じたからだ。

『はるか、にげて。』

まだ微かに残っている。美希の意識が春香への想いという細い糸で繋がれていた。

朦朧とする頭を必死に働かせて、この状況で美希を止める方法を考えた。

そして美希の手が自分に触れていることによく気付いた。

春香の能力は特質型に分類される『支配』と呼ばれる能力だ。

この世界には魅力の無いものは存在しない。人間はもちろん、動物や草木にまでそれは存在する。『支配』はその魅力に干渉できる。自

分以外の魅力を吸い取ったり、送り込んで操ったりすることができ
る。相手の魅力を支配するという春香の能力は前例の無い最強クラ
スの能力。

その能力を使って美希自身を支配する。自分の魅力を流し込んで、
そうやって流し込んだ魅力を操作して美希の身体を操作するのだ。
こうすれば、美希の体内に循環している魅力の動きがストップする。
あとは美希の身体に残った春香の魅力が消えるまでの一時的な仮死
状態のようになる。

そうなれば後は鎖で繋ぐなり閉じ込めるなりで対処のしようが出
てくる。場合によっては春香が一生の美希の傍で魅力を操作し続け
て仮死状態から生還させない方法もあるが、そうなるともはや死んで
いるのと同義なので春香は意地でもその選択はしない。

(意識のあるうちが勝負だ。早くしないと・・・っ)

春香は美希の手を掴んで能力を発動させた。蛇口を一気に捻った
ような速度で手や首から魅力を全力で送り込んで行く。

数秒後、徐々に春香の魅力に侵され始めた美希の足が一瞬だがカ
クツと折れた。

(今だ!!)

春香は更に流し込む魅力の量を増やした。

あと一步で美希を完全に制御できる。そう思っ出しようる限りの
力で美希の魅力を侵していった。

痛みが走った。目の前には美希の顔。赤い綺麗な瞳の傍から大粒
の涙が滴り落ちる。

首を掴んでいた右手が放された。放されたのに地面に落ちなかつ
た。

突如として襲った嘔吐感から堪えることが出来ずせり上がってき
たものを口と鼻から吐き出す。吐き出した真っ赤な液体が地面に落

ちた。美希の左肩から自分に向けて伸びた腕は真下を向いた所で自分の胸の中に消えていた。夥しいほどの液体が胸部から落下し、ビシヤビシヤつと音を立てて地面を濡らした。

「は……る……。がああつ！ あああああつ!!」

神はどれほど残酷なのだろう。意識が残っている美希は今、自分の腕が誰に突き刺さっているのかハッキリと自覚している。

怪我どころか致命傷。一目見ただけでわかる生命の危機。美希は涙を流し震えながらさらに腕を押し込む。

呼吸が出来ない。痛覚が既に麻痺しているのか痛みはない。だが身体の震えが止まらない。

寒さなどの震えとは違って激痛に襲われたときに出てしまう震え。それが今、私の身体を襲っている。美希の腕を掴むけれど、力なくただ乗せているだけ。

「み……き……。だい……。じょ……。だよ……」

笑う。笑ってみせる。気休めにすらならないとしても、意地でも笑ってやる。

息が出来なくても、どれだけ血を流しても、美希に私の苦しむ姿なんか見せたくない。

汗も震えも止まらない。傷口が熱い。美希の腕の上に置いていた腕を、ゆつくりと震えながら持ち上げ、力なく美希の頬を手で包む。そのまま重力に身を任せ前屈みになった私は、美希の額にキスをした。まるで眠りに付く子供にするように。優しく。

そしてそのまま、魅力を美希へ全力で流し込んだ。

美希の身体がビクツと強張った。眼の力が抜けていき、眼が閉じられたと同時に私の胸に突き刺さる左腕も力をなくして身体から腕が抜けてその場でうつ伏せに倒れこんだ。完全に身体の力が抜けて意識が無くなった美希もそのまま仰向けに地面へ吸い込まれていった。「は……る……。……」

ドサツと倒れた美希の顔を間近で見ながら目からは涙が流れていた。どうしてこんなことになってしまったのだろう。今朝は美希より

も早く起きて朝食の準備をして、美希を起こして一緒に食べて。纏めた荷物の最終確認をして、アイドルの衣装を着てそのまま校舎に来て……。

(私達が何をしたの……?)

桜の木にうつ伏せのまま左手で触れた。その反対方向にある美希の顔を見ながら。

(酷いよ……神様……)

桜の木だつて立派な生物だ。間違いなく魅力は存在している。

ならばこの木に自分の魅力を流し込んだらどうなるんだろう。この木に魅力を全て注ぎ込んだらどんなことが起きるんだろう。

(もしも……もしも奇跡を起こすことが出来るのなら……神様……私達にここまでのことをしたんだもの……私のお願ひ……聞いてくれるよね?)

桜の木に自分の魅力を流し込んだ。目が霞み、意識を保つのでやつとのこの状況で最後の最後まで残った魅力を流し続けた。

身体が冷たくなっていくのを感じていた。

もう助からない。私は死ぬんだ。不思議と恐怖も悲しみもない。ただ、悔しかった。

私が律子に衣装を見せるなんて言ったから。いつもと違う律子を偽者だと見抜けなかったから。偽律子の封印術を解封出来るほどの力が私になかったから。

美希の人生を……私の人生を弄び、そして奪った彼女を許せはしない。

このままでは終われない。

仮死状態になっている美希はいつかきつと目覚める日が来る。私の魅力が美希の中でなくなるのが明日なのか10年後なのか、それとも100年後なのか。とにかく目覚めたときにまた暴走してしまうことがないように、誰かが美希を外に出さないようにと祈りながら瞼を閉じた。いつも笑顔だった美希を瞼の中で思い描いて、今この瞬間を心に深く刻みつけた。

(神様・・・天海春香、最後のお願いだよ・・・。この魅力は私の魂。いつか・・・美希が目覚めたとき。もしもいつもの美希じゃ無かったら、そのときは私も目覚めさせて。私の魂と思念を宿したこの木の下で・・・。)

そう願ひ、春香の魅力はとうとう底を尽いた。眼は見えず、何も聞こえず、どれだけ力を入れてももう二度と動くことの無い身体の冷たさを感じながら涙を流し、まるでテレビを消したときのように意識も無くなり。

静かに立つ桜に最後の一滴まで生命を注ぎ込んだ若きアイドルの鼓動は完全に停止した。

息絶えた春香の傍で、しゃがんで二人の様子を見た律子がニヤツと笑った。

律子はそのままその場で穴を掘り、春香の遺体を桜の木の傍に埋めて仮死状態の美希を担いで、そのまま校舎の中へと消えていった。

その後、美希と春香は律子の手によつて失踪という形で闇に葬られた。

施設で育った二人の消息を知るものも探すものもない。

この惨劇を誰にも知られることもなく年月は経ち、100年後にその惨劇が扉を開くことになる。

序章

終

一章 ― 前編 ― 出会い

ここは異能の能力を持つ者たちが集まるとある学院。

丘の上に創設されたその学院は、西洋風の小さなお城のような校舎で、周囲には自然に覆われた森や湖、川もあれば控えめではあるが草原もある。

近くには人々が賑わう割りとき大きな街があり、学院へは街の北にある草原を4キロメートルほど進む。その先には深い森があつてその入り口から更に3キロメートルほど真つ直ぐ進むと緑の木々から打って変わって満開の桜並木が姿を現す。その桜の木を抜けていくと開けた小高い丘の上はその学院が聳え立っている。

桜の木々に囲まれているその学院は白い壁で覆われたコの字型の校舎があつて、この校舎は4階建てになっており1階と2階は授業やレクソンで使われる施設が備わっている。

全寮制の学院とあつて3階は食堂と浴場。談話スペースやトレーニングルームなどがあつて、4階は生徒達の部屋が20ほどある。

校舎の裏には約1ha（ヘクタール）程の大きさの円を描いた湖があり、畔に4人ほどが乗れる手漕ぎの小船が2隻置かれている。現在の校舎は十数年前に出来た新校舎で、その新校舎の西に150メートルほど行ったところに古びた洋館のような旧校舎がある。

壁が黒ずんだ赤レンガで屋根には青みがかつた木材が使われている。

旧校舎は3階建てで上から見ると四角い形になっている。中央には縦40メートル、横が20メートルほどのフットサルコートとほぼ同等の広さの中庭がある。殆どが芝生で覆われていて、四方の壁際には補整された石の床に2階部分を支える石柱が何本も並んでいる。石の床の通路には少しばかりの植物と各校舎へ入るための扉があつて、学生に人気のある場所でもある。芝生部分は何も無く広々とした空間で地べたに座つての談笑やレクソン、能力の訓練なんかにも使われている。この旧校舎には学業で使用する

資料や様々な道具などが保管されているため、この中庭で授業をす

ることも少くない。

そのため、旧校舎ということであつたらかしではなくしつかりと整備、手入れされているのだ。

そしてその旧校舎の北に行くと、周りの桜とは比べ物にならないほどの立派な一際大きい桜の木が生えている。樹齢幾百年という太い幹に力強く咲き誇る白桃色の花からヒラヒラと花びらが宙を舞っている。

100年以上の歴史を持つこの学院では主に異能の力である『能力』を育てるための場所で3年に一度の入学と卒業があり、その中でも特に優秀な成績と実力の持ち主には3年次での重要なテストを受けることが出来る。そのテストはこの世界の人間の誰もが羨む栄えある職業『アイドル』になるための試験で、それに合格することで卒業後にアイドルとしての資格が与えられるのだ。

そして今この場所で日々鍛錬に励むのは、人並み外れた魅力を持つ7人の可憐な少女達。

それぞれが全く違う能力と特性を兼ね備えた能力者。アイドルたちの卵だ。

少女達が翌日には3年生になる新たな季節。

窓からは朝日が差し込み時計の短針が9つ目の印を打とうしている頃、眠りから覚めた水瀬伊織、高槻やよい、そして我那覇響の三人は白く艶やかな丸いテーブルを囲んで朝食のティータイムと何気ない会話を楽しんでいた。

「ねえ知ってる？ サクラの木の下には女の子が眠ってるんだって……。」

話を切り出したのはこの部屋の主である我那覇響。

16歳の彼女は肌が薄い褐色で黒髪のポニーテールがよく似合う活発な女の子だ。

腰まで伸びた艶のある黒髪を纏める白く長いリボン。

無地の白いハーフトップに白のハーフパンツでテーブルについている。

椅子を引いて前のめりになり、テーブルに腕を乗せてその上に顎を

乗せている。

明るく活発な彼女は面倒見がよく、初対面でもすぐに仲良くなつて友人ができてしまう。

彼女は鮮明にイメージ出来たモノを自分の魅力を使って具現化させるという補助型でも珍しい能力の持ち主で、例えば頭の中でイメージした動物なんかを具現化して友人の探し物を探したり、一番イメージがし易い犬やハムスターを生成して遊んだりする心優しい女の子だ。

その響の右隣からは同意ではなく落ち着いた否定の声が発せられた。

「そんなのどうせ迷信よ。確かめようが無いわ。」

紅茶の注がれたカップを持ち上げながらそう発したのは水瀬伊織。

15歳とは思えないほどの大人びた性格と言動をする彼女はとある財閥のお嬢様だ。

裾の長い白のネグリジエ姿で足を組みながら紅茶の香りを楽しんでいる。

腰近くまで伸びたブラウンの髪。前髪は横に流してキュートなお凸が広く見える。

彼女の能力は攻撃型に分類される雷電能力でそれほど珍しいものでもないが、異常なのはその威力だ。そもそもコントロールが困難な能力で一般的な電撃使いであれば蛍光灯を発光させるのが精々なのだが、彼女は魅力を練り上げることで身体中から桃色の電撃を発し、通常の稲妻と同等の威力を放出することが出来る。

ただ、燃費も悪く魅力を大幅に消費するので雷レベルの攻撃は一日で3発までしか使えない。少量の電気なら半日、静電気レベルなら一日中放つていられる。

よくある能力だからこそこまで極められるのか。彼女の探究心から来る向上心と努力には自信とプライドが備わっている。

水瀬家は代々、雷を操る家系だ。1代で財を築いた彼女の祖母によく似て責任感が強い。幼い頃から努力を続けた彼女はその能力と優れた知性から、自分の認められないものに一切の妥協と容赦がない。

しかし、認めたモノや人には強い信頼を持ち、誰よりも人を思いやる深い慈悲の心を持っている。とても優しい女の子だ。

「うーん。地面を掘って桜を傷つけたら校則違反だもんね。」

テーブルのパンケーキをナイフとフォークで切りながら会話に入ったのは高槻やよい。

伊織と同じく裾の長い白のネグリジエを来てパンケーキを幸せそうに頬張っている。

彼女は水瀬家の使用人の家系に生まれた。伊織が生まれた翌年に産まれたやよいは伊織の祖母の計らいで今まで姉妹のように育った。伊織もやよいを妹のように、親友のように、大切な人として意識している。本来やよいは伊織の専属メイドとして仕えている。

彼女も面倒見がよく人の世話や掃除が好きで、水瀬邸宅の掃除をしていると伊織からはそんなことしなくてもいいと怒られることもしばしば。だが彼女はそのやり取りがスゴク気に入っている。

能力で『身体強化』というものがある。

これは補助型の能力で体内に循環している魅力を一点に集中させて運動能力を強化増幅することができるというもの。一般人の能力で身体を強化しても持ち上げられるのは、せいぜいが300kg程度に対し、やよいは筋力を強化して現在約2t弱までなら持つことができる。

「というか、そんな噂話一体どこから拾ってきたのよ?」

「ふふん、この前の大掃除のときに旧館資料室で見つけた本があっただろ?」

「ああ、あの汚いあれね。」

ティーカップをテーブルに置いて伊織が思い出そうと瞳を左上に持ち上げた。

~~~~~回想~~~~~

ほんの2週間ほど前のこと。この学院では進級準備期間として春季にだけ一時的に実家へ帰省する期間が存在する。みんながそれぞれ

れの町や家に戻り、離れて暮らす家族と過ごす大切な時間だ。指定された期日までに帰省を終えて寮に戻った生徒達は、後日に3日間も掛けて旧校舎と新校舎の大掃除をすることが毎年の恒例行事だ。この大掃除だけは能力を使うことを禁止しているので時間がかかる。それこそ朝から夜までかかることもある程だ。その大掃除では例年と違って旧校舎の資料室を掃除することになった。

過去2年間は講師の指示で掃除は一切しなかった。もちろん用がないのであれば生徒が入ることもあろうはずがない。

当然、中に入ると埃が積もりクモの巣が張り巡らされネズミも走り回っているような状態だった。最大級の嫌悪感を感じながら掃除を始めてようやく半分ほど終わったところで、それは見つかった。

倉庫のように扱われているためかビンに入った標本や古い書籍に木箱のオンパレードだった本棚を伊織が雑巾でキレイにしていく。雑巾を使って木の床を拭いているやよい。

そして叩きで埃を落としていた響がクシャミを連発している。

「うええ、埃が凄くてクシャミが……は……ぬっひゃあっ！」

「それ……クシャミなの？」

「響、伊織ー。バケツに水汲んできたよ。」

「おー、ありがとうだぞ真、雪歩！」

床の拭き掃除をしているやよいはキレイになっていく部屋を見てどンドンご機嫌になっていく。そのやよいが手を止めて床の違和感に気付いた。

「……あれ？」

「どうしたのやよい？」

「これみて伊織ちゃん」

伊織がやよいに近づき何があるのか確かめる。すると、やよいに言われて初めて床に敷かれている木材が不自然なことに気が付いた。その木材は柵の下敷きになっていてほんの少しだけはみ出しているような状態だったが他の木材とは違い明らかにおかしい。

何がおかしいのかと言うと、まずその床部分だけ他の床との溝が違うのだ。

他の木材は長方形のフローリングといわれる床で細長い木材が敷き詰められている。だが、その床だけ細長いフローリングの3枚分くらいが溝もなく棚に踏まれている。

伊織がしゃがんで軽く叩いてみると、コンツと軽い音がした。中が空洞になっている。

「この棚、どかすわよ。」

「うん、任せて…あ。」

やよいが能力を使おうとするが、封印術の得意な講師であるティーチャー律子に大掃除の間は全員能力を封印されているため使えない。巡回しているティーチャー律子に見つからないように、出来るだけ素早くみんなを動かす。

棚を移動し終わったところで、予想通り雑誌より一回り大きいくらいの四角い床が顔を出した。普段は講師以外入らない旧校舎の資料室で一体いつから開けられていないのかわからない床の戸は伊織の好奇心を大いに掻いた。

浮いた床を取り囲むみんなを他所に伊織はその前に跪いて床の溝に爪を引っ掛けた。

「伊織ちゃん気をつけて。」

みんな何があるのかと息を呑む。板の両側が持ち上がり、爪から指に持ち直してそのままゆっくり開いた。カビ臭さと一緒に姿を現したのは鎖で巻かれた赤い布とそれに挟まれた紙。三角の中に四角を書いたまるでおにぎりのようなものが書かれていて、その鎖の真ん中には古びた鍵が入っていた。

「……鍵？」

~~~~~現在~~~~~

大掃除した古い資料室の中で見つけた箱の中に入っていたのは本と折りたたまれて挟まっていた見取り図、そして古い鍵。

相当昔に何者かが書き記した日誌のようなものだった。

そこには、能力開発の理論や実験結果などが書かれている。カビと虫に食われたのか殆ど読めない部分が多かったのだが、最後のページだけは僅かに読むことが出来た。

『止められな。子が だと思いでいたのは

の上 った。は掌の られた け。ここか が始

ことはわかっていたはずなのに

・・・。 これを読 た。お願いします。これを た

0年 の に起こる 劇をどうか さい。私が

だった為に った彼 たちのために。そして から

若い ため。 りの少女は大きな桜の木の下に眠ってい

も に うこと 来たら、女の言う てくだ

さい。

それが未 守る最後の鍵 す。お願いします。 記：

り』

どうやら何かの懺悔文のようなものと伊織は感じた。一文に『少女は大きな桜の下に眠って』と書かれていたことを今になって響が持ち出したのだ。

伊織はあの鍵と本を忘れようとしていた。簡単なカラクリだが隠していたのは間違いない。そんなものに触れて後で問題になっては自分の評価に傷が付く。

だから出来るだけ気にしないようにしていたのだが・・・。

「実はあの本と鍵、持ってきてきちやってるんだ。ほら！」

「ちよつ、何考えてるのよ！ 勝手に持ち出して律子にバレたらどうするの!？」

「大丈夫だって！ ねえねえ、せつかくだからこの本と学院の謎も自分達で解いちゃおうよ！」

「あ、それって何だか冒険みたいで楽しそうかも！」

やよいは立ち上がって好奇心のままに眼をキラキラさせていた。しかし、やはり伊織は乗り気にはなれなかった。

「面白そうだとは思うけど、私達はそんな遊びしてる暇ないわよ。もうアイドルを決める段階まで来ちゃってるんだから、もっと魅力や能力を高めないとダメじゃない。」

伊織の言葉を受けた二人はハツとした後に申し訳なさそうな顔をした。

響は椅子を座りなおし、やよいもゆつくりと座って真面目な顔で口を開く。

「そ、そうだよ。私もやることいっぱいあるし……。」

「アイドルが選出されない年もあるって話しだから、今まで以上に気合入れないとだぞ。」

「ほら、そのうち元の場所に返しといてあげるから貸しなさい。」

響は伊織に日誌と鍵を渡した。朝食を終えた三人はアイドル選出のことを考えると少し険しい顔になったが、少しの間のことと伊織が立ち上がって引き出しの中から複数の白いリボンを取り出した。長いものから短いまでベッドの上に順に置いていく。その内の一つを手に取り伊織が振り向くと、そこにはもう笑顔の伊織が居た。伊織はやよいを手でチョイチョイとベッドまで来るように合図した。

「ほら、こっちに来なさいやよい。新しいリボンで髪を結ってあげる」その言葉にやよいも笑顔になりベッドの上でちょこんと座る。

そんな二人を見て、響はベッドにうつ伏せで寝転がり読みかけの本を開いて三人でゆつくりと時間を過ごした。

同時刻、旧校舎の北に行くと、周りの桜とは比べ物にならないほどの一際大きい立派な桜の木が生えている。樹齢幾百年という太い幹に力強く咲き誇る白桃色の花からヒラヒラと花びらが宙を舞っている。その木の傍で一人の少女が今、眠りに就こうとしていた。2年前にこの学院にやってきた“如月千早”その少女。

長袖のワイシャツに肩の布地が無い深い青のワンピース。襟元に

朱色の短いネクタイで先端に白いラインが一本横に入っている。腰まで伸びた長い青の髪を地面に這わせ、整った顔立ちは気の強さを持ち合わせた清楚という印象を受ける。

この学院の生徒である彼女はお腹の上に手を組んで、今まさに爽やかに吹く風に意識を任せている。

その眠りを一枚の桜の花びらが邪魔をした。緩やかに舞った花びらが千早の鼻頭にそっと乗った。その感触を感じてゆっくりと目を開く。

綺麗に舞う桜の花びらと少し感じる春の寒さを蹴り飛ばすような陽気が満ちる青い空をぼんやりと見つめていると、不意に「ねえ……」という声が聞こえてきた。薄い意識が起こした空耳だと思っただが、少し離れた頭上に気配を感じた千早は身体を起こしてその場所を見た。そこには見覚えの無い女の子が一人立っていた。一瞬で印象に残ったのはリボン。彼女の第一印象だ。髪は肩にかからないくらいの長さで頭の左右に短いリボンをつけている。紺色の服は肩から胸に掛けて白いラインが入っていてその下に赤いスカーフをこれまたリボンのように括っている。今はあまり見ない洋服でかなり昔に『セーラー服』と呼ばれていた洋服だ。紺色の少し長めのスカートはシンプルというに相応しい格好で、一言に『純粹』という言葉が彼女を見て頭に浮かぶ。

「ねえ、あなたアイドルになりたいの？」

唐突な質問に言葉が詰まる。首をかしげて質問してくる彼女の素性は全くわからない。

この学院に来客する者はそれほど多くはない。ましてや入学以来、自分達以外の女の子を見たのは初めてだった。どう見ても自分と同年代の彼女が何故こんな場所に居るのか。

この学院には編入制度は無いと思うし、迷い込んだような顔にも見えなかった。

ただ、一瞬の風に揺られた彼女の髪と舞う花びらが言葉で形容しにくいほど綺麗だった。

そして彼女の質問の答えが、詰まった喉から発せられた。

「なりたいわ。」

「どうして?」

「それは……。」

「……。」

答えが出ないまましばらくして彼女が「そう……。」と呟いた。

その途端に突風が吹いた。ヒラヒラと落ちる花びらに加え地面に落ちていた花びらまでもが吹雪となって千早の視界を奪った。髪を押さえ目を塞いでいた千早が目を開くと自分を中心に無数の花びらが渦を巻いて空へと舞い上がっていた。周囲は白桃色に包まれ舞い上がった花びらが自分へと降り注いだところで目が覚めた。

目を開いて自分の花頭に花びらが一枚ふわふわと乗っていた。

身体を起こし、周囲を見回す。爽やかな風に乗って舞う桜の花びらの他に目に入るものは特にない。いつもの桜並木が広がっているだけだった。

「……夢?」

とても奇妙で現実感のある夢。急に幻想的な展開になって目を覚ましたが、登場した彼女の顔や声、姿をハッキリ覚えている。しかし何を話したのか覚えていない。

他愛の無い会話なのか重要なものなのか。知る術もない今は特に考えもせず行動することにした。夢は夢だと気持ちを切り替えて自室へと足を向けた。

昼を過ぎた頃、昼食も終えて新校舎の裏にある小さな湖の畔で桜の木にもたれながら本を読む千早は、視界の端に入った船に目をやった。そこには休日を楽しむあずさ、雪歩、そしてオールを漕ぐ真の姿があった。

あずさは艶やかな紺色のショートヘアに足も長く女性にしては高めの身長で、恐らく男性から見れば大変魅力的なスタイルをしているだろうと思う。

キレイな顔立ちから放つ明るい笑顔におっとりとした性格から想像が付くほどのマイペースなお姉さんだ。ただ、もう20歳になると

言う彼女に唯一方向音痴という弱点がある。2年生の夏季休暇中に体重が増加したおかげで能力を使わずに徒歩で移動するという運動に挑戦してみたのだが、一日行方不明になって翌日帰って来た時は気が付けば200キロも離れた東の街に居たというので、講師の女性にこつ酷く叱られた。

一般的には殆どありえないことだろうけど、彼女が徒歩で移動する時は誰かの付き添いが必要なので一人での移動は必ず能力を使うことを約束させられ、徒歩での移動を制限されてしまう始末だった。

しかし、散々怒られたのにそれでも落ち込むことなく笑顔で居た彼女に千早も安心感のようなものを抱いている。

雪歩は大人しい、か弱い女性と言えば当てはまるほどの気弱な女の子だ。

茶色の髪を肩で揃え、華奢な身体は見るからに非力に思える。いつも白い服を纏うので白以外のイメージが浮かばない。純白、清純という言葉が似合う彼女はきつと世の男性の理想とも呼べるかもしれない。良い意味でのギャップになるのだが17歳とは思えない渋い趣味をしている。東の国で飲まれているお茶が好きで、部屋では真ややよいにそのお茶を振舞っているらしい。彼女は何においても自信が無く、よく涙目になっているのを授業で見かける。

恥ずかしいことや失敗したと思ったら何処からとも無くシヤベルを取り出し『穴掘って埋まっていますう〜！』と言うお決まりのセリフと共に本当に穴を掘って入ってしまう癖がある。しかし水を使う彼女の能力は入学当初から凄く安定していて、今までレッスンで失敗したところを見たことが無い。意外と芯が強いと言うか肝が据わっているのではないだろうか。

そして彼女も、人を惹きつける柔らかい笑顔を持つ魅力的な女性であることはこの学院で一緒に学んできた千早も良く知っている。

気配りも出来て優しい彼女はもしかすると誰よりもお姉さんなのかもしれない。

オールを漕いでいる真は、少し気の強い黒髪ショートヘアのボーイッシュな女の子。

身体は鍛えているだけあって女性にしてはガタイが良い様に思える。格闘技が得意でよく一人で稽古をしているのを見かけるが、それに加えて能力の訓練もしていて彼女の努力の姿勢は千早も一目を置いている。

入学前から雪歩とは友人で、最初は雪歩を守るように生活していた。周囲を睨むような目で、一人のときは本当に近づきづらい空気を纏っていたのだが、雪歩を解してみんなの中に溶け込むことが出来た。本当の彼女は凄く陽気で明るい性格だったことに驚いたものだ。そんな彼女もやはり女の子なのだと思わされたことがあった。

少し前に所用で彼女の部屋を訪ねたときにベッドの上に置かれていたピンクのフリフリドレスを見てそのままドアを閉めた。幸い丁度留守だったので見なかったことにした。

その時に私を含め7人の中でも特に乙女の心を持っているのが真なのだろうと思った。

気が強いからこそ来る憧れもあるものなのだろうと、これも真の魅力の一つとして胸に止めた。

三人が楽しそうに湖を小船で横切っている。

本当は同じように遊びたいが一人が性にあっていることと今まで大して関わってこなかった後ろめたい気持ちから声をかけることもできず日ごろ暇な時間は本を読んでいる。千早に話しかけてくるのは主に雪歩と響とやよいくらいのものだが、それでも特に親しいというわけでもない。やよいたちも今頃自室でまた伊織と響の三人で笑いながら話でもしているのだろう。正直に言う少し羨ましい。

真たちが遠くなった頃、本を閉じて再びあの丘の上に向かう。心地いい風と綺麗な花びらが舞う光景は千早のお気に入りだ。この周辺の桜は一年中咲き乱れている。

本来は桜の木と言えども一年中咲いているなんてことあるはずがない。だが不思議なことに、この桜は花びらが落ちていないのに全く枯れない。専門家が調査しても解明出来なかったらしい不思議な桜達にちなんだ呼び名で地元民に呼ばれている。

白のような淡い桃色の花びらの匂いを嗅ぎながら本を読むことが何より好きだった。

そして読み疲れたら風に吹かれながら少し眠る。桜にもたれ掛かって読み始めた本の文字が睡魔を発し、暖かい日差しと微かに漂う花の香りを楽しみながら千早は本を抱いてそのまま眠りに落ちていった。

それから少し後、船を下りてあずさと別れた真は自室で雪歩に髪を切ってもらっていた。

真の髪は学院に入る前から雪歩に切っている。二人は幼い頃からの親友同士で、よくお互いの家に遊びに行ったり外で遊んだりしていた。

二人の出会いには御伽噺に出てくるようなものだった。

雪歩の故郷に移住してきた真が町を散策していた時、片隅にある小さな広場を通りかかった。声があるので行ってみると、同じ年頃の男の子に酷い虐めを受けている雪歩を見つけたのだ。もちろん、そんなことが一番許せない性質の真はそのいじめっ子達に食って掛かった。いじめっ子を叩きのめした真に雪歩が惚れるという展開になったのだ。

当時は雪歩も真を男の子だと思っていたため町で見かけては物影に隠れて付いて回っていた。頻繁過ぎて流石に気付いた真が雪歩に声をかけると顔を真っ赤にしてこう言い放った。

「あ……あの……その。まこと……君。その……と、とも……だちに。」

「……あのね君。僕……女の子なんだけど」

「だから、まこと君」じゃなくて真「ちゃん」だから。女の子だからね！」

「……」

頭の中が真っ白になった雪歩は何処からともなく取り出した大人用のシャベルを使つて無言でザックザックと穴を掘り出した。とてつもない勢いで掘り進める雪歩は30秒でおよそ1メートルほど掘り進めた。

掘り進める手が止まつて蹲つて泣きべそをかき出した雪歩に真が苦笑いで質問した。

「あの……何をしてるの?」

「ぐすつ……助けて貰つたのに男の子に間違えてた私なんて、埋まつてしまつた方が……」

「……くす」

「ふえ……?」

「あはははは、君つて変な子だね。あはははは。」

「うう……やっぱり私、穴掘つて埋まつて」

「でも僕、君みたいな子嫌いじゃないよ。……ねえ、僕達友達になろうよ」

「……え?」

それから、わんぱくだった真の後を付いて回る雪歩という図が日常的になった。

真は格闘家であつた父親に格闘技を教え込まれていた。しかし、能力を使う雪歩に憧れて雪歩の母親に教えを乞うた。雪歩は町を統治する大きな屋敷の娘で、地元では近づかないようにと言われる家だつた。その雪歩の母親は優しい女性でどんなことでも教えてくれる人だつた。過去に一度学院の入学試験を受けた経験もあつた彼女は能力の使い方を知っている範囲で雪歩と真に教えてあげていた。

格闘技を習う真は元々勘が良く、すぐにコツを掴んで炎の能力を覚醒させた。

一般に照らし合わせれば、間違いなく天才の部類に入る速度で真の能力は成長していた。

そして天才は一人ではなくすぐ傍にもう一人。母親との会話中にお手伝いの女性が運んできた飲み物を机と床に零したのを見た雪歩が、掌を広げるとこぼれた飲み物が集まつて宙を舞い元のコップに

戻っていった。

僅か6歳で誰にも教わらず水を操った雪歩に母親も驚愕した。それ以降、雪歩に能力の使い方や簡単なレッスンを教えていた。

その二人が14歳になった時にアイドルを目指したいと家族に告げるとあっさりOKが出た。やってみるべきだと雪歩の母親も推薦して学院の受験を許可した。

その年の受験者はおよそ200人。いずれも国中から集まる能力の使い手だが、その中でもやはり郡を抜いて強力な魅力と能力を持って見事合格した。

それから2年。翌日から新学期と言うこともあり、せっかくなので整えようと雪歩が散髪を提案したのだ。

床にシーツを敷き、首周りに白い布を巻いて前にある鏡で確認しながら髪を切っていく。

鋏の音だけが響く室内で痺れを切らしたかのように真が口を開いた。

「ねえ、もし僕達がアイドルに選ばれたらどうする?」

「え・・・あの、私なんてダメだよ。アイドルになれるほど能力が高いわけでもないし。私より真ちゃんの方が絶対アイドルに向いてる」

「そんなことないさ。雪歩にだっていいところはたくさんあるし、僕より強力な力もある。アイドルになるなら雪歩の方がいいよ。」

鋏を止めて目を伏せる。自分が大好きな女の子の髪を見ながら、心の中の正直な気持ちにモヤモヤした。アイドルになれるなんて思っていないし、みんなに失礼な話だが多分自分こそ今までアイドルに執着しているわけではない。

ただお互いが笑い合えるように。真とずっと一緒に居られるようにと、ただそれだけが雪歩の心の声だった。本当ならアイドルになるためにここに居るはずなのに、口に出すとそれだけで、もしかすると軽蔑されるかもしれないと不安な気持ちを抑えて少しの吐露で平常心を保とうとする。

「そんな・・・私は、今のままがいい。変わらない日常を暮らして、ずっと真ちゃんの傍で笑っていたい」

「大丈夫。ずっと一緒だよ、雪歩。」

「・・・私、真ちゃんのことを・・・好き」

「・・・僕も、雪歩が好きだよ。」

「・・・っ！」

「だから僕は、君を守る。僕の力全部を使ってこれからも雪歩を守ってみせる。この約束は絶対さ。」

そう。それでいい。きつと私が言った『好き』と真ちゃんの言った『好き』には多少なりとも違いがあるだろう。でも、それでいいんだ。真ちゃんは私を守ってくれる。

そして、私も大好きな真ちゃんを守りたい。これから先もずっと、ずっと傍で。

「・・・私も、真ちゃんを守る。だから、ずっと一緒に居てね。」

そういうと輝くほどの笑顔で雪歩は髪切り鋏を動かし続けた。

能力のレッスンは特殊なものが多い。実力に応じて変化させなければ上達しない。

例えば、野球選手が素振りばかりしていたとする。だが誰かが投げた球を打たないと上達するのは難しいのではないか。物事の本質的な部分に触れてしまうのかもしれないが、アスリートやアーティストにエンターテイナー。どんなことにも基礎の訓練だけで乗り越えられるほど低い壁ばかりではない。やはりそこには実力に応じた練習や訓練が存在していて、それをモノにしてこそやっと表舞台に立てると言うものだ。このレッスンも同じ事で、基礎ばかりをこなしても成長に限界が来てしまう。基礎を行い応用もこなす。基礎をしつかり覚えていくからこそ状態に応じてレッスンを変化させられる。そして自分の実力に合ったレッスンをして初めて成長し、その成果が現れるという。

そんなプロセスが存在している。

その能力を使う上で必ず必要になるのが“魅力”と呼ばれるエネルギーだ。

魅力というのは、御伽噺（おとぎばなし）で言うところの魔力に相当する。

“内側から溢れる魅力”と言ったように内面、心を磨くことで心臓部に魅力を発生させて脳を経由して身体中に巡らせることで能力を使用することが出来る。

脳を使うとは言うものの、実のところ誰でもいつかは自然と出来てしまう。

人間産まれた時から息の仕方や身体の動かし方を自然に出来ていたように、気が付けばやり方を覚えていて勝手に出来てしまうのだ。

その能力の覚醒が遅いか早いかの違いではないが、それでも一般的な能力の発現は10代後半と言われている。10代前半だと早いほうで、9歳以下での発現は世界的に“天才”や“神童”と呼ばれて未来を期待される有望な能力者だ。

ただ難しいのはそこから能力を成長させること。今まさに彼女たちが2年間直面し、これからも考えていかななくてはいけない能力者全員が持つ永遠の難題だ。

そんな難題をしつかりと基礎から応用まで毎日こなしているのがやよいだった。

やよいが行う基礎レッスンは魅力を使って遠くにある飴の入ったビンの蓋を開ける、魅力の『操作』のレッスンだ。

やよいは身体中に魅力を移動させて強化するのだから、もし戦闘で魅力の移動が遅かったとなれば戦闘になったときに全く役に立たない。やよいの能力には魅力を更に緻密に操作する事が不可欠なのだ。

蓋が開くようになるたびにビンとの距離を開けていき、20メートルほどの距離で開ける事ができれば次は蓋を裏返してその上に飴を一つずつ乗せていくという難易度の高い操作を要求される。

それが出来て初めて応用レッスンの重量上げ。まずは100kgから、そこからどんどん重量を上げていく。これは両手に胴体に足と、バランス良く魅力を振り分けて維持しなければならない。かなり微妙な魅力の操作を行うこのレッスンは、もしも片腕の魅力が強かったり弱かったりすれば違う身体の部位に負荷が掛かるようになっていく。

このレッスンを経て、やよいはようやく魅力を使った戦闘訓練が行われる。

もちろん相手は律子。生徒とのレッスンは講師が相手をする事が規則で決まっている。

生徒同士だと思わぬ事故や怪我になりかねないからだ。それぞれ人並み外れた能力を有しているのだから当然の措置である。

校内条例、いわゆる校則で“能力を使った生徒同士のケンカ”や“能力を使った合同レッスンは即退学”という重い罰則を強いている。ただしビンの蓋開けなどの魅力のみで能力を使わない基礎レッスンは危険を伴わないため生徒同士でも承認されている。

基礎レッスンと言えば、女性らしさを磨くためにも様々なマナーと

歌や踊りに容姿の清潔さを学ぶと共に能力の扱い方を間違えるだけでどれだけ危険なことなのかとか、この能力にはどんなことをすれば向上するのかなども学んでいる。

そのため1年次では殆ど座学と基礎レッスンで終わる。複数ある基礎レッスンの中に『浮遊術』と呼ばれるものがある。能力のレッスンとしてはこれ以上大事なものは無いと言われるほどのものだ。

まず魅力で身体を包み、空気中の魅力と同調させて身体を浮かせる。この時点でかなりの集中力が必要だった。慣れてくると空気の魅力を捕まえて浮遊することが出来るようになる。

次に滞空時間を保つために魅力の消費をコントロールするレッスンは更に難しく、始めたては魅力の消費感覚がわからず気が付けば落下するということを繰り返していた。

消費を抑えすぎると落下してしまい、多すぎると長時間飛べないという魅力コントロールの基本中の基本とされるレッスんだ。無意識に浮遊できるようになるまでおよそ半年。

うまく飛べなくて毎日挫けていた雪歩なんかはどちらかと言うと穴掘りの方が上達していたくらいだ。

そして浮遊レッスン初日からみんなの度肝を抜いたのはあずさだった。全員が空気中の魅力と同調させることに一生懸命だったのにあずさは笑顔で草の上に座っていたのだ。

伊織がレッスンに集中するよう注意すると座ったままのあずさの身体が浮かびだしたのを見て伊織が尻餅をつくという、今では珍しい光景を見たものだ。実は入学前からこの手の訓練は欠かしていないとのこと、みんながあずさにコツなんかを質問したのだが説明が抽象的過ぎてまったく役に立たずそれぞれ地道にレッスンした。

千早達がまともに飛べるようになるまでの半年間であずさは浮遊中に空間移動してしまうという業まで身につけて伊織の嫉妬を買っていた。

「浮遊と転移の魅力を分けちゃえば簡単よ〜?」

とあずさは言うものの普通は簡単にできるものではない。学院に入る前からどこかで魅力のコントロールを身につけてきたからこそ

出来る芸当だ。

そんな頃からしてみれば、やはり年月というのは人を成長させる。そしてまたこれからも成長する。毎日同じことの積み重ねなのだろうけど、それが何より大事なことなのだ。

新学期初日であるこの日、3年次のレッスンや授業内容などの説明をするオリエンテーションのみとなっている。

教室は前方に大きな黒板に壇上と教卓があり、その壇上から2メートルほど離れて生徒が読み書きをする横長の机と、机の前に取り付けられた引いて下ろす椅子がある。床は階段状になっていて、大きな窓と白のカーテンがある。

天井が高く壁は固いため音も声もよく響く。極小の声での内緒話も聞こえてしまいそうになるほどだ。

オリエンテーションが始まる前、響は既に中段の椅子に腰掛けていた。

響のその右前にやよい。左前に伊織が陣取っている。

その二人に向かって響は前のめりになって話し始めた。

「なあ、知ってるか？ 私達の中からアイドルが選ばれるかもしれないんだって！」

楽しそうな声で伊織とやよいに話しかける。

その問いかけに伊織とやよいはお互いの会話を中断させて質問に答える。

「まだ新学期が始まったばかりなのよ？ ちょっと気が早すぎるんじゃない？」

「それはそうかもだけど、でももし本当だったら一体誰が選ばれるのかなー！」

「もつちろん、この伊織ちゃんとやよい以外に誰が居るのよ！ っとそれはともかく響。あんた授業中にまで筆談しようとするのやめなさいよね。気が散るじゃない！」

授業は仲の良い生徒同士が隣になると何らかの遊びやお喋りをしてしまうことから必ず隣一人分を開けて席に着く決まりになってい

る。お互いの間に一人分あいていることを確認するために、前の二人の間に後ろの生徒を一人挟むようにしている。やよいと伊織の間の空間をその一つ奥に座る響が埋めているのだ。

しかし、律子の目を盗んでは手紙で筆談することが出来るため、時折誰かが私用で手紙を渡して話をするのが授業の一つの楽しみにもなっていたりする。響は常習犯として一度律子に折檻を食らっているが懲りていない。

「自分手紙が好きだからな！ それにこうでもしないと話せないし。」
「声を出したらティーチャー律子が怒っちゃうもんね」

「だったら黙って人の実技を見たりそつとイメトレでもしてなさいよ」

「ホントに伊織はレッスンが好きだよね。自分もレッスンは好きだけど伊織ほどストイックにはなれないさー。」

「でもこんなにも訓練してるんだもん。伊織ちゃんだったら本当にアイドルに選ばれるかもしれないね！」

「ま、この伊織ちゃんにかかれば楽勝よ！ やよいだつてきつと選ばれるから頑張らないとね」

「う、うん。そうだね」

ふふん、というように長い髪をかきあげながら余裕の表情を見せる。

しかしその反対に、やよいは笑顔を見せはするものの声のトーンはどこか元気がない。

響と伊織の会話が継続する間、教本を纏めながらそのまま俯いた。その時丁度ドアが開いて律子が教室内に入ってきた。

みんな各々の席に戻り、律子の話が始まるのを耳を傾けて待った。講師である『ティーチャー律子』が壇上の教卓の横で話し始めた。

19歳の彼女はまるで財閥の家庭教師のような格好をしている。少し長い髪を後ろでまとめ、長円形のレンズをしたリムレスのメガネはテンブルにチェーンをつけて首の後ろに回してぶら下げられる様になっている。

襟付きの純白ブラウスを着てその胸元部分には大きなエメラルド

ブローチを付けていてブローチの下からは細長い赤のリボンが伸びている。キュつとした腰から下は膝下くらいまで裾が伸びる抹茶色のロングスカートと、3センチほどのヒールのある茶色のブーツを履いている。

服装は地味に見えて彼女にちゃんと似合っているのだから、やはり律子自身が大人っぽいのだろう。誰から見ても美人と言わしめる顔立ちにメガネが良く似合うしっかりしたお姉さんという印象だろうか。怒るときは怒って笑うときは笑う。照れるとそのギャップにきゅんと来ることもある。2年間、彼女のレッスンと勉強に励んで着実に成長したのだから、有能なのは間違いない。文句の付けようがない信頼できる女性だ。みんな慕ってはいるものの、千早だけは会話をするものややはりあまり関わろうとはしなかった。

最終段階に入る3年次のプログラムを強い口調で話し始めた。

「3年次の課題は特性向上よ。自分の持つて産まれた特性を向上させるレッスン。まあ得意分野といってもいいわ。個々の特性を磨くための特殊なレッスンが用意されています。卒業、特にアイドルになるためには個人能力と特性を高めて卒業試験にて講師、つまり私の合格を得る事が必要なので今までの研鑽を更に積む必要があるわけ。」

ここまで説明している律子だが、いまいち理解出来ていないやよいが質問する。

ゆっくりと手を上げるやよいに気付いて一時的に言葉を切ってやよいの発言を待つ。

「あのお、ティーチャー律子。つまり自分の能力を、特性で使いこなそうってことですか?」

「まあだいたいはそのいうことよ。2年生の時は特性の維持もようやく出来た段階だから、今度は無意識でも出来るようにしっかりとレッスンしてもらおうからね。その力を試験で私に見せて合格すれば卒業、実力次第でアイドルになれるわ。」

「な、なるほど・・・?」

律子が左手で教卓をバンツと叩いて少し声を大きくして座っている7人に続けて話す。

「2年次に修得した特性をさらに向上させるのが3年次の要。3度ある卒業試験で特性を活かした能力を使って私の合格を得ることで卒業することが出来る。そしてさつきも言ったように、成績実力共に優秀であればアイドルの選出も兼ねているわ。3度の試験で全て不合格だと退学。アイドルになるためには最低でも2度目で合格しなければアイドルの道はないと思つて頂戴。」

言い切ったところでフンツと鼻息荒く吐き出すと、今度は後方側に座る雪歩が手を挙げて律子に質問を投げかけた。

「あの・・・今までその試験で退学になった人は、ど、どれくらい居るんですか？」

雪歩らしいもつともな質問だった。この学院は3年に一度の入学と卒業という変わったシステムを採用しているため、先輩や後輩がいない。だからそういう『誰かが退学になったことやアイドルになったこと』という情報が全くないのだ。

最悪の出来事を予想ではなく確認をすることでどれだけ覚悟が出来ることなのかを推し量ることが出来る。今まで誰も退学したことがない、などと言うようなら気を抜く者は気を抜くだろうし、その言葉を逆に嘘ではないかと疑う者は全力の努力を惜しまないだろう。

だから常に自信が持てない雪歩はティーチャー律子にアイドルになるには、卒業するためにはどれほど困難なのかを再確認しようとしている。気弱な雪歩にとって大きな質問であることは間違いない。彼女の中にもやはり熱い何かがあるのだろうと思う。

そしてその質問に対しての律子の答えに絶句した。

「・・・每期、3名から5名ほどが最低ラインに到達せず脱落するわ。私がこの学院の教師になった時から每期それくらいの退学者が出ます。過去には9年連続で一人も卒業出来なかったこともあるみたいよ。」

「そう・・・ですか。ありがとうございます。」

雪歩の顔は見るからに沈んだ。そして他の皆も驚く者や堂々とする者、笑顔の者。

それぞれが違う表情を浮かべているにも関わらずさつきよりも強

い緊張感を感じた。

3名から5名と言っても何人中かを言わなかったことは彼女なりの優しさなのだろうか。

とはいえ、9年連続というのはあまりにも酷い。普通に考えれば入学した生徒が極少人数、3人や4人の場合。また、過酷なボーダーラインを敷かれたと考えられる。

もしくは退学が続くほど生徒のやる気や才能がなかった可能性もないわけではないが、これはほぼ無いと思っていいだろう。少人数ならまだしも自分達と同じくらいの人数が3期に渡って入学したのであれば充分大人数だ。その中でやる気や才能がない人間なんてまず居るはずがない。何故なら厳しい審査をパスしてこの学院に入っているのだからそれなりの力はあつたはずなのだ。にも関わらず3年間の研鑽の後に卒業できなかった。

となれば当然危惧するのはボーダーライン。ボーダーラインに到達できなければ卒業も何もない。退学、ただそれだけ。2年間頑張つて研鑽を積んできたのだ。ここで退学などという不名誉はなんとしても避けたいところだった。

当然ながら今の話を聞いて千早も驚かなかつたわけではない。

ただ千早はこの学院に居る間はどんな時でも努力を惜しむつもりは無かつた。

それだけアイドルになるのは大変なことなのだ、毎日自分に言い聞かせて全力で取り組んできた。3人や5人の退学という言葉だけで大きく揺らぐほどの覚悟ではない。

皆の顔を見て緊張感が伝わったのか、律子が少し笑みを見せて話を戻した。

「この特性の違いは大きく分けて4つに分類される。やよい、何だつたかわかる?。」

「はわっ! えーと、攻撃と防御、補助、特質の大きく分けて4つです。そこから細かくすると他人とは違う自分独自の能力のことです。」

「正解よ。この特性は指紋のようなもので十人十色の違いがあるわ。例えば土属性のやよいが持っているのは補助の中で最も多い身体強化

の特性ね。その特性を合理的に効率よくレッスンしてその精度を高めて無意識に必要な魅力を使えるようにする。入学当初のやよいは200キロの錘を持つてたけど、この2年間のレッスンで2トンまで持てるようになった。魅力操作の精度が上がってる証拠よ。みんな2年間朝から晩まで覚えたことを必死にレッスンしてきた。そして今はもうみんな教わるという作業は全て修了してる。」

「つまり、3年次の課題はひたすら特訓しろって訳ね。」

真つ先に伊織が両の手のひらを持ち上げて律子が何を言いたいのかを予測して答えた。

先を越された質問の意図を手早く答えてくれたことに律子の顔から笑みがこぼれる。

「さすがね、頭の回転が速い子は好きよ。伊織の言うとおり3年次の課題はひたすらにレッスンして特性と魅力を高めていく作業。この作業はあなたたちが能力を使い続ける限り一生付いて回る言わば“責任”。一般的な筋トレと同じだからサボったりしたらその時点で他と差がつくと思つて毎日を勤しみなさい。さて、他に質問は？」

質問の問いかけから数秒の後に真が手を上げて律子に質問を投げかけた。

「ティーチャー律子。卒業試験についてですけど、僕達それぞれの能力に対してのボーダー・・・合格ラインは答えてもらえるんですか？」
「それはダメ。教えてしまうとそのボーダーラインからの向上が止まってしまうわ。だから教えるわけにはいかない。・・・だけど、そうね。飛躍的に上達した程度とだけ言っておくわ。上達方法はそれぞれで考えてね。」

「なるほど。どれだけやればいいのかわからない不安と、実力に応じてその訓練を変えていかないと上達しない能力・・・精神的な負担が凄く大きいね。それなら退学が多いのも頷けるかな」

「それも含めての訓練でことですよ。やるしかないわ。」

「ですよねえ・・・」

伊織の言葉に雪歩が短い相槌を打つ。少なからず奮起した者もいるようだ。やるしかない。この学院に入って出来ることはやってき

た。難しいことも理不尽に感じることも細かい命令やルールも全て守ってきたのだ。今の自分達に余程の“想定外”が無い限りこの精神を揺らがせることなんて出来ない。ただ只管にやるだけなのだから開き直れば恐れることなど何も無い。この後の律子の言葉を聞くまでは、みんなそう思っていた。

「さてここで少し発表なのだけど、先日実施した能力値測定での結果なんだけどね。みんな相当頑張ってるからこのまま行けば全員卒業も夢じゃないわ。もちろんアイドル選出もね。」

その場の空気が緩んで喜びに変わる。退学などと暗い話ばかりしていたものだから反動が大きかったようである。笑声がこぼれる。“やったね” “これからだね!” “そういう声が聞こえてきて律子がニヤツと笑った。

「そしてっ!!」

賑わった途端の律子の大声。

ピタッと、音が鳴ったように静かになった。

何事かと思い、揃って律子に向き直る。

「あんた達の中で現在一番アイドルになれる可能性のある子を発表するわ。千早、前に来て」

室内が大きくざわついた。一瞬の驚いた顔の後、無言のまま立ち上がり前へと歩む。

アイドルになれる可能性を秘めた者だと言うのに何故千早が前に立っているのか。

能力、協調性、信用性も自分達よりあるとは思えない彼女が、何故自分の名前ではなく千早の名が呼ばれたのか伊織は理解できなかった。

「ティーチャー律子! 何故千早なの。どういことなのよ!」

「私が能力値測定で判断した結果よ。あなた達の誰よりも魅力と能力の特性が秀でていいる。日課にしている読書と一人行うレッスンの成果が出ているわけよ」

伊織たちからすれば魅力を高めるには“喜怒哀楽と感情豊かにすること”で成長するはずなのだ。だが千早は笑顔は殆ど見せない。

大半は湖の畔やあの桜の下で本を読んでいるだけで喜怒哀楽のどれでもない状態ばかりなのに、何故自分たちよりも千早の方が力をつけているのか、今の律子の説明だけでは到底わかるわけが無かった。

「じゃあ説明してあげるわ。あなた達が入学したての頃、魅力について説明したわね。魅力を上げるためには心を磨いて知識と経験を付けなさいって。」

「そうです！ 僕達は心を磨くためには喜怒哀楽が最適だとみんな考えました。」

「それで自由な時間はおしゃべりしたり遊んだりして心を開放してただぞ。それじゃダメだったってこと？」

「ダメじゃないわ。むしろそれが第一歩なのよ。魅力を鍛えるためには大切なこと」

「じゃあ何で千早が候補になるわけ!？」

「千早は自分に最適な方法を取っていただけのことよ。あなた達がお茶や船を漕いでいる間にもね。そして特性に関しては既に卒業生と同等に使いこなしているわ。目を見張る成長振りとは現段階での能力の高さからアイドル候補として発表したまですよ。」

それぞれの方法で行っていた魅力を高める心の開放は感情豊かなことが大事だと思い、そして今も律子はそう言っている。お茶をすることや船で遊ぶこと以上に行えるレッスンは一体何なのか。自分達以上に能力を有する千早は今までどんな方法で魅力を高めてきたのかに興味がある者や、そんなことはどうでもいいからちゃんとした説明を求めて怒る者。その光景をニコニコ見ている者もいれば荒げた声に反応して半泣きで身を縮める者。怒る友人にオロオロする者に不満そうだがそこまで怒ることでもないと腕を組んでいる者。それぞれが違う表情や感情が見えて少し面白いと思ってしまう千早であった。

「私は自分の好きな場所で本を読んでいただけよ。時には眠って時にはそこで昼食を食べて過ごしていただけ。」

「ほら聞いたかしら！ そんなの何もしてないのと同じじゃないの！」

「何もしていないのはあなた達よ。」

厳しい言葉が伊織を、そしてその場に居る千早以外をバツサリと切り捨てるが如く言い放った。

「私は喜怒哀楽が」第一歩」だと言ったの。そしてあなた達は感情を豊かにすることに徹した。それは間違いいではない。だけど、それ以上のことをしなないと成長しないのは能力を使う上で必要なことだと散々言ったはずよね。」

確かに、口がすっぱくなり耳にタコが出来るほどに律子は言葉にしてきた。能力などを使うためのレッスンはその実力にあつた方法を取らなければ成長しないと。それが今伊織を始め座っているみんなに襲い掛かっている。実力はある。能力も優秀。やらせて見れば大概出来て大した文句も付けられない。だけどそれ以上の成長が見られない。

停滞している。それに比べて千早はそれ以上のことをこなして来た。いや、正確には自然に出来てしまっていた。

「あなた達は感情豊かにすれば良いと、そこで考えをやめてしまったのよ。その先もう一步踏み込んで考えていたら違っていたかもしれないけれど、知識と経験を蓄えたのはこの中にどれだけいるかしら。」

沈黙。俯いて表情が暗くなる。あずさを除いて。そしてここで千早の考えを聞いてみることにした律子が千早に促した。

「私が言うのもなんだけれど、感情豊かが人間にとって大事なものは当たり前だから、それ以外に目を向けたの。知識は本を読めばおのずと入ってくるし、経験は普段のレッスンや自主レッスンで補えばいい。でも心を豊かにするのであれば、やはり自然に触れることじゃないかと思つたの。そのためにこの建物の周りには森に桜に小さな草原、湖に古い建物まである。少し遠出すれば町もあるし山も川もある。自然に触れる環境としてはスゴく充実している場所だと思わないかしら？」

全員が沈黙する。言われてみれば確かに、この学院の周りには不自然なくらい自然が整っている。となれば、千早の言うことは概ね正解と捉ざるを得ない。心を豊かにするというのは感情ではなく感性。

それを豊かにするという意味合いだったのだと、今頃になって気付くものが多数だった。そんな彼女達を見かねて口を開いたのは律子だった。

「これはあくまでも魅力に対するレッスン。魅力が備われればその分強力な能力を使うことが出来る。今のあなた達も大したものだけれど、千早はその遥か上に居るの。それだけのことをこの学院で感じ取ってきた。例え顔に出なくても、心が豊かなのは既に証明されているよ。」

律子に目で合図され自分の席に戻った千早はいつも通り机に手を置き律子の話を聞く体制になる。立っていた伊織もストンと椅子に座った。みんながそれぞれ自分のやってきた事を振り返りながら、あれは正解だった。これは間違いだった。そんな考えが頭の中でグルグル回っている。その中でも一番混乱と不安が押し寄せていたのが伊織だった。

今まで必死にレッスンをして日常を心の赴くままに過ごして来たのに、それを今更になって間違いだったのだと言われたのだから。そして今まで見下していた千早には能力全てにおいて劣ってしまったという事実にも必死で理性を抑えている。

怒りと興奮で涙も滲む目を擦って律子に目を向けた。

「じゃ・・・じゃあもう、私達がアイドルになるなんて・・・。」

「・・・そう思うのはあなたの勝手よ伊織。他のみんながどう思うかは知らないけれど、ここで諦めるのであれば私から言うことは何も無いわ。」

伊織は再び目線を落とす。膝の上に置かれた握りこぶしがフルフルと震えている。

涙を堪えているのか、それとも怒りを堪えているのか。今の伊織の中にどんな感情が渦巻いているのか・・・。長年一緒に過ごしてきたやよいですら、伊織の心にかかる言葉はどうとう見つからなかった。「3年生の授業やレッスンで私が出来るとはあまりないわ。ただ、何かについたり訓練の手助けをするだけだからある程度は自分でどうにかすることを覚えなさい。文字通り私のお眼鏡に適うようしつ

かり努力するように。以上。解散！」

そうしてこの日のオリエンテーションは終了した。律子が出た行った後、真と雪歩は今後の話しをしている。あずきは外に目を向けていた。伊織はやよいにレッスンに付き合ってもらおうように教卓の前で話をしていた。

考え事をする者が居たり、開き直って頑張ろうという者も居たりだが教室内はあまりいい空気とは言えない。千早はその日の予定をどうするか考えていた。桜の木の傍で本を読むことは確定しているが、すぐに向かうような気分でもない。一度自室に戻るか先に昼食を摂るか、本の続きを読みながら頭の隅で考えていた。

やよいはリングゴを持ってどれだけの魅力でリングゴが割れるのかという集中のレッスンをしていた。

律子から出された課題で部分的に集中した魅力をコントロールするのだそうだ。

強すぎれば弾け飛んで弱すぎれば割れないという微妙なコントロールをするレッスンで攻撃型の能力者がよくやる方法だ。

「んん〜。．．．はあ、なかなかうまくいかないよお」

「．．．．．」

「．．．ねえ伊織ちゃん。もう一回教えて？」

「別にいいけど。たまには別のやつに教わるのもいいわよ？ 例えばアイドル様の千早とかね。」

癪に障ったのか少しだけ眉間に眉を寄せる千早は読んでいる本をパタンツと閉じて前へ出た。部屋を出るのかと思われた勢いある歩行は黒板の前で教卓にもたれ掛かる伊織の前で止まった。

「何かしら？ 呼ばれた気がしたのだけど」

「あら、気のせいじゃないかしら？ 誰もあなたなんかのこと呼んでないわ。アイドル候補になつて自意識過剰になつてるんじゃないの？ 調子のいい事ね。」

そう言い放ち。やよいからリングゴを取り上げて掌の上でふわふわと浮かせている。

千早が部屋を出る拍子に後ろからぶつけてやろうという考えなの

だろう。

「水瀬さん。そういう言い方は品位に関わるんじゃないかしら。もう少し配慮した言葉を使わないと失言が目立ってしまうわよ。財閥令嬢の名が泣くわね」

伊織の表情が変わった。単なる怒りではなくキレた。

千早を含めその場に居る全員が伊織の逆鱗に触れたことを察した。フワフワ浮いている赤いリングが徐々に紫に変色していく。

微量だが、リングに電気を送り込んで帯電させているようだ。

「・・・むかつくわ。あんた。」

「怒るのは勝手だけれど、ふっかけたのはあなたよ。」

「・・・あんた何様？」

「・・・」

「なんとか言ったらどうなの・・・？」

「・・・」

「・・・なんで。」

そこに居る全員に緊張が走る。伊織の電撃なら部屋中を迸らせることは可能だ。

もし怒りが爆発したと同時に放電なんてしたら直撃する可能性も充分ありえる。

だからその場に居る伊織と千早以外の全員が放電に身構えていたが・・・。

「なんであんたがアイドルなのよ・・・なんで・・・」

そして手の上で浮遊していたリングが爆発するが如く弾けとんだ。

伊織の怒りを含んだ静かな声が表情と共に荒々しく変化していく。これ以上ないほど千早を睨みつけて伊織特有の桃色に光る電撃が掌から迸る。徐々に強くなっていく電撃はまるで伊織の怒りの増減を表しているかにも見えた。

「認めない・・・。私は、認めない！ あんたがアイドルだなんて!!」

「あなたが認めなくても、それを決めたのは私じゃない。私に文句をいわないで。」

「・・・ホントいい度胸だわ！ じゃあ今ここで決着を付けようじゃ

ないの!! あんたの氷と私の電撃。どちらが上なのかハッキリと!!」
「やめてっ!!」

伊織が声を張り上げたのと同じくしてやよいが悲しみの表情を浮かべて伊織の腕にしがみついた。

怒りに我を忘れかけている伊織に声を大きくして説得を始めた。

「や、やめて伊織ちゃん!! こんな事したって結果が変わるわけじゃないよ!!」

「・・・やよい離しなさい。」

「それに能力を使ったケンカは退学処分なんだよ!! 退学になんてなったらそれこそ意味がなくなっちゃうよ!」

「・・・」

やよいの必死の声に伊織は応えた。怒りに身を任せるのは自分の悪い癖だと自負しているが、やよいのことやプライドを刺激されると見境なく怒りをぶつける。

その度にやよいが必死に伊織を説得する。例えどれだけ怒りに囚われていても、やよいの声が届かなかったことは過去に一度たりとも無かった。そして今回も、やよいのお陰で退学という不名誉を回避することが出来た。

やよいが自分にやめろと言って来るのであれば聞かないわけにはいかない。それは伊織自身のプライドに関わる問題なのだから。伊織は千早の顔を再度睨みつけて無言のまま教室から出て行った。やよいも千早の顔をチラツツと見て伊織に続いた。

一悶着が終わり緊張が解けた途端にそれぞれに動き出した。涙目の雪歩に慰める真。

千早に話しかける響。そして窓際に座るあずさは息を吐く千早を無表情で見ていた。

第一章

後編

終

第二章 ―笑顔の底―

1時間後。私は授業の終わり自室に戻った後であずささんに呼び出され、教室へと向かっていた。

白い床が50メートルほど伸びる廊下は静まり返り、誰も居ないことがわかる。

教室の前に到着した私は数秒間ドアの前に立って、取っ手に手を掛け無言で開いた。

窓際に佇む笑顔のあずささんがこつちを見て、手招きで合図する。

三浦あずさ。彼女は謎の多い女性だ。入学当初から魅力のコントロールが抜群に上手で昔から能力の訓練は日課として続けていると言っていたが、それ以上のことを話してくれない。訓練してくれた先生や出身を聞いても話さず誕生日すらも知らないと言う。

スラム出身なのかとも思ったが、これほどまでの容姿端麗な女性がスラム生まれとは到底思えない。艶やかな紺色のショートヘアに足も長く女性にしては高めの身長で恐らく男性から見れば大変魅力的なスタイルをしているだろうと思う。

キレイな顔立ちから放つ明るい笑顔におっとりとした性格から想像が付くほどのマイペースなお姉さんだ。そんな彼女が人を呼び出すなんてちよつと意外だった。

断る理由もないので用件を聞いたら、また桜の木の下で本を読もうと思っっている。

ドアを閉め、あずささんの元に向かった。大して広くもない教室だが、天井の高さと固い壁のためか音が響きやすい。

呼び出したということはあまり人に聞かれたくない内容なのだろうと予想していたのだけれど、そんな話を教室ですると言うのは寧ろ軽率ではないだろうか。

となれば、特に他人に聞かれても良い話なのか。窓際に到着した私はあずささんの顔を見て妙な感覚に囚われた。

『いつもと雰囲気が違う』そんな感じだった。

「ごめんなさいね千早ちゃん。急に呼び出したりして。」

「いえ、こちらこそお待ちせしました。一体、どんな御用なんです？」
黒板を背にしてあずささんの顔を見る。いつもと変わらない笑顔がそこにはあった。

「ただ笑顔で話し始めたあずささんが、いきなりとんでもない事を口にしたためにたった今考えていた事が全部吹きっ飛んでしまった。」

「千早ちゃん。お願いがあるの。」

「なんですか？」

「アイドルにならないでちょうだい」

「なっ！ 何をっ——」

予想外の言葉に私は一瞬驚き冷静さを欠いた。だけどそういう反応を予測していたのかあずささんは驚いた拍子に後ずさる私を自分ごとカーテンで被って逃げられなくした。

カーテンで注意を逸らした隙に私の口元にあずささんの人差し指が当たる。

「しー。人が来ちゃうでしょ？」

「・・・だからっていきなり過ぎます。どういうことですか」

「ちゃんと理由はあるからそれを今からあなたに話します。信じるか信じないかは千早ちゃんが決めて頂戴。」

「・・・わかりました。」

「まず、私のことを話すわね。・・・私は三浦あずさ。この学院の地下で産まれた戦災児。生年月日は不明。能力は超長距離転移で——」

「ちよ、ちよつと待つてください。一体何を言ってるんですか？」

この地域が戦火に巻き込まれたのは数百年前と聞いている。その頃はもちろんこの学院は存在していないはず。つまりこの学院の地下で産まれたなんてことは絶対に有り得ない。

その上、生年月日は不明だなんて事は貧困街（スラム）出身以外にありえない。いや、今は貧困街でも生年月日は分かる。

この国外でならば紛争も起きている国があると聞いているけど、まさか・・・。

「ごめんなさいね。千早ちゃんが混乱するのもムリはないわ。簡単に言うとな、私はこの時代の人間じゃないの。80年先の未来から来

た・・・未来人。」

「・・・未来人？」

「そう。本来ならこの時代に居てはいけない存在なの。」

私の心に驚きや畏怖は無い。そもそもまともに受け止められていない。

唐突に何を言い出すのかと思えば未来人という。一瞬にして疑問が噴出する心を抑えて、タイムスリップして来た彼女は何の目的でここに来たのか。本の物語が好きな自分としては少々興味もでるところではあるが、こういう馬鹿げた話しに付き合うつもりは今のところない。

友人として話しに付き合いはするが聞き流す程度でしか対応できないだろう。

カーテンを元に戻し、あずきさんは私の眼を見ながら真剣に話し始めた。

「私はこの綺麗な世界とは違う、世界が崩壊した未来から来た三浦あずき。」

「・・・崩壊。」

「そこは草木は枯れて水も無くて、太陽が見えず舞い上がる粉塵と雷雲に覆われた世界。口元を布で覆わなければまともに呼吸も出来ないほどのね。」

あずきさんは話しながら外を見る。暖かい陽光を浴びて穏やかな顔がとても美しく見えた。

今のところ私の読んだ本に該当する内容はない。まだ知らない作品かあずきさんが考えた想像の物語なのかとも思える。

崩壊している未来の世界などまったく想像できない。この個人の能力でしか判断しない汚い世界を綺麗と言い、今よりも遥かに生き辛い世界。

少々だが興味が湧き始めていた。

「そして私は今から62年後にこの地下で産まれる赤ん坊。その頃には周りの桜なんて跡形もなく朽ち果てているわ。」

「その、未来ではどんな生活を送っていたのですか？」

真面目に聞いているというフリをしつつ質問形式で疑問を解消していく。

そこまで設定が出来ていないと人に話す意味など無い。主人公はあずささん自身なのだろうけれど他にどんな設定やストーリーが展開されるのか少し興味が出てきた。

あずささんは窓際の壁にもたれ掛かった。顔を見ると、困ったような表情になっている。

「私は物心付いた頃からずっと能力を伸ばすことだけ教えられてきたの。魅力のコントロールや知識。戦う術や能力を生かした攻撃、支援の方法なんかもね。」

卓越した技術。確かにあずささんは入学当初から魅力のコントロールや能力に対する扱い、知識と豊富な経験があるようだった。

しかし、そんな小さな頃から能力を扱っているのならアイドルになっただけもおかしくない。そういえば世界が崩壊したと言っていたがアイドルたちはどうなっているのだろう。

もしも大戦なんかが起こっていたら真っ先に投入されるのは能力者たちと兵器開発のお偉方のはずだ。アイドルは全滅してしまったのだろうか。

「アイドル達はどうなったのですか？ 世界が崩壊するような事態ならアイドルも戦争に加わったはずですよね」

「戦争……なのかもね。」

一瞬虚ろな目になったのを見逃さなかった。彼女の目や表情から真剣さがあるのが感じとれる。

意味ありげにボソッと呟いたあずささんだったが、すぐに質問の回答をあずささんの口が発した。

「アイドルは全て殺されてしまったわ。今生き残っている人間はもう目でも数えられるほどになってしまっているの」

つまり、目算できるのであれば多くて100人足らず。下手をすればその半分くらいしか生き残っていないことになる。もしその未来があったとして自分が生きて居る可能性など殆どないのではないか。だって並々ならぬ人知を超えた能力を持つアイドルたちが挙って全

滅しているというのだから。それに各国のアイドルたちも全滅しているというのであれば国間戦争というわけではなさそうだな。となれば、一体何と戦っているのか。

「そして私の両親も私達を逃がして死んじゃった。13歳のときの話よ。攻めてきた彼女達に両親は私達をおばあちゃんに預けて囿になった。」

千早 「両親も・・・。」

「両親はアイドルだったの。部隊長を勤めるほどの優秀な人たちだった。」

両親はアイドルでしかも部隊長。エリート中のエリートだ。出来すぎた設定だが、本当のようにも聞こえる。演技のレックスン？ 真に受けそうなほど切実に話している。

周りの人間も死んでいく中、正気で居られる方がどうかしている。この少なくとも徴兵されることのない世界は確かにあずささんの語る世界からすれば天国と言っているほどの平和な世の中。欲望や企み渦巻く裏の世界もたいしたことのないと思えるほどに。

話しながら伺えるあずささんの表情は笑顔ではいるが、どこことなく寂しそうにも見える。

気持ちを堪えているのだろうか。例えば本当でも作り話でも、こんな話は赤の他人である私にするようなものじゃない。なのに呼び出してまで聞かせることになんの意味があるのか。それがとても気がかりだった。

「私がこの時代に来たのはパラドックスを起こすため。未来では今でも、二人の眠り姫が破壊と殺戮を繰り返しているの。」

“眠り姫”。知らない言葉だった。聞いたことがないが、あずささんの話しではこの正体不明の生き物が敵なのだろうということだ。

だから私は質問する。それはどういったものでどういった生物でどういった行動をするのか。

「・・・眠り姫というのは？」

「恐ろしい能力者よ。誰がそう呼び始めたのかは定かではないけど、その二人があの世界をめちやくちやにした。」

「能力者!?! では、その敵はアイドルだというんですか!?!」

突如強大な力を得た能力者が世界を滅ぼし他のアイドルや能力者、ましてや一般市民を殺戮して破壊の限りを尽くしているというハチャメチャな内容だ。だが、ありえない事ではない。昔から能力に溺れた輩が弱者をいたぶる身の程知らずや犯罪者は後を絶たない。

一般市民でも少しなら能力を扱えるのだから、突如アイドルの中や一般から強大な力を得て反逆に出たと言っても今の世界ではありえない話ではない。

そしてあずささんの口からとうとう敵に関しての話が出ようとしていた。

「あれはアイドルなんて生易しいものじゃない。死神……。そう呼んでもいいかもしれないわ。」

「その二人と言うのは、今もこの世界に……。?」

そういうと、あずささんの目が細くなった。そして私を睨み付ける様に見る。

なにか悪いことでも言ってしまったのか?

少し気圧された私に向かって産まれてこの方、最も衝撃的な話を聞かされた。

「ええ、この世界に居るわ。一人は、星井美希と呼ばれる金髪の少女。もう一人は……。あなた」

「……。え?」

「あなただと言ったわ。そのもう一人は……。」

私は凍りついた。息をするのも忘れた。今あずさんはなんと言った?

あなた?

あなたとは誰のこと? あずさんが未来の人間だということも中々に信じられない話なのに80年先の未来は崩壊していて二人の眠り姫と呼ばれる能力者が暴れまわっている。

そして星井美希と呼ばれる少女と……。もう一人は……。

「あなたよ、如月千早。あなたが未来で暴れ、私の家族を殺し、世界を崩壊させる眠り姫の一人」

睨みつけていた眼が据わって無表情のようで憎しみが含まれた表情をしている。

こんなあずきさんは見たことがない。怒っている。あの三浦あずきが。

「ちよつ、ちよつと待つてください！ 未来人というだけでも信じがたいのに私が未来で暴れまわって人を殺してるなんて、そんなのただの妄想から来る言いがかりじゃないんですか!? 星井美希なんて知らないし証拠もないのに人聞きが悪いです！」

さすがに動揺を隠せない。言葉通り憤慨した。こんな事を言われて黙っていられない。

自分が未来の世界をめちやくちやに荒廃させてしまつて人を殺しまわっている？

人聞きが悪いにも程があるし信じろという方が無茶だ。私にはそんな能力はないし度胸もない。例え本当だとしてもどうしてそうなったのか全く想像できない。

混乱し始めている額に手を置き俯く。情報の処理が追いつかない間もあずきさんは話をやめない。

「今の時代で、一人の眠り姫が復活してしまうの。その眠り姫は星井美希。この学院の生徒はその星井美希と戦い、命を落としてしまふ。」

俯いた顔を上げゆっくりとあずきさんの顔を見る。この時の表現で一番適切なものは間違はなく『蛇に睨まれた蛙』だった。

人間とはこんなにも冷たい眼をすることが出来るものなのか・・・？

自分の顔が青ざめていくのがわかる。

入学から共に学び、過ごしてきた友人達をまるで会ったこともない他人のような扱い。

彼女は簡単に命を落とすなんて言葉を選んだ。元々信憑性などかからも無い。証拠も無い。

作り話と思つて聞く意外にない。だが、もし本当だとしたら、彼女にとつて私達は何・・・？

「そして、その星井美希を止めようと必死に一人で戦うのがあなた。しかし、星井美希に敗れてあなたは最後の賭けにでる。ある女性から薬を貰ったあなたは周囲の人間の声も聞かずその薬を使った。でも、その薬は罠だった。それは……」

「バケモノになる薬だった……と?」

「その通りよ」

「それが、これから起こると?」

「ええ。」

「……バカバカしい。ふぎけないでください。」

さすがに付いていけない。どんな物語を書いたのか知らないがこなんくだらないことに付き合わされたのかと思うとイライラしてくる。さつさと立ち去ろう。このままだとあずささんを怒鳴り吐けてしまいそうだ。

失礼します、と立ち去ろうとした時だった。あずささんが封筒を差し出してきた。

その四角い封筒は所々破れて黄ばみがかかり、表の文字は擦れて読めない。しかし、封はしっかりと開かされていて一度も開封されていないようだった。

「最後にこれを読んで頂戴。お願い。」

「……」

私は差し出された封筒を手にとって開いた。ペリペリつと音を立てて封をしていたシールが開く。中には2枚の便箋が入っていた。どうやら手紙のようだがこれが何だというのか。手紙を開いて文字を読み始める。

『——前略、如月千早殿。あなたに手紙を書く日が来るなんて思ってもみなかった。

今これを読んでいるということは、その時が近づいて来たということなのでしょう。

未来では本当に凄惨な日々が続いています。愛するものを奪われ、

思い出の場所を破壊され、生きる希望が日に日になくなるこの世界はまさに地獄。この世界をどうにか変えたい。そのために、そこに居る三浦あずさを信じて下さい。それがまず始まりであり、未来を変えるための一つの希望なのだから。

あなたとはまた本の貸し合いをしたかった。もつとあなたの読んだ本を読みたかった。

あなたは自分の読んだ本には必ず桜の花びらを目次に挟んでいたわね。山桜の花言葉の話をしたときのあなたはとても楽しそうだった。今では何もかも懐かしい。高尚でいたいと話してた志はとても立派だとそのときは思ったものさ。

だけど、あなたはあんなに変わってしまった。もう本を読むこともないんだらうね。

自分の夢が叶わなくても、せめて子供達の夢だけは叶えたい。平和な未来を。平和な世界を、託します。無茶なお願いだけど、どうか信じてほしい。

よろしく頼むさ、千早。

1×年 ○月△日』
×

「・・・我那覇・・・響より。」

ドサつという勢いで床に尻餅をついてしまった。足の力が抜けてアヒル座りになって震える手で手紙を見た。1×年・・・今から80年後の未来。手紙も古く、きつとこれを書いてから何年も経っている。ポロポロの封筒に黄ばんだ手紙。例えうまく作ったとしてもこれだけは書けようがない。書ける訳がない。だって・・・

「どう？ 信じてもらえるかしら？」

そう。私は我那覇さんと本の貸し借りをしている。別におかしくはない。

彼女とは友人同士なのだ。周知の事実が書かれていてもおかしくはない・・・

だが、あり得ないのだ。

私は山桜の花びらを目次に挟んで常に志を忘れないようにしてい

る。

山桜の花言葉に高尚というものがある。学問や技芸、言行など程度が高く上品であること。気高く立派であること。この花言葉を忘れないかぎり私は向上し続けられる。

だが、花言葉のことを知るといいうのは普通の生活の中ではまずないだろう。私が誰かに話さない限り東洋の知識である山桜の花言葉を知り得はしない。この手紙の中にその内容が出てくる。

私は話していない。山桜の花言葉も私の持つ全ての本の目次に桜の花びらを挟んでいることも……。

「……信じるわあずきさん。あなたを信じる。」

「よかったわ。一時はどうなるかとヒヤヒヤしちゃった。」

ヒヤヒヤする顔というのは困った顔に近いと思っっているけど、彼女の眼はそんなヒヤヒヤとは到底いえない眼で私を見ていた。

もし拒否して出て行くものなら後ろから刺されてもおかしくないほどに冷徹な眼をしていた。是非とも鏡で見せてやりたいところだ。だけど、もしかすると私はこの手紙に救われたのかもしれない。

それにしてもだ。急いで作ったにしてもたったの1時間と少しくらいで、これだけボロボロの紙に言ってもいない事すら書かれれば信じないわけにもいかない。

「ついさっきの彼女との出来事がこの手紙に書かれてるんだもの。仕方ないわ。」

響が本の貸し借りを提案して来たのは数日前。いつもみたいに湖の畔で本を読んでたらその本読んだことあるぞ。と話しかけられ、その本の内容や別の本の話で盛り上がり、本の貸し合いを提案された。自分も読んでみたい本がまだまだあるし我那覇さんの本は自分とは趣味が違っていて知らない本ばかりだったから都合が良かった。だけど、目次に挟んだ花びらの意味は我那覇さん以外に教えていない。先日、鼻の上に落ちてきた花びらを新しい本の目次に挟んだ。その本をオリエンテーションの後。水瀬さんが出て行った後に話しかけられて貸した際、我那覇さんに質問されて初めて人に花びらのことを教えたのだ。それからたった1時間。その時間でこの手の込んだ工作

をする意味など考え付かなかった。

「響おばあちゃんからね、今日の放課後に呼び出して手紙を渡して欲しいって言われていたの。どうやら効果があったみたいね」

「でも・・・ほ・・・本当に・・・？」

「信じて」

冷たい眼から一転してジッとこちらの眼を見つめてくる。真剣さがすごく伝わってくる。

未来人ということも未来が絶望的だと言うことも本当なのかもしれない。

だって『信じて』という一言にこんなにも心を感じたことはないのだから。

「：わかりました。信じます。でも、私の質問には答えてください。」

ようやく確信を持てたのか私の信じるという言葉を聞いて、笑顔を振舞ういつものあずささんに戻った。冷ややかな雰囲気や怒り、憎しみの感情は一切消えてしまっている。

胸の前で両手を組んで頷く。

「うふふ、何でも聞いてちょうだい。」

そういつてあずささんは教室の机に腰からもたれ掛かる。

私も窓際から離れてあずささんの隣にもたれ掛かった。

確かに、こんな内容だと人には聞かれる訳にいかないわね。

そういつてあずささんに近づき質問を開始した。

「・・・じゃあまず、どうやってあずささんはこの時代に来たんですか？」

「・・・私の能力は超長距離転移。過去に跳んだ後での行動のしやすさも含めて都合がよかったから、時の魔女にここへ送られたの。私は位置移動だけで時間転移まですることができないから彼女達にお願いしたの。」

確かに、あずささんは長距離転移という能力を持っている。国を跨ぐほどの距離を一瞬で転移、つまり移動することが出来るという稀な能力だ。そしてあずささんだけでは時間移動も空間移動も出来はしない。新しく出てきた『時の魔女』とやらの話を聞く。

「時の魔女とはどういった人物か教えていただけますか？」

「難しいけれど、答えるわね。彼女達は昔も、今も行き続けている魔女……というのは大げさなのだけれど。能力で自分の身体の時を止めたせいで、外的要因以外で死ぬことがない不老不死の持ち主。特質の能力を持つ双子の子供。一人は時間操作で時間を操り、一人は空間操作で文字通り空間を操る能力を持つてるの。二人揃って初めて発揮できる時間時空を操る能力者。まあそれ程の能力だから当然、発動には膨大な魅力が必要なのだけど。」

なんとなくだけれどわかってきた。つまり、未来ではその時間や空間を操る能力者を見つけたことよって、原因であるこの時間に転移してきた。それに選ばれたのがあずささんだった。未来をいい方向に改変することが目的なのであつて、そのためにはこれから目覚めるであろう星井美希を目覚めさせないこと。もしくは倒さなければいけないということになる。でもそれならば……。

「この世界の双子を見つけて原因である星井美希を別の時間や空間に飛ばしてしまえばいいのでは？ この時代にも生きていたのであれば、その双子の居場所も知っているんですよね？」

「それが、この時代に来てから必死に探したのだけど見つからないのよ。」

「この時代の居場所をその双子に聞かなかつたんですか？」
「もちろん詳しく教えてもらったわ。でもその場所には居なかつたの。」

居なかつたなんて、そんなことが有り得るのだろうか。確かに80年も前の事だと、まず覚えている方がおかしな話だけれど……。覚えていてあずささんに断言したのだとすると、まず間違っているとは考えにくい。他に情報が無いあずささんはそれを頼りに動いていたはずなのに。

何故居なくなつてしまつたのか、私には想像すらもつきそうに無い。

「……一体何故。」

「それはこの世界が、既に改変されてしまつた世界だから。」

「!?」

正直に言うとうち今日ほど驚かされる日は今までも、そしてこれからもきつと無いだろうと思う。それほどまでに衝撃的なことが多すぎて頭がパンクしてしまいそうだ。

だがパンク寸前の頭でもハッキリとわかることもあるものだ。疑問の答えを言った時点で双子に何が起きたのかが私にもハッキリとわかった。

認めたくは無いらけれど、もし本当に過去から現在に至って改変された世界なのだとしたら、それはこの時代の双子の行動が変わっているということになる。予め教えられた場所に居なかったことがその証拠と言ってもいい。

でも、じゃあどうして……。

「じゃあ、何故もつと前の時間に跳ばなかったんですか！ そうすれば時間もあつたはずです！ 改変された原因だつて突き止められたかもしれないのに。」

もたれ掛かった机を勢いよく離し身体ごとあずささんの方へ向けて強い口調で言い放つた。

改変された世界だというのなら改変前に転移して原因を排除すればそれで解決ではないか。なのに何故改変されてしまったこの世界のこの時間に転移したのかわからない。

いや、予想は出来る……。人を別の時代に転移させるという大掛かりな計画でそんな穴があるとは到底思えない。ということは、転移の計画実行時にトラブルが起こつたと思うほうが自然。荒廃した世界で用意周到に練っていた計画を土壇場で変更せざるを得ないトラブルといえ、一つしか思い浮かばない。

「本当はこの時代から更に100年前に転移するはずだったけど、未だあなた達に邪魔されてしまったから。」

「……転移にはどんな準備が必要だったんですか？」

「時間転移には双子の魅力を最大まで高める必要があつたの。そうしないと、180年という時間を遡ることができなかった。もしも無理やり180年前に転移してたら彼女たちは命を落とし転移した私も

時空間に閉じ込められていたでしょう。奇跡的に時空間から出られてもどの時代でどの場所かもわからないし、きつと精神が無事ではなかったはず。当然、そんな奇跡をいくつも重ねないといけない賭けに出るわけにはいかなかった。そして追い込まれた私達は、双子たちの能力が安定する範囲での転移を行ったわ。この時代にもっとも近い時に跳ぶ事が出来た。それが3年前。」

かなり複雑な内容で、言葉だけだと理解が追いつかない。出来る限り頭の中で整理をする。

元々第1候補だった今から100年前、つまり180年前に転移する直前で眠り姫に襲われて時の魔女達の魅力が足りず転移できなかった。仕方なく予め用意していた第2候補である3年前に緊急転移。何とかこの時間まで跳ぶことが出来たが、既に改変が行われたこの世界で時の魔女を見つけることに困難を強いられているということ。

さらに考えると、あずささんには気の毒ではあるけれど、未来ではもう眠り姫を食い止める手段や戦力が尽きてしまっていると思っ方がいい。魅力を練る時間稼ぎも出来ないほどの戦力差だとすると、転移したあずささん以外の未来人達の生存は絶望的かもしれない。

その魔女達も、我那覇さんも・・・

「・・・大体は把握できてきました。・・・それでその、我那覇さんは・・・生きているの?」

恐る恐る質問してみる。日差しに雲がかかり窓から差し込む春の日差しが一瞬にして遮られた。そしてあずささんの視線が落ち、寂しそうな瞳を私に向けて声を発した。

その答えは、私の予想通りの答えだった。

「響おばあちゃんは、死んだと・・・思う。」

「・・・私のせい・・・ですよね。」

「改変計画実行のときにね。眠り姫の襲撃を食い止めていた響おば・・・我那覇響は、私が転移する直前にあなたに胸を貫かれたの。未来には、怪我を治せる能力者や医師者は居ない。きつと・・・助かってないと思うわ。」

「……」

何故か悔しい。未来の出来事だ。今の自分には何の関係もないはずで、未来のことを想像したところでわからない。だけど悔しい。そんな気持ちが湧き上がってくる。

どんどん険しくなる私の顔をこの人はどんな気持ちで見ているのだろうか。

春でも涼しいくらいなのに汗が止まらない。

次から次へと聞かされるのは未来の自分が起こす悪行。未来の私はどれほどまでに残酷で無慈悲なのだろう。例え眠り姫であろうとも、かつての友人にまで手をかけるほどに残酷非道になってしまったのか。目の前にいる彼女はどれほど私の顔を憎んでいるのだろうか。家族を殺され、慕っていたであろう人を殺され、未来を奪われて今ここにいる彼女は、一体どれほどの修羅場と悲劇の中をくぐって来たのか。

もはや普通の人間が想像も出来ないほどの苛烈極まる死線に居たに違いない。

どうすればこの人に許してもらおうことが出来るのか。いや、きつと永遠に許されないだろう。今の自分ではなくても未来の自分が彼女の全てを奪ってしまったのだから。

「協力してください。」

ビクツと身体が跳ねて彼女を見る。笑顔のまま居てくれる彼女の顔があった。

きつと今の自分の表情や態度を見て気持ちを察してくれたのだろうか。

「私や響さんに詫びたい。報いたいと思うのであれば、未来が良くなる様に協力してください。私の望みはそれだけです。・・・お願いします。」

頭を下げられた。頭を下げなければいけないのは私の方だ。きつと許されはしない。

今でも彼女は激しい葛藤の中に居る。仇の顔に頭を下げるという、常人ならば胸が張り裂けそうなほどの屈辱と激昂の最中なのだから。

だけどあずささんはそれでも頭を下げ続けた。その時、私は唐突に理解した。彼女の中では既に優先順位が決まっているのだ。だから例え仇の顔でも頭を下げるのだろう。

強い。

恐ろしいほどに強い。そして同時に哀しい。ここまで来てしまった以上突き進むしかないのだろうけど、それでも目的のために周りの全てを犠牲にすることを躊躇わない彼女の心が。これほどの覚悟で頭を下げる彼女を、無碍にすることが出来るだろうか？

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

深々と頭を下げる。その下げた頭の先にあずささんから手を差し伸べられた。頭を上げてその手をギュツと握る。力強く。彼女の期待に応えられるように。

手を放し、そろそろ自室へ戻るためにあずささんは話を終わらせ教室を出て行くこうとする。

寸前にこの疑問はやはり聞いておこうとあずささん呼び止めた。

「あずささん。．．．もう一つだけ聞いても？」

「何かしら？」

「この世界は既に改変されてしまった世界だと言いましたね。ということは、未来から今よりも過去に飛んだ人間が．．．？」

「．．．．．居るわ。一人だけ．．．。」

あずささんは教室のドアの前で振り返った。その顔に笑みはなく、眼は冷たくもなく普通だったが、触れていい話ではなかったらしいことは雰囲気伝わった。

「その人の名前は、貴音。．．．私の．．．妹よ。」

第二章

終

第三章 —世界の分岐—

私は本を持って丘の上にある桜の木へ向かっていた。あずささんの話を聞いて別れた後、かなりの混乱を強いられた。自室に戻ってあれやこれやと考え込んでいたのだけど、テーブルに置いていた本を目にして桜へと足を向けた。既に午後4時を回っている。

夕食まであまり時間もないが閉じこもっていても気が滅入るだけなのだから外でゆつくり考える方がいいかも知れない。

新校舎からほんの少し距離はあるが、気に入っている場所のためなら歩くのも苦ではない。

桜の根元が見えはじめたとき、そこにはあのリボンの少女がこちらを向いて待っていた。

目を少し擦ってみるが、どうやら今度は夢でも幻でもないらしい。桜の手前まで歩いたところで足を止めた。お互い5メートルほどの距離で向かい合って数秒、少女が千早に声を掛けてきた。

「待ってたよ。千早ちゃん」

「・・・どうやら夢ではなかったのね。」

「あれは夢だよ。私はあなたの意識にちよつと触っただけ。」

「・・・名前聞いてなかったわね。私は——」

「改めて初めまして、如月千早ちゃん。私は春香。天海春香」

「春香、なんで私の名前を知ってるの?」

「みんなそう呼んでるじゃない。違うの?」

確かに千早と呼ばれている。ティーチャー律子からさえも。ファミリィネームの方は私自身が好きになれないから下の名前で呼んでくれと学院に入ったときに自己紹介で話したからだろうけど。少なくともそのときにこの春香は居なかったし、自分達7人と教師1人しかいないこの学院で見かけたことの無い春香が生徒でないのはわかってる。

何者かわからない彼女のことを警戒してはいたものの、しかし何故か、心のどこかでは不思議と安心している自分もいた。

ゆつくりと彼女に近づいて行く。

「・・・いいえ。違わないわ。私は如月千早」

「よろしくね。」

「ええ。私に何か用？」

「うん。単刀直入に言うとな、千早ちゃんにアイドルになってつて言おうと思つて。」

この言葉を聞いたときに目眩でもするかの様に頭部に右掌を押し当てる。

今日は一体なんだというのか。アイドル候補の発表から伊織を怒らせ、あずさにはアイドルにならないで欲しいと呼び出され、今度は出合つて間もない友好的な付き合いも無い目の前のリボンの彼女からはアイドルになつて欲しいと言われる。

アイドル、アイドル。確かにアイドルにはなりたいが今日と言う日に同じ言葉をこうも何度も聞くと流石に少し嫌気がさしてきてしまう。いや、正確には『同じ言葉を使った流れの違い』に耳がイラついているのだ。しかし、あずさの話を聞いたあとなのだ。

恐らく春香もそれなりの重い話をするのだろうと察し、額の手を下ろして口を開く。

「どういふこと？」

「ちよつと長い話だし、ショック受けちゃうかもしれないけど落ち着いて聞いて欲しいんだ。今から話すこと。私達のことを知つて欲しい」

この丘は時々強い風が吹く。その風が桜の花びらを飛ばし、吹雪のようになつて降り注ぐのだ。だがこの桜は季節が変わつても年中咲き乱れ枯れることはない。

その風を浴びながら、まるで二人しか居ない空間にでも入つたような錯覚を起こす。

二人は桜の木の根元に座ると、春香が静かに話を始めた。

春香の身に起こつたこと。100年前の学院。星井美希と共にアイドルの道を掴み取つたこと。その道を講師である律子が閉ざしたこと。その時に起こつた凄惨な事件の全てを私に話してくれた。

「……どうコメントしたらいいのかしら。」

凄く困った。もの凄く困った。本人は至って真面目に話をしているように見えるから余計にツツコミ辛い。

偽者の律子？

謎の薬？

魅力で人を操る？

何を言っているのだろう。

この天海春香なる少女は今、夢物語か重度の妄想のように現実味のない話を私に聞かせている。

星井美希の暴走の話は先のあずさの話と合致する部分はある。だけれど、別部分も聴いてみると逆にあずさの話も作り話に思えてきてならない。未来の我那覇さんの手紙がイタズラに作られたと思ってしまうほどに。

「……だから、信じられないかもしれないけど私は生きた人間じゃない。とつくの昔、100年前に死んだ人間なんだ。」

「つまり……幽霊……ということなのかしら？」

「そんな感じかもしれない」

そろそろ本当にドツキリか何かではないのかと我慢できなくなってきた。

本当はみんなで設定を考えて、見たことも無い春香をどこかから連れてきてセリフを言わせて陰から笑っているのではと……。

だがあずささんに関しては何証拠とも呼べる我那覇さんの手紙があったのだ。それだけを根拠にするのもどうかと思ってしまうが、入学当時のあずささんの能力値を考えても物心付いた頃からの訓練ともなれば説明も付く。教えていたのが我那覇さんなら尚更だ。能力の育て方を知らない一般人とは違う明らかな実力。あずささんにはそれが根拠に成り得るのだ。だから未来人というのは信じてもいいかもしれないが、話だけで特に証拠もないこの幽霊少女の言うことは流石に如何なものか。

タメ息を吐きたい気持ちをどうにか押さえ込み会話を続けようとする。

「・・・続けて」

「・・・千早ちゃん。今ちよつと“幽霊なんて”と思つてタメ息吐きたくなつたでしょ?」

「え。い、いいえ? そんなつもりは・・・」

「・・・ふふ。」

頬を膨らませて見るからに不満そうな顔をしていた春香が、一転して笑つた。

まるで心を読まれたのかと思うほどに言い当てられてしまったけれど、どうやらからかわれてしまつたらしい。今度は私が少し不満そうな顔をする。

「もお、ひどいわよ春香」

「あはは、ごめんね千早ちゃん。何せ久しぶりにこんな会話が出来てちよつと嬉しくて。」

その笑顔は本当に嬉そうだった。髪に括られたリボン。身体の大きさは同じくらいで華奢に見える腕と足。無垢というに相応しい笑顔の背景に散り落ちる桜の花びらがよく似合つていてとても画になる。

こんな会話は私も久しぶりだった。学院に入る前もそうだが、入学したあとでも冗談を言い合うような会話は殆どしていない。

というより出来る相手を作ろうとしなかつた。自分自身の雰囲気も性格も冗談が通じないのでと誤解されがちだが親しい友人を作ること研鑽を怠つてしまふのではないかと不安だったからだ。

萩原さんとたまにお茶をしたり我那覇さんと本の貸し借りをしているが、それは単にリラックスと知らない本の貸し借りをすることが出来るから。友人ではあるものの知り合いレベルの仲だ。

アイドルになるためには遊びを捨てて一心不乱に努力を続け、高みを目指して力を伸ばす。

本を読んで知識も蓄える。結果、主席で入学した伊織や次席の響を差し置いて現時点でアイドル候補に選ばれた。

この状態を維持すればいずれは・・・と考え、今までに比べ一層友人や遊びなどを疎遠にするつもりだ。だからこの春香ともそこまで

親しくするつもりは毛頭無いのだが。

「まあ、普通いきなりこんな話をされて更に“私ユーレイ”なんて言われたら信じるわけ無いよ。」

「・・・正直に言うかと疑ってるわ。あなたの話しも幽霊なのかどうかも。」

「だよなー。じゃあさ、私に触ってみて。」

春香の腕に恐る恐る掴みかかってみる。すると驚いたことに春香の腕を触ろうとした私の左手がスツと通り抜けて通り抜けた部分がユラユラと揺れて、マール模様のように見える。

実体がない。そういう能力も無いわけではないが、もし能力だとしたら通り抜けたときは身体が透けているはずなのだ。だが彼女は透けるのではなくマール模様でユラユラしていて元に戻るだけ。こんな能力は自分の知識にはない。

「あなた・・・本当に幽霊なの?」

春香は立ち上がって2、3歩前へと歩き出す。周囲の桜を見渡ししながら空気を思い切り吸い込んで息を吐ききった後に千早へと向き直った。

左手人差し指の先を自分のコメカミに当て付けて考えてみる。

「正確には魅力を媒体にした精神体・・・かな? この木に流し込んだ魅力のおかげで私はここに繋ぎとめられてる。この木を中心に周りの桜にも私の魅力が行き渡ってるから、桜のあるところまでなら歩き回れるんだ。」

「それより外に出たら・・・?」

「私、消えちゃう!」

春香は両手をグーにして口元に持っていく。恥ずかしいような仕草をして顔は笑顔。

小芝居がかかった言い方だったが、本当に消えてしまうのだろうかから冗談じゃない。

彼女の元の性格なんだろうけれど、何とも楽しそうに話す少女だろうと思う。

「と、思う。」

ズツコケそうになった。

まあそれはそうだろう。実際に試したら今ここにはいないのだろうし。

しかし、可能なのだろうか？

今まで様々な本や資料に目を通してきたけど魅力を物や生物に流し込む能力なんて聞いたことがない。木々に魅力を流し込んで残った精神体だと言ったけれど、それはつまり魅力と精神には何らかの繋がりがあると言うことだろうか？

実際のところ、魅力についてはかなり昔にそのメカニズムが解明されている。だけれど、魅力と精神に繋がりがあるなんて証明は今まで成されていない。しかし目の前には魅力でこの世と繋がった精神体の女の子が今目の前にいるのだ。胡散臭くはあるものの、必要以上に疑う余地もなくなっていた。

「でも、木々の中にある春香の魅力はなくならないのかしら？」

「うーん。私がこうやって長時間精神体化し続けたら消耗しちゃうかも。」

「かもって、私なんかと話してたら春香が消えてしまわないかしら？」

「大丈夫だよ。今まで何度か試してみたけど、何故か回復していくみたいだから。」

「回復……この桜のおかげってこと？」

「わかんないけど多分。空気中と陽光の魅力を吸収してるから、同化状態の私も回復するのもかも。光合成ってやつ？」

「この世を彷徨い太陽の光と空気で生きる……文字通り植物状態。全然笑えない。」

しかし春香の能力事態がかなり特殊なものだから実現できたことだが、そもそも他人や植物なんかに魅力を流し込むなどと言うことが出来ないのだから春香以外にこの状況が分かる人間などいない。春香の話も信憑性が無いにしろ、真剣さが声から伝わってきて……あるいは悔しさが見えた。

「春香……その……星井美希って言うのは……」

「美希とは腐れ縁というか、親友って言うのかな。小さい頃に施設で

出会ったの。私より後に入ってきた美希は凄くワガママで、最初はケンカばかりだった。だけど、お昼寝の時間には必ず私の布団に潜り込んで来て・・・義妹みたいに思ってた。」

春香は空を見上げていた。視線の先を2羽の鳥が遊ぶように飛び回り去っていく。

そのまま春香はそっと目を閉じた。かつては、あの鳥達のように二人で遊び、二人で学び、二人で眠った100年前の記憶に思いを馳せているのだろう。

その姿を見て私は世界の残酷さに怒りを覚えた。子供の頃から同じ時間を共にして、ようやくアイドルの資格を掴み取った途端に永遠の別れを告げさせられたのだ。それも家族同然の間柄である者の手によって。そして星井美希も、一番大切な人を手になければいけなかった自らの無力さを呪ったに違いない。それを精神的に耐える事なんて私ならばムリだ。そう断言できる。

瞼をうつすらと開く春香から哀愁を感じた。数秒の間の後にしつかりと目を開き話を再開する。

「だから美希が私を殺したとき、凄く心配だった。目を覚ました美希がもしも正気に戻ってたらどうしようって・・・。もしも正気に戻っていたらあの子はきつと、私を殺したことに堪えられない。せめてあの子を迎えに行けたら・・・ずっとそう思ってた。」

「あなたって凄いのね。」

自然に出てきた感心の言葉が春香には不思議なようだった。

何故そう思ったのかは自然と理解出来たけど、春香は全くわからないさ。さそうな顔をしていた。

「・・・そうかな？　どういうところが？」

「小さい頃からワガママ相手にケンカして、すぐ一緒に昼寝して。殺された後の百年もの時間をずっと美希の身を案じてる。本当に美希が大切なんだって伝わってくるわ。」

そうやって私はその言葉を口にした。多分この時、春香はまったく予想していなかったんだろうと思う。そして私も春香の反応を予想していなかった。

「まるでお母さんね。」

春香の顔には驚きの表情が浮かんでいた。目を見開き口を小さく開けて私を見ている。

何か悪いことを言ったかしら？

私から顔を逸らした春香の顔がどんどん赤く染まっていく。そしてとうとう抱えていた膝に蹲ってしまった。

数秒、具体的には10秒ほどの間の後に少しだけ顔を上げた春香は鼻から下を隠したまま私を見た。耳まで赤くなっている春香は不覚にも可愛いと思ってしまう。

「まさかそんなこと言われるなんて・・・」

「あ、嫌だったかしら？」

私は苦笑いから一応謝る体制になっていた。人間は相手の反応を見て次にどういう行動や言葉が出てくるか予想するという無意識の意識が働いている。

だからきつと地雷を踏んだ様に言ってはいけないことを言ったのだろうと思った。

すると春香の目がどんどん潤んできて、そしてまた顔を伏せた。

更に10秒ほどの間をおいてゆっくりと顔が上がって赤らんでいた顔が少し戻り、こちらに顔を向ける。

「ううん。そうじゃないんだ。実は昔、学院の友達にも同じこといわれちゃって・・・。まるで美希のお母さんみたいだって・・・思い出しちゃった」

何事もないようにこちらへ笑顔を向けるが、伏せた膝の中で100年前の気持ち頬を滴ったのだと察した。当然だろう。例えば精神体だとしても、常人ならとつくに磨耗して会話することも困難な程の時の流れを独りで居たのだから。笑顔で居ることもきつと奇跡ではないだろうか。

正気を失ってしまった最愛の義妹と戦い、命を落としても尚この場所でするように待っている。誰とも話さず姿も見せず、いつか誰かが美希を忌まわしき呪縛から解き放ってくれるその人を。けど、それは私ではない。星井美希と戦える能力もなく、彼女を救う手立ても皆目

見当がつかないのだから。今の私は春香とこうして話をするだけ。

私の役目はそれでいい。彼女の心を少しでも軽く出来たのなら少しの会話くらいお安い御用だ。

美希を救うという大きな使命はいつかまた現れる正義感と探究心の強い誰かに任せよう。

きっとそれが私にとつても春香にとつても最善なんだと思い込む。

私は春香が常軌を逸する強固な精神力を持っているのだと思っていたが、そういうことじゃない。春香の心は今でもか弱い少女そのものだ。普通の女の子と何も変わらない一人の少女。ただ美希のために必死に孤独に耐えてきた。それはきつと死ぬ間際から、

いや・・・そのもつと前から覚悟していたのだろう。美希のための覚悟を。

人との付き合いなど私の卒業まで一切絶つつもりだったのだけど、残されたこの学院での時間の中で春香とお話する時間を作ってもいいかもしれない。

馬鹿げた偽善かもしれないけれど私が卒業するまでのたったの1年だが、春香の孤独を少しでも和らげることができるのなら。

そんなことを考えながら、頭の別のところでは新たな疑問が生まれ始めていた。

律子のことだ。

春香たちが騙されたという偽教師。春香も美希もこの学院の生徒だった。

彼女達は律子の偽者に呼び出され地下へ向かい、美希は怪しい薬を打たれた影響で狂乱してしまった。

春香は美希を殺す決断ができず、致命傷を与えられてそれでも自分の命を散らして美希の命を救った。優秀な彼女達でも見破れなかったティーチャー律子の偽者は、虚を付いたとは言え罠に嵌める力を持っていた。道案内をするほどの余裕を持ちながらとなると、相当な能力者だったに違いない。

相手に化ける能力・・・。

もしそんな能力を使われたら何らかの対処をしない限り簡単に隙

をつかれてしまう。

ハッキリさせておかなければいけない。

少しずつ顔の赤みが抜けていく春香に質問をぶつける。

「いくつか質問してもいいかしら」

「もちろん」

重い話をしたばかりだというのにそこにはもう吹っ切れたように笑顔で答える春香が居た。目の潤みも完全に消えている。

自身満々に『もちろん』ということは何を聞かれても問題ないほどの答えを用意しているのか。それだけ余裕があるということだ。なら私も心の準備を整えつつズケズケと踏み込んでみるとしよう。

「まず、今の時代で私達を教えているティーチャー律子は……。」「偽者だよ。この100年、化けてる所しか見てないから正体は私も確認出来てない。」

やはり、あの律子は偽者。100年前に偽者として春香達の前に現れたのは、既に本物の律子は殺されていて入れ替わったということだ。騙すだけなら化けて春香達を騙し実験すればいい。だが、殺したということは本物の律子に見つかるわけにはいかなかったのだろう。

そして春香の話しでは偽の律子は100年この場所に滞在しているという。

長期的に何かの目的でこの場所に居続けるためには律子と入れ替わる必要があった。

今までの話しからすれば、理由は一つしかない。

「では、やはりずっと作った薬を試していたのね？」

「うん。どれだけの生徒が犠牲になったのかわかんないよ……。」

「私達は実験材料……ということなのかしら。」

「そうだけど、そうともいえないかな。」

実験材料だと肯定されなくなかったけれど、肯定とも否定とも違う曖昧な答えが返って来た。春香の言うことが何を指しているのかわからず首をかしげる。

それを見た春香が、中途半端な返答と捉えられたことに気付いたの
で言い直した。

「えつとね、アイドルと実験体は別だと考えればいいかな。」
「別？」

「うん。この学院はアイドルを輩出したときの褒賞金で運営されてい
るの。つまりアイドルは金銭的に必要だということ。」

「なるほど・・・アイドルは資金源になるから成績上位者は狙われなく
て、逆に成績が悪い人は能力値も低い訳だから必然的に除外。危険な
のは成績の中間順位にいる生徒。今だと高槻さんや萩原さんたちつ
てことになるのね。」

「ほええ。理解が早くて助かつちやう。」

軽いように話しているけど内容がおぞましいとしか表現できない。

この学院では表向きにはアイドルを養成する学校であり、裏ではア
イドルになる見込みのない生徒を使った人体実験の検体育成施設と
いうことになる。

この春香達のように実験に使われ暴走し、表向きには失踪といわれ
たり、実験に使われた生徒が死亡して表向きには自殺と処理されたの
かもしれない。

そんなことを100年もやってきたというのか・・・。

今ではただの推測だし、傍から聞けば頭のおかしい妄想狂の妄言と
いわれそうだ。

だが、この学院のシステムには前から違和感を持っていた。律子一
人しかいない教職員。

たまに来る販売業者とは違う風貌の客。3年に一度の入学。外界
から隔離され一般人が滅多に来ることのない場所。

ありえるのかもしれない。

「これがこの学院の闇なのね。」

「真っ黒過ぎだけどね。」

「だけど、もし毎回実験が行われているなら流石に不審に思われるの
ではないの？」

「当然、実験に使われた生徒の親族が押しかけることもあったよ。だ

けどそんなことは大した問題じゃないの。」

「どうということだろう。教師が身勝手にも預かった生徒を使って人体実験を行っているというのに大した問題ではないだなんて。どうか人体実験をしているという時点で世間的には大問題だ。例えどんな理由があろうとも世界規模で人体実験は容認されていない。」

「もしも公になれば死罪は免れないというのに。まさかそれ以上の問題がこの学院にはあるというのか。確かに、既に美希のことがあるのだから春香からすればそれ以上の問題はないだろう。」

「だが今も私を含めた生徒全員が危機に晒されているのだ。友好ではない人も居るけれどそれでもやはり、私からすれば美希のことよりも気にしなければいけない問題だ。」

「聞き捨てる訳にはいかない。」

「それは私達の生命の危惧を気にすることは無いって言うことかしら？」

「あ、ごめん。大した問題じゃないと言ったのは千早ちゃんや美希の話じゃないの。」

「じゃあ何のことを言っているの？」

「この時、私は少し強めの口調で春香に聞き返した。」

「そしてこの後、私は聞くべきではなかったと酷く後悔することになった。」

「ねえ千早ちゃん。この学院の運営資金はどうやって調達されているんだっけ？」

「それは、この学院からアイドルを輩出することによって・・・運営：されて・・・。」

「いや・・・ちよつと待って。」

「ここはアイドルを養成する学院でアイドルを輩出することによって運営資金が提供されている。そして輩出されたアイドルは国家公務執行統括事務局に所属し、その主体は“軍”。」

「教師も、警察も、公共移動乗務員も、国の繁栄の為に力を尽くす公務員は全て軍属になる。」

つまり……

「もう……解ったみたいだね」

「……この学院の運営には、国が関わっている？」

国そのものが絡んでいるのなら、それはつまり人体実験が秘密裏に容認されている？

確かにそれなら色々と説明が付く。アイドルという強力な能力者が国に従事することで利益を生み、その利益で私腹を肥やす者が居る。実験の検体は簡単に用意が出来て、死亡すれば容易に処分できる。警察に圧力をかけて保護者達の問題も何もかも揉み消せるし、情報操作でその一族を失踪と言う形で人体実験の検体出来る。

方や最高の保証国。方や悪魔の国。

最悪だわ……。

これは律子をどうにかすれば良いだけの問題だと思っていたけれど甘かった。

偽律子が国に容認させたという内容は、恐らく重鎮の人間が喉から手が出るほどの条件を出したということ。能力者の育成と卒業後の軍備強化の増員。あわよくば制御可能の眠り姫の贈呈……と言ったところか。そもそもその話をしたとしてどうして信用してもらえたのだろうか。私だって今の春香の話を全部が全部鵜呑みにしているわけではない。

今まで話した内容には、何一つとして決定的な確証がない。

『ティーチャー律子に偽者ですか？』と直接聞くわけにもいかないし、もしも春香の話が事実だったとして偽者と気付いた私を放っておくほど甘い訳がない。

資金が必要ならば現在のアイドル候補を実験に使うとはとても……。

……待つて。その理屈だとあの話は。

「あの……成績優秀者が実験体にはならないというなら、何故春香や美希が実験体にな？」

この問いに春香は首を横に振った。

「……それは私にもわからない。それは多分、ティーチャー律子にし

かわからないと思う。」

「・・・そう。でも直接なんて聞けないし、永遠の謎かも知れないわね」
「そうだねー。聞く機会があれば聞いてみたいかも」

左手の人差し指を自分のこめかみに付けて苦笑している。

わからないのなら仕方が無い。春香が言うように、いつか謎を解いてみたいものだ。

その春香の顔が一変して目を細め、無表情に、にらまれてるような、まるでさっきの未来の話をしている時のあずさの顔を思わせる。

嫌な予感がした。そしてその予感は一瞬にして的中することになった。

「ねえ千早ちゃん。〃眠り姫〃って知ってる？」

私は驚いた。

私は今まで眠り姫のことを伏せながら星井美希のことを聞いていたのに。

あずささんに聞いた眠り姫の事と世界崩壊の未来を、美希と私が引き起こす。この誰にもわからない未来の話を自分の溺愛する家族に向かって〃あなたの義妹は世界を崩壊させる〃などと言ってしまえば、私の時と同じく機嫌が悪くなるのは当たり前だ。

星井美希をこと細かく知っている〃死に証人〃が居るのだ。情報のためにも、この先に待ち受ける困難のためにも、眠り姫のことを伏せて話すのは当然の選択だと思った。

けど、彼女は眠り姫のキーワードを口にした。

知っていたんだ。美希が眠り姫と言うことを。

「・・・・・・・・。」

「やっぱり知ってたんだね。眠り姫のこと。」

「・・・・・・・・ええ。」

私は私で美希の情報を探っていたが、春香は春香で私がどこまで知っているのかを探っていたのだ。

非現実的でしかない会話の中で春香は常に情報を探っていた。

全く知らないレベルではないにしろ齧った程度だなど思い至ったからこそ、この話を切り出した。私が興味を持つて質問をすることも

全て読みつくした上で。

「千早ちゃんがどうして眠り姫を知っているのか・・・は大体想像付くけどね。・・・三浦あずさでしょ?」

「・・・何でもお見通しね。」

「彼女だけ異常だったからね。入学してから何度か見たただけだけど、あの魅力のコントロールは身内や知り合いによつぽど精通した人がいない限り、まず到達出来ない域だったからね。何かあるとは思ってたの。」

確かに屋外における最初の浮遊術のレッスンでいきなり飛んで見せたのがあずささんだった。

今だから分かるが、あの頃の彼女の能力値は今の私と殆ど変わらな。もし本気を出したら私でも足元に及ばないかもしれない。入学したてから彼女は既にアイドルの有力候補だった。

あずささんの次に早く浮遊術を覚えたのが伊織だった。まだ飛べない私達を見て伊織は勝ち誇った顔をしていたが、その直後にあずささんが浮遊しながら転移したのを目の当りにして開いた口が閉まらないようになっていたのは今思い出しても少し笑ってしまう。

そんな彼女が恐れるという眠り姫こと星井美希。アイドルを全滅させてしまう世界崩壊のキツカケとなる人物は一体どれほどの力を有しているのか。

「眠り姫のことはどこまで知ったの?」

「驚異的な能力者で無差別っていうくらいかしら。ねえ、律子はその眠り姫を作り出そうとしていると言うことなのよね?」

「多分そうだと思う。本当の目的はわからないけれど。」

眠り姫を作って何か成し得たいことがあるというのか。その疑問は今解消できそうにない。情報が少ないと言うのもそうだけど、春香ですらわからないことなのだから私が分かるはずもない。予想することは出来ても確信も無いのにそれに合わせた対策なども立てられない。

「予想の範疇を超えないけど、偽律子の目的は“眠り姫”。それも制御できる・・・ね。」

「制御なんてできるのかしら。未だに制御された眠り姫が作り出されていないように思えるのだけれど？」

「眠り姫を作り出しても制御できなかったのが美希なのよね。逆に眠り姫自体を作り出すことには成功しているわけだから、後はその課題なの。まああれ以降、美希ほどの眠り姫を作り出せていないというところを見ても成果が停滞しているのは明らかなんだけど。」

「絶対的な力を持つと言われてる眠り姫を完全に制御できればどうなる？」

世界の破滅。あずささんが言っていたように復活してただ暴れているだけなら世界が死ぬまでおよそ80年。しかし、何者かがその力を制御した場合は世界の破滅か征服のどちらかと言えよう。そしてもつと短い時間でそうなってしまおうだろう。

これはあずささんの言う美希の復活とは別にして、とんでもないことに首を突っ込んだじゃったわね。

今更だけれど。

「でも100年も成果なしでよく国が黙ってるものね。」

「それなんだよねえ私が特に疑問視してるのは。現在もこの制度が続いているのはかなり妙なのよ。国側の関係者はもう高齢か、または亡くなってるはずなんだけどね。」

「確かに……。」

確かに、春香の疑問はもつともだ。私が疑問に思ったのだから誰にだって考えうることだし、もしこの計画が引き継がれているにしたって100年もまともに結果が出ていないモノに投資すると言うのはリスクが高すぎる。続けさせるメリットがあるのか……。

もしくは続けさせなければいけないものなのか。その答えを知るのは最早律子以外にいないでしょうし。今は気にしても仕方が無い問題かもしれない。

それより、彼女は未来のことも知っているのだろうか。

いや、今の彼女にとってはこの時代ですら未来なのだ。その未来を彷徨い、彼女は一体何を見たのか。星井美希が復活するとただ察知したわけではないだろう。もつと直接的な要因があったに違いない。

だから私に声を掛けた。この件に巻き込まれるであろうことを予想して。

「・・・春香。あなたは何故この時代に美希が復活すると思ったの？何かを知ってしまったんでしょう？」

「うん。原因は二つあるんだけど、決定的だったのがね・・・ある生徒が『鍵』を見つけてしまったから」

「鍵？」

ある生徒とは誰のことなのか。そしてその鍵が何かの比喻なのかそれとも本当に扉に使う鍵なのか。その鍵が美希の封印を解く鍵なのだろう。

まだわからない部分が多いので春香の話を続けて聞くことにする。

「その鍵は地下の、美希が封印されている部屋の鍵なの。その鍵を水瀬伊織ちゃんが持つてるみたい。」

「・・・また、厄介な人が持つてしまったものね。」

伊織の名前を聞いて少し顔を顰めた。恐らく春香にも伝わっただろう自分の態度と顔をすぐに元に戻す。

つまるところ、二人から鍵を回収して星井美希を復活させないのが私のこれからの行動なのだろうと予測する。偽律子の問題はとりあえず後回し。今私が何か行動を起こしたところで抗えずに偽律子と国に消されるのがオチだ。

その前に万が一にでも星井美希の封印が解かれればみんな揃ってただではすまない。

自分達も、世界の未来も。

「もし水瀬伊織が扉を開けなくても、他の誰かが開けてしまうかもしれない。そうなる前に、鍵を手に入れて欲しいの。鍵を旧校舎の資料室に戻してくれれば、それでしばらくはまた大丈夫だと思う。」

「破壊してはダメなの？」

「それが、鍵に使われてるのは同調金属なの。」

同調金属。200年前に採掘された当時は普通の鉱石だったが、一つの塊を溶かして一度に二種類以上の物を作ったら耐久度が同調することが判明した特殊な金属。

錆びる事が無いとされているその金属は上流階級の人間にしか手に入れることが出来ないと言われていた世界的にも希少で高価な物の一つ。

つまり鍵と錠前に同じ金属が使われているため、鍵を壊せば錠前が壊れて錠前を壊せば鍵も壊れると言うことね。

「水瀬さんが持っているというのは確実なの？」

「多分ね。この前、我那覇響ちゃんが水瀬伊織ちゃんに鍵を渡してるところ見ちゃったの。」

「どこで？」

「自室で。」

「……ん？　つまりどういうこと？　自室で我那覇さんと水瀬さん

の鍵の受け渡しを見ていたとすると、ずっと一緒に居たのかしら……。

いや、そもそも一緒に部屋にいたと言うより……。

「……まさか、ずっと覗いていたのかしら？」

「ホントに鋭いよね千早ちゃん。なんでわかっちゃったの？」

「……まあいいわ。春香は『見ちゃった』って言ったでしょ？　もしその場に居たのなら、あなたなら『見ていた』と言うと思っただけだよ。見ちゃったのは偶々とか遠くから見た人が使う言葉だからそうじゃないかとね。」

「……恐ろしい。とんだ名探偵が近くに居たものだよワトトン君。」

誰のことを言っているのやら。

とりあえず、今では私の質問に対する答えになっていないので改めて訊きなおす。

「それより、何故鍵が見つかったのかの答えがまだなのだけれど……。」
「ああ、実は私達が殺されて間もない頃にこの木に言い残していった人が居たの。99年後の冬に旧校舎の旧資料室を見張っていた欲しいうって。その頃の私はまだこの木と同化し始めていたからこれ以上は覚えてないんだけど。」

「その人……何者なのかしら。何だか気になることばかりだわ。」

「それでここ2年ほどは毎日のように旧校舎を見張ってたんだけど、この前の大掃除の時にととう……ね。」

なるほど、と言って頷く。その人が何者なのか？

答えとしては預言を扱う能力者か。滅多に無いが迷い込んだ旅人か。

しかし、今となつてはその人も生きては居ないのだろうから確認なんて取れっこない。

考えを頭の隅に追いやつて話を切り替えることにした。

「春香、眠り姫について詳しく教えてくれる？」

「・・・私が知ってる限りのことなら」

あずささんとの話ではまともには知り得なかったけど、今度はちゃんと説明を聞けそうね。

眠り姫とは一体どんな存在なのか。とんでもない能力を使う化物としか認識できていないため少しでも情報が欲しいところだ。

「眠り姫っていうのは、能力者の性質と魅力が変化した状態のことらしいの。強制的に特質に変化させて元の能力とは全くの別物にしてしまう。本来は消費される魅力が永続的に損なわれない状態だからずっと能力を使い続けられるんだって。以下、黒ずくめのお兄さん達参照。」

「黒ずくめに関してはどうでもいいとして、能力を強制的に変化させられてしかも魅力が永遠に続くと言うことは寿命もなくなるし衰退もしないってことよね？ 実質上の不老不死と言うことになるのかしら？」

春香は首を縦に振る。

眠り姫と言うのがどれほど厄介なのかを理解した。

一般的な人間に照らし合わせれば、魅力が無くならないと言う事は睡眠を一切とらずに活動し続けられることと同じこと。

人間は能力を使わなくても移動や労働をすることで魅力消費してる。睡眠や食事を摂ることで消費した魅力も回復するわけだけど、老いていけば行くほど魅力は回復しなくなっていく最終的には魅力を全て無くして人生を終える。それが一般的な魅力の原則だ。

だが眠り姫はそんな原則ですら超越する。寿命が無いのであれば未来で大暴れしているのも頷けると言うものだ。

眠り姫もこの春香も普通では有り得ない。

強い意志と奇跡を起こして警告するために現れた春香。

眠り姫の復活を阻止するために未来から来たあずささん。

100年の眠りを経て目を覚まそうとしている眠り姫、星井美希。

何も知らず復活の鍵を見つけてしまった水瀬さんたち。

偶然なんかで終わらせるには少しムリがある。あずささんの話も春香の話も事実となれば、そう遠くないうちに美希が復活して戦いになり、私も眠り姫として世界を崩壊に導くことになる。もしも運命が変わるのだとしたら、これから先は何に対しても注意して過ごさないといけない。例えば戦いになるとしても、せめて私が眠り姫にならないように。

そして私の話を何とかみんなにも信じてもらい、律子の企みの証拠も掴んで拘束しないといけない。

律子を制すると言う状況は想像できないが、やらなければいけない時が来る。

そのためにはまず、秘密裏に水瀬さんに話を聞いてもらって鍵のこととこれからの未来の話を信じさせること。そして順を追ってみんなに理解してもらおう。

水瀬さんの鍵、次にあずささんを交えて説得。そして律子の企みの破綻。

大まかな目的はこんなところね。

「難しい顔してるね。やっぱり難しいかな？」

「そうね。だけど、やらなければいけないのでしよう？」

春香が笑った。その笑顔は自分の話を理解してくれたことと、私が動いてくれると言う言わば期待の現われ。やることが決まったのであれば後は時間の問題だ。

「とにかく、みんなに協力してもらえるようにお願いしてみるわ。最善策としては美希や律子と戦うことよりも扉を開けない努力をしないこと。」

「本当に勝手な話しだけど、お願い千早ちゃん。何よりもこれからの未来のために。」

「全力を尽くすわ。」

立ち上がってスカートに付いた土を払い、千早は走って伊織の元へ向かった。

その後ろ姿を春香は願いをこめて見送った。

第三章

終

第四章 ―扉―

千早とあずさが教室で会っていた頃、やよいは旧校舎の中庭で一人
思い悩んでいた。

旧校舎の中庭は大半が芝生で覆われている。四方を校舎に囲われ
ていて吹き抜ける空を寝転がって見上げるのがとても心地いい場所
だ。

いつもなら伊織と一緒に空を見上げる彼女が珍しく一人で膝を抱
えて座っている。

暗く沈んだその顔には恐怖と焦燥が微かだが感じられる。

そんな彼女を二階の窓から覗く奇妙な女性がいた。

身長が高く、腰程まで伸びた銀色の髪。白いカチューシャに春香と
同じ服。紺色の布地で胸元には白いラインとその中心に赤いリボン
が結ばれたセーラー服。

彼女はそつと窓を離れて姿を消した。

それから2、3分ほど経った頃、いつもの溢れるような笑顔とは違
い、無表情のやよいからタメ息が漏れる。

「……………はあ。」

「どうしたのタメ息なんてついて。」

顔を上げると、何時の間にか目の前に立っていた律子に声を掛けら
れた。

いつものように笑顔で腕を組み毅然と立っている。そして、何気な
くやよいの隣に腰を下ろした。

「何を悩んでいるのかしら？」

昔の本に出てくる財閥の家庭教師のような格好をしている彼女は
私達とそう変わらない年齢の女性だ。抹茶色のロングスカートに襟
付きの白ブラウス。首元の大きなエメラルドブローチからは細い赤
のリボンが下に伸びている。

「べ、別に悩んでなんていません。ティーチャー律子こそ、どうして
ここに？」

「私はちよつと資料を見に来ただけで、良いのが見つからなくてね。」

どうしようか考えてたら、2階の窓からやよいの姿が見えたから降りてきたのよ。」

そう言うとき律子は2階の窓を指差した。

やよいもその手の動きに合わせて窓を見る。

頭をポリポリとかきながら恥ずかしくて顔を赤くした。

「あはは、見られてたんですね。」

「やよい、今は私しか居ないから喋っちゃいなさい。あなたにタメ息を付かせる理由。」

「……………」

やよいは戸惑った。人に相談するような話じゃないし、それが律子だったらなおさら相談し辛い。

そんなことで悩むなら訓練しなさい！

と言われるのが予測できるほどに。

それほどこまでに厳しい人だと思っている。だから話しかけられたときの笑顔に少しだけ驚いた。確かに、今まで律子の笑顔は授業でもプライベートでもたくさん見てきた。

だけど……どこか変な……まるで何かを待っていたようなそんな感じが少しだけした。でも、隣に座った律子の雰囲気はいつもどおりだった。

「ほら」

「は、はい。……その……私、自信がなくなつて。みんなはあんなにも凄くて、頑張つて、どんどん先に行つちやうのに。私は何をやってるんだらう……つて」

「つまり、置いていかれてる気がするってこと？」

やよいは首を大きく横に振った。抱えていた膝に一層顔を埋めて表情を悟られないように隠した。考えていることを声に出すと、意思とは関係なく涙が浮かんでくる。

「そうじゃなくなつて……私、伊織ちゃんのメイドだから……ずっと伊織ちゃんの傍でお仕事したいから。だから、もっと頑張らなきゃって思ってますけど……どんどん伊織ちゃんが凄くなつていつて、私に伊織ちゃんの傍に居る資格があるのかなつて」

「ああ、そういうことか。」

やよいはずっと伊織の隣を歩きたい。しかし、自分と伊織では能力や魅力に大きく差が出てきてしまったことでやよいは自信をなくしていた。

このまま差が開いてしまつて、もしも伊織が自分のことを見損なつたら嫌われてしまうかもしれない。そんなことを考えていたのだ。

「だから・・・私、もつと強くなりたい。もつと能力を使いこなして魅力もどんどんあげて伊織ちゃんに追いつかないと・・・。」

「・・・いい方法があるわよ?」

明るい声。満面の笑顔と共に発せられたのは笑顔に見合う明るい声だった。

やよいは他人にどれほどの欲や悪意があろうとも、人を疑うということをしなない。

律子には今まで散々能力向上の世話になつてきた為か信頼すらしている。

切羽詰つているやよいに律子の提案は救いの手に思えた。

律子が言うそのいい方法と言うのをしっかりと耳に残そうとするように、顔をグイッと律子に近づける。

「ど、どうすれば・・・その方法つてなんですか!?!」

「実は、誰にも知られていない秘薬があるの。能力と魅力を格段に向上させる薬なんだけど、試してみる?」

「お薬・・・ですか。えっと、ちよつと怖いかなーつて。」

流石に薬と聞いて少し引き気味になつてしまつたやよいではあつたが、それでも今の状況を打開出来るのであればこのチャンスを逃すことは出来ない。

心理的に追い詰められた人間と言うものは救いを求めて普段よりも人の言うことを信じやすくなつてている。

そして、一度疑つたり他人に恐怖心を覚えると疑心暗鬼に囚われ攻撃的になつたり自暴自棄になりやすい。

だが元より律子のことには信頼している。

ずつと前に伊織が身体能力や魅力を向上させる薬や疲れを一瞬で

吹き飛ばす薬なんかの話聞いたことがあった。

その薬の一種だと考えれば、律子なら持っけていてもおかしくはないとやよいは思った。

「大丈夫よ。その薬は極秘のものだけど、今までに薬を使用した子の中にはアイドルに選ばれた子も居たわ。」

「アイドルに……。」

やよいは困惑の顔色から直ぐに律子への期待の眼差しへと変わった。

律子の言う薬を使えば伊織と一緒にアイドルに選ばれるかもしれない。

やよいの中にあつた一片の疑心が一瞬で掻き消えた。

「お願いします。そのお薬、私にください！」

「いいわ。ただし、この薬を他の生徒に見られるわけにはいかないのだから今日の夜、消灯後に新校舎の私の自室まで来なさい。」

「はい！ よろしくお願いします！」

やよいの顔が明るくなった。やよいにとっては悩みは解決したのだから笑顔になるのは当然だ。

しかし、それとはまた違う笑顔を律子は放っていた。傍から見れば普通に笑っている彼女だが、わかる人にはわかるだろう狂気と興奮が入り混じる笑顔。

その笑顔の裏側をやよいが気に留めることは無かった。

同時刻。伊織は新校舎の資料室で学院の記録を手にしていた。響の言っていた『サクラの木の下に女の子が眠っている』という謎の日誌にかかれたことを調べていたのだ。

日誌の最後の内容とそこに書かれた女の子のことが気になっていた。

『止められな。子が だと思ひ込んでいたのは
の上 った。』

は掌の　　られたけ。ここか　　が始　　ことはわかつていたはずなのに

・・・　　これを読　　た。お願いします。これを　　た

0年の　　に

起こる　　劇をどうか　　さい。私が　　だった為に

った彼　　たちの

ために。そして　　から　　若い　　ため。　　りの少女

は大きな桜の木の下に

眠つてい　　。も　　に　　うこと　　来たら、女の言う

てください。

それが未　　守る最後の鍵　　す。お願いします。　　記：

り』

書かれていることを普通に読み取るなら、この学院で死人が出たという解釈になる。

このことが公にされていたとしたら責任を負わされたこの学院に何かしらの記録が残っているかもしれない。死人が出るほどの出来事なら、何かしらの資料や記録が残っていてもおかしくは無いのだがその期待とは裏腹に、古い資料を探しても一向にそれらしいものは見つからなかった。

そして授業が終わってから3時間近く経った頃、少し気持ちが萎えかけてきていたその時だった。

手に取った資料には学院の見取り図が描かれていた。どうやら旧校舎のモノの様だが、それを見た伊織はとても大きな違和感を感じた。それは旧校舎のエントランスホールにある左右の階段。その右の階段下の壁に奇妙な部屋が存在している。

大きさにして凡そトイレの個室二つ分くらいのお小さな空間だ。

初めて見た見取り図に何故違和感を覚えたのか？

それは、前々から思っていた違和感と繋がったからだ。

短い春休み後の一斉清掃で旧校舎のエントランス階段後ろの壁が左側に比べて右側がやけに出っ張つてすることに違和感があった。

つまり、左側の階段裏はしつかりと空間が出来ているのに右側は階段の半ばまで壁が出っ張っているのだ。

その時に壁を叩いたりしてみたが特に変わった音も感触もなかったから、それ以降気にしなかったが。

部屋一つ丸々埋め立てるなんて真似は普通しない。何かの間違いで描かれたのか、それとも何か別の理由があったのか……。

伊織の中にこの奇妙な空間を確かめたいと言う好奇心が芽生えた。その衝動に駆られ伊織は見取り図を手に資料室を出てその場所に向かった。

もう日が沈み始めている。夕焼けから夜へのグラデーションし始めた空を無視して伊織は旧校舎に来ていた。

両開きの扉を開いて中に入ると広いホールがあり、磨かれた石の床には入り口からレッドカーペットが真っ直ぐ敷かれている。カーペットはホールの中央で十字に別れていて、真っ直ぐ行くと中庭に出るための扉、左右には昔使われていた教室や個室に繋がっている。そのカーペットの十字になる手前には左右に椅子と長い机が設置されていてまるで協会のような作りになっている。

そして伊織が今立っているのは1階の入り口から見て右側にある階段の裏だ。

木造の階段は左右に二つあって一段ごとに綺麗な絨毯が敷かれている。

右階段の後ろには少しの空間とただの白い壁があるだけだ。ここは毎年の大掃除で拭き掃除をする壁なのだが、目の前の白い壁には特に変なところなんてない。叩いてもコツコツと、やはり普通の石の音がするだけだ。

それでも何かあると睨んだ伊織は周囲を見回してみる。そして、一つだけ気付いた。

大掃除と言えども壁や階段は拭いても『階段裏の一段目』まで拭いているところを見たことがない。

這いつくばって一段目の階段裏をジッと眼を凝らして見る。する

と、一箇所だけ指先程度の丸く凹んだ部分がある事に気がついた。その部分をグッと押し込んでみる。その凹みは簡単にグイッと奥まで押され、ガタンツと言う音がしてから壁を見ると床から伊織の胸元くらいの高さで伊織二人分くらいの幅の壁がガコツと飛び出してきた。そのまま、ゆっくりと左へ開いていく。

「まさか・・・。」

まさか本当にこんなものがあるとはと戸惑った。

恐る恐る近付き中を覗きこむ。そして驚愕と共に埃と真つ暗な地下へと続く階段が現れたのだ。

「こんなところに隠し階段だなんて・・・何かを隠しているのかしら？」
せっかくここまで来たのだから確かめないわけにはいかない。伊織の心をくすぐった好奇心と冒険心は、物怖じもせず地下への階段があるその石戸の中へ一歩踏み出した。

身体を屈めて中に入り階段の一段目を踏むと、足元に設置された蜀台の蝋燭に火が灯る。

まるで物語に出てくるダンジョンだ。

息を呑み、意を決して伊織は石階段をゆっくりと降りていく。階段を降りていくと徐々に広い空間になり始め、一番下の段を踏む頃には大人が並んで歩けるほどの空間になっていた。その一番下へと辿りつくくと、まっすぐ伸びる通路が現れた。周囲は完全に石や岩で出来ていて人が作ったことが丸わかりに整備されている。通路は思ったより長く200メートルほどもある直線だ。壁の蝋燭が通路を不気味に照らしていて少し怖い。

進んでいくと、行き止まりの手前の左側に大きな木製の扉を見つけた。鉄の枠が嵌っていてもつもなく古いその扉はシンプルで特に装飾の類は施されていない。取っ手がついていてその真ん中に大きな錠前が付けられている。大人の両掌を広げたくらいで、錠前の真ん中にこれまた大きな鍵穴があった。

その時、ふと伊織の脳裏に一つの鍵が浮かび上がった。

直感的にだが伊織はこの扉こそが、あの鍵で開くことが出来るのだと。

だが、これは恐らく開けてはいけない扉なのだろう。隠し階段、地下通路、嚴重な扉。

これだけのワードが揃えば危険なものが中にあるのだろうことは容易に想像がつく。

他に何か無いか周囲を見回す。

「・・・え？」

変わった部分と言えば天井から木の根が這い出ているだけだと思っていたが、見回してみると伊織は戸惑った。

「キレイ過ぎる・・・。」

伊織が気にしたのは床や壁、鍵に天井の木の根だった。壁を触ってみても割れてる部分がありなく、床にも土ぼこりすら殆ど落ちていない。鍵は磨かれては居ないが錆ないように手入れされている。

未だに誰かがここに出入りして保存している形跡があった。

生徒の誰かだろうか？・・・いや、それは無いだろう。

普通に考えて同じ場所で衣食住を共にしていた友人達が2年以上もこの場所への出入りを見つからずに過ごせるとは思えない。外部の人間だと、一番近い町でも14里(約55キロ)程の距離がある。管理する為にその道のりを移動するのは非効率だ。そして前の理由と同じで2年間も不審な人物が見られていないのであれば、この線はほぼ無いと思つていい。

もしこの場所が学園も承知の上で管理しているのなら必然的に律子が一番怪しいわけだ。更にここから細かく可能性が分岐する。

律子が知っているのか、いないのか。隠しているのか、隠していないのか。言う必要が無かったのか、近づけたくなかったのか。考え始めるとキリが無いが、何か大きな秘密があることだけは感じざるを得なかった。

あと気になると言えば天井の木の根。これは一体なんなのか・・・。そこで伊織は自分が今地上だとの位置に居るのかを想像してみることにした。

『ねえ知ってる？サクラの木の下には女の子が眠ってるんだって』

響の言葉を思い出した。そういえばここは丁度、旧校舎外の丘にあ

るサクラの木の下。

ということはこの中に居るのはその女の子なのだろうか。こんな場所で監禁でもされていると言うのか。だとしても、これでは生きてるか死んでるかなんてわからない。

日が暮れる。ここは時間を掛けて調べる必要があると思いその場は離れた。

地上に戻って、階段裏の扉をしつかりと閉めた。不思議なことに、開いていた扉の跡が消えてしまった。完全に閉じたことを確認して外に出た。

日も暮れかけた空は橙から紫にグラデーションがかかっている。あずさの話を聞いて部屋に戻り、本を持って部屋を出たのがお菓子時。春香の話を聞き終わったのが数分前。

そして夕刻を迎えた今、焦りが生まれていた。鍵を持っているのが水瀬さんだということはわかった。攻撃が最大の防御と言わんばかりの高火力を持つ彼女からすれば、私は防御だけで攻撃が使えない役立たず的な考え方をされている。入学したときからそんなことを思われているためか当時から犬猿の仲とも言うべく良い関係とはいえない。

だから話をしたところで簡単に鍵を渡してくれないだろう。恐らくまだ鍵を使う場所まではわかっていないと思う。彼女自身も慎重な人間だから無闇に鍵を使うとも思えない。

だけど、やよいと響が絡むと話が別だ。

響が好奇心で鍵の使用場所を特定し、もしもやよいに『開けてみようよ!』なんてたきつけられたら開けてしまうかもしれない。予想は予想を重ね、最悪の場合は場所の特定が終わっていて鍵を使う算段を立てている。というのが最も不味い状況だ。

そんなことを考えながら桜から走って旧校舎を通り過ぎようとしたときだった。

なんと伊織が旧校舎の入り口から出てきて伸びをしている。

こんなところに一人で何をしているのか。中庭で休んでいたのだろうか。だが、いつもならややよいと一緒に中庭で談笑することが多い。一人という状況で旧校舎、中庭にこんな時間まで居たというのは少し疑問を感じる。でもどちらにしろ伊織に用があったのだから都合がいい。伊織が行動する前に声を掛けることにした。

「水瀬さん！」

反応した伊織は怪訝そうな顔をしてから気付いていないフリをして新校舎の方へと身体をむける。それを止めるべく声を掛けて追いついた。

「水瀬さん丁度よかったわ。今からあなたの部屋に行こうと思っていたところなの」

「こんな時間までお気に入り桜の下で本読みかしら？ よつぽど暇なのね。」

相変わらずの嫌味全開の会話が始まりそうだったが、そんなことをしている場合ではない。

気が進まないことではあったがあずさと春香の必死の頼みなのだ。この世界と未来を壊す訳にはいかない。だからこそ、鍵は早急に伊織から取り上げて元の場所に返さないといけなかった。

「悪いけど、冗談に付き合っている場合じゃないの。水瀬さんあなた、鍵を持っているでしょ？」

「・・・部屋の鍵のことかしら？ 持ってるけど、それがどうかして？」
目を合わさずにポケットから自室の鍵を見せつける。

一拍置いてからの返答。逆に分かりやすい反応で伊織が惚けてるのは簡単に判る。

「部屋の鍵ではないわ。旧資料室で見つけた古くて小さな鍵。」

「・・・持っていないと言ったら？」

「はぐらかさないで。あなたが持っているのはわかっているの。」

「・・・誰から聞いたのか知らないけど、持ってたらなんだっていうの？ まさか、あなたの鍵だなんてバカなこと言わないわよね。」

伊織は右手を腰に当てて千早に向き直った。

千早は奥歯をギリツと噛んだ。

(やはりこうなるのね……。水瀬さんが素直に渡すとは思っていなかった。この分だと理由を話したところで徒労に終わるでしょうし、かと言って下手に嘘を吐くと余計に拗れることになる。ここは本当のことを話して納得してもらおうしかない。最悪あずささんにも話して貰って納得させるしかないわね。)

伊織は財閥令嬢と言う肩書き関係なく頭が良い。

気が短いから途中で話にならなくなるが、冷静な彼女と言葉の応酬になれば負けてしまうのはわかっている。

「それは私のではないわ。でもあなたの物でもないでしょ。」

「そうね。これは誰のものでもない。だけど何か重要な鍵だということとはわかる」

「なら、それをこっちに渡してくれないかしら？」

「嫌よ。あなたに渡す理由がない。」

「理由はちゃんと話すわ。だから……。！」

言葉が止まった。理由は水瀬さんの後ろの先にある。彼女の顔を見ながら話していた私は視界の端に動く律子を見つけたからだ。

こちらに向かつて歩いてきている。もし春香の時代から生きているのであればあれは人間じゃない。永遠に年をとらない背格好も変わらない、まるで時が止まっているような生き物なのだ。律子にこの話を聞かれるわけにはいかない。聞かれればあずささんや春香、私自身も命も危うくなってしまう。

「水瀬さん。今日の消灯後にあなたの部屋まで行くわ。そこで話しましょう。」

今まで無表情だった伊織の顔が険しくなる。私と話して癪に障ったのかイライラしているだろう。

「あんたを私の部屋に入れるわけ無いでしょ？ それにあんたの部屋にも行く気はないわ。この話はおしまいね。」

「待つて！ じゃあこの旧校舎でお願い。私の最初で最後のお願いだ

「と思って聞いて。」

「嫌よ。あんたの頼みなんて聞く気もないのに睡眠時間を削つてまで……」

「お願いだから……。」

水瀬さんの眉間の皺が一層深くなる。その後、目を瞑り諦めたように大きなため息をついた。

そして次の言葉で私は水瀬さんに対して少し光明が見えた気がした。

「はあ……。消灯後にこの旧校舎まで来ればいいのね？」

「ええ！ 鍵も持ってきて欲しい。それがないと話すのに時間がかかるわ」

「どんな間抜けな理由が聞けるのか楽しみね。言つとくけど、律子に見つかりでもしたら承知しないわよ。」

「二人ともここで何をしてるの？」

私もだけど水瀬さんもギクリツと身体が震えた。私はまだ見えていたからいいモノの水瀬さんは気づいていなかったらしく動揺を隠せていなかった。

ちやんと名前を呼ばないことを怒られると思ひ覚悟していたが、律子の顔を見るとエラクニコニコしている。何故かとても機嫌がいいようだ。いつも以上にニコニコしていて怪しさを感じさせる。偽者だと聞いたせいとか、どうにも怪しく見えてしまう。

「もう夕食の時間なのに何をしているの。早く食堂に行きなさい。」

「何でもありません。すぐに戻ります」

そういうと水瀬さんは私の方を見て『教えなさいよ！』と言いそうな顔をして律子に向き直り、一礼して足早に去っていった。私も一礼して食堂に向かう。

その二人を律子は無表情で見送った。

消灯前の伊織の自室。10畳ほどの室内では入り口から見てすぐ右手にカップや紅茶の葉を置いた棚があつて、部屋の中央左側に丸い

テーブルと奥の方に椅子が設置してある。

その反対側には勉強机と呼ばれる学生の必需品的なものが壁向きに置かれていた。

右側奥にベッドが置いてあり、頭を右側にして眠っているのか枕が右壁側に置かれている。

奥の壁との間には約20センチ程の隙間が開いていて、隙間には引き出し付きの棚とその上に花瓶が枕の横辺りに置かれている。

奥の壁の左部分に上下開閉式の窓がある。窓の右側の壁には画も掛けられている。

伊織は丸テーブルの椅子に座り、やよいと響もベッドに座っている。

二人は談笑をしたり響がハムスターを出してやよいの肩や頭の上に乗せたりする。

響はやよいの変化が少し気になっていた。いつもハムスターなど動物を出すとよく可愛がってくれるのだが、今日はそんな素振りを見せず愛想笑いが続いていた。伊織も伊織でやけに考え事をしているので話し掛けづらかった。

その伊織は、夕暮れの千早の行動の事で考えに耽っていた。

正直あそこまで食らいついてくるとは思わなかった。了承はしたものの行かない手もある。

でも気になる。日誌、扉、鍵、千早の態度。

千早はこれがなんの鍵なのかを知っている。あの扉の鍵であろう事を。

けど、千早が焦る理由が一体何なのかがわからない。昼間の推測で、もし本当に女の子が監禁されているのだとしたら千早も関わっている？

事件がバレると不味いから隠蔽するために鍵を保持する……。いや、それはない。いけ好かないけれど、いくら千早でもそんな真似をするとは思えない。あの日誌や鍵、地下の様子を見ても最近のモノ

でないのは明らかだし若い千早や他の皆が加担しているとは思えない。

だとすると、もう一つの可能性。この学院を揺るがしかねないほどの危険なものが入っているとしたら、それを知った千早の態度にも説明が付く。

確かに焦る理由ならば充分だけれど、それならば『眠る女の子』とはなに？

矛盾が生じるし危険なものかもハッキリしない。律子が何か秘密を持つてる可能性もある。

(んー、まだ証拠がないから下手に動けないし、これほど考えが煮詰まったらもう千早から話しを聞いて材料を集めるしかないわね。)

この件は非常に荒れる気がする。それを最後に思考を停めた時にやよいの顔が眼に入った。何故かやよいが愛想笑いをして元気が無い。

「どうしたのやよい？　なんだか元気がないみたいだけど。」

「え・・・？　そんなことないよ・・・元気だよ？」

明らかかな嘘。歯切れが悪いし、やよいが私に嘘をつくなんてかなり珍しい。

やよいに限つてあるとは思えないが、何か良くないことを隠しているような気がしてならない。

「何年一緒にいると思ってるの？　私がやよいのことを元気が元気がじゃないかくらい判らない訳ないでしょ。　何か悩みなら話さない。ちゃんと相談して。」

「悩みなんてないよ。気にしないで。」

「じゃあなんで元気がないのよ。いつものやよいらしくないわよ？　私に相談しなさいよ。どんな事でも解決してあげるから」

「なんでもないよ。大丈夫だから」

「やよ・・・」

「なんでもないって言ってるでしょっ!!」

「ーー!!?」

驚いた。突如大声を上げたやよいにスゴく驚いた。

やよいはいつもなら元気で笑顔が絶えないことが多いため、怒ったりする印象が薄く薄い。この私でも今までやよいが怒ったりする場面というのはほとんど見たことがない。だが今この瞬間は間違いない怒りを露にしている。

そしてこの時、私以上に驚いていたのが響だ。隣でいきなり勢いよく立ち上がって怒鳴り声を上げれば、そりや誰だつて驚く。そして訳もわからず焦りながら響はやよいに話しかけた。

「や、やよい？ どうしちやつたんだ？ いきなり怒鳴るなんてらしくないぞ……。」

「……ごめん。もう寝るね。」

そういうとやよいはスタスタと私の前を通って自分の部屋へと戻って行ってしまった。やよいが怒る理由も解らないまま残った私たちは顔を見合わせた。

「……響、悪いけど今夜はもう部屋に戻ってもらえる？」

「あ、ああ。……わかった。」

何かなんだかわからない響が一番動揺していたが、私も一瞬の動揺の後に静かに湧き上がる苛立ちから響と入れ替わりでベッドに寝そべり布団をかぶってしまった。

響は何故か涙目になりながら部屋の明かりを消して自分の部屋へと戻っていった。

消灯してから2時間。今は日付が変わろうという頃。千早に言われたとおり消灯後に鍵を持って旧校舎へ向かった。そしてその姿を廊下の隅っこから小さな動物が見ていた。

寝巻きのままで出てきてしまったため少しだけ肌寒い。近頃は春の割に暖かい夜も多く過ぎやすかったのだが、今日に限って空気が冷たい。

自室から旧校舎まで特に遠いわけでもないのだが、こんな時間に出歩くというのは慣れていないせいかな落ち着かない。足早に旧校舎ま

で歩く伊織は、すでに旧校舎の入り口で待っている千早を見つけた。

消灯してから1時間。そろそろかと思えば外まで歩く。建物の中は気味の悪いほど静まり返り足音すらも遠くに響くように思う。すると、気のせいか自分の足音とは違う足音がしたように思った。こんな時間に廊下を歩く人といえばこの後に会う伊織くらいしかいないのだが、姿が見えない以上そうともいえない。音の正体を確かめずにサツサと建物を出て、肌寒さを感じながら旧校舎まで向かう。これからはしばらく来るかどうかもわからない伊織を待つのだが、いつ来るかわからない不安が襲う。

あと1時間もせず日付が変わる。満月の明かりに照らされた夜空を見ながら、2の時まで待つことにしよう。明日も授業があるのだから朝まで待つわけにはいかない。

そろそろ日付が変わる頃。羽織を持って来るべきだったと思いながら、新校舎の方から人影が歩いてくる。近づくにつれて姿が現れてくるのを見て、安堵と感謝を心で感じた。

「水瀬さん、ありがとう。」

「手短に話してもらわよ。どういうことなのか。言っとくけど、いい加減なことや私をイラつかせたりしたらすぐに部屋へ戻るからね。」

「水瀬さん。この旧校舎に地下室があることは知ってるかしら？」

「・・・知ってるわ。地下室の場所。鍵も持ってる。この通りね」

「それを渡して。じゃなきゃ元の場所に返してきて」

「なんであなたに命令されなきゃいけないのよ。それに理由を話すとやっておいて話さずに鍵を渡せなんて順序が逆じゃないのかしら？」

確かに、あの時は焦って理由を話すからと言って呼び出したのだから伊織の言うことが正しい。穏便に済ますにはやはり春香との話を言うしかない。

あずさのことについては、まだ付き合いは続くのだからこれから未来人ということは一旦伏せておくことにした。

「春香って言う女の子が居てね、その娘が警告してくれたの。地下に

いる眠り姫を復活させてはダメと言われたわ」

「眠り姫？」

「ええ。未来を破滅に導く能力者だそうよ。あなたが持つのはその鍵なの。」

伊織は手に持つ鍵を見る。こんな鍵と扉にそんな大層なものが居るとは到底思えなかった。そして一つの疑問を千早に提示した。

「その春香って娘は何者で何でその事を知ってるの？」

これは必ず訊かれると思っていた。普通に考えたら誰だっと思ってそう思う。だが、下手に嘘をつけない。

ボロが出ればその時点で伊織は自分と取り合わない事を千早はわかっていた。正直に話すのが無難であることは間違いなかった。

「何故知っているのかはハッキリと言えない。ただ、彼女は昔桜の木と魅力を融合させた精神体だと言っていた。」

「はあ・・・あなたバカじゃないの？ そんな訳の分からない女のことを信じるわけ？」

「確におかしいかもしれない。でも、こういう理由があつて——」

「あのね、理由理由ってなんでも理由さえ話せば分かってくれと思つたら大間違いよ。地下に眠り姫とかいうバケモノみたいなのが眠っていて扉を開けると世界が滅ぶ？ 本の読みすぎで頭に花でも咲いたんじゃない？ そういうのは妄想の中だけにして。」

理由を話したところで無駄だった。こうなることは予想していたが、だからと言って引き下がるわけにもいかない。伊織の罵声罵倒は今に始まったことではないし今まで無視すればよかったのだが、この分からず屋には熱意も誠意も必死の声にも応える気がないのだと思ってしまう。だが何とか説得しなければ・・・。

「これは冗談じゃないの！ 嘘でもないこれから起こる真実を・・・」
「あなたに予知能力でもあるのなら考えてあげてもいいわ。でもね、私からすればそんなに簡単に人を信じてる時点で呆れるわけ。そんなことじゃこれから先、人を信じていつか足元を掬われるかもね。」

「確かに私には予知能力の類は備わっていない。だけど、彼女はそのことを知っているのよ！ 危険を教えてくださいる彼女を信用して何が

悪いの！」

「まったく話しにならないわね。その胡散臭い幽霊女の証拠も何も無い情報で人を信用するだなんて呆れてモノも言えないわ。さあ、くだらない茶番はこれでおしまいよ。部屋に帰らせてもらおうわ」

「待って！ 待ちなさい！ その鍵をちゃんと返しなさい!! あなたはそれがどれほど危険なものかを理解していない！ 元の場所に返す気が無いならそれを今すぐ私に渡しなさい！」

部屋に帰ろうとする伊織の反転させた身体が止まった。手を見ると握りこぶしが震えている。怒らせたのだろうけどそれはこちらとて同じことだ。じれったいやり取りに私もいい加減イライラし始める。やりたくはないけれど無理やりにも鍵を使えないようにしないと万が一があればそれこそ後の祭りとなるだろう。

自分の焦燥と伊織の怒り。お互いにもう限界だった。

「……うるさい。……うるさいのよいちいち!! あんた何なの！」

こんな時間に呼び出して訳のわからない話をしたのだから鍵を寄越しなさいって……何様よ!! 私に命令しないでちょうだい! あんたの言うことなんか誰が聞くもんですかっ!!」

「いい加減にして!! 扉が開いたら世界が終わってしまうのよ!? 少しでも開く危険があるのならその芽を摘んでおかなければいけないの! 春香の、人の忠告を無視しないで! その鍵は明日必ず元の場所に戻してもらおうから!!」

「このっ……!! もう許せないわ。だったらあんたの言うことと逆のことをしてあげるわ。あとで慌てふためくといいのよ!!」

「水瀬さん!？」

そういうと伊織は旧校舎に走って入っていった。

それを追いかけてよとしたときに、視界に歩いてくる人影が見えた。

急いで旧校舎の中に入って伊織の姿を探すが見当たらない。地下ということはこの1階に入り口があるはずだと見渡してみる。伊織はそれに向かって移動したに違いない。

だがどれだけ見ても入り口が見当たらない。そうこうしている内

にさっきの人影が旧校舎の入り口にまで迫ってきた。仕方なく2階へ続く右の階段の裏に身を潜める。

早く伊織を探しださなければいけないのだが、もしも律子が見回りに来たのであればこの状況を説明できない。そして予想通り律子と何故かやよいまで一緒に旧校舎に入ってくる。足音が近づいて来てその数だけ心音が恐ろしいほど高鳴ってくる。

そして、自分の隠れている反対側の階段の裏で二人は止まった。もし振り向かれば即見つかってしまう。

律子は階段裏で両手を広げ、能力を発動させた。封印術が得意な彼女の呼び掛けで空中に金色の錠前が姿を表した。その錠前を解錠して床にかかっていた封印を解除した。

すると今まで床だった場所が一瞬で地下へと続く入り口が変わった。二人はそのまま中へと姿を消した。どうやら見つからずに済んだようだ。殺していた息を吐き、額の汗をぬぐう。

あの中に伊織がいるのだろうか。
音を立てずに地下へと潜ったのはこういうことだったのかと納得しつつ、降りていく律子とやよいの後を静かに追った。

螺旋状の階段を下りていく。暗い足場をゆっくりと確認しながら進む。

長い。もう50段は越えている。3分ほどかけて降りたところでまっすぐな通路に出た。

横幅2メートルと言ったところか。石造りながら整備されたその通路は壁に蝋燭立てが付いており、蝋燭も立てられているのだが火は付いていない。整備されているとは言っても石造りの足場はデコボコが多くしつかり歩かないと足を引っ掛けそうになる。そんな暗い通路を20メートルほど先に明かりが見える。どうやら扉が開いているようでその扉は木製で出来た普通の扉だ。その扉が少しだけ開いた状態で静止していた。

この中にやよいと律子がいる可能性が高い。そして伊織も。

見つからないように中の様子を伺おうと扉の隙間からのぞき見た。

「……………なんなの……………これ……………」

眼を疑った。

これはなんだ。部屋中赤い光でいっぱいだった。壁や床が石造りなのは判る。だが部屋が赤く見えるほどの発光は一体なんなのか。

そしてその部屋の、千早の居る入り口の傍で行われている行為は一体なんなのか。

ネグリジエ姿のやよいの腕に挿された一本の針。律子が手に持つのは黄緑色に発光する液体の入った注射器。今まさにその注射針がやよいの腕に刺さり発光する薬物であろう液体を体内に注入されている。

ゆっくり、ゆっくりと投与されていく薬と徐々に赤く変化していくやよいの目。

異様であり異常。人体に害のない薬品だとしたらこんなところで処置するはずが無い。

つまり人目を避けて投与する何かだと言うこと。

そのとき私はあの時の会話を思い出していた。

『うん。この学院はアイドルを輩出したときの保証金で運営されているの。つまりアイドルは金銭的に必要だということ。』
『なるほど・・・アイドルは金蔓になるから成績上位者は狙われない。逆に危険なのは成績の中間順位にいる生徒。高槻さんや真たちってことになるのね』

ついさつき春香としていた恐ろしい会話を頭の中で鮮明に蘇った。偽者の律子がこの学院で生徒に何をしてきたのか・・・。

こうして今日、何らかの理由で目を付けられたやよいを実験材料にしたわけだ。

どんな効果をもたらすか判らない非道の人体実験。今まさにそれが目の前で行われていた。

自分も見つかる恐らくただでは済まない。封印術が使われてしまえば終わりだ。

そしてこの時、千早は自分がとんでもない思い違いをしていることにやっと気が付いた。

律子が封印していたあの地下への入り口が伊織に解錠出来る筈がない。見た限り補助型の強力な封印術を攻撃型の伊織に解ける訳がないのだ。

ならば地下への入り口はまだ他にあるというのか。

急いで通路を引き返そうとした時だった。

とてつもない衝撃と地響きが建物と周囲の地面を揺らした。

「・・・まさかっ」

転びそうになるのを必死に建て直し螺旋階段に向かって走った。

第四章

終

第五章 — 脅威 —

「はあ……はあ……。」

千早が律子と螺旋階段を下りていくのと同時に伊織も『女の子が眠っている』であろう扉の前に辿りついていた。

さつき旧校舎の入り口前での千早との口論から勢い任せに飛び出し、千早が律子に気を取られている間に地下への入り口を開いて閉じた。

頭に血が上り、ただひたすらに階段を駆け下りて封印されている扉の前にまで到着した。

胸の前で鍵を持って、あがった息を整うのを待ちもせず扉の大きな錠前に鍵を差込み、ぐつと力を入れて回した。

両開きの扉は真ん中に巨大な錠前が付けられており、伊織が鍵を回したことで音も無くキラキラと光ながら消滅した。そして伊織の心の準備も整わぬままゆつくりと扉が開く。

その中から出てきたのは。紅い眼をした金髪の美少女だった。

「うそ……まさか本当に……？」

無意識に後退りしてしまう。

あの日誌に書かれた少女が本当に実在していたのだ。

監禁されていたにしては服も身体も汚れていないように見える。

出てきた金髪の少女は伊織を見て、無表情からおぞましいほどの笑みを浮かべた。

啞然としていた伊織はその顔を見て言い表せることが出来ないほどの寒気に襲われた。

得たいの知れない何かを受けて反射的に階段方向へ跳び退いた伊織の目が、その攻撃を認識したときには既に遅かった。

「しまっ……!!」

「……くすっ」

金髪の美少女から放たれた黄緑色の球体が身体に直撃してしまっ

た。
階段近くまで吹っ飛んだ伊織はそのまま意識を失う。

伊織に向かって歩く少女だが、意識を失っている伊織に興味を示さない。

そのまま彼女は階段を上っていく。

出入り口付近に到達した少女は隠し扉の仕掛けも気にせず能力で壁を吹っ飛ばしてしまった。

破壊された隠し扉付きの壁は瞬間にガレキに変わり、崩れ落ちていく。

そしてガレキを乗り越えた眼前に、畏怖する千早の姿があった。

時が変わって、千早が旧校舎の前で伊織を待っている頃。響はベッドで身体を横にしてずっと考え込んでいた。

自室に戻ってからずっと胸の中がモヤモヤしてちつとも眠れない。

原因はやはりさっきの伊織とやよいのやり取りだ。

「いつもはあんなに仲が良いのに・・・やよいどうしちやっただ。」
やよいが心配だった。伊織はどちらかというを抱えるより相談するタイプの人間だから彼女が悩むとしたら余程のことだろう。

だがやよいの場合はその逆かもしれない。

やよいは伊織の屋敷で産まれた時からメイドとして育てられてきた。当然、使用人としての礼儀作法なんかも学んでいるはずだ。その中にもし、『主人に対して必要以上の会話をしてはならない』と言う決まりがあったとしたら？

やよいには言えるはずもない。

主人である伊織に使用人の自分が泣き言や悩みを相談するなど、本来ならばあつてはならないことだ。例えば友人として接していても、その一線だけは無意識でも越えないようにしているはずだ。

それが、やよいの学んだ『英才教育』であり主従関係の最後の一線なのだ。

だからやよいはどんなことでも我慢をするし、その術を知っている。

悩みを抱えて友人にすら言わず、ひたすら我慢するなんてことをやりかねない子なのだ。

そして恐らく予想は当たっている。

今思えば態度や雰囲気などから、言えない何かを抱え込んでいることは明白だった。

(明日にでも聞いてみよう。伊織に言えないようなことだから自分が相談に乗れるかはわからないけど、何もしないよりずっとマシだからな。)

そんなことを思ってもう日付が変わろうとしている頃だった。考えることをやめて眠りに付こうとした時、不意に部屋の外から足音がしたような気がした。

耳を澄ましてみると近づいてきた足音は部屋の前を通って遠ざかっていく。

律子の不定期巡回の可能性もあるけれど、それにしたって巡回時間にはまだ早い気がする。

「・・・他の部屋の誰かな？ こんな時間にどうしたんだろう。」

こんな時間に出歩く生徒は滅多に居ない。何故なら消灯後にもしも律子に見つかれば連帯責任で全員10日間の早朝掃除をする羽目になるからだ。年に一回の大掃除や授業後の教室清掃と違って、毎朝4時から授業開始の8時までいたるところでみっちり掃除だ。

大半が6時頃に目を覚ますみんなにとって睡眠時間を削ってまで掃除など勘弁願いたい。

そんな事を思っていたら、部屋の前で見張りをしてもらっている魅力で作り出したハムスターが木製の扉を擦り抜けて入って来た。

この寮の扉には鍵が付いていないことで突然律子が扉を開けて中の様子を覗くことがある。

プライバシーの侵害とも取れるが、消灯を守らないこちらが悪いのだから言い訳できない。

だから律子が来てでもいいように、毎日部屋の前に自分の能力で作ったハムスターを生成して見張らせている。

響は普段から自分の魅力を動物の形に変化させて遊んでいる。本人の能力は『魅力を物体に形成したり、魅力体を実体化させる能力』で、魅力をハムスターの形に形成したり実体化して、どこからどうみ

てもただのハムスターに見えるようにする。

魅力体は響が眠るとコントロールができなくなるため自動的に空中に霧散する。

そのハムスターが扉を抜けて響に報告するために部屋に入ってきた。

響は起き上がりハムスターを手に乗せる。

「どうしたんだハム蔵？ 誰か廊下を歩いてたのか？」

するとハム蔵と呼ばれたハムスターは頭を上下に振って明確な意を示した。

消灯後に出歩くことが減多にないため誰がそんな危険なことをしたのか知りたくなった。だから響はハム蔵に指示を出す。

「ハム蔵、さつきここを通った人と一緒に誰が部屋に居ないかを探つて欲しい。出来るだけ早く頼むぞ。それと絶対ティーチャー律子に見つかっちゃダメだからな？」

そういうとハム蔵は勢いよく飛び出した。

魅力体であるハム蔵は扉をすり抜けて廊下に出る。壁をすり抜けられれば簡単なのだが、部屋の壁には触れれば能力を強制解除する解効石―カイコウセキ―、別名コンタクトブレイクと言われる石が壁に塗りこまれている。もし能力を使って壁から別の部屋に行こうものなら能力を強制的に解除され、下手をすれば壁に埋まってしまうこともあるのだ。

そして窓も換気以外で解放してはならない決まりになっている。前に窓から別の部屋へ遊びに行ったら数分経たずに律子が乗り込んできたので、窓にも何か仕掛けがあると伊織は睨んでいたが、いぞ解らなかつた。当然連帯責任で掃除をさせられたのでそれ以降窓から外には出ていない。なのでいくら魅力体の動物でも壁抜けは出来ないし、仕掛け不明の窓からも外には出入りできない。必然的に扉一択になるわけだ。

同期で魅力体を使えるのは響だけなのだが、実は実体化せず魅力体のままで木製である扉やコンタクトブレイクの鉱石が使われていない場所ならどこでも擦り抜けて情報収集が出来ることを律子は知ら

ない。

一般的な魅力体と言えれば攻撃型が使う光弾の類だがそれは障害物にぶつかれば爆発するというもので、能力者の常識的な部分で魅力体は壁などの物体を通り抜けることが出来ないとされている。そのため能力値測定で披露すれば恐らくアイドル候補に名乗りをあげられるかもしれない。だけど例え魅力体であっても可愛がっている動物を諜報活動に使われるのは嫌だった。自分自身が諜報員になることもそうだが、アイドルになって律子のようにアイドルを育てる教師になりたかったからだ。能力を使用した諜報活動員不足は生徒である自分の耳にも届いている。だからこそ、そうならないために隠した。教師の律子はもちろん、たまに来る外部の人間には絶対に知られたくなかった。

生徒全員のフロアはこの階にあるから時間はそんなにかからない。静かな廊下を靴で歩いたら足音が響いてすぐにわかる。何故廊下は足音が鳴るようにされているのか。これは見回りの教師が音によって違反者を発見するためだ。

裸足で歩いてもペタペタという音や、靴下の摺り足ですら聞かれて捕まった生徒も今までたくさん居たらしい。

最早地獄耳などで済ませられるレベルではない。

封印術の得意な律子は自分から発せられる音を封印して違反外出した生徒に気付かれないうように近づき捕まえるのだ。

そして今もまた足音が聞こえた。律子ではない。またも部屋を抜け出した生徒がいる。

恐れ知らずというか傍迷惑というか。お願いだから見つからないでほしい。

そう願いながら部屋でジッと待っていると3分ほどしてハム蔵が帰ってきた。

手の上まで上ってきたハム蔵が語りかけてくる。

「千早と・・・やよいと伊織が部屋に居ない？」

なんだか凄く嫌な予感がした。千早と伊織が犬猿の仲なのはみんな知っているが伊織とやよいが今気まずい雰囲気なのを知っている

のは響だけだ。

それにこの3人がこの時間に出歩くことがまずおかしい。律子に見つかって大掃除など特にやりたくない千早と伊織が揃って出歩いている。どんな理由があるにせよこの異常を見過ごすほど響はのんびり屋ではない。どの道モヤモヤして眠れやしないのだし、念のため他のみんなにも話してみようと移動する。

ハム蔵には引き続き他の生徒を起こしてあずさの部屋に集めるよう指示を出した。

あずさの部屋は響の隣だ。鍵の掛かっていない扉を開いてあずさの部屋に入ろうとする。

「……………誰？」

身体がビクツとなった。ドアを開いたところであずさが後ろから声を掛けてきたのだ。

響は『ひっ』という細い声を出して振り向き両手を突き出して待てと手を振る。

「どうやら転移で響の後ろに回りこんだらしい。

「じ、自分だぞあずささん！」

「あら、響ちゃんだったの。ごめんなさい驚かせちゃったわね。」

「いや、自分もいきなり部屋に入って悪かったさ。でも、ちよつと話があつて」

そうしている間にハム蔵に起こされた真と雪歩があずさの部屋まで赴いた。

眠そうに薄目で頭をかいている真。欠伸が止まらないのか涙目で寝ぼけている雪歩は胸の前で枕を抱いている。響はみんなを部屋に入れて話し始める。

「それで響ちゃん。話というのは？」

「ああ、千早と伊織とやよいが居ないんだ。この時間に出歩いているらしいんだけど」

「え……………ちよつと待ってよ。もう消灯とつくに過ぎてるよね。ティーチャー律子に見つかったら大変じゃないか！」

「……………ぼえ……………」

「もう、ねえ起きて！ 起きてよ雪歩！」

未だに寝ぼけている雪歩の両肩を掴んで前後に揺さぶる。

すると雪歩の両目がカツと見開かれ真の瞳を捕らえた。

そしてキリッとした顔で言葉を口にするが……。

「あ、真ちゃん。今日もカツコいいね！」

「ダメだ寝ぼけてる。」

「え……あのっ」

雪歩の肩に乗っていた手を離してあずさに向き直る。

真は両手をギョツとして胸の前まで持ち上げて顔は焦りで涙目になっていた。

「とにかく3人を早く見つけないと、また掃除が……！」

「待つて真ちゃん。……響ちゃん。3人がどこに行つたか心当たりあるかしら？」

「それがわからないんだ。この時間に動物を走らせる訳にもいかないから探せないし」

「……もしかしたら。」

すると突然、待機していたハム蔵が急に暴れだした。部屋を走り回ったと思ったらハム蔵は響の背中から頭に上り、旧校舎の方へと威嚇している。

響が『どうした？』と言葉を発する前にとつともない地響きが彼女達を襲った。

ドゴォーンっ!!

爆発音のような音と共に大きな地震でも起きたような錯覚に陥つて響は尻餅をついた。

雪歩と真は何とか堪え、あずさは少しだが宙に浮いた状態になっていた。

「な、何が起こつたんだ！」

「これは……っ！ 『纏え！』」

するとあずさは突然、訓練の時に着る戦闘衣装に身を包んだ。

そして小さな光に包まれた右手にハンドマイクが現れた。

戦闘衣装は入学と同時に配られた言わば訓練着だ。

壁際に掛かっていた衣装が光に包まれて消え、一瞬であずさの身体を覆っていく。

戦闘衣装は入学能力値測定でのプロフィールを元に作られている。プロフィールには身体のサイズを記入する部分があるのだが、主にこの戦闘衣装のためのデータだ。

入学時に手渡されるこの衣装は、特殊な魅力を持つ生物の糸で織られた生地をベースに作られたもので、一般的には戦闘衣装。魔法衣やデュエルフォームと呼ぶ者も居る。一度着た人間は身に纏っている衣装と手に持ったハンドマイクに使用者の魅力を記録し、持ち主が『纏え』と言葉にすることで戦闘衣装は一瞬にして魅力に分解され使用者の着用するために再構成される。

ハンドマイクは衣装の分解を感知して持ち主のもとに再構成する構造になっている。

どちらも魅力で繋がっている持ち主の元で再構成されて出現するというものだ。

魅力は指紋やDNAと同じく十人十色の違いがあるため確実に持ち主の元で出現する。

簡単に言えば、一言だけで着替える手間が省ける鎧と思えば良い。いつ召集を受けるかわからないアイドルからすれば着替えの時間などあるはずもない。そこで迅速かつ確実に衣装を着る方法としてのシステムが採用された。

初めてこのシステムが生まれたのは凡そ90年前。

ちなみにこの方法を考え付いたのは水瀬財閥、つまり伊織のお婆さんなのだ。

一代にして財閥まで伸び上がった手腕は脅威的で衣装の生成方法は企業秘密。世間には知られていない。水瀬家の秘伝だそうで、もちろん伊織も生成方法については熟知しているがやよいは知らない。一族相伝というわけだ。

そんな衣装を身に纏ったあずさは窓から差し込む月の光を浴びてとても画になる壮麗さだ。

紫と白のコートに近いその衣装は紫の大きな襟から左胸の前を紫

色のラインが一番下まで伸び、その横を紫のボタンが上に二つ、下に二つと付いていて、腰にベルトが巻かれている。下の衣装も白地に紫のラインが入ったスカートになっていて、そこからは紫色のフリルがこれもスカート状になっている。靴は白のブーツでこれは履き口のところを紫色のラインが横に入っている。

そして肘まで伸びるパーティグロブ。これらを身に纏ってあずさは焦る口調で指示を出し始める。

「私は爆発の原因を調べてくるわ。真ちゃんたちは戦闘衣装を着て旧校舎に来てちょうだい！ 響ちゃんは着替えたあとに能力で強力な動物を実体化しておいて！」

「ちよっ、あずささん!？」

真が声を掛けると同時にあずさは転移で旧校舎へと向かった。呆然とする3人だが、あずさの焦り具合から見ても何か重大なことが起こったのだろうと察した3人はすぐさま自室に戻り自分の戦闘衣装を身にまとって、普段決して出てはならない窓から浮遊術でそれぞれに飛び出した。

あずさは旧校舎の上空に転移していた。さつきから嫌な汗と予感が止まらない。

爆発の原因である旧校舎では1階の窓ガラスが全て砕け散り入り口は吹き飛んでいて所々から白煙が上がっている。

もしも、もしもアレが目覚めたのだとしたら……。そう思うと次から次へと恐怖心が競りあがってくる。状況的には最悪のタイミングだ。今は夜中。

一日の疲れが残るこの時間に目覚めたのならまともに戦えない。

しかも彼女達は夜戦の経験など皆無だ。太陽が高い内に行っている授業の戦闘訓練とは訳が違う。暗闇の攻撃に対応するだけの経験が圧倒的に足りていない。

戦力的にもかなり厳しい。未来の響でさえ体力は無いにしても星井美希とは互角の力だった。だがそれは何十年という研鑽の賜物だ。今のあずさ達にそれほどの力は無い。

本来の計画では復活を阻止することが最大の目標だった。

復活して倒すにしても綿密に練った計画があつてこそ成功する可能性が出てくるのに。

そんなことをグルグルと考えながらあずさは旧校舎の入り口目掛けて降下を始めた。

この爆発が伊織や千早の喧嘩であることを切に願つた。そうでなければ災厄の始まりだ。

ある程度降りたら飛行をやめて自由落下で入り口を目指す。そして白煙立ち込める1階ホールエントランスを見て思わず足が止まった。

入り口から入ったいつもの記憶にある眺めとは全く違い、その場所に置かれていた椅子や長い机は原型を止めず木片と化し、見える限りの窓ガラスが割れ、赤いカーペットも埃で黒ずみ、建物の左右にある1階から2階への階段も半ば吹っ飛んでホールは広い空間が出来上がってしまった。

煙は徐々に外へ出て行き、その奥に立っている人影を見つけた。

薄暗いホールでゆっくりとこつちに歩いてくる人影は……。

「あ………」

小さく声が漏れた。そしてあずさの顔から血の気が無くなり一瞬で蒼白へと変わった。

身体が小刻みに震えだす。手から肩、胸から全身に広がり頭。腰から足先まで震えて心臓は激しく鼓動を打ち、恐怖のあまり息が止まった。

視線の先には幾度と無く目にした恐怖の象徴である星井美希が、こちらに向かつてゆっくりと歩いてくる。

息が出来ない。とうとう涙まで溢れてきて数滴床に落ちるが止まらない。

ふるふると震えていた手はやがてガクガクと音がなるかと思うほどに震えた。

(逃げなきゃ……逃げないと……。嫌、死にたくない！ 動いて……助けて誰かつ!!)

動けない。身体が動こうとしない。頭の中は未来で起こったありとあらゆる凄惨な記憶が次々とフラッシュバックを起こして吐き気まで催してくる。

あずさまであと10メートルも無いところで美希は止まった。美希は右手を伸ばし、あずさに向かって攻撃を開始しようとしている。未だに身体は動こうとしない。このまま攻撃されてあっさりと死に絶えてしまうのか。

自分の今までの人生やこの時代に来た3年間は全くの無駄だったのか。

1秒にも満たない時間で頭を過ぎる言葉は無念と後悔。そして懺悔。

とうとう目の前が真っ白になり意識が遠のき始めた、その瞬間だった。

「あずささんっ!!!」

「——っ！」

星井美希が放つ黄緑色の閃光があずさの顔の横を過ぎ去った。

美希の視線が後ろへと移動する。そこには千早が息を切らせて立っていた。

あずさもまた千早の声で意識を取り戻した。酷い量の汗が頬を伝う。

身体の震えが少し和らぎ、ぼやけた視界が少しずつ鮮明になっていく。

本来ならばこの時、あずさの人生は終わっていたはずだった。

この偶然が彼女の運命を大きく変えた。

美希が閃光を放つ瞬間。千早は能力を駆使して美希の足元に氷の針、俗に言うアイスニードルを放っていた。攻撃のモーションに入っていた美希は飛んでくる氷の針に足元を掬われ攻撃を遅らせることに成功した。

ほんの一瞬だが攻撃の手を止めた美希は倒れそうなあずさの頭に再度照準を合わせた。

更にそこへ千早の声で身体を強張らせたあずさは動くはずだった

頭の照準からも回避することが出来た。

もし千早が声を張り上げてあずさの名を呼ばなければ、倒れ込む頭に美希の攻撃が直撃していただろう。

そして食事に見せられないような凄惨な光景が広がったに違いない。

美希を見て冷静さを失っていたが、今は何とか能力を使うくらいには身体が動く。

そうだ、恐怖している場合じゃない。何のためにこの時代にまで来て果たさなければならぬ使命を未来の皆から託されたのか。未来を変えたい。世界を変えたい。

絶望に突き進むしかない世界を救いたい。その気持ちでここまで来たはずだ。

そのために、この拾った命でなんとしても星井美希の討伐を果たさなくては。

刺し違えてでも止める。心の中で決意を持った彼女は千早の元へと転移した。

その時、千早は何故か動こうとしないあずさを見ながらヒヤヒヤしていた。

地下から出てくる美希と運悪く鉢合わせてしまった千早は、美希が手の上で放出した黄緑色の球体を見て即座に防壁で身体を包んだ。その途端に周囲を破壊し吹き飛ばすほどの大爆発が起こったのだ。

少しでも遅れていたら怪我程度で済まなかったかも知れない。

爆発した後も攻撃を仕掛けてくると警戒した千早だったが、その素振り無く入り口の方へと歩いていく。そしてその時にあずさが現れた。

あずさは全く動こうとせずただ立ち尽くしている。千早の脳裏にある言葉が浮かんだ。

『トラウマ』

もしも動かないじゃなく動けないのだとしたら……。そう考えた時、今のあずさが非常に危険な状態であることを察した。

美希は既に攻撃する態勢に入っている。右手を前に突き出した彼女はあずさに狙いを定めていた。

「ーどうすれば良い。どうすれば助けられる!？」

攻撃型なら単に能力で攻撃するだけで気も逸らせるだろう。だが千早は防御型だ。

攻撃系統の技は殆ど持ち合わせていない。出来て精々自分の腕の大きさと同じ氷の針。

アイスニードルくらいのものだ。

だがもしも能力を防ぐ何か防壁のようなものを張られていたらとても気を逸らすことが出来ない。物理防御に関してもさっきの爆発で無傷だと言うことは飛んできた破片に対して反射する方法があるということだ。となれば直接攻撃をすると無駄になる可能性がある。こんなとき他のみんなだったら・・・。

その時、伊織の言葉が頭に過ぎった。

『そんなことじゃこの先、人を信用して足元を掬われるかもね。』

・・・それだっ！

攻撃を防ぐために大幅に魅力を使ってしまったが氷の針を作るくらいならば、まだ余裕がある。

千早 『纏え。』

瞬時に千早の服が青色の戦闘衣装に変化する。そして左手に現れたハンドマイク。

このハンドマイクは戦闘衣装と共に配布された魅力を増幅させるための装備。

所持している状態で自動的に体内を巡る魅力の循環を早めてくれる効果を持つ。

簡単に言えば本に出てくる魔法使いの石のような役割だ。

入学当時はまだ魅力が少ない者も居るため全員に配布されるようになっていた。

新たな訓練や技などを習得するときなんかにも使い、今この状況で使うことを選んだのは少しでも威力を向上させるためだ。

ハンドマイクは魅力の増幅、能力の使用回数、威力の増加をさせる

ことが出来るという有利点。逆に不利な部分はマイクの破壊や装備を解くことでプラスされたステータスが通常と変わらなくなってしまうということだ。

所持するためには片手を封じられてしまうため戦闘の邪魔になることもない訳ではない。

そんな時は一時的に手放して装備を解いて戦う。再び『纏え』と口にするのでマイクが手元に戻ってくるのだから、戦況に応じた戦い方をしようと思えば出来るのだ。

だからそういうときは伊織などが羨ましい。伊織の能力は形状などのコントロールが特に必要ないため威力を高めれば使える高火力重視の能力。ハンドマイクでのステータスブーストがなくても充分な威力を持っている。

アイスニードルも魅力をコントロールすることでようやく作り出せるようになったが威力自体は期待できない性能だ。攻撃型ならばもつと強力なものを作り出せるが今はこれが精一杯。贅沢は言ってもらえない。もうすでに美希は手の先から黄緑色の光を発している。確かに直接攻撃をすると無駄になる可能性がある。

ならば周囲の状況を変化させるしかない。例えば、能力を使って足場を崩すなど……。

美希の攻撃が放出されようとしている。間に合えっ！と心の中で叫び氷の針を飛ばした。

結果、寸前のところで美希の足の数センチ手前の床を貫き身体の安定を崩すことに成功した。

だが、星井美希の攻撃が一時的に遅れたにも関わらずあずさは動こうとしなかった。それどころか、ふらっと倒れそうになったのを見て大きく叫んだ。

「あずささんっ!!!」

あずさの動きが一瞬止まったと思えばその顔の横を黄緑の光が光速で過ぎ去っていく。

残光が残るその光景の中で美希はこちらを向き、あずさもこちらを見ている。

そして、数秒もしないうちにあずさが横へと転移してきた。

「はっ・・・はあっ・・・」

「あずささん！ 大丈夫ですか!？」

「ち、千早ちゃんありがとう。助けられちゃったわね」

「いえ、それよりもアレがそうなんですネ。」

「ええ。あれが・・・眠り姫。星井美希。」

一見平静を取り戻したように見えるあずさだが額から頬を伝い滴る汗が止まろうとしていない。

昼間に聞いた話の内容ではあずさは星井美希に少なからずトラウマになるような出来事を経験させられている。死の世界と化した未来の星井美希と重ね合わせて恐怖で身動き出来なかった。と言ったところだろう。

今動いているということは何とか振り切ることが出来たのだろうか。

そして二人を見ていた星井美希は何故かそのまま旧校舎を出て行くこうとしている。

まるであずさと千早に興味を示さないようにゆっくりと。しかしあずさはそうさせる気は全く無かった。

「ま・・・まちなさいっ」

あずさの声に無反応で歩く星井美希が旧校舎の入り口に差し掛かった時だった。

「!」

外から入ってきたものに美希は後退を余儀なくされた。入り口付近から後ろに飛び退きあずさを攻撃した位置へと戻る。

美希に攻撃したその正体はとて大きな狼にも見える動物だった。白い毛並みにグルグルっと威嚇を示す低い声。人が乗れそうなほどの体躯。この周辺で、それどころか世界のどこを探してもこれほどの種が居ると思えない。そしてこの場所で動物を操る魅力具現化の能力を持っているのはたった一人。

「あずさ、千早！ 大丈夫かっ!？」

人が乗れそうとは言ったが本当に乗っている。

その大きな狼の背中には戦闘衣装を身に纏った響が乗っている。そして入り口から真、雪歩が姿を現した。

狼に怯える雪歩は戸惑いながらも周囲の惨状に目を配らせ最後に美希を見た。

狼が威嚇しているというのもあつて美希が安全な相手ではないと言うのは伝わっているようだった。

「ふええ……なに……これ？」

「……あずきさん。千早。これはそこに居る金髪の子がやったの？」

「真、気をつけて！ 彼女から目を離してはダメよ!!」

「どういうこと!？」

「彼女は星井美希。この旧校舎の地下に封印されていた“眠り姫”と呼ばれる怪物よ。油断しないで！」

「……眠り……姫？」

彼女たち3人は眠り姫のことなどまったく知らない。

どんなことであろうと情報が無いというのは危険なことが多いものだ。今、真たちの目の前には『暴れている能力者が居る』という認識だろう。

未来を崩壊させてしまう脅威の怪物とは到底思っていない。

その認識を今改めなければ大変なことになる。

みんなは星井美希に対話を求めるだろう。気が立ってる人間に対して一般的な対応と言えば相手との話し合いで解決しようと試みる。それがダメだった場合は強行手段。

しかし、話し合いの提案などしている間に星井美希は間違いなく問答無用で攻撃してくる。

そうなれば後の祭りだ。誰か一人でも攻撃を受けて倒れたら取り返しが付かない。

みんなで力を合わせても敵うかどうかかわからない相手だ。

伝えるなら今しかない、千早は声を挙げた。

「私達が力を合わせて戦っても敵わないかもしれない!! 油断したら死ぬわよ!!」

真をはじめ響と雪歩も耳を疑った。自分達が力を合わせても敵わ

ないかもしれない。

それは2年間の教育を受け、一般人には到底及びつかないステータスを持つ自分達でも太刀打ちできない強力な能力者だという意味だ。そんな能力者は、アイドルと同等かそれ以上の能力者だということになる。

何者かはわからないが千早とあずさが疲労を見せるほどの相手だ。元より油断なんてするつもりは無いが、千早の警告には恐ろしい意味が込められていることにみんな気付いていた。

相手の『動き』を警戒するだけであれば「油断しないで」で済む話だ。だがその後には付けられた「死ぬわよ」という言葉で気付くことが出来た。

この金髪の正体不明の超能力者はここに居る人間を“殺すつもりで攻撃してくる”ということだ。油断したら死ぬというのは『動きを警戒して』ではなく『攻撃されるから気をつけて』という千早の警告。そして目の前に居る自分達と変わらない少女の、身も竦む程の眼光と驚異的なプレッシャー。

「なるほど、話し合いの余地はなさそうだね。」

「最初から全力で戦うのよ。そうしないと身を守れない！」

「彼女は・・・アイドルなのか？ アイドルのような戦闘衣装を着てるけど」

「アイドル・・・ではないわ。でもそれ以上の力を持つてる。」

千早の言葉が決して過言ではないことは緊迫した声色から感じ取ることが出来た。

真は腕を前に突き出すと手の中あるマイクに魅力を集中させる。マイクが徐々に赤くなりそのマイクの先端からは炎の刀身が徐々に生成されていく。真の属性を使った炎の剣だ。

この炎の剣は真が2年生の時に編み出した攻撃型の具現化生成術で、魅力のコントロールで長さを変えたり温度を変えたり出来る。放射系の能力も訓練してはいたのだが、性に合わないようで接近戦一択という道を選んだ。この剣は常に形状を保っていると魅力消費し続けるので普段は全く使わない。

つまり手を抜いている余裕が無いことを察してくれたということだ。

その真の行動を見て雪歩も、いつもとは違う気の引き締まった顔になった。

雪歩は水属性の補助型で水質や水分水素を変化させることを得意としている。大まかには質を変化させて別のものにするという錬金術のカテゴリに入る。実戦での使用よりも研究を重ねてどうすれば必要な変化をさせられるかと言うことに時間を費やしているのだ。

水を毒などにも変化させることができるためアイドルに抜擢されれば暗殺専門のスパイに推薦されるかもしれない。それほど貴重であり使い方で国を滅ぼしかねない強力なものなのだ。

「雪歩。君は魅力の消費がボクより激しいんだ。ムリしちやいけないよ」

「わかってるよ真ちゃん。ペース配分は大丈夫。」

「わかった。じゃ・・・行くよっ!!」

真が真っ先に飛び出した。

炎の剣が一闪。残光を残して美希の身体を襲う・・・と思われた。

「・・・なっ・・・」

いつの間にか美希の右手には大きなスタンドマイクが握られているた。

そのスタンドマイクと美希は微動だにすることなく真の炎の剣を受け止めている。

だがこのくらいの力量差はハッキリ言っ予想は出来ていた。

受け止められていた炎の剣が弾き返され真も急いでその場を離れて元居た位置に戻った。

みんな、そして千早自身が驚いていたことは他にある。美希の右手に持つスタンドマイクの方だ。

「千早、どういうことなんだ!! 彼女、アイドルじゃないか!!」

美希の持つスタンドマイクはアイドルの資格を持つ者しか扱うことの出来ない武器だ。

千早たちが持つハンドマイクの性能は魅力の増幅。それと違いア

アイドルとして認定された者に届けられる実戦用の戦闘衣装とそれに付属するスタンドマイクは所持者の魅力を物理攻撃に変換させる性能を持っている。魅力の絶対値がまだ少ない学院生には到底扱えない。扱おうにも物理攻撃に変換したところで5分も持たず疲弊して倒れてしまうだろう。

魅力を循環させて使用するスタンドマイクの種類は多く、選定するのは新人アイドルの最初の仕事と言われている。

先端から魅力で作られた湾曲の刃が出現する、威力を重視した大鎌型。

先端から鋭く突き出る刃でバランスを求めた槍型。

真ん中から分かれて両の手で切り裂く速さを求めた双剣型などの代表的な種類がある。

アイドルになってから訓練するのでは遅いため、学院の訓練メニューや授業自体に実戦的な武器の使い方。スタンドマイクに模したモノでの戦闘訓練も千早たちは散々こなして来た。そのため美希の持つスタンドマイクがどの型であるかも既に頭の中で判別している。

大鎌型。威力重視のマイクだ。

アイドルが相手というだけでも厄介なのに威力重視となると真では分が悪い。

真も威力を求めた戦闘スタイルだが美希と本気で戦うとなると威力負けしてしまうのは明らかだ。

実戦経験は恐らくそれほど差はない。差があるとすればステータス。あずさが敵わないのであればこの場の誰よりも高いステータスを持っている。流石に真も分が悪いため受け止められた剣を引いて真は再び雪歩の近くへと戻った。

「真ちゃん！ 大丈夫!？」

「大丈夫さ。けど思ったよりもマズい状況だよ。」

「え?」

「あずささんと千早は疲労で動きが鈍ってる。伊織とやよいはまだ来ないし、戦おうにも相手は火力型のアイドル。束になっても敵うかわ

からない」

「でも……やるしかないぞ。」

響も真と雪歩に近付き目の前の眠り姫を見据える。

声に少しの恐怖が混ざっていた。初めての实戦なのだから当然だ。響の微かな覚悟に二人も苦笑しつつも賛同する。

「……だよ。雪歩は回り込んであずきさんと千早の回復を。響はいぬ美と一緒に僕と攻撃。サポートよろしく。」

「わかったぞー！」

「気をつけてね二人とも」

雪歩は入り口から壁沿いにあずきと千早の元へ移動する。

真はさつきと同じ炎を纏う剣を身構える。

響も跨っている巨大な狼、いぬ美と共に美希の動きに集中している。

いぬ美と呼ばれた狼はハム蔵と同じ魅力体の動物だ。今は戦闘のため響の能力で魅力体を実体化している。攻撃を受けて霧散する魅力体とは違い、実体化することでダメージを受けても霧散する事はない。体躯は人を余裕で跨らせるほどの大きさで、飛行の能力を兼ね備えている。いぬ美は響が実体化し得る中でも特に戦闘向きの動物で攻撃の威力とスピードを兼ね備えた頼もしい存在と言える。そのいぬ美がグルルルと威嚇しながら美希を見ている。

当の美希は立ったまま動かない。

薄暗い建物の中では表情も見えない。

緊迫した状況が続いた。

第五章

完

第六章 ―開戦―

自然に囲まれた小さな学院。旧校舎の1階エントランスホール。その場所で今、誰にも知られざる戦いが始まろうとしていた。

建物内部は眠り姫と呼ばれる脅威の能力者、星井美希の攻撃によって入り口の扉に机や椅子も壊れ、窓ガラスは全て砕け散り、2階へ上る左右の大きな階段が真ん中から下が跡形もなく吹っ飛んでいる。

沈黙する星井美希と真のにらみ合いで緊迫した空気の中、壁際を移動していた雪歩はようやくあずさの居る場所まで辿りついた。

二人の状態を急いで確認する。

「二人とも、大丈夫?」

「ゆ、雪歩ちゃん……。」

「あずささんちよつと手を。」

雪歩はあずさの手を取って脈を診る。次にあずさの頬に手を当てて顔色を見てから、千早の顔を見て目を合わせる。

目を合わせて数秒で千早は息を吐いて目線を下に向けた。もう一度千早に目を合わせるように言っただけなのに、また同じように目線を下に向ける。

(あずささんは顔が白く冷たい。手も冷たくて脈が弱い。目眩を起こしているみたいだし、多分低張性の脱水。千早ちゃんは極度の疲労。魅力が急激に消費したみたい……。このままじゃ攻撃されてもまともに回避も出来ないし……。そうだ!)

「雪歩ちゃん。私より先に千早ちゃんを……。」

「ダメです。あずささんを回復させないといざと言うときに回避に影響が……。」

「千早ちゃん。つらい状況だけど氷出せる?」

「え……。小さいのなら大丈夫。それでもいいかしら?」

「うん。口に入るくらいの四角い氷をお願いします。」

千早は掌を上へ向けて意識を集中する。魅力を消費している千早

は辛そうに顔を顰めながら空気中に氷を生成する。大きさにして口に入るサイズの氷を二つ。その氷を雪歩は自分の手に取って能力を発動させた。白く薄い水色の氷が徐々に光輝いて数秒の後に光は収まった。そして氷の色が白く薄い水色から黄色と白色の氷へと変化していた。

雪歩は黄色を千早に、白色の氷をあずさに手渡す。

「それを口の中で舐めて溶かしてください。」

「これは・・・？」

「の、能力で変化させた特性のポーションです。二人の状態から今の状況に合わせて変化させたので回復するはずです。さ、早く口に。」

あずさと千早は急いで雪歩が作ったポーションの氷を口に含む。口に含んだ瞬間に若干の苦味の後、甘い味が口の中に広がる。頭に響く甘味だがフワツとした浮遊感に包まれていく。約5秒ほどの幸福感の後に意識を戻した千早の疲労感がもう殆ど消えていた。あずさも脱水による気だるさが消えて徐々に顔色を取り戻し、頬に桃色が浮かぶ。頭痛が収まり意識がハッキリしてくる。

雪歩の特性ポーションは名前負けしていない個人の状態に合わせて変化させたまさに「特性」なのだ。

瞬時に回復する速度と効能はエリクシーに引けを取らない。

「まるでエリクシーね・・・。凄いわ萩原さん」

「そ、そんな・・・私なんて全然。まだまだエリクシーほど凄くないしホンのちよつと回復させられる程度で・・・。」

「そんなことないわ雪歩ちゃん。まさかこれほどなんて・・・驚いちちゃったわ。」

エリクシーとは回復を専門にしているアイドルの総称で、傷や体力を回復する能力を持つアイドルや、能力で薬を作って回復させるアイドルなどがそう呼ばれる。

雪歩の目指すアイドルだが、水を変化させて薬を作る雪歩がエリクシーになったとしたら歴代の偉大なエリクシーに並ぶ能力を持つかもしれない。

そう思わせるほど彼女の作った氷の効き目が凄いのだ。回復した

あずさも驚きを隠しきれない様だった。

「あ、あずささんは脱水が酷かったのでスポーツドリンクに近い氷にしました。増血剤のように体内で増水して急速吸収するようにもしました。千早ちゃんも神経の使いすぎと魅力の消費から来る疲労だったから滋養強壮効果のある氷に変えたの。あずささんと同じで急速吸収だから効果はすぐに出たと思う。」

「助かったわ萩原さん。ありがとう。」

「ううん。薬師学の知識が役に立ってよかった。」

座り込んでいた千早も立ち上がり、美希を見つめた。今ようやく真と響が攻撃を仕掛けようかという緊迫感に包まれている。

そして改めて周囲を見回し旧校舎ホールエントランスであった場所の惨状を確認して美希が出てきた場所を見てハツとした。

律子とやよいはまだ地下に居るだろう。それと同じく伊織の行方がまだわかっていない。

これほどの騒ぎだ。何かあったと彼女なら真っ先に駆けつけてくるだろうけれど未だに姿を見せない。

「萩原さん。今の特性ポーシオンをもう一つ作ってくれないかしら。」

「え……いいけど。どうするの?」

星井美希が姿を現したことから鍵を使ったことは間違いない。となれば、美希の出てきた場所から地下に入って扉を開いた。美希を見てうまく逃げ出したか攻撃されたかのどちらかだろう。

一度地下に潜って伊織がいるかどうかの確認だけでもしないと、万が一にでも瀕死の状態だったら発見の遅れで命に関わる。

「多分だけど、まだ水瀬さんが地下に居ると思うの。攻撃を受けて動けなくなったら大変だから念のために確認してくるわ。」

「……わかったよ。任せて!」

「……ふふ。」

再び千早が氷を生成している最中に、突然に美希が微かに笑った。そしてその小さな笑いは次第に大きくなっていき大笑いまで始めた。

「ふふ．．．ふふふ．．．あはっ。あははははははっ!!」

そこに居るみんなが大笑いする美希に恐怖染みた感情を抱く。

千早は自分の胸の中に何か恐ろしい、ドロツとしたものを感じたような気がした。

恐怖心自体は今はまだそれほどでもない。感じたのは簡単に言うると『嫌な予感』だ。

この戦いはみんなの運命や未来を大きく捻じ曲げるのだろうかという予感を感じた。

本格的な戦闘衣装とアイドルの持つスタンドマイクを装備し、真の攻撃を意図も簡単に防いだ脅威の存在が笑っている。氷を生成して雪歩に渡すところで笑いは止まり、そして．．．。

「!!?」

一瞬だった。1秒にも満たない一瞬の間に美希は真との距離を詰めたのだ。

真は回避する間もなく、美希の拳が腹部にめり込み、そのまま真は入り口の外まで吹っ飛んだ。

その隣で美希の攻撃に驚く事もなく、攻撃をいち早く察知していたいぬ美は真が攻撃を受けた瞬間に噛み付く体制になっていた。しかし、いぬ美の噛み付きはガチンツ!という音と共に虚しく空を切る。

美希は既に回避して響といぬ美の後ろに回りこんでいた。

そこへ即座にあずさが転移して更に美希の後ろへと回り込んだ。手に魅力を集まさせて指先を鋭い刃に変え、美希の身体を貫こうと手突の構えをとった。しかしその時あずさが見たのは、こちらを見ながら笑う横顔だった。

あずさが咄嗟に前屈みになったその瞬間、頭の上を鎌の刃が通り過ぎる。

転移した時、美希のスタンドマイクから放出された魅力がまるで死神の鎌が如く湾曲した刃となってあずさのうなじ部分に据えられていたのだ。

あと1秒判断が遅れていたらあずさの首は血飛沫をあげて宙を舞ったことだろう。

美希は前方宙返りの様にジャンプしたと思えばその勢いで前屈みになってるあずさの顔面に踵を叩き込むつもりだ。そうは行くまいと寸前にいぬ美の傍へと転移して、体制の整わないいぬ美と響を連れて転移で距離をとる。

たったの5秒程度の攻防だがスピーダーの戦いなら良くある光景だ。この攻防が終わって皆がまた動かなくなる。

そしてこの攻防の間に雪歩の氷のポジションが完成した。真が吹っ飛ばされたのを見て伊織と真の氷を2つ分作っておいた。雪歩のポジションは傷を治すことは出来ないが体力を回復することはできる。

「千早ちゃん。ここは私達で食い止めておくから、早く伊織ちゃんを。」

「・・・ええ、お願い！」

雪歩は階段横の割れた窓から外に出て入り口の前で倒れている真の元へ向かった。

千早は対峙しているあずさと響を見てからすぐに地下へと向かう。今は仲間を信じて伊織の無事を確認することが優先だ。

千早はさつきとは別のもう一つの階段裏にある地下の入り口を下りていく。

身構える響とあずさ。数秒の沈黙のあと、更に激しい戦いが始まった。

長い階段だ。薄暗く、壁についている蝟燭も破壊されて機能していない。

だが暗いからといってゆっくり降りている暇はない。今にも上ではみんなが死力を尽くして戦っている。少し身体を浮かせつつ急いで降りて躓いても止まらないように急ぐ。

降りている途中で階段が崩壊していた。さつきの振動はこの階段を壊したときのものか。

ガレキになっている狭い中を必死に進む。そしてようやく整備された通路に出た。そこには仰向けに倒れて意識を失っている伊織の

姿があつた。

「水瀬さん！」

呼吸と脈を確認する。脈はしっかりと打っているが呼吸が少し弱い。

急いで雪歩特性ポーションを口の中に放り込んだ。

私達よりも回復に時間が掛かっているように見える。本来は雪歩が相手の状態を見て回復薬を作るのだから回復の遅れは当然とも思えた。

それでも時間にして数十秒。伊織がようやく目を覚ました。

「う……ち……はや？」

「水瀬さん！ よかつた、気が付いたのね」

眼を覚ました伊織は力をこめて起き上がろうとすると、頭と腹部の痛みを訴える。ポーションを口に入れて飲ませてはいるが体力が回復するだけで怪我を治すことはできない。動けるのであれば自力で行動してもらわなくてはいけなかった。

戦えるのであれば戦力に、戦えないのであれば避難してもらうつもりだった。

「……私、一体……」

「今、上であずささんたちが戦ってるの。水瀬さん、戦えそう？」

「戦い……そうかあの女、いきなりとんでもない攻撃してくれちゃつて……」

「まだ少し身体がふら付くだろうから大丈夫そうなら地上に上がってきて。私は戦いに戻るわ。」

「ま、待ちなさいよ！」

伊織は身体を動かさないようにして、立ち去ろうとする千早を呼び止めた。声が震えている。

星井美希に対して恐怖心が芽生えたのか、いつもの伊織とは思えない弱気な声が狭い通路に響いた。

「あんたが行ったって勝つてっこないわ！ みんなで逃げないと！」

「それはダメよ。私達が食い止めないと世界が崩壊してしまう。さつき話した通りのことが現実になってしまうのよ。」

「わかつてるわよ!! でも今戦ったところで勝ち目なんてない。私ですら一撃でこの様なのよ。対策を立てて力をつけて挑まないと!」

「その間にどれだけの人が死ぬのかしら。あなたが扉を開いた時点でそんな暇はもうないのよ。」

「・・・そ、それは・・・。」

さすがの伊織も言葉に詰まった。それはそうだろう。勢いに任せて感情的にとった行動がよもや本当に世界を崩壊させてしまうかもしれない少女を解き放ってしまったのだから。

たったの一撃。その一撃があの水瀬伊織のプライドを粉々に打ち砕いたのだ。

千早は、伊織がどんな攻撃を受けたのかはわからない。きっと不意打ちのようなものなのだろうと思う程度だがその攻撃の非情さと力は千早も身を持って経験している。

千早の防御を持ってしてもギリギリで凌げたほどの威力とあずさに放たれた目にも留まらない光の槍。まだ本気を出していない彼女の規格外の力に千早も恐怖しないわけが無い。

だが、それでもあずさと春香の話を聞いた千早には星井美希を止めるという選択肢以外は既に持ち合わせていなかった。

「もういいわ。そんな状態のあなたが参戦したところで足手まといだもの。私はもう行く。あなたは好きにして」

「・・・。」

いつもなら即座に言い返してくる場面だが、伊織は苦虫を噛んだような顔でただ座っている。言い返してこない。もはや千早へ怒りを与えることも出来ない。自分の不甲斐なさ、情けなさ、そして軽率にも自分のとった行動の愚かさに対して千早に言い返す資格すらもない。

攻撃の痛みも死ぬかもしれない実戦の恐怖も想像して身体が動かない。

戦意喪失。

それが今の伊織の状態だった。ならばもう置いていくしかない。戦ったところで戦力にならないだろうことは明白だ。連れて行った

ところで逆に危険だと千早は判断した。

千早は俯く伊織を置いて一人地上へと戻った。

地上では未だに激しい攻防が続いている。地響きがその証拠だ。階段を上って地上へ出ると建物自体はさつきより滅茶苦茶に破壊されていて、よく倒壊しないものだ。千早は少し感心した。

今のところ誰も戦闘不能状態になつてはいない。ただ、皆かなりの体力を消耗しているのか動きが良いとは言えなくなつて来ていた。

真も雪歩に回復してもらつて空中でさつきと共に戦っている。

響も応戦しているが攻撃を避けるので精一杯のようだ。雪歩は地上からその戦いを見ている。みんなを回復させるので魅力を使いきたのかもしれない。雪歩の能力は魅力の消費がかなり激しい。さつきの氷でも成分を変化させるというのは恐ろしく高度な業なのだ。

そもそもエリクシーの資格を得るには医学と薬学、栄養学を理解し憶し、アイドルの試験と合わせて筆記と実技の国家資格試験で合格しなければいけない。その資格を得るために雪歩は絶賛勉強中なのだ。そして彼女は攻撃手段もちゃんと持っている。ただ、今の状態でそれを使うと魅力の消費が激しくさつきの千早と同じフラフラな状態になりかねない。

万が一の時に備えての待機だろう。

「千早ちゃん！ 伊織ちゃんはどうだったの？」

「一応無事よ。だけど戦意喪失状態ね。あれでは戦えないわ」

「そ、そうなんだ……。こっちはあの子を外に出さないように戦ってるんだけど、あずささんがー」

「ぐっ、もう抑えられない!!」

上空から突如として叫び声が聞こえてきた。既に何十回と美希との罅迫り合いを繰り返している真が音を上げた。魅力、体力ともに余裕がなくなったのだ。

戦闘の激化で真とあずさ、響の三人がかりでも押され始めている。

千早も浮遊術で急ぎ戦域に入り、雪歩もそれに続く。

その時、真とあずさから距離を置いた美希は階段のあつた上で静止

し、入り口付近の上空で止まるあずさ達に向けて黄緑色の魅力球体を放った。

さつき千早が防いだ球体よりも小さいものだが、威力が落ちているとは思えない。当たれば怪我で済まないのは容易に予想できる。一直線に放たれた球体は今一番美希から遠いあずさに向けて放たれた。ギリギリのところまで回避するとそのまま校舎の正面上部が大きな爆発で覆われ黒煙と炎が空に舞い上がる。その爆発した隙間からみんな外に退避した。

校舎の中ではやはり手狭で動きにくいし、いい加減いつ倒壊するか分からない建物の中に居るのはリスクが高すぎる。当然だが、外に出る方が攻撃も回避も余裕が出るはずだ。

美希を外へと出さないよう戦っていたが、このままではいつか戦いにすらなくなる。

そう思った千早が先に外へ飛び出した。それに次いで雪歩が外へ、響といぬ美も外に出た。

あずさと真はまだ中で戦っているが真が下の出入り口から飛び出して来た。

あずさも転移で千早の隣に合流する。

「ダメだ！ 外に出てくるよお!!」

響の叫び声と共に美希が下の入り口から飛び出してきて真を追撃してくる。

地上での打ち合いで何とか鏢迫り合いに持ち込む真だが、剣と違い美希の鎌扱いが柔軟で対応するのに精一杯だ。

真が普通に刃を振り下ろせば柄の部分で打ち上げてきたり、真の攻撃をいなしたと思えばクルッと回ってそのまま真横に薙いだりと恐ろしいほど訓練された攻撃でどこからどういった攻撃が来るか予測が難しい。

そんな攻撃をまともに当たらせないようにしている真も大したものだと思える。

美希と真が剣と鎌の鏢迫り合い状態で均衡していたのだが、一瞬動きが鈍った真の隙を逃さず炎の剣を弾いて蹴りで再び真を吹っ飛ば

す。

そこへ雪歩が空気中の水分を凝固させスコップの形をした水色の光を多数出現させた。ハンドマイクを身構えて大きく振りかぶり美希へ攻撃を飛ばす。

「お願いっ！ 当たってえっ!!」

飛んでいくスコップの弾は雨のように次々と地面に衝突して爆発を起こす。雪歩は補助型でありながら努力の賜物か、一撃でも当たれば例えアイドルでもそれなりのダメージを与えられるほどの威力があるのだが、なんと美希はその光の雨を上回るスピードで回避していく。どんどんスピードを増す美希は矛先を真から雪歩に変更して襲い掛かった。

上空から放ち終えた雪歩はモノの100近くあった光の弾を回避されたことで驚愕の表情を浮かべている。目で追うのがやつのスピードで駆け抜け急上昇してくる美希を見て咄嗟に動けない。

「は、速いっ!!」

「雪歩ちゃん!!」

あずさが転移で雪歩を助けた。雪歩の回避と同時に美希の鎌が空を斬った。

あずさが居ること全員回避率が大幅に上がる。多勢ならば話は別だが相手は単体。

転移することでみんなが大きな攻撃を受けることは早々ない状態だった。

あるとすればカウンター。こちらが攻撃を仕掛けたときに振り返り討ちにあうくらいだろう。

美希の鎌が空を切ったと同時にその動きを狙って真が急激に距離を縮めた。

「はあああああああああああつ!!」

炎の噴出させて魅力と気合を練り上げる。攻撃力を上げて打ち込む真の剣をスタンドマイクで軽々と全て受け止めている。真の炎の剣が持つ攻撃力は建物なんか簡単に崩壊させるほどの威力がある。その攻撃を受け止め、あまつさえ反撃にすら出る星井美希には畏怖せ

ざるを得ない。

2、3度の打ち合いの後に真は鏢迫り合いで負け一時後退。間髪入れずにいぬ美が美希に噛み付こうと後ろを取った。

それも難なく回避されてしまい、そこへ既に実体化させていた大蛇のヘビ香が美希を追撃しようとする。白い身体に頭が二つあるヘビ香は響の可愛がる家族の一匹だ。

一度上空へ飛び上がった美希は、襲ってくるヘビ香の首が二つ近くの見計らって鎌を振り下ろす。勢いよく伸び上がっていたヘビ香が横一闪、一薙ぎで四散した。

上空で凄まじい戦いが繰り広げられている中、地上に律子の姿があった。

戦う美希を見て思わず笑みがこぼれる。そして次に見つめたのはあずさだった。

律子はあずさに向かってゆっくりと、ただゆっくりと歩き始めた。

第六章

終

第七章 ― 涙 ―

喧騒が外へと移り、静まり返った旧校舎。

誰も居なくなり破壊されたホールにうつすらと人影が地下から現れた。

怯えた表情で地上へと上って来た伊織が屋内の惨状に言葉を失った。

「・・・何よ・・・コレ。」

伊織は美希の攻撃を受けた激痛を思い出し震え、実戦など楽勝だと思っていた自信とプライドが粉々に打ち砕かれていた。

『・・・纏え』

それでも自分の身を守るために戦闘衣装を身にまとう。一瞬にしてピンク色の衣装が伊織の身体を覆った。これでまともに攻撃を受けることになっても多少のダメージは防ぐことが出来る。

外からは聞き取れない叫び声と爆発が響いてくる。

自分も戦わなくては・・・そうは思うものの身体が動いてくれない。

「・・・なんで、どうしてこんな時に・・・私はっ」

2年間衣食住を共にし、励まし学びあった仲間が自分のせいで傷つきながら戦っていると言うのに、それでもまだ我が身が可愛い自分に腹が立って仕方が無い。

自分の情けなさに俯き、目を閉じ、悔しい思いから拳を握り締める伊織の耳にコツン・・・と小さな足音が目の前から聞こえてきた。

目を開き顔を上げるとネグリジエ姿のやよいが伊織を見て立っている。

反対側の地下から上ってきたのであろうやよいとの距離は僅か7メートルと少しだった。

「や・・・やよい。無事だったのね！」

「・・・」

この時、伊織はやよいの側に行きたかったのに“近づけなかった”。

何故か足が動こうとしない。

動かない理由が解らないまま、ふと不自然なことに気付いた。

普通ならば、今の伊織のようにやよいも伊織の様子を見て喜びを表しても良い筈だった。

だが、やよいは伊織の言葉で元気に喜ぶどころか全くの無反応だったのだ。

とてつもない違和感と現実とは思えない惨状の中に立つ二人の少女がようやく動き出したのは、やよいの雄叫びにも似た叫び声からだった。

「う……」

「や……やよい?」

「うううああああああああああっ!!!」

喉がはち切れんばかりの叫び声を上げてやよいの身体から電流のようなものが迸った。

身体全体を強張らせて白眼をむきガタガタと音がなるほど震えた。放出されている電流はやよいの魅力と同じオレンジ色から真っ赤になり、やがて真っ黒に染め上がっていく。

突然の光とやよいに起こった事象に驚いた伊織はあまりの衝撃に尻餅をつく。

そして真っ赤な光がやよいを包み、弾けて消えたと思えばやよいの身体はオレンジ色の戦闘衣装に包まれていた。

微量ながら赤い電流がやよいから放出され、ゆっくりと開いたやよいの眼は真っ赤に変わり果てていた。

「や……やよい。どうしちゃったのよ……」

囁くように口にした言葉はやよいの耳にも心にも既に届かなかった。やよいは右腕を挙げ、そのまま伊織に向かって歩き出した。

その拳は禍々しい程の赤に染まり、岩くらいなら簡単に粉碎できる魅力を纏っていた。

近づいてくるやよいを呆然と見ていた伊織は尻餅をついたまま動けず、とうとうやよいがすぐ側にまで近づいてきた時に伊織はようやく我に返った。

そしてすぐさま、やよいは挙げた右腕を肘から曲げて拳を顔の横に

持つていき、そのまま一気に伊織に向かって振り下ろした。

伊織が真上に跳んだと同時にやよいの拳が石の床を砕いて深くめり込んだ。

仲の良い姉妹同然に時を過ぎた伊織に向かって、放つてはならないほどの殺気に満ちた一撃だった。

直撃していればまず間違いなく命は無かったであろう攻撃がやよいから放たれた事に伊織はショックと動揺を隠しきれない。

跳び上がったから一回宙返りして着地した。

そこは丁度、両階段の中央。奥に中庭へと繋がる扉がある。

伊織はやよいから離れるためにドアを蹴破って中庭へと飛び出した。

それに続いてやよいも伊織を追撃して何度も殴りかかる。

中庭はいつもやよいと談笑する場所だ。広さはフットサルコートと同じくらいの面積がある。

あまり人が使っていない施設にも関わらず手入れされているその場所では、やよいと伊織のお気に入り場所でもあった。

伊織は2階を支える柱を支えに息を調えようとする。振り返ると、

やよいが支柱を無理やり引っぺがし振り回し始めた。その支柱はやよいの腕が回らないほど太く、重さは有に100キロを越える。当たればもちろん吹っ飛ばされて場合によっては大怪我をしてしまう。

「やよい！ やめて!!」

「うううー・・・うううっ!!」

「戻って!! いつもの優しくして元気なあなたに戻ってよ!!」

やよいが自分の意思で攻撃しているのではない。赤ん坊の頃から共に過ごしてきた、たった一人の親友が例えどんな間違いだろうと自分の意思で攻撃してくるなど天地がひっくり返っても有り得ないと言ふ確信があった。

やよいが支柱を振り回し、回避する伊織はやよいに呼びかける。

やよいが腕に持つ支柱を伊織に向かって振り回し、他の支柱も粉々に砕いていく。

一本、二本と砕いたところでやよいが支柱を投げた。

「やよい」「うううううっ・・・うっうー!!」

「やめなさい!!.. やよい!!..」

伊織へ飛んだそれを後方宙返り、いわゆるバク宙に一回転捻りで回避して両手から得意の電撃を迸らせる。

「眼を覚まして!!..」

バシィツと言う音とともにやよいの身体を電気が走る。

もちろん低威力ではあるが人が気絶するには十分の電力だ。

電撃を受けたやよいは動きを止めた。立ってはいるが俯き両手はだらんと地に向いて垂れている。

「や、やよいっ..」

倒れないところを見ると気を失った訳では無さそうだが、今の状態では元に戻ったかはわからない。

だがこの沈黙が伊織とやよいの運命を大きく変えてしまったことを伊織が気付くはずもなかった。

「やよい...」

手を伸ばしたい。今すぐに彼女を抱き締めていつものように頭を撫でてあげたい。

伊織の目尻に涙が浮かぶ。

気持ちを抑えきれず、無意識に右手をソツと伸ばす。

「いおり・・・ちゃん」

「やよいー」

声を聞いた瞬間、伊織は駆け出した。

5メートル程度の距離が遠く足が重い。

駆け寄った伊織はやよいの両肩を掴んで抱き締めようとした。

「!!?」

腹部に激痛が走った。

左足を踏み込んで腰を落とし、能力で強化されている拳を伊織の腹部に思いつき叩き込まれた。

身体がくの字に折れ曲がった伊織は目の前を白黒させながら勢いよくぶっ飛んだ。

水切りのように地面を転がり奥の支柱に背中から打ち付けられる。

「っ……はっ、かつ……」

意識は何とか保ったが呼吸が出来ない。

プロの格闘家よりも重い悶絶必至の一撃を受けたのだ。

ギリギリのところまで致命傷を避けられたのは戦闘衣装のおかげと言って良い。

と言ってもダメージが無いわけではない。

腹部の打撲、背中と頭部の打ち付けられた痛み。吐血は無いが嘔吐感は強烈だった。

「かはっ……うぐっ」

お腹と胸を押さえながら必死に呼吸をしようと空気を吸い込む。

しかし伊織の口の周りにある空気は微動だにしてくれなかった。

伊織に足音が近づいてくる。芝生を踏むその足音は、無表情のやよいがゆっくりと伊織に近づく音だった。

場所は変わって丁度その頃、真と雪歩はまたも美希に吹っ飛ばされ軽いが傷を負っていた。

雪歩の方が美希に狙われダメージが大きく、動くことがつらい。

響も具現化に体力と魅力を消耗してしまい、膝を地面についてしまふ。

真も体力は普段の鍛錬から並大抵ではないものの、幾分魅力が尽き始めてしまって回復する隙がない。

魅力を大きく消費する炎の剣で戦い続けた結果だ。仕留め切れなければやはり、早い段階で戦えなくなってしまう。

今、上空で美希と戦っているのはあずさと千早だった。あずさの転移が徐々に遅れだし、千早の防御も薄くなり始めている。千早が複数のアイスニードルを飛ばして、そのうちのいくつかをあずさと一緒に転移して美希に飛ばすという戦法を取る。しかし補助型と防御型の二人が眠り姫である星井美希を相手にまともにダメージを与えられるわけもなかった。

例えらとラスボスにMP切れ寸前の魔法使い二人で挑むようなものだ。いや、今がまさしくその状況である。

かなり苦しい展開を強いられたあずさと千早だが、幸いまだ戦闘不能に陥るほどの傷は負っていない。

(下の3人はまだ動けそうにないし、私もあずささんも体力と魅力に余裕がなくなってきた。)

油断も隙も許されないだろう状況の中で、更に現状把握をすることが困難になっていた。

なのに、ほんの2秒程視線を地上の真たちに向けた時だった。

ドスンツと肩に強烈な衝撃と痛みが襲った。

何が起きたのか分からず、あずさの声だけが響いた。

「千早ちゃん!!」

2秒程度見せてしまった隙を見逃さなかった美希が、約15メートルの距離を一瞬で千早の頭上へ移動して肩を蹴り落としたのだ。恐ろしいほどの速さで近づいてくる地面に対して、頭が追い付いていない千早をあずさは転移で助けるつもりだったのだが……。

(……転移できない!?)

ここへ来てあずさの魅力も底をついた。ペースを考えずに誰かを庇い、誰かを助け、誰かの攻撃をかわし切っていた影響がここに来て回ってきた。

あずさはもはや浮遊術を数分使えるぐらいにしか残っていない。

最悪の状況だが美希にそんなことは関係なかった。

「余所見してる暇……あるの?」

「!!」

落下を始めて1秒と少し。千早はようやく自分がどうなってしまったのかを理解した。

アイスニードルで攻撃しようとした魅力の残量を考えてときに、無理やり現状の把握をしようと真たちに視線を向けてしまった事で一瞬隙が出来てしまった。

その僅か2秒の隙に上から右肩に蹴りをお見舞いされた。20メートルの高さから完全に自由落下状態だ。

地面が迫っている。このままでは頭から叩きつけられてしまう。

何も出来ない状態ではあるが、せめて転落速度を落としたり衝撃を緩和させないと本当にパニックホラー映画さながらのグロテスクな光景を自分自身で演出してしまいかねなかった。

頭を働かせることに必死になったのだが、あと3秒とも無いタイムリミットにパニックと化した頭は働いてくれなかった。

死が頭を過る。

その時、落下するであろう場所を見て千早は目を疑った。

「千早っ!!」

そこには響が居た。

その横では真と雪歩もこちらを見ている。

(何をしているの・・・?・・・まさか・・・いくら何でもそんな無茶、我那覇さんの能力じゃ出来っこない!)

今のタイミングで逃げろとも言えない千早はただ落下に身を任せていてもいけないと思い、少しでも衝撃を和らげなければと浮遊術で落下速度を落とそうとした。

けれどあまり効果がない。

落下を回避する方法を思いつかないまま、ついに千早は響の腕へと落下した。

ドシンッと受け止めた衝撃で響は腕どころか身体ごと下敷きになってしまった。

「ぐっ・・・うう。」

本来なら人が落ちれば即あの世コースまっしぐらだったはずの高さから落下して、恐ろしいほどの衝撃を受け倒れこんだ。

血の気が引いた・・・。

落下している人間一人を受け止めると言うのは想像しているよりも恐ろしいものだ。

速度と重力に応じて落下する人間の体重は何倍にもなる。その重さを人間の腕で受け止めるとなると骨折で済めばいい方だろう。落下した人間は助かる可能性も上がるが下敷きになった人間の死亡率が格段に跳ね上がるのだ。その行為を響は本当にやってのけた。千

早はすぐに起き上がり響の様子を見る。

そこには仰向けに倒れている響の姿があった。

「我那覇さんっ!! なんて無茶を・・・。」

「だ、大丈夫さ。これくらいどうって事・・・っッ!。」

身体を起こした途端に左腕を掴んで蹲る。何とか立とうとするが立せずアヒル座りになった。

骨が折れたような音は聞こえなかったが、だから折れていないと言いつてもいい切れない。実際、響は痛みで顔を顰めている。押さえているのは左腕。身体全体で受け止めてくれた響だが身体や足へのダメージもかなり大きいだろう。

歩くどころか立つことも出来ないような様子だ。

自分の油断のせいで響が傷付いたことに酷い罪悪感を感じた。

「・・・そんな。」

恐怖の混じった声を発した雪歩を見た。彼女の視線がまっすぐ上空を見つめている。

その視線の先にいたのは美希だった。

美希の声が聞こえた。余所見してて良いの?・・・と。そう言っただけで美希はあずさの脇腹に蹴り入れ、激痛と共に30メートルほど吹っ飛んだ。何とか空中で踏みとどまったあずさだが美希を見た瞬間に強い寒気を感じた。

地上から15メートルほどの上空で美希はその身体に恐ろしい程、魅力を高めていた。

そして美希の視線の先に居るのは、地上に座り込む四人の少女。

この光景に見覚えがあった。かつて未来で最も大切だった人達を殺された残酷な光景。

13歳になった数日後、妹と共に老婆に担がれ空を逃げながら眼に焼き付いた、最愛の二人との突如の別れ。

今もまた、あの時と同じ別れが訪れようとしている。

あずさは頭の芯が熱くなるのを感じた。数秒後の最悪な光景が頭

を過ぎつて胸が苦しくなり、目の奥もカツと熱くなる。そして全力で叫んだ。

「みんな!! 逃げてっ!!!」

脇腹が痛む。声を出さなければどれだけ楽だろう。

元々はこの世界の人間を巻き込むつもりだった。この学院の生徒になって星井美希と時の魔女を探し出し未来を変える。そのためなら自分以外の命なんてどうでもいいと……。でもあずさは今叫んでいる。未来を変えるのなら自分とは何の関係もない彼女達など、どうでもいいはずなのに。

あずさは叫んだ。

眠り姫、星井美希の犠牲者を数多く見てきたあずさにとって、もう誰一人として目の前で命を落として欲しくなかった。

同年代の子供なんて居なかった未来とは違い過去のこの世界で、たったの2年だが衣食住を共にした数少ない友人達が目の前で命の危機に晒されている。

彼女達に死んでほしくない。

これ以上は、もう立ち直れない!

助けるの。何がなんでも助ける!

残りの魅力を使って全力で飛ぼうとした。

しかし現実をあずさに牙を向いた。あずさの想いは突如の妨害に打ち砕かれた。

転移の使えない今を狙って何者かが後ろから羽交い絞めにしてきたのだ。脇の下から腕を入れられ肩を固定される。

あずさの後ろに回りこんで動きを止めた張本人。あずさは顔を右に向け視線を後ろにしてその犯人を見た。

そこには見開かれた瞳と不気味に笑う律子の顔があった。

グツと身体が強張ったのを感じて腕や足に力を入れるが動かない。

身体を触られた瞬間に動きを封印されてしまったようだ。

「くっ！ ティーチャー律子・・・なんでっ!？」

律子は右手を使って掌を顔の前に広げる。その手を退けたとき、そこにはもう律子の顔は無く、代わりに幼い頃から見知った顔が姿を現した。

「お久しぶりですわ。おねえさま」

「貴音ちゃん!？」

律子の正体を知ったあずさは動揺を隠せない。自分と同じく時間移動をした実の妹なのだ。未来で眠り姫を操る研究をしていた貴音は崩壊した未来の科学では不可能だと悟った。だからこそ、時の魔女を復活させて丸め込み騙した挙句に過去へ転移した。

それ以降は消息不明だったのだが、未来よりも資源が豊富な時代で眠り姫を操る研究をしているだろうことは想像が付いていた。だがまさか同じ時代で教員に化けているなんてことをあずさは微塵も思っていなかった。転移する魅力もないあずさは貴音に簡単に取り押さえられてしまった。

「そんな、こんなところで・・・」

「おねえさま。少しの間眠ってもらいますね」

羽交い絞めにしていた右手をあずさの両目に被せた。すると一瞬にしてあずさの意識がなくなつた。だらんと身体の力が完全に抜け切つたあずさは貴音の肩に担がれた。再び律子の顔へと変え、下界の惨状に目もくれず、浮遊術でそのままあずさを連れ去ってしまった。

「みんな消えちゃえばいいって思うな!」

美希がゆっくりと両手を持ち上げ空へと向けた。

すると美希を中心に左右と頭上にフレッシュグリーンの色をした三角形の陣が出現した。

回転している3つの陣はゆっくりと回転を緩め、やがて止まった。キラッ

と、それぞれの陣の中心が煌めいたと思つたらバシユーツと黄緑色

の特閃光が千早へ一直線に降り注ぐ。

千早は瞬間的に巨大な防御シールドを展開した。

前後と2枚のシールドを作り出した事で何とか防ぐ事は出来たものの、千早たちの後ろへ弾け跳んだ美希の閃光がプラズマを発生させていた。そのプラズマが消滅する頃、攻撃の余波に耐えられずシールドが一気に四散してしまった。

両手を前へと突き出した格好で息も上がり、立っているのもやっとだ。

「くっ・・・！」

「千早!!」

千早の後ろで三人が叫ぶ。彼女のシールドが衝撃に耐えられず四散したことで、美希の閃光がどれほどの高威力なのかを三人は察していた。

千早は防御に特化した防御型だ。千早に防げなければこの場の誰も防げない。そのシールドが砕け散ったのだから身体に直撃すればどうなるか、容易に想像がつく。

千早は膝を地面につけまいとふんばる。

氷の特大防御シールドを作り出した千早はこれほどまでに膨大な魅力の消費は経験したことがない。

当然、急激な疲労が千早を襲った。

美希は千早たちの周囲の木に閃光を放った。吹っ飛んだ桜の木は燃え上がり、空中では美希がいつでも攻撃する準備を調えている。

つまり、千早たちは退路を絶たれた。

満身創痍の状態で周囲は炎。上空は絶対無敵の眠り姫。文字通り絶体絶命。

「これが・・・アイドルの力だというの!？」

あまりにも圧倒的。一撃の攻撃力に回避行動の早さ。目にも留まらぬ浮遊術に隙を見せない強力な防御。相手を追い詰めるために何を利用すれば良いかという状況判断能力と冷酷無慈悲な行動力。どれをとっても想像を遥かに越えている。

再び攻撃が放たれようとしている。今の千早にはまともに防御で

きるだけの魅力がない。

必死に頭を回転させて打開策を考える。しかし冷静さを欠いた今の千早の頭では、あと数秒で答えを出すなど到底不可能だった。

代わりに一つの答えを示した雪歩が千早の前に出て水のシールドを展開した。

「防御型じゃないから大した力にならないけど、このシールドと千早ちゃんのシールドで持ちこたえられないかなー！」

「・・・今は逃げることもできない。やるしかないわ！」

雪歩の作り出したシールドに千早の氷のシールドを合わせて何とか強固な防壁を作り上げようとしていた。

雪歩の物質変化で温度を0℃以下まで下げ、千早の氷のシールドに触れさせ分厚く凝固させていく。

それと同時に二人の残った魅力をシールドに注ぎ込む。

響と真も壁を張れば良かったのだが、響は具現化能力ではあるものの盾を出現させることが酷く苦手だ。

真は炎属性の盾しか出現させることができない。この状況で炎の盾を出現させても千早たちの氷の盾を弱体化させてしまいかねないのだ。

再び美希の攻撃が開始された。

黄緑色の閃光は真っ直ぐ千早と雪歩の防壁を直撃し、今にも砕け散りそうな程シールドにヒビが入り始める。

「くあ・・・あああつー！」

「くっ・・・」

正念場と言わんばかりに二人は全力を注ぎ込む。

攻撃力が薄れ始めた光線をなんとか防いでいる雪歩と千早。均衡状態が続いたが突如、美希の攻撃が止まった。

「・・・と、止まった・・・？」

二人は息を吐き、千早は顔を青くして地面に膝をついた。もう余力は一切残っていない。

みんな顔を見合わせて笑顔がこぼれた。

そして千早は雪歩の清楚な笑顔を見上げて、よく似合う純白の衣装

の腹部から赤く染まっていくのを笑みと驚愕の表情で見ている。

「あ……あ？」

一瞬、ほんの一瞬気を抜いてしまった瞬間だった。

一筋の黒い光が雪歩の身体を貫いた。

一点集中されて放たれた黒い閃光はキリで板に穴を開けるが如くシールドを破壊して雪歩を貫いた。

「ゆ……」

美希が手を勢いよく引くとそのまま黒い閃光は美希の下へ戻っていく。それにつられて雪歩も美希の元へ引き寄せられ、手の先で止まった。美希の口元が恐ろしく無邪気な笑みを見せ、途端に至近距離からの衝撃波で吹き飛ばされてしまった。

「雪歩おおーっ!!」

炎で包まれた木々のその先まで飛ばされてしまった雪歩を真が走って追いかけた。

「待って真……ぐっ」

「我那覇さん！ 痛いでしょうけど、二人を追って！」

「千早も一緒に……！」

「急いでっ！」

千早に促され多少回復した響はいぬ美を出現させ、動揺して走る真に追い付きいぬ美の背中に乗せて炎の間を駆け抜けた。

千早は美希に向き直った。

燃え盛る周囲の木々の上空にたたずむ眠り姫の姿は美しくも恐怖。

魅力が尽きることの無い美希は消費を気にすることなく能力を使うことができる。

それはまるで無限に放つことが出来る銃弾のようなものだ。

兵士にとっては夢のような話。能力者にとっては有り得ない現実だった。

美希は再び両手を空へと掲げ魅力を集中し始める。今度こそ千早たちにとどめをさすつもりで、さっきの黒い閃光よりもさらに強力な魅力を千早は感じた。

時同じくして伊織は窮地に立たされていた。

やよいの攻撃を受けてしまった伊織はゆっくりと迫り来るやよいを見ながら、苦悶の表情を浮かべている。

顔色一つ変わらず迫るやよいは紅い眼を光らせながら伊織の前まで歩いてきた。

そして、伊織を持ち上げたと思えば首を掴んで締め上げてくる。

「や……やよ……い……」

首を絞められ持ち上げられた伊織は足をバタつかせながらやよいの名を呼ぶ。

しかし、答えない。ただただ、伊織を殺すことだけに集中しているようだ。

意識が薄れる中、伊織は力を振り絞り身体から放電してやよいを攻撃する。

するとやよいは手を放し、放電攻撃を受け3メートルほど吹っ飛んだ。

地面に落ちた伊織は大きな咳をしながらボーっとする意識を必死に戻す。

「はあ……はあ……や、やよい……」

伊織はやよいを見た。するとやよいはうずくまり、頭を抱えて地面に何度も打ちつけている。勢いよく頭を叩きつけるやよいを見て駆け出した。

ヨロヨロと千鳥足ではあるが、それでも急いで止めに入る。

無理やり抱き起こしても一向に暴れることをやめようとしなない。

「あああっ!! や……ぐうっ!!」

「やよい!! しっかりしなさいやよい!!」

「い……いおり……ぢゃ……」

うずくまって苦しむやよいを起こして抱きしめた。

一体どれほどの苦しみがやよいを襲っているのか全く想像がつかない。

今までどんなことでも泣き言や弱音を言わないやよいが耐え難い

と思うほどの苦しみ。

それを思うと伊織の目からは涙が溢れ出てきた。

苦痛のせいか既に能力を使っていないやよいは痛いくらいの力で伊織を抱きしめた。

二人の涙が止めどなく滴り落ちる。

「いお……り……ぢゃ……」

「やよい……。ダメよ……。絶対にダメっ!」

「こ……ごろ……して……。くだ……。さい……。おねが……。い」

「絶対ダメなんだから!! しっかりして!!」

「痛い……。ぐるし……。お願い……。殺して……。ください……。」

「っ……」

幼い頃から同じ屋敷で同じ時間を過ごして、姉妹のように育ったやよいが痛み、苦しみ、あまつさえ自分に殺してくれと懇願してくる。なんなのか。一体なぜこうなってしまったのか。

星井美希を解き放ってしまったからか。

鍵の使用場所を探してしまったからか。

学院の謎を解き明かそうとしたからか。

そもそも鍵を見つけてしまったからか。

いや、こんな学院に来てしまったからだ。

自分が描いていた未来はこんな悲劇では決して無い。

一番大切な彼女が苦しむ未来など、ただの一度として望んだことは無かった。

やよいの苦しむ声と後悔の念で気が狂いそうだった。

今自分がやよいにしてやれるのはそんなことしかないのか。

答えが出ない。わからない。最善なんてものはもうとつくに無く

なってしまったのか。

ただ、今の自分がやよいにしてやれることは……。
それは……。

「いゝおりちゃん!!!」

「う……ああ……あああああーっ!!!」

伊織の全力を注いだ電撃がやよいを包み込んだ。

ほんの3秒ほどだろうか。

放電していた、たったの3秒が1分にも、1時間にも感じて。

今この時、

水瀬伊織は、

高槻やよいという、

親友で、

姉妹で、

一生傍に居ることを誓った存在を、

殺してしまった。

崩壊。自分を取り返しが付かないことを、例えやよいの頼みでも殺してしまつた現実を決して忘れることはないだろう。

伊織の精神が耐えることを諦めかけた時だった。

「い……おり……ちゃん」

「やよい……やよいっ!!」

伊織はやよいを抱き起こした。

「いおり……ちゃん……ありがとう……ごめん、ね」

「やめて……そんなこと言わないで! 私はあなたを殺してしまつた。

例えやよいのお願いでも、仕方なかったからって私はあなたを殺したの!! ごめんなさい! ごめんなさい!..!!」

「私ね...ずっと、憧れてた...。伊織ちゃんに。」

やよいを強く抱きしめた。伊織は涙を零しながら耳を傾ける。やよいも伊織の背中に、力を振り絞って手を回し抱きしめる。

「...伊織ちゃんの...傍...居たくて...私...弱いから...りつ...こ先、生に...くすり...て...アイドル...に」
「やよい...バカ! 力なんて無くても、見合わないと言われても私はあなたから離れるなんてできなかつたのに...なんでよ...なんで...」

「ごめ...なさい...。伊織ちゃん...?」

「...やよい...?」

「伊織ちゃ...どこ...?」

「やよい!! ここよ、私はここに居る!! ずっと傍に居る!!」

「...伊織ちゃん...あ...とう...だい...すぎ...」

「やよい...私もよ! 私も...!」

伊織の背中から腕が落ちる。

現実味のない時間が流れて彼女を感じようと一層強く抱き締める。しかしやよいの鼓動は、もう感じない。聞こえない。

「...いやよ...いや...いや...いやあつ!!」

もう笑うことも、泣く事も、怒ることもない腕の中で眠る大好きな人を抱きしめながら...大粒の涙を流す。

「二体...アイドルってなんなのよ」

大切な人を亡くしてまで手に入れる必要があるの?

いや、あるはずがない。アイドルにそこまでの価値なんて、やよいに見合う価値があるはずがない。

アイドルなんて、初めから目指さなければこんなことにはならなかったのに...。

いや、違う。そうじゃない。やよいを見ていなかったのは私だ。アイドルの事ばかり考えて彼女の苦悩に気付かなかつたのは私。

なのにとどの口が親友だなんて言えるのかしら。
私は……。

自分の価値。プライド。アイドルと言う今では無価値となったピエロの荣誉。踊らされた自分の不甲斐なさ。そしてやよいを唆した信頼できる敵。

失った大切なものと得た無価値なものが伊織の心の中に大きな穴と化し、その穴に見合う憎悪が広がり始めた。

やよいの亡骸をその場に寝かせ、伊織はやよいが最後に口にした『りつこ』の言葉を頭に置き、復讐の炎を燃え上がらせる。

「ごめんなさいやよい。」

「くすっ」

立ち上がって見上げると、そこには伊織とやよいを見る美希の姿があった。

「ケジメはつけるから！」

衝撃波によってかなりの距離を飛ばされてしまった雪歩は夜桜の花びらが舞う地面の真ん中で倒れていた。

響の召喚した狼がようやく雪歩に追いつき真が真っ先に雪歩に駆け寄る。

響は、月の光に照らされる雪歩の周りに黒い水が広がっていくのを見た。

赤くはない。そう見えないだけだ。しかし、その量は既に物語っている。

響の中に一言だけ無意識に呟かれた。

もうダメだ……と。

真はそのことはお構いなしに雪歩を抱き上げ必死に呼びかける。

「ねえ起きて!! 起きてよ雪歩!!」

眼を覚まさない。今の雪歩は生きているのか、死んでいるのか。距

離を置いて見ている響にはわからない。

近づけない。友人を失うであろう恐怖に足が動こうとしない。震えは無い。しかし嫌な汗が背中を伝う。

そして眼を開けない雪歩を抱きしめ涙を流し今尚、真は必死に呼びかける。

「起きてよ……じゃないと、僕は……僕は」

「真……ちゃん……」

真は顔をあげる。そこには笑顔があった。その笑顔はジツと真を見つめる。

涙が止まらない真は拭うことも忘れてただ雪歩と言葉を交わそうとする。

「雪歩……」

「まこと……と……ちゃん。そんな顔……しちや、ダメだよ。いつもの……カツコいい……まこと、ちゃんに……」

「そんなことどうでもいいよ!! すぐに助けられる。治療できる!! しつかりするんだ雪歩!!」

「まことちゃん……。もう、わかってる……。んで、しょ?」

雪歩は視線を自分の腹部へ移す。真はその視線を追わず雪歩の顔を見つめ続ける。

見たくないのだ。自分の大事な人に空く憎くて仕方が無い風穴を。

「もう……助からない。私は……」

「諦めちゃダメだよ!! そんなの雪歩らしくない!! 諦めることが一番ダメだつて雪歩が一番わかってるはずじゃないか!! ボクは……ずつと……」

雪歩と居たい。

何故かその言葉だけが出てこない。声が出せない。言葉にしたい。伝えたい。だけど声が出ない。眼を強く瞑り思いは水滴になって零れ落ちる。

嗚咽が漏れそうになる。既に心では理解している。

頭では否定してももうわかってているのだ。

だから声が出ない。出せない。出てくれない。

例え声にしても、あとほんの数秒で幻に変わるその言葉が。

真の頬に冷たい感触が触れる。まるで長時間雨に打たれたように冷たい雪歩の手が真の頬を包んでいた。

「今……まことちゃんが……できる、こと……を。ひび……きちやん……を、まもって……」

「雪歩……？ ダメだ……眼を閉じちやダメだ雪歩!!」

頬に触れる手に自分の手を乗せる。もう眼を開ける力も残っていない雪歩は最後にため息のように一つ息を吐いた。その一息と同じく身体から力が抜けていく。真が放せば簡単に落ちてしまう手をそのまま頬に押し当てる。彼女を少しでも感じたい。そう思っって押し当っていた手から雪歩の最後の言葉が、心が真に伝わった。

『ごめんなさい。私……幸せだったよ。まことちゃん……ありがとう』

一滴の涙が雪歩の眼からこぼれる。彼女の手が真を安心させようとするかのように頬を包みこんでいる。雪のようなその手に熱い水滴が伝う。止まることを知らないその水滴は真の頬を伝い、雪歩の手を伝い、雪歩の頬に落ちた。

「……雪歩……」

終わったのだ。

ずっと守ると誓ったその言葉を守ることができなかった。

守れなかった。

助けられなかった。

底知れない悲しみに襲われる。

しかし涙は止まった。

もはや涙も出ない。

それほどまでに心のダメージは真を壊した。真の中でのすべてが今終わりを告げた。

永遠に開くことのないその眼を見ながら、真もそっと眼を閉じた。

そしてもう一人、真の遠い後ろから友の命が尽きるのを見ていた響は何も言わず二人の元を後にした。

自分の非力さを呪いながら涙の落下に合わせて嗚咽が漏れる。

主人を乗せた一匹の狼はその零れ落ちる悲しみと声を背中で受け止め静かに歩いた。

第七章
終

第八章　―友―

真と響が雪歩を追いかけて姿を消した後、千早は一人で美希と対峙していた。

つい先ほど空に浮かぶ眠り姫、星井美希の手によって萩原雪歩が瀕死の一撃を受けてしまった。

千早自身が響に真とともに行くよう促した訳だが、状況は最悪だった。

必死に避ける防ぐの抵抗も虚しく体力も魅力も使い果たし、今は地面に座り込んで空から放たれる死の光をただ待っているだけだった。

逃げることに叶わない残り数秒の命を諦める。

空を見上げながら目を瞑り、今までの記憶を掘り起こしながら死を待った。

「……。」

両手を空に向けて伸ばす美希の周りに黄緑色の三角の陣が出現した。

クルクルと回って徐々に速度を落としていく。

「バイバイ」

そう口にして陣が停止した時だった。

ドガシャーッ

雷が落ちたような爆音と共に旧校舎の中庭付近が桃色に光り3秒ほどで消えた。

それに気をとられた千早はハッと旧校舎から美希に顔と視線を戻す。

黄緑色の陣が上の先端から光の粒になって消えていく。

美希もまたその音と光に気をとられて集中力を欠いたようだ。陣が完全に消えて空に高々と掲げていた両腕をだらしなく下ろした。

しばらく旧校舎を見つめて、ゆっくりと中庭へと飛んでいく。

死を回避した千早は、力が抜けて呆然と空を見つめる。

「なんだったの、今のは？」

何が起きたのかわからないが、命拾いしたことには変わりなかった。

せめて立ち上がって歩けるほどには回復しなければいけなかった
ので楽な体制で目を瞑ってゆつくりと心と身体を休める。

横になりたかったが間違いないと眠ってしまう。

眠らない程度に意識を浮遊させた。

「ケジメはつけるわー！」

上空に星井美希の姿を確認してから敵意を向ける。

さつきと違ってもう震えも恐怖心も感じない。

ただやよいを騙して薬を使った律子とやよいの苦悩に気付かず我が道を進んだ自分への憤怒で満たされ、空には八つ当たりにもつてこの敵がいる。

律子の居場所を聞き出し殺す。

ただそれだけを目的に、最後は自ら人生の幕を引こう。

そう思い身体に桃色の電気を纏う。

「・・・律子はどっ？」

「知らないよ。」

「・・・そう。」

伊織を纏う電気はどんどん膨らんで絶え間無くバチバチと音が鳴り続く。

伊織の身体を濃いピンクの球体が包み電気が球体を走り回っていた。

「じゃあ、消えなさい。」

「あはっ☆」

伊織を包む球体が一気に身体へと取り込まれ、右腕を振り上げて思いつき振り下ろした。

まるでボールを投げたようにピンク色の光の筋が美希向かって飛

んだ。

お互いの距離は高低差を含め15メートルと少し。
光の筋はそこそこの速度で飛んで美希と同じ高さで止まって消えた。

「・・・なに？」

美希が首をかしげて伊織を見た。立ち尽くして俯き表情が見えない。

「デコちゃん。消えちゃったよー？」

後ろに手を組んでバカにしたように声を発する。

すると伊織がバツと顔を上げた。

目を見開き睨み付けるような顔を見て今度は美希が何かに気付いたように表情が強ばった。

急いでその場を離れようとしたが。

「遅いっ!!」

その声と同時に光が消えた場所から『バシィッ』と大音量でピンクの球体が現れた。

その球体は1秒も無く美希の身体を包んだ。

「しまっ」

「弾けなさいー!」

途端に球体の中で電撃が弾け回った。目を開けてられないくらい光ってバリバリつと絶え間無く鳴り続いた。

1分弱も続いた攻撃は徐々に落ち着き始めパチツと最後の音と共に静寂を取り戻した。

「水瀬さん!」

千早が旧校舎の中から出て来て伊織に近づく。

その時、傍らに寝かされたやよいが目に入った。

「・・・高槻さん・・・?」

「千早っ!!」

伊織の大声に一瞬ドキツとして千早は伊織を見た。

その身体は所々に擦り傷を作って土埃で汚れている。

それを見た瞬間、何があったのかを察した。

やよいは律子に薬を打たれていたこと。そしてきつきの雷のような電撃と二人の状態。

やよいに目を移すとその身体は火傷の跡が強く残っていた。

「まさか……こんな……。」

千早の脳裏に地下室での出来事が甦った。

あの時に投薬を止められていたら、きつとこんなことには……。千早の行動は万人から見れば正しかった。正しかった筈なのに。生まれたのは後悔の念だった。結局眠り姫は解き放たれたのだ。やよいを助けるべきだったと、千早はもう目覚めることのないやよいへの謝罪の気持ちでいっぱいになった。

「終わらせたわよ。」

視線を空にやる伊織と同じ場所を千早も見る。

そこには静かに佇むピンクの球体にヒビが入り始めていた。

「あれは……?」

「電玉（でんぎよく）よ。球体に敵を閉じ込めて電気を集中砲火する技。終わったら球体は割れて中の敵は蒸発してるわ。」

千早の見たことがない技だった。

伊織の能力は電気を飛ばしたり身体から放出するだけだと思っていた。これほどの技があったなら本当にアイドルに抜擢されていたかもしれない。

尋常ならざる威力は確かに火傷などでは済まないだろう非情の技だった。

球体が割れ落ちていく。

「な……んですって……。」

割れたピンクの球体の中に更に黄緑色の球体が姿を現した。

その球体は上部から光の粒になって消えていく。

そこには膝を抱えて胎児のように身体を丸めた星井美希の姿があった。

「今のは流石の美希でも火傷しちゃうところだったの。」

「ありえない……人が蒸発する程の電気を浴びせたのに、それを防ぐなんて……うっ」

大きくふらついて片膝が地面についた。

これほどの威力の技だとかかなりの魅力を使ったことは簡単にわかる。

千早もそれほど回復していないのに伊織まで消耗してしまった。二人とも美希の攻撃を防げる手だては遂に無かった。

「もう終わりなの？　だったら、そろそろ本気で消しちゃうね。あふう。」

アクビをしながら美希の手元にはスタンドマイクが出現する。

先端から緑色の魅力が死神の鎌のように形を成して炎のようにゆらゆらと揺らいでいる。

現在でもお互いの距離は結構ある。

だが持ち出してきたと言うことは攻撃手段がある可能性が高い。警戒するには十分だった。

右手でクルクルと回した後、腕を伸ばして縦に持つ。

こちらに向く刃はまるで照準を合わせるようだ。

すぐに美希が鎌を大きく振りかぶった。

来る！　と一層警戒を強める。

振りかぶった大鎌を思いっきり投げた。恐ろしいスピードで回転しながら飛来する大鎌は目の錯覚で円形に見える。

千早と伊織は紙一重で伏せて避けた。

大鎌は校舎に飛び込み何かが壊れる音を残して静かになった。

「ふ、ふん。来るって分かかって避けないといけないじゃない。」

立ち上がって美希に強がって見せる伊織だが千早は何かがおかしいと感じた。本気で終らせると言って出した武器が本当にこれだけで終わるのか？

目を細めて笑顔になる美希を見てハッと気付く。

まだ桜についた炎の微かな灯りで、美希から黒い線が伸びているのが見えた。脳裏に雪歩の時の出来事が甦る。

もしあの時と同じモノだとしたら。

「水瀬さん伏せてっ!!」

「え？」

背後の校舎からドガアつと大鎌が飛び出してきた。

驚愕のあまり目を見開く伊織は身体が強ばって、足が地面にくつついたように動かない。

未だに回転の衰えない鎌の刃は動けない伊織の胴体を捉えた。

かに見えた。

まさに伊織の身体が上下で別れようとした一瞬の出来事だった。

伊織と鎌の間に上空から突如飛来した”何か”が地面に突き刺さった。

それは両端や赤色に輝き、炎のようにゆらゆらと揺らめいてそれが刃だと気付くのに時間がかかった。

これは美希と同じアイドルだけが使う事の出来るスタンドマイクだ。

両端が魅力の刃になっている事から槍型。それも双刃剣と呼ばれるタイプで、扱いがヒドク難しい事から今では扱うアイドルはいないと聞いた。

こんなもの、一体誰が……。

槍型のスタンドマイクで弾かれた美希の大鎌はそのまま空へ飛び上がって美希の手に戻った。

それと同時にようやく尻餅をついた伊織が身体を震わせる。

当然だろう。このスタンドマイクが無ければ今はもう地面に転がるただの肉塊になっていたはずだ。

「あれはっ」

美希も驚きの表情を浮かべている。

どうやらこの槍に見覚えがあるらしい。

それもそのはずだ。そこへ現れた人を見て千早も驚愕を露にする。

千早達の前に背中を向けて空からゆっくりと降り立ったのは、紛れもなく昼間に言葉を交わした天海春香の姿だった。

真っ赤な薔薇のヘアアクセサリーを乗せ、白い生地ピンクのラインで黄色の袖にボタン留め、エポーレットも同じく黄色で軍装飾のような仕様になっており、ピンク・白・黄色のフリフリスカートを微風にたなびかせている。

「大丈夫？」

「春香、どうして？」

その名前には伊織も聞き覚えがあった。

夕方、旧校舎の前で千早が口にした名前だ。何故こんなところにいるのか。そしてアイドルが持つことを許されるスタンドマイクを何故所持しているのか。

どれも少し考えれば答えが出る疑問すら答えが出なくなるほど混乱していた。

「千早ちゃん、話は後。さっき、秋月律子が地下に向かったよ。」

「律子っ！」

その名前に伊織が激昂する。

震えているはずの彼女の心は、命を落としかけたことを忘れたように見たこともない形相で春香を問い詰めた。

「律子は今どこ！ 地下ってどこの地下なの！」

「・・・美希が封印されていた場所だよ。」

すると伊織は勢いよく立ち上がった。

若干ふらつきはしたがしっかりと膝を伸ばして立つ。

まだ魅力も体力も十分に回復しきれていないが、それでも律子の元へ這ってでも行くと言う気迫が見てとれる。

「行かせないよ！」

美希が片腕を上げて指先をこちらに向ける。

放たれた閃光は一直線に伊織へ襲いかかった。これは旧校舎の入り口でわずさに放った黄緑色の閃光と同じ。貫通力のある攻撃だ。

千早は無理に防壁を作ろうとしたが、春香がそれを右手で静止した。

春香は目の前の地面に突き刺さるスタンドマイクを両手でしっかりと持って思いつきり地面ごと振り上げた。

「うー、わっほい!!」

えぐれた地面からドドドッと火柱のような赤色の閃光が放射された。赤い閃光は美希の黄緑色の閃光をかき消して、更にその先の地面からも勢いよく飛び出し、上空にいる美希に到達した。

間一髪でかわした美希はそのまま旧校舎の屋根の上に降り立つ。
そして春香も美希との距離をあけて屋根へ跳んだ。

春香の攻撃を回避し、屋根に着地して正面を見据える美希は笑っていた。
「ふふ、ふふふ。」

「美希……」

「……待ってたよ。春香。」

「還ろう……美希。ここは、私達の居ていい場所じゃない！」

「あはは、美希達の場所なんてはじめからどこにも存在しないよ。世界を壊して、生き物を殺す。ねえ、春香もおいでよ。きつと楽しいの。」

「美希……あの時助けられなかった私を恨むんならそうすればいい。だけど世界を、みんなの未来を壊してしまうというのなら、私も黙ってられない。」

「今の春香じゃ美希は止められないよ？」

「それでも、理性をなくしたあなたを止めるのは私の役目。私の……役目なのっ！」

晴れ渡り月と星達が見守る中で、二人の武器が交じり合った。

「……何よ……コレ。」

その言葉には千早も同意するしかなかった。美希と春香の攻防はまさに人知を超えた力の応酬だった。

空を、地上を、全てを巻き込み刃を交える二人は千早と伊織を置いてきぼりにするには十分な戦闘を繰り広げていた。

千早は自分がこんな戦いに手を出せるほどの力を持ち合わせているとは思っていない。

一進一退の攻防を繰り広げるその二人は息を切らすことも無く戦っている。

お互い攻撃が当たらない。当てられないの連続で何をやっているのか検討もつかないほどのスピードだった。

時折飛んで来る閃光に当たらないようにするのが精一杯の二人は避難をしようか真面目に考え始めていた。

「千早、私は律子のところへ行くわ。」

春香と美希の戦闘を背景に伊織が千早に向き発した。

「そんな、いくらあなたでも危険過ぎるわ。私も一緒に・・・」

「大丈夫よ。こっちの心配よりあの眠り姫を倒すことだけ考えてなさい。」

「水瀬さん・・・」

「・・・押し付けるようなこととしてごめんなさい。だけどあの子の、やよいの仇だけは何としても討ちたいの。」

初めてだった。伊織が千早に謝ったのは。

面と向かって話す伊織の目はもう千早を見ていなかった。

彼女は偽物である律子の元へ今すぐにでも向かいたいのだ。

千早はやよいを見る。何があったのかは想像できる。だが二人の味わった苦しみや痛みはわからない。

人の死は身近な人間を変える。良い方にも悪い方にも。

復讐、仇討ちは現実逃避から来る自己満足行為だ。失った怒りや悲しみ、憎しみを発散するために行う行為。そうしなければ心を保てない人間もいる。もちろん復讐せずつに止まる人間もいるだろう。どちらの人間も心の内は穏やかでいられない。

今の伊織も同じだ。彼女はその負の感情に囚われている。発散してしまうのが先か、それとも自分が本当にすべき事に気付くのか。それは神のみぞ知る未来の彼女の運命だ。千早にも誰にも伊織を止めることは出来ない。彼女の感情が、止まることを許さないのだから。

その行動に千早が取るべき行動は、既に千早の中にあった。

「・・・わかったわ。美希は春香が戦ってくれているし、私は巻き込まれないように高槻さんの身体を護る。でも無茶しないで。あなたが死ぬことを高槻さんは決して良く思わないことを忘れないで。」

「わかってるわよ。・・・やよいをお願い。」

そう口にして伊織は走って旧校舎に入って行った。

千早は直ぐにやよいの側へ移動する。

空で激戦繰り広げるなか、千早は心に静かな何かを感じていた。

やよいの頬に手を触れさせる。

まだ温かい。しかし、息遣いも鼓動も感じない。

身体は至る所に火傷の痕がある。顔は全くの無傷でキレイだった。

今にも目を開けそうなほどに。

「……本当に……」

千早の頬に涙が伝う。初めて味わう仲間の、友人の死。

仲が良かったと言うほどでもないが、やよいとは勉強を教えたり食事を共にすることもあった。いつも元気な笑顔に励まされたこともあった。みんなもきつとそうだろう。いつも伊織との仲を取り持ってくれた。

今思えば自分も随分と苦勞をかけたかもしれない。

なら、最後に彼女に送る言葉はこれしかないだろう。

「……ありがとう。」

その言葉に、やよいが笑った気がした。

第八章

終

第九章 — 邂逅 —

千早と伊織が合流したその頃。

貴音に捕まったあずさは、眠ったまま美希が封印されていた地下室へと運び込まれていた。

かなりの広さで旧校舎全体が入るくらいの広さと、5階建て住居並みの高さがあるドーム状になっている。壁はレンガにも見える特殊な石で出来ている。壁の中間部分には、グルッと一周を細長い鋼が埋め込まれていて紫に光る球体がまた一定間隔で並んでいる。

天井近くの四方の壁から鎖が伸びてあずさの両腕に巻きついていった。宙に吊るされたあずさの頭上では、天井から桜の気の根が大きく伸びている。

周囲では赤い球体がゆつくりと光ったり消えたりしていた。

それは視覚化された高密度の魅力だった。何故かこの地下室、もと桜の木の根には尋常ではないほどの魅力が充満している。

貴音はその常軌を逸した光景を見上げながら笑みを零していた。

「ついにこの時が来た。行く年月、幾重もの試薬品や実験を繰り返しても成功することはできなかった。しかし、あの魅力とお姉さまを使えば……。ふふふ……。ついに……。成就する。時は来た……。今こそ!! でびゅーの時……。!!」

貴音は吊るされたあずさを見ながら、両腕を空へと向けて伸ばした。

それが合図だったかのように、周囲の魅力はどんどん密度を増していく。

その魅力があずさに吸収されていく様子を見ながら、貴音は黄緑色の薬品を右手に持った。

瞬間、大きく幼い声が地下室に響き渡った。

「やせなこよ!!」

桜から降り注ぐ魅力が一瞬にして消失した。

上空を見上げながら貴音はゆつくりと両手を下ろした。

「なんとということをするのです……。亜美……。真美っ!」

振り向かず、声を荒げた貴音の後ろの入り口に二つの影が立っていた。

黒いシュシュで髪を右側サイドテールにしている女の子は双海亜美。黒いドレスを身に纏っている。メイド服にも見えるその風貌は袖や首元、丈が膝まであるスカートに白いヒラヒラがついていて白のニーソックスにフォーマルシューズを履いている。

圧倒的な存在感を放っているのは口に唾えたおしゃぶりだろう。

赤ちゃんが使うおしゃぶりが年齢に相応しくない存在感を示していた。

そしてその隣には同じく黒いシュシュで左側サイドテールにしている双海真美。

亜美と全く同じ服装でおしゃぶりも全く同じ。違いとしては、亜美よりも少し長い髪の毛であることくらいだろうか。顔立ちは良く似ていて一目で双子であると判る。

真美が腰に手を当てて右手で貴音に人差し指を突き刺した。

「もうお姫ちゃんの言いなりになってならないんだかね。お姫ちゃん言ったよね。未来を変えるために力を貸して欲しいって」

「誰も犠牲にせず未来で暴れる眠り姫を倒したい。だから未来の亜美たちはお姫ちゃんをこの時代に運んだ。」

「だけどお姫ちゃんがやったことは怪しい薬を使った人体実験。初めから犠牲ばっかじゃん！」

「封印術が得意なお姫ちゃんは能力を使って亜美達の記憶を封印した。」

「記憶を封印された真美たちに捻れた歴史を吹き込んだ。」

く回想く

子供部屋のようなその空間は、数多くのぬいぐるみが散乱し、写真や絵が壁に飾られ植物が這い回り鳥やカエルなどの動物もその部屋の中に動き回り暮らしている。

そんな空間の中に一つのベッドがある。大人二人が楽々と寝られ

る広さのベッドに四条貴音を真ん中にして亜美が右側、真美が左側で大きなクッションを背におしゃぶりを啜えながら会話を楽しんでいる。

「お姫ちゃんが未来から来たつてのにも驚きだけど、記憶をなくした真美たちに今までの出来事を教えてくれるなんて、お姫ちゃんって親切だね亜美！」

「そうだね真美！　ねえねえお姫ちゃん。あの本の続きを読んでよ」「ではお話ししましょうか。これまでの出来事を……。」

三人とも黒いネグリジエを着て分厚く大きな本のページを捲る。辞書より二回り程も大きいその本で亜美と真美はワクワクしながら貴音の物語を語られ続けていた。

「悪い先生は二人の生徒を戦わせました。戦いの末、大きなサクラの木で戦いは終わりを告げたのです。」

「それで、どうなったの？」

「旧校舎のそのサクラの下には、女の子が眠っていて、何年も何年もその扉が開くのを待っているのです。何年も……何年も……。」

「可哀想……。」

「ふふ、そうですね。とても可哀想なお話です。」

「そうして貴音は不気味な笑顔と共に二人の記憶を改竄して手中に収めていた。」

時の魔女である二人は永遠にその容姿のまま、時間によって命を落とすことがない。

貴音の目的を遂行するためには時の魔女は邪魔だった。だが、二人の命を奪うわけにはいかなかった。貴音の目的はあくまでも未来の眠り姫を倒すこと。そのためには未来へ戻るために二人の力は必要だった。

だから隙を見て記憶を封印し、あたかも自分が助けたかのように演出したのだ。

100年もの間、嘘を重ね続けた。

く現在く

貴音が二人に向き直った。封印が解けて記憶が戻ってしまっていたのには少し動揺したが、それでもすぐにいつもの不敵な笑みを取り戻す。

「仕方ありませんね。再び記憶を封印して言いなりにしましょう。しかし、何故封印が解けたのでしょうか？ あなた達には1年周期で封印を重ねがけしていたというのに。」

「私が解いたのよ。」

亜美と真美の後ろから二人とは違う声が聞こえた。

そこにはメガネを掛け、髪を後ろにまとめた女性が立っていた。

貴音はその女性を知っている。およそ100年前に自らの手で殺し、成りすましてきた女性の姿があつた。

さすがの貴音も不敵な笑みが消える。

「・・・何故あなたがここに居るのです。秋月律子。」

「ティーチャー律子と呼びなさい貴音。信じられない話だけれど、時空を越えてきたのよ。」

律子は入り口から5メートル程歩いて止まる。律子の後ろを亜美と真美が歩き、三人は貴音と10メートルほどの距離が開いた所で止まった。

貴音は別の次元に居る双子の仕業であろうことを確信した。

その確信が間違っていないことを律子が答えてくれる。

「およそ100年前。私はある日に殺されなかった秋月律子よ。」

「・・・なるほど。どうやってかは分かりかねますが、事態を知ったのですね?」

「未来から来た人がいたの。その人のおかげで私は殺されることを知り、対策を練ってあなたを倒した。」

「でも今、私はこの場に立っている。過去ではなく平行世界の秋月律

子と言うことですか。」

この貴音の結論に後ろの二人が律子の隣に並ぶ形で前に一步踏み出した。

平行世界。所謂パラレルワールドと呼ばれる別の世界は数多に存在し現在、または未来が今の時間と平行に進んでいると言う夢溢れるファンタジーな話だ。

「お姫ちゃんが過去に来たから平行世界が生まれたんだよ。本来歩むべきだった世界とは懸け離れた未来にね。」

「なるほど、この世界も平行世界であると言うことですか。しかし、封印術が苦手なあなたがよくこの二人の封印を解いたものです。」

「あら、なめないでもらいたいわね。これでも歴代トップの成績で卒業したのよ？ 封印術の解き方くらい心得てるわ。ちよつと時間がかかったけどね。」

「ちよつと・・・ですか。呆れますね。100年分の記憶の解封など数多あるはずのびーすを一つずつ埋めていく作業だと言うのに。」

「おかげで真美たちは助かったよ。今まで犠牲になった人たちは戻らないけど。だけど、一つの世界でも平和に出来れば。未来は変わる。」

お姫ちゃんをこの世界からブツ飛ばす！」

「ふふ、さすがの私でも時間移動などできませんからそうなってしまつてはお終いです。ですので、全力で抵抗させていただきます。」

そういうと自然体で魅力を高め始める。それにしたがって亜美や真美、律子も魅力を高めた。

1対3で少々分が悪いと思いつつも亜美と真美を無力化出来ればまだ律子と戦える。

何せあの秋月律子だ。本気でかかっても勝てるかはわからない。

そう思いながら、空気が変わるのを感じた。律子も同じような反応を示す。

バシユっ!!

空気の變化に気付いた律子が咄嗟に屈んだ瞬間、頭の上をピンク色

の光線が通り過ぎた。

その直線状に居た貴音も一步横に移動してその光線を回避する。律子に向かって入り口から電撃が飛んできたのである。

「っ……なにっ!？」

全員が入り口の方へと眼を向ける。するとそこには傷だらけだが怒りと憎しみに満ちた伊織の姿があった。

息を荒げ、身体中から桃色の電気を走らせている。

「秋月……りっこおおおおおっ!!!」

咆哮。そして同時に巨大な電撃が律子に向かって迸る。律子は已む無く防御の盾を出現させ攻撃を弾き飛ばす。

「一体なんなのよ!! あんた誰!! なんで攻撃してくるの!!？」

「殺す!! あんただけは……私がやよいに代わって殺してあげる!!!」
そして再び四方に放電する。今までの伊織の電撃とは比べ物にならないほどの威力を乗せて部屋中に迸らせた。

制御できないほどの魅力が感情となつて今まさに暴走している。

「これはこれは、面白くなつて参りましたね。亜美、真美。私の相手はあなたたちがしてくださるのでしょうか？」

「あつたり前じゃん。亜美たちだつてお姫ちゃんにはデツカイ借りがあるんだかね……。」

「そうだよ。この借りは簡単には返せないんだかね。」

緊迫した中、律子は今の状況を整理することで頭がフル回転していた。

普段は冷静な彼女だが、今その内は怒りが燃え広がっている。

何故見ず知らずのデコの広い女の子に攻撃されなければいけないのか。

自分は未来から来たあの人の言葉で命を拾い、その恩返しがしたくてこの世界に飛び、この世界の四条貴音を倒すというそれだけのはずだった。

しかし、状況は倒すどころか倒される寸前だった。

さっきの電撃は本気で殺すつもりだった一撃だ。

そして、四条貴音と対峙しているのは時の魔女である亜美と真美。万が一どちらかが貴音に倒されたら元の世界に帰れない。

つまり、自分と関係の無いこの世界の行く末を嫌々見守らなければならぬわけだ。

亜美と真美が居なくなってしまうと、この世界の未来を守れなくなってしまうということである。それだけはどうしても避けなければいけない。

どうにかして亜美と真美の援護をしながら戦わなければいけないのに。

「なーんてことをりっちゃんは考えてるんじゃないかなあ」

「ところがどっこい。亜美たちだってそんなことくらいわかってるよ！」

「でも確かにピンチといえばピンチだったりして」

「ちよつと真美い。戦う前から縁起悪いっしょ！」

「私があなたたちの能力を知らないわけではありませんよ？ あなた方は時間転移と次元転移の能力しか使えない。それも先ほど天井の魅力を飛ばしたことでしばらく能力が使えないのはわかっています。観念なさい。」

貴音には確信があった。二人の魅力は今、能力を使うにあたって全く足りていない。

距離や時間軸の差違はあるが一度まともに能力を使用するごとに4分の3程度を消費する。それは未来に居た時、彼女たちが口にしてきたことだ。

そしてその能力以外に使えるのは少しの障壁のみで攻撃できる属性はない。

つまり対人戦には全くの無力なのである。

現在の状況で亜美と真美ができることと言えば時間稼ぎ。律子が伊織を止めて加勢に来てくれる。または誰かがこの状況に飛び入り参加してくれることを待つしかない。

二人の魅力量で貴音の攻撃を1回、防げて2回がいいところだろ

う。

そのことに気付いているのは亜美と真美と貴音だけだ。

「真美！・ できるだけお姫ちゃんの能力を避けて避けて避けまくるしかないよ！」

「わかってるよ亜美！ 障壁を使うのはホントにピンチの時だけだよね！」

「さあ、行きますよ!!」

そしてその後ろでは律子と伊織がお互いに今にも飛び掛りそうなほどの剣幕で睨み合っていた。

しかし、その睨み合いも伊織の攻撃で破れる。

ジリジリと伊織の身体から放電し始め、それは伊織の頭の上で集まり圧縮されていた。

危険どころではない。おそらく普通の人間が触れると一瞬にして身体が四散するほどの電力が圧縮されている。10万、100万、1000万、検討が付かない。それが今、律子に牙を向けられている。当の律子は苦笑いをしながら、これほどの能力者を育てられる未来はなかなか捨てがたい。などと思っていた。

まだ勤めは短いが講師としてこの学院に志願してよかったと思える。これほどの才能に数多く巡り合え育てられるのであれば講師冥利に尽きると言うものだ。

でも今この子たちは苦しんでいる。自分の不甲斐ない死と共に将来有望な子達をどれほど失ってしまったのか。それを考えるだけで心が痛む。そしてそれ以上に腹立たしい。

生きている内にこの未来を見ることが適わないと言うことに。

「・・・ホント、腹が立つ。」

そしてとうとう伊織が行動を起こした。

「一瞬で終わらせてあげるわ。やよいの無念を味わうのね!!」

伊織の一言で電気を圧縮させた玉が飛来してきた。速度は人間が走るほどの速度だが

当たれば即死必至のデスポールだ。

それが伊織の頭から電気の紐で繋がれ意思のとおりには操っている。

「訳のわからないことを・・・言ってるんじゃないわよっ!!」

突如としてバチバチいつと律子の身体から放電し始めた。普段から魅力を高めていた甲斐があつてか伊織の電玉を止めるには充分だった。

律子から放たれた緑色の電撃により律子と伊織の間で電玉が鬩ぎあっていた

「なっ!!」

驚愕のあまり声が飛び出した。2年ほど彼女に能力について教えてもらっていたが電気の能力を持つとは聞いていない。彼女は封印術を得意とした典型的な補助型の能力者で攻撃型の能力と対等であるはずが無い。それが今、目の前で自分の能力に匹敵するほどの電力を放ち自分の全力を止めてしまった。

能力を隠していた？

可能性が無いわけじゃない。だったらそれなら記録が残っていたり誰かが封印術とは別の能力を見ているはず。人数の少ないあのクラスで噂話が好きな響あたりが言葉にしてもおかしくない。

いや、それ以前に補助型が攻撃型の私に攻撃能力で、それも電撃で適うなんて絶対にありえない。

今までの律子じゃない！

「・・・でもこのまま押し切ってやるわ!!」

伊織の魅力が跳ね上がる。少しずつ押され始める律子は電気を止めて別の能力を発動させた。律子からの放電が無くなり勢いがついた電玉は、いきなり地面から突出した土の柱にぶつかり双方消し飛んだ。その衝撃で律子と伊織が吹き飛ばされる。その衝撃は亜美真美と貴音にも影響を及ぼし戦闘を一時的に中断させた。

「とんでもない攻撃をしてくれますね。このような狭い場所で。」

「ちよつとちよつとお！　ここが地下だつて忘れてるんじゃないの!?　まあ、ちよつと助かったけど。」

「いやいや、これ後ろからも攻撃来るかもしれない状態なんだから超ヤバいっしょ!」

丁度貴音の攻撃を避けまくっていた亜美と真美だが能力に頼らない動きは基本スタミナ勝負となってしまう。今の二人にまともに運動できるスタミナなど備わっていない。貴音は簡単な能力を使って二人のスタミナを奪っている最中だった。

そんなときにいきなり背中を殴られるような衝撃波が襲ってきたら動きも止まる。

それは貴音も同様で防ぐには時間がなさ過ぎて発動中の能力を中断した。

吹き飛ばされて壁に叩きつけられた伊織は正面から歩いてくる律子を眼にした。立とうとするがダメージが大きく身体が言うことをきかない。歯を食いしばり立ち上がる。

既に律子は伊織の目の前に立っていた。恐ろしい剣幕。般若面をつけていると言われれば信じてしまうほどに。

そして――

「こんのバカアアアアっ!!!」

ばちいーんっ!!

という音と共に伊織の頬を全力の掌が飛んできた。

身体の痛みと相まって朦朧とする頭が一瞬で覚めた。

「な、なにすんのよ!!」

「それはごつちのセリフよ!!　いきなり攻撃してきて、こちらら初対面なんだからちよつとは親切にしたらどうなのよ!!」

「しょ・・初対面!?　あんたこそ一体何を言ってるのよ!!」

「いい?　私はこの時代の律子じゃないの。私は今から1000年ほど前の別次元から来た律子。わかる!」

「は、はあ!?　何訳のわかんないこと言ってるのよ!　信じるわけ無いでしょー!」

「こんの・・っ!」

睨みあう二人。その時、伊織の頭に白い影が乗っていた。小さい動物のようなその姿はハムスターのように見える。

いきなり現れた白い影を追いかけてその主が姿を現した。

「おーいハム蔵！ 一体どこに行くんだ!!」

汗だくで現れた響は扉から広がる異様な空間を見て身体を硬直させる。

天井からぶら下がる巨大な根。その下に鎖で繋がれたあずき。

その下に知らない女性と子供二人。素早い動きで能力を撃つたり避けたり人間のそれとは思えないほどの身体能力を目の当たりにして、ここが異常な常態なのは一目瞭然だった。

そして伊織と律子の姿も見取れる。

「・・・なにこれ？」

入り口で呆然としている響に伊織の頭の上のハムスターが響の元へ駆け寄る。

「・・・なにあれ？」

意味不明の物体を目にした律子はその物体を目で追いかける。

まだ動けそうにない伊織は体力の回復を待つて再び律子に攻撃する算段を頭の中で立てていた。

「あ、ハム蔵！ お前こんなところに居たのか！」

ハム蔵に近づく響だったが、ハム蔵はまた走って今度は律子の服を駆け上がり頭の上に到達する。

律子は特に何かに触られたり登られたりする感覚は無いため気にはならない。

そのハムスターの前に両手を出して乗るように促す。大人しく手のひらの上に移動するハム蔵を見て響が「あれ？」と声を漏らした。

ハム蔵は再び響へ走り肩の上に登った。

「ハム蔵。いつもはティーチャー律子のこと怖がるのに急にどうしたんだ？」

この言葉で伊織はハツとした。確かに、今までハム蔵は律子に近づくことどころか距離をとって威嚇をしているのを何度か見たことがある。響は自身の能力で生成した動物の魅力体を実体化して意思を

持たせることが出来るからそれでよく遊んでいたものだが、終ぞ律子に対してだけは懐くことがなく、逃げたり響を護ろうとするような動きさえ見せたことがあった。

動物の勘と言えばバカバカしいと一蹴するのがいつもの伊織だが、その時はまさかと思ひ律子の顔を見上げた。

「あなた・・・本当に初対面なの？」

「そうよ。この時代の人間じゃない私にあなたとの面識なんかあるわけ無いでしょ。」

「それよ！ 100年前から来たって言ったけれどどうやって・・・」
「うあうあああっ！」

亜美の叫び声が遠くから近くなって隣で背中を打ちつけた。

短い呻き声を上げて伊織の体に倒れこんだ。

それを追いかけて真美が駆けつける。

突然の出来事に伊織が身を縮めて驚き、律子も亜美が飛ばされてきた方を見る。

「亜美、大丈夫!?!」

「うぐ・・・ちよつとキツイっぽいよお。」

「みんな、危ないっ!!」

入り口から響の声が響いた。

伊織が正面を見ると、貴音が相当な魅力で腕を横一閃に薙いだ。

牡丹色（ぼたんいろ）の風の刃こと、かまいたちが凄い速度で飛来する。

切れ味抜群の刃がとうとう寸前のところまで迫った。

逃げることも出来ず、せめて自分の身体を盾にしようと隣で寄り掛かる女の子を抱き抱えたとき、律子の手に触れた瞬間かまいたちが弾けて消滅した。

顔を上げて律子を見た。驚きのあまり自分の顔から血の気が失せて青くなっているのがわかる。

夥しいほどの魅力が身体から溢れて緑色に発光している。

「お返しよ。」

そう一言口にして今度は律子が一閃。

横に薙いだ腕から緑色のかまいたちが貴音のかまいたちよりも早い速度で飛び出した。

貴音は急いで伏せた後、頭の上を通り過ぎて壁に大きな傷をつけた。

「信じられない……。あ……あなた、一体いくつ属性を扱えるのよ。」

「……5つ」

「……は？」

律子は背中越しに答えた。

腕を上げて顔の前でパチンツと指を鳴らして腕を挙げた。

冷える空気が更に冷え込み、上を見ると上空に冷気が集まって大きな氷の針。

アイスニードルが成人男性くらいのサイズで4本生成されていた。

高々と上げた腕を振り下ろしてアイスニードルが飛び出す。

まるで銃弾のようなその塊を避けている貴音も貴音だ。反射速度と身体能力が上がっている。

全ての氷を避けきったところで感嘆の言葉を口にした。

「ふう……。真、恐ろしい能力ですね。秋月律子。」

「よく言うわね。あなたこそキツチリ避けてくれるじゃない。」

「運動能力を抑制する脳の働きを封印しましたが、それでも避けるのが精一杯とは。まともに戦うと恐ろしいですね。」

律子はメガネのブリッジ部分を左手中指で持ち上げ、今度は掌から炎を出すとどんどん膨らませていった。

これまでに雷、土、風、氷、炎と5つの属性を操っている律子に対して伊織は開いた口が塞がらなかった。

軍に所属するアイドルが一生かかっても二つとして扱えない複数の属性を5つも扱うと言う、本来ならば絶対に有り得ないその能力に驚愕して質問するための声も出ない。

自分はこんなトンデモ超人と戦おうとしていたのかと命拾いしたこと気付いた。

しかし、本当に理解できない。5つの属性を操る能力なんて今まで聞いたことがない。

学院で読んだどんな資料にも載っていないし想像してもバカな話だと鼻で笑っていた。

だがこうして目の前で攻撃型の威力そのままに多種多様の能力を使われたら現実に居るのだと認めざるを得ない。

「あなたとこうして戦うとは思っていませんでしたよ。この学院始まって以来の天才。えれめんたるますたー・秋月律子。」

「あんたがこんな馬鹿なことを考えなければ、出会うことも無かったでしょうけどね」

第九章

終

第十章 ― 幸せの意味 ―

えれめんたるますたー。火、水、土、風、雷とその他の応用を完全に操ることが出来る幻の存在。

放つ炎は空を燃やし、操る水は海を作り、怒涛の土は山を押し上げ、吹き荒れる風は全てを吹き飛ばし、落ち這う雷は神速で飛び交う。

文書で確認されている使い手は一人。

髪の短し数多の使い手、口元に黒点を持つ神の使い。

五つの力を使い分け、人々の救いに尽力せり。

最古の文献に記されていた神の使いと称されるほどの強大にして幻の能力。

その使い手の一人、秋月律子。

眠り姫の次に戦いたくはなかった相手。これも宿命なのでしようか。

額に汗が浮かんで頬を伝い首を流れ落ちていく。

目の前で膨れ上がる炎の熱のせいなのか、はたまたその炎の行方が自分に向けられているからなのか。解らぬまま、汗は足先まで流れ落ちていった。

「ち、ちよつとー！」

私は目の前で大きく膨れ上がっていく炎の玉を見ながらその熱のせい、はたまた内心の焦りからか、額から流れ落ちる汗を止められずにいた。

何故なら、これだけの規模の炎の玉が放たればここに居る全員が何かしらの被害を被るからだ。

「そんなものここのでぶつ放せばどうなるかくらい分かるでしょー！」

腕を高々と挙げて大きくなる炎は直径にして3メートル程のキレイな球体となって熱が表面を揺らしている。

これには流石の時の魔女二人も入り口の具現化使いも身の危険を感じずにはいられない。

「わかっているわよそれくらい。」

律子はその炎を更に大きくさせて直径で4メートルになった。

これじゃあ落としたり爆発した瞬間に周りが消し飛んでしまう。

本当にわかっているのか判らないし律子の行動は狂気の沙汰としか思えなかった。狂気の行動は更に続き、まさか今度はその炎球を風船のように真上に放り投げる。

終わった。

完全にそう思った。

しかし、その炎は思わぬ形で消失する。

炎球は律子の真上で落ちず静止した。空に向いた腕をバツと貴音に向けて、なんとその炎球からバレーボールほどのサイズの炎球が飛び出した。

とてつもない速さで飛び出す炎球を向けられた貴音はギリギリのタイミングで避けていく。

巨大な炎球はどんどん小さくなりもうすぐ無くなりそうなところで、ついに貴音が腹部に燃え盛る一撃を浴びた。

それを皮切りに2発目を左腕に、3発目を右足の脛に命中した。その衝撃で前に倒れ込む。

律子の炎球もそこで尽きたのか完全に消失した。

「もう無駄よ貴音。今の攻撃、かなり効いたはずだもの。もうやめなさい。」

貴音はよろめきながら立ち上がり、痛みを堪えて律子に首を振って見せた。

彼女は何故そこまでして戦い、目的を果たしたいのか。

伊織には全くもって理解できない。

「やはり、そう・・・上手くいきませぬね。威力よりも・・・数で・・・圧してくるとは。」

「お姫ちゃんもうやめなよ！」

「そうだよ！ 真美はもう怒ってないから・・・だからこれ以上は——」

「お黙りなさい!!」

怒気の混じった声が大きく響いた。

その声に真美が思わず言葉を切り、亜美も身体がビクツと跳ねる。初めて感情を露にする貴音は睨み付ける目付きで、しかしその場の誰でもなく遠い何かに向けているように思えた。

どうやら律子だけが貴音の内心を理解しているようで、何かを言ううとしてそこから堅く口をつぐんだ。

「私は止まれないのです。止まれないのですっ!!」

この言葉にとても強い悲しみを伊織は感じた。

彼女がどれほどの経験をしたのかは、計り知れない。

その言葉にどんな重みがあるのかもわからない。ただど一つだけ解る。

”この人は何かを酷く悔いている”

それが何なのかはわからない。

その後悔が彼女を止められなくしている。

あとに退けなくしている。

だけどそれを解決したところで、きっと何も変わらない。

彼女が何に苦しんで何に後悔しているのかが解っても誰も何もしてあげられない。

だからだろう、律子は口をつぐんだのだ。

貴音にしか見付けられない答えを他人が解るはずがないのだから。

「・・・申し訳ありません。」

貴音が右腕を一気に横一線に凧いだ。

再び牡丹色のかまいたちが飛び出し、そしてその標的となったのは・・・。

「・・・えっ？」

「しまっ!!」

かまいたちと一足違いで律子も響へと飛び出す。

足に一気に魅力を溜めて放出した。風の属性を利用した移動法で響を突き飛ばした。

(いけない！ このかまいたち、防御が間に合わない！)

攻撃型の律子は防御型の能力を使うためには、修練を積んでも一時的に意識を集中しなければならぬ。

貴音のかまいたちも大した威力はないだろうが、しばらく動けなくするくらいのはある。

千早であれば瞬時に身体の魅力を硬化させてダメージを半減させたり出来るのだが、型が違うだけでその能力を発揮するのは至難とも言えるのだ。

簡単に言えば右利きが左手でスゴク綺麗な字を書くようなもので、決して簡単ではない。

響の体を突き飛ばしてから振り替える間もなく攻撃を受けた。

身体が切り裂かれることはなかったものの、大きなダメージとなって律子の意識を朦朧とさせた。

「あ……そんな!? ティーチャー律子!」

(魅力が……。これ、ちよつとヤバイかも。)

倒れた律子を心配している響に貴音はゆつくりと近づき始めた。

脚を引きずりながら歩く様は、まるで二人に対する死神のようだった。

貴音の意識が律子と響に向いている今、私は行動を起こした。独り言を呟くような声で双子に話しかける。

「ねえ、あんたたち。まだ動ける?」

「え……。」

「真美は動けるよ。」

ゆつくりと身体を起こし、震える足をどうにか言うことを聞かせて立ち上がった。

今の状況で何をすべきか。どうしなければいけないのか。そのことをこの亜美と真美に、そして響に伝えなければいけなかった。

「これから私があの貴音と戦う。双子のあんたたち、どっちでもいい。あずさを降ろして頂戴。」

その言葉に亜美と真美は驚きを隠しきれなかった。

それも当然だろう。今の私の風貌は一見すると貴音よりもポロポロに見える。魅力も大して回復していないし、とても戦えるような状態ではない。

「いくらお姫ちゃんが怪我してるからって、いおりんじゃムリだよ！」

「そうだよ！ いおりんだってポロポロじゃん！ 時間稼ぎにもならないよー！」

「あんたたち言ってくれるじゃない。．．．だけどやるしかないわ。」
あずさが起きられればここから逃げ出すことなど造作も無い。

「ただ、どういう訳か鎖に繋がれたあずさが目を覚ます気配は微塵も無い。」

意識を封印されているのなら封印術に長ける人が居ない分、解封するのに時間がかかる。

時折聞こえる地響きから地上でも戦闘が行われていることは明白。

だとすれば、ここが地下である以上時間をかければかけるほど状況が悪化することは目に見えている。

律子がダメージを受けた今、あの貴音と呼ばれた銀髪の女性に対抗できるのは攻撃型である私しか居ない。

時間稼ぎにすらならなくても、ここで勝負をかけないと私たちに未来はない。

「あずさが起きれば戦い方が大きく変わるわ。今のジリ貧の突破口、意地でも降ろして叩き起こしなさい！」

「わ、わかったよ！」

強めの口調で言ったのが良かったのか二人は私の緊張感を感じてくれたようだ。

亜美もさっきのダメージが残っているが立ち上がってゆつくりと歩き始める。亜美を支えるように、更には護るように真美も亜美に続いた。

「亜美、真美。その様な動きではあずさお姉さまを降ろすことなど叶

「いませんよ?」

貴音の様子が変わった。

怪我しているはずの脚を前後に開いて腰を落とし、まるで東方にある剣を使った『居合い』という構えに似ていた。

さつきと同じようにかまいたちを放つ気なのだろう。

構えてから数秒、亜美と真美があずさの下へとたどり着くところで桃色の雷が貴音を襲い、構えを解いた。

かまいたちを放つ寸前の電撃。紙一重でかまいたちを止め、紙一重で電撃を避ける。

「邪魔をしないでいただけますか? 伊織。」

「封印術って言うのは大したものね。痛みすら封印しちゃうのは流石に反則だと思っけど?」

「極めれば痛覚を封印するのは造作ありません。まあ脳への干渉ですから、僅かにコツは要しますが。」

「ねえ、一つ聞いていいかしら? あんたがやよいをあんなにしたの?」

伊織の声に怒りが混じる。あるいは殺意か。この質問自体が既に確信した上での問いなのがわかる。

徐々にだが伊織の身体からバチバチと放電し始めているのがその証拠だ。

どう答えようと伊織は攻撃を止めないだろう。

「・・・何故そう思うのです?」

「その封印術と独特な魅力の色・・・と言えば納得かしら。」

「・・・なるほど、よい答えですね。」

伊織が更に電力を上げる。バチバチと五月蠅いほど弾けて伊織の身体が桃色の魅力を発し始めた。残り少なかった魅力が急激に上がり始めている。

さつきの律子も魅力が身体から溢れて緑色に発光していた。

それと同じ現象が伊織にも起こった。

『ボルテージ現象』

心の高ぶりにも限界点は存在する。テンションに越えられない域があるように。その高ぶりの限界点を越えた先にあるのがこのボルテージ現象だ。

このボルテージ現象は人によって違った効果が現れる。律子の場合には攻撃力が上昇するように。そして共通して現れるのは魅力の回復と最大値の上昇。

急速な回復で戦いを継続することができる。

ただし、ボルテージ現象を維持することは不可能と言われている。意図的に発現させるには早くても5年に及ぶ修練が必要だとされている。

そして、一度発現することで一人前のアイドルと認められる。

皮肉なことに、アイドルに価値を見出だせなくなった少女が一人前のアイドルとして認められるための最後の難関をクリアしたのだ。

それを見た貴音は小さく感嘆の声を上げる。

伊織はそんな変化にも気付かず身体を桃色に発光させて髪を揺れ動かし、貴音を睨み付けながら電気を迸らせた。

「ねえ真美。」

「ねえ亜美。」

「あずさお姉ちゃん、どうやって降ろそう。」

伊織と貴音がまさに一触即発の最中、亜美と真美はあずさの下までたどり着いていた。

この時、亜美と真美は特に大事なことを伊織に言い忘れていた。

「私達、固有能力以外は使えないんだよね。」

実のところ今この二人があずさを降ろそうとしても降ろせなかった。

二人は自分達の能力である時間操作と空間操作以外は簡単な障壁しか使えない。

浮遊術を始め封印術の解封など穴の開いていない針に糸を通すくらい出来ない。

つまり、不可能なのだ。

「これはあれだよ真美。大ピンチって奴だよ！」

「うあうあ。どうしよう!! ……ん？」

頭を抱えて下を見た。

足元で何か光るものがウロウロしているのが視界に入る。それはハムスターのような白い影。その影が右手を挙げて走り出した。

追っていくとそのハムスターは今にもぶつかり合いそうな二人を避けて響の元まで走っていった。

「そっか！ ひびきんに手伝ってもらえば！」

「あずさお姉ちゃんを助け出せる！」

「真美！ 使える!?!」

「この距離なら今の魅力でも余裕っしょ！」

真美が両手を前に突き出してバツと一気に開いた。

真美と亜美の目の前を眩い光が現れたと思ったら一瞬で消えてその場に響が座っていた。

真美の空間操作は空間と空間を繋ぐことが出来る。入り口前に居た響と律子の居る周囲の空間と、亜美と真美の目の前の空間を入れ替える操作を行った。この操作は時間軸が違ってても有効で、今の真美の居る空間と5年後の真美の居る空間を繋ぐことができる。

ただし、それには時間操作が出来る亜美の能力があって初めて可能となる能力。

移動させる空間を固定してから切り取って時間移動させるのだが、真美は通る空間の消滅を防ぐために全力で固定しなければいけない。固定しなければ本来生物の居ない時空間の排除力で訳のわからない場所に吐き出されてしまう。

その固定操作の為に膨大な魅力を消費してしまう。時間移動などと言う神をも恐れぬ自然のルールを破るのだからそのリスクは尋常ではないのだ。

「え……なに？ あれ、移動した!?!」

「ひびきん!!」

「うわ、誰?」

亜美と真美は二人揃って響の顔の鼻先2センチくらいまでグイッと近づきこれから行う行動の説明を始めた。

その後ろでは貴音が伊織の電撃を避け続けていた。

人間は脳と身体の負担を減らすため無意識に機能を抑制していると言われていたが、貴音は脳の『抑制する無意識』を封印することで通常の人間よりも身体能力が高くなっている。そのため伊織の電撃のスピードですら捕らえきれなかった。

(くっ、封印術を極めるところまで厄介だなんて……)

攻撃を仕掛けているはずなのに何故か追い込まれていつているようにしか感じない。

それもそのはずだ。元々伊織は魅力を大幅に消費したままこの戦いに望んだのだ。

魅力が高まり続けても消費される魅力が多ければ意味がない。いつしかボルテージ現象が止まってしまった今、無暗に消費し過ぎて魅力がいつ尽きてもおかしくない状態だった。

息も荒く身体の動きが鈍い。

「ふふ、伊織。そろそろ限界なのではありませんか?」

「うっさい……わね。はあ……はあ。」

あずきの妹である貴音も幼い頃から能力の訓練を行ってきた人間だ。実力の開きは天と地の差がある。それがわかっていても伊織が退く事は出来なかった。

そもそも、アイドルに選ばれ講師の律子に挑むつもりだったのだ。力の開きなど最初から百も承知だ。

「あの子の……やよいの仇を討つまでは……死んでもあんたを倒す!!」

今にも倒れそうな程にムリをしている伊織だが、目の前にいる自分の敵を見て目を疑った。

何のつもりなのか伊織の攻撃に身構えていた貴音が構えを解いて直立になり目を閉じた。

諦めたのか。それとも何かの罠なのか。だが、今が攻撃のチャンスなのは間違いない。最後の力と言わんばかりに特大の雷を放とうとした時、口元に笑みを浮かべた貴音からの一言が逆鱗に触れることになった。

「……そんなことで私の邪魔をしているのですか。」

「……そんなこと……ですって?」

ゆつくりと、だが激しく伊織の身体中から電気が迸り始めた。

貴音はニヤリと笑みを浮かべた。狙い通り。まさにそんな笑みだ。あずさの救助を優先させた訳だが、最早そんなことはどうでもいい。

救助に向かわせた二人も、世界が崩壊するかもしれないことも、自分自身の未来もどうでもいい。ただ、今日の前にいるこの女を髪の毛の先すら残さず消し去ってしまいたい。

それほどに伊織は怒りで我を忘れた。

「そんなことですよっ!!」

怒りの爆発という表現が一番適しているように、まさに伊織を中心に爆発したような電撃が天井や壁へと四方八方に弾けた。

脳回路が焼き切れるであろう高圧の電力は直撃だけで死を意味する。

それは貴音もわかっているはず。なのに、貴音は雷の速度で飛び散る電撃を紙一重でかわして伊織にどんどん近づいていく。
(これだけ乱射してもかすりもしないなんて!?)

そしてとうとう伊織の目の前に詰め寄せられた時だった。首をへし折ってやろうと貴音が右腕を伸ばした瞬間。

伊織が消えた。

貴音は勢い余って更に5メートルほど進んで止まった。

「ごめんなさい、伊織ちゃん。」

懐かしい声のする方へ身体を向ける。

その声の主は貴音の良く知る人物だった。

幼い頃から一緒に能力を学び、日々を戦いと生きることだけ考えて切磋琢磨し合った仲。

一瞬で伊織を攫った彼女は亜美と真美、響と律子の元に戻った。そして貴音に向き直り、良く通る声で静かに名前を呼んだ。

「貴音ちゃん……。」

「おはようございます。お姉さま。」

二人の間に沈黙が続く。

数秒の間の後、緊張と気力で戦っていた伊織が地面に膝をついた。限界寸前の魅力が無理やり放出したのだ。

既に何時、命尽きてもおかしくない状態の伊織の身体は本人の意思に反して動くことを完全に拒否した。

結果、立って居られなくなり息も切れ切れだ。目も霞、聴力も著しく低下して意識をやっとの思いで保っている。これ以上の能力の使用は本当に命を落としてしまう。

息を整えることにも辛そうな伊織が何とか口を動かしてあずさに訊ねた。

「……あ……ずき。どういう……ことか、説明……して、くれる でしょうね……？」

あずきは答えない。

星井美希が復活し貴音を見つけた今、素性や目的を隠す意味などない。

だが、あずきはそれでも答えを渋った。

目の前の女性、実の妹である彼女とまだ分かり合える。元の関係とまでは行かずとも説得で妹を取り戻せるのではないかと思っていたから。

だが、その望みは無残にも断ち切られた。

「……く」

「？」

「ようやくお姉さままで実験を行えると思っていたと言うのに……っ!!」あずきは身の毛が弥立つほどの殺気に襲われた。

殺気を交えたおぞましい執着。睨みつけるなど可愛いレベルの眼光。気迫。

それらをこの場に居る全員に放って自分の苛立ちを表現していた。

この時、あずさは感覚的に悟ってしまった。

もう不可能なのだ。かつての仲の良かった姉妹に、切磋琢磨したライバルに、そして最も愛した家族に戻ることは、最早叶わないことに。

「どうして……。どうしてなの貴音ちゃん。」

「……。」

「わかってるんでしょ?」

「……。」

「あなたが……貴音ちゃん自身が私達の未来を崩壊させたと言うこと、わかってるんでしょ!!」

そうだ。眠り姫の復活したこの世界の未来があずさ達の世界なのだとしたら。

過去へタイムスリップした貴音が、未来を救うために星井美希や如月千早と対抗出来る“眠り姫”を作りだし、時の魔女の能力で眠り姫を連れて未来へ戻り戦うはずだった。

「……。どうしてなの?」

「お姉さま。もう無理なのです。あの日、あの二人を手に掛けたときから、私にはもう後ろに道すらも無くなりました。ただ進むだけ。ただ、殺め続けるだけなのです。」

伊織は貴音の悲しみの正体を悟った。

貴音はこの時代の星井美希を眠り姫にして制御し、未来の眠り姫二人と戦わせることだけをずっと目標に進んできた。だからこそ、美希を眠り姫にしてしまう時も積み重なった実験の失敗も『その先に予測出来るであろう未来』までも全く見えていなかった。

タイムスリップこそが全ての元凶なのだ気付いたのは既に多大人数を手にかけて後だった。自分の行動や犠牲にした命、苦悩や人としての心をひたすら殺して実験を繰り返した。

実験で眠り姫を作り出した自分の行動が元凶なのだ知った時、彼女は心の底から絶望した。

そして取り返しが付かないところまで来てしまった貴音は現実を否定してその道突き進むしかなくなってしまったのだ。

「お姉さま。眠り姫を作り出すのです。魅力に支配されない究極のアイドルを……。」

世界を狂わせた元凶。彼女達の世界を破壊した元凶が自分自身なのだと思えたくなく。

「お姉さま。これで未来は救われるのですよ。」

更にはまだ未来を救えると言う自己暗示に支配され、彼女自身が既にそんな簡単なことにも気付くこともなく上手くいかない世界を恨み、その世界に復讐したいと思うようになってしまった。

「お姉さま、早く。さあ！」

これ以上無いほどに不憫な実の妹。だが、それでももう許すことも出来ない。

それほどもでに彼女の罪は償う方法がもうなかった。

「お願いします。お姉さま、どうか。」

そうとなれば、世界にも未来にも、現在を生きる全ての人々にも、彼女にも、あずさがしてあげられることが、たったの一つしかなかった。

「……貴音ちゃん。」

「さあっ!!」

一瞬だった。

あずさの姿が消えた

瞬きをした後に飛び込んできた光景は

妹の胸部を貫く赤く染まった姉の右腕だった

その右腕は

震えながら実の妹に致命となる一撃を刺し込んだ

貴音は口から液体を吐き出し

その場に崩れ落ちた

その光景を見ていた私と響は

目を離すことが出来なかった

これほどまでに残酷で哀しくて苦しいのに

美しい光景をみたことがなかったから

「貴音ちゃん……ごめんね。ごめんね……。」

「お姉……さま。ごぼっ……わたくし……は。」

「ごめんなさい……。ごめんなさいっ。」

「謝ら……ない……。で。わたくし……。こ、そ……。」

「こんな頼りない姉でっ！ あなたにこんな仕打ち……。」

「良いの、です。今まで……。いのち……。を、弄んだ……。わたくしには……。幸せ過ぎ……。結末です。ありがとうございます……。ございませ……。」

「ありが……。と……。」

「貴音ちゃん、あなた……。」

「ああ……。やっ……と……。やっ……と、死ぬ……。……ことが……。」

「……。」

「ごめん……。なさい……。お姉……。……さま。ごめ……。……な……。」

美希。……。はる……。……。」

「っ!!」

胸の中で永遠の眠りに付いた貴音をあずさは強く、強く抱きしめた。嗚咽を漏らす彼女に伊織も亜美も真美も、響もかける言葉など無かった。何を言ってもそれらは全て無粋にあずさの心を傷つけるだけだったから。

「……。終わった。」

「今まで何度も人の死を見てきたけど……。……やっぱ慣れない……。ね。」

「……。そだね。」

大切な人を失うと言う消えることの無い傷を、きつとこの二人も
持っているんだろうと思う伊織だった。

そしてその傷は、自分にも深く付いているのだということも。

伊織はその気持ちを抱きつつ、自らの手で別れた二人を見続けてい
た。

第十章

終

第十一章 —素直な心—

終幕へと向かっている中、未だに地響きが鳴り止まない地下でそれが、まるで時が止まったかのように動こうとしなかった。

入り口から入って部屋の中央付近では、今や二度と目を開けることの無い妹を抱きしめながら嗚咽を漏らす姉の姿があり、その後方では身体をを少しずつ回復させながら座り込む少女。その右隣に立つ双子の姉はおしやぶりを加えながら立ち尽くし、更にその隣では妹が同じくおしやぶりを加えながら座っていた。

双子の後方にはポニーテイルの少女が座っていて、その側に女性講師が少女の肩にもたれ掛かっていた。

2分もないくらいは無言の時間が過ぎて、身体を休めて回復する少女。水瀬伊織が未だに妹を抱く姉、三浦あずさへと声を投げかけた。

「ねえあずさ……その娘とあなたは未来の人間なのよね？」

あずさは抱きしめた貴音をそつと離し、膝の上で眠らせた。

体制を変えず、背中越しに自分達のことを話し始める。

「……この娘と私は、80年後の未来から来た未来人。眠り姫の復活を阻止し、この貴音ちゃんを見つけ出すのが私の役目だった。」

「そう……千早にあのバケモノの話をしたのは、あんただだったのね。」色々と合点がいった。この戦いが始まる前、千早が私に色々と腹の立つことを言った行動の裏にはそういう経緯があったわけだ。

あずさが千早に未来の出来事を話し、近々その眠り姫が復活してしまおうと言うことと、私や他の誰かがあの鍵を使ってこの部屋の扉を開き、眠り姫を外に解き放って世界が終焉へと向かう。という大まかな未来があったわけだ。

それを手早く阻止しようとしていたのが千早だった。

だが千早も突然未来の話信じるとはほどバカじゃない。

何らかの形であずさの話信じた千早は、私に鍵を渡すように迫ってきた。

ちゃんと話をしていれば、信じていれば、感情に任せて考えなしの行動をしなれば。

きっと今の絶望が生まれることはなかったはずなのに。

「・・・何やってるのかしら、私。」

先ほどの激しい戦いが収束したことで、急激に冷静さが戻ってきた。

自分の愚行がはずさの居た未来へと繋がってしまったことに腹立たしく、それ以上に今までのどんな経験よりも情けなさでいっぱいになってきた。

その後、失ったものの大きさに押しつぶされそうなほどの悲しみが襲った。

堪える間もなく頬に雫が流れ落ちる。

「・・・ごめんなさい。」

「伊織・・・？」

今度は伊織が涙を流し、嗚咽を漏らす。

自分の行動が周りの人間を、世界を危険に晒し、自分の一番大切な人までも失った。

伊織の中に渦巻いていた自責の念が、緊張の糸が切れたことよって噴出したのだ。

「わ・・・私のせいでみんな・・・私が扉を・・・開けたから・・・。ごめんなさい。・・・ごめんなさいっ!!!」

涙が止まらない。

拭っても拭っても溢れ出る。顔をぐしゃぐしゃにしても心の悲しみは決して消えない。

未来への喪失感も、失った心の穴も、過去の罪の重さも、全てが今伊織に襲い掛かっている。

背中を小さくして泣きじゃくる伊織を見て律子が響の背中を軽く叩いた。

響は律子の気遣いに感謝しつつ伊織を強く、強く抱きしめた。

「違うぞ伊織!」

声を大きく伊織の言葉を否定した。

そして子供を諭すような声で伊織に告げる。

「未来じゃ眠り姫が復活してる。誰かが扉を開けた未来があったん

だ。それが伊織かもしれないし、自分かもしれない。他の誰かかもしれない。今回は伊織が貧乏くじを引いちやっただけさ。そうだろうあずさー！」

いつの間にかあずさからは嗚咽は聞こえなくなっていた。元々、覚悟していたことだったのだろうか。気持ちの落ち着きを取り戻したあずさは貴音を膝に寝かせて、そのまま転移を使って身体を伊織に向き直らせた。

動かずに向き直れるとは便利な能力ね。と律子が思いながらあずさの表情に同情してしまう。

響も、いつも笑顔だったあずさの沈んだ表情に新鮮さと痛々しさを感じながらあずさの言葉に耳を傾けた。

「確かに、私の世界では扉を開いたのは千早ちゃんだったらしいわ。その責任を感じて必死に止めようとしていたんだそう。」

あずさが響の言葉を肯定する。普段から本を読む響は未来に過去、異世界とファンタジーの方面でそれなりに強い。千早のあまり読まないジャンルの世界観を持っている響だからこそ、あずさの話をよく理解できた。

幾重にもある平行世界で起こる若干の異なる事象が後に大きな変化をもたらす事もある。

今この瞬間も平行世界は生まれているのだ。響が伊織を抱きしめた世界、抱きしめなかった世界。扉を開いたことを罵った世界。その幾重にもある世界は存在していると響は思っている。そしてそれは事実であると、ここに居る未来人のあずさが証明してくれた。

「な！ だから伊織だって今回の被害者なんだ。伊織が開けなくてもきつといつか誰かが絶対に開けたさ。悪くない。伊織は悪くないんだ、な！」

響の胸に顔を埋めて泣く伊織をあずさはジツと見つめていた。時間が存在する限り、いつ誰が何をするか解らない様々な可能性があるこの世界で、千早が解錠し、伊織が解錠しとキツカケさえあれば変わってしまう世界。神の作ったシステムか、悪魔が楽しむ籠の中なのか、それすらも人には解らない。

ただ、平行世界があることで運命は絶対ではない。とこの世界が認められている。

その最後の証明は誰に委ねられているのか。

それはまだ、誰にもわからない。

「それからティーチャー律子も、さつきは庇ってもらってありがとう。」

脚を伸ばして後ろに手をつき座る律子が、左手をチョイチョイと振って気にするなど合図する。

貴音の風の刃で切り裂かれることは辛うじて防げても貫通したダメージ自体は防げなかったようで、立つことはまだ出来ないようだ。

そこで今度はあずさが律子に対して質問を投げかけた。

「あの、少しいいかしら？ えっと、そこに居るのは貴音ちゃんとは違う律子さんのよね？ 本物ということと・・・いいのかしらあ？」

律子が現れてからと言うものマトモな説明をされていないのは全員揃ってのことだが、特にあずさはホンの少し前まで眠っていた訳だからその疑問も当然だ。

あずさは律子から貴音へと変化するところを直接見ている。つまりとところ、貴音が自分の膝の上で静かな眠りにしているのだから、別の律子が存在していることはあずさからすれば異常極まりない訳で。量産型律子と言わんばかりで混乱してしまいそうだった。

その疑問自体は伊織も同じだったようで響の胸の中で眼を瞑って話しを聞いていた。

「ええ、私は本物の秋月律子よ。ティーチャー律子の方が馴染みかしら？」

「りっちゃんとは100年前の別次元、つまりお姫ちゃんに負けなかったりっちゃんなんだよ。」

「ひ、100年!？」

突然大きな声で驚いた響の声に、泣き疲れ始めて遠のく意識をフワフワの浮遊感に任せていた伊織まで驚いて飛び起きた。

うたた寝の思わぬ回復力で身体が割りと動く。

見上げると響の顔があわてふためいていた。

「え、いやだつて・・・100年て言ったらスゴくお婆ちゃん！」

「誰がお婆ちゃんですつて？」

「ひっ・・・じ、冗談さ冗談！」

「まったく・・・それよりよく貴音の封印を解けたわね。誰が解いたの？」

その疑問は伊織もあずさも気になった。

貴音は自分の脳ですら操作できる封印術師の謂わば究極系だ。あずさの封印を解くなんて律子以外は到底不可能なはず。

「ひびきんだよ？」

と、言う風に度肝を抜く発言が飛び出す。

あずさも伊織も到底信じられなかった。

律子はしばし顎に指を添えて考える素振りを見せたが、やはり彼女にもわからないようで響に問いかけた。

「あなた封印術師じゃないわよね？ どうやったの？」

「いや・・・それが実は、あずささんにかけられてたのは基礎封印術の一つだけだったんだ。あれくらいなら自分でも簡単に解けるぞ。」

その言葉に律子もあずさも、驚愕の表情を見せる。いまいち分かっている伊織が律子にどう言うことなのか説明を求めた。

「つまりどう言うことよ？」

「つまり、貴音は初めから彼女・・・あずささんを実験に使うつもりなんかなかったのよ。」

伊織には理解できなかった。

あずさを実験に使うつもりがなかったのなら何故こんな真似をしたのか。

あずさを拘束して全力で戦って負けて最後には命を落とした。全くもって訳が解らない。そして隣でも響が伊織と同じ顔をしていて律子が苦笑いを浮かべる。亜美と真美も未だに要領を得ていないと見た律子が全員に分かりやすく説明をした。

「今となつては推測になつちやうけど、多分これは貴音の自作自演だったのよ。」

「自演・・・あつ」

「そっか・・・そうだったんだね。」

ここで亜美と真美が理解した。

まるで授業のように律子が二人に続きの説明を任せる。

二人は律っちゃんとの面倒くさがりー！ とブーイングを浴びせるが律子は知らぬ顔をして黙ってしまった。

「ちかたない。真美ヨロー。」

「うええ・・・二人ともずっこいよ、もうく。えっとね・・・お姫ちゃん他のもないあずさお姉ちゃんに殺されたかったんだよ。でも普通にお願ひしたんじやダメだと思っただね。」

「あずさお姉ちゃん優しいから。だからお姫ちゃんはあずさお姉ちゃんを追い込んで殺すしかないようにちむけたんだよ。自分がどうしようもないくらい狂ってる演技をしてさ。」

「自分で命を絶てなかったんでしょね。そして最愛の姉の手で死ぬことが彼女の最後の願ひだったのよ。」

結局、真美亜美と続いて最後は律子が説明してくれた。三人はとも分かりやすく説明してくれたお陰で伊織と響は複雑な表情に変わった。

これは酷い自己満足だわ。

この世界に来て講師に成り済まし、生徒を使って眠り姫を作り出して後にその罪を自覚し、命を絶てず最後には姉の手での死を願って死んだ。

あまりにも酷い身勝手。そしてあまりにも可哀想な話。

彼女は間違いなく志していた。未来の眠り姫と戦うための力を獲得する。それは純粋な気持ち。

だけど星井美希の実験で制御は出来ないが眠り姫を作ることには成功した。それから実験を繰り返したが全く成功せず、気付けば後ろには死体の山。

そしてその時にやっと理解したのね。星井美希は成功では無かったことに。

その時にやつと気が付いた。

『自分が未来を崩壊させるものを作り出したことに』

それが分かったときの貴音の絶望はきつと計り知れないものだったに違いない。未来の事に目を向けすぎて今を疎かにした結果だ。

未来に帰ればこの世界とは関係無い。だが、直接未来と関係のあるものを作ってしまった。封印したとはいえ誰かが星井美希を解き放つかもしれない。

そうなれば、未来は記憶通りの道を辿るだろう。後は眠り姫に対抗して倒すことのできる力を作り出すしかない。それが考えられた唯一の方法だった。

結局貴音も、未来と同じ道を歩みたくなかったと言うこと。

「何よ……。あんたも戦ってたんじゃない、運命と。」

響は泣いていた。人一倍感化されやすい彼女のことだ。きつと考えてる内に貴音の気持ちを少し感じ取ってしまったのかもしれない。

あずさは貴音の頭を撫でていた。艶やかな銀色の髪と綺麗な顔、到底死んでいるように見えない。

亜美と真美も貴音に近付いてその眠る顔を見つめていた。貴音とどういった関係かはわからないが、二人の性格の事だ。きつと親しかったに違いない。

「・・・何とか動くわね。さて、そろそろ外に出ましょ。地響きもまた酷くなってきたし。」

律子がそう呟いて皆がハツとなる。

まだ外では千早と春香が美希と戦っている。

あの戦いに参加しても足手まといなのはわかるけど、少しでも力になれるかも知れない。

みんなが立ち上がったって、あずさは貴音を寝かせたまま転移する意思を伝えてきた。

「あずさ、中庭に行きなさい。千早が居るし、やよいもそこに・・・」
「わかったわ。」

そうしてあずさも転移の準備をした。

亜美と真美は立ち上がった律子を軽く支えながら同じ速度で歩く。

私も地上への扉に向かって歩き出した時、響だけが歩を進めず律子に質問した。

「なあティーチャー律子。その、ひよつとしたらなんだけど訊いて良
いかな?」

「ん? なにかしら?」

律子を支える亜美と真美、それにあずさも私も響の質問を待った。

「もしかしてティーチャー律子は、前から貴音のこと知ってたのか?」
不思議なことを訊くものだと思った。

私も途中参加だったけれど律子と貴音の関係が敵同士であると会
話の流れでハッキリしている。

以前にも戦ったようだし、能力も知ってておかしくない。

響は私よりも遅くこの場所に到着したのにも関わらず何故そんな
事を思ったのか。

まあ今の地上のことを考えると、そんなこと大したことじゃないと
思って気にしなかった。

「そりゃ知ってたわよ。だって……」

この言葉を聞くまでは……。

ところ変わって地上。

いまだに中庭の周囲で繰り広げられる戦闘。気持ちよさそうな芝
生の上に寝かされたやよいの亡骸を護る千早と、その隣で膝をつく春
香の姿を空の上から美希が見下ろしていた。

二人の戦闘は周囲への被害も見事なもので、旧校舎の壁に穴が開い
たり崩れたり、中庭の地面がえぐれたりとそろそろ原型がなくなつて
きている。外の木々もまだ燃えていて新校舎の方も大きな音を立て
て崩れていた。もちろん千早とやよいにも影響が出ないわけではな
い。流れ弾が、とにかくよく飛んでくるので分厚いシールドを張って
凌いでいる。ただ飛んでくる攻撃の殆どが光線系なので、部分的に防
げばいいという理解に至った。なので分厚くて小さいシールドを

作って閃光に当てればいいだけなので今までよりも魅力の省エネが半端ない。しかし、防ぐ数が多かったため千早の息は切れ切れだ。春香もどんだん美希の動きに着いていけなくなっていた。目にも止まらない戦いは美希が振り下ろしたスタンドマイクの鎌を防いだことで、春香は地面へと飛ばされた。クルクルと回って上手く着地した春香もやはり息が上がっている。

あれだけの攻防の後でも美希はやはり、疲れを見せる様子はない。

「ふう・・・相変わらずスゴイ戦闘感だなあ。どの攻撃もギリギリで避けられてる。」

「春香でもかなりの強さなのに、これほどなんて・・・。」

戦闘開始直後はほぼ互角の戦いをしていた春香も時間をかけるにつれて動きが悪くなっていった。

本物の身体というわけではないだろうからマトモに戦えてるだけでも奇跡的だけど、魅力の消耗が心配になってしまう。美希はやはり眠り姫の身体だからか消耗してもすぐに回復してしまう。というより消耗しているのかもわからないほど動きが良いままだった。

「やっぱり性能差が出ちゃってるかなあ。」

「あつちは完全攻撃型。こっちは防御型と変則的特質型。火力差はどう考えても埋まらないわね。」

「でも攻めないと一気にやられるよ。千早ちゃん、役割は今のままよろしく！」

そう言って春香はまた美希に向かって飛び去って行った。上空では光が飛び交い始める。

美希と戦っているのは殆ど春香で私は高槻さんを護って動けない。水瀬さんにあずかった彼女の身体をこれ以上傷つけさせない為にも、せめてもう少しだけ戦力が集まれば・・・。

突如として鼻腔にフワツとした爽やかな香りを感じた。フと右を向くと、腕に見たことのない女性を抱えたあずささんが立っていた。昼間に見た絵になる綺麗な姿とは一転して、身体の至る所に赤黒い染

みが付いている。

右腕は肘までその色で染まり、頬や腹部にまでそれは飛び散っている。

地面に寝かされた高槻さんを見て驚いた顔で数秒停止した。そして高槻さんの右隣にその綺麗な銀色の髪をした女性を寝かせる。服には穴が開き赤黒い染みが広がっていて、その人ももう動くことがないことを物語っている。

「千早ちゃん、大丈夫？」

「あ、あずささん。その人は……。」

「この娘は妹の貴音ちゃん。……昼間に話したでしょ。」

この人が貴音さん。未来から来たあずささんの妹。状態を見ても決して良い結末じゃない。

悲劇がまた起こってしまったのだろう。大切な人を失う悲劇が。そしてそれは本人たちで終わらせてしまったということ。二人の状態を見てわかった。

あずささんは高槻さんをジッと見ている。まるで謝るような表情で一筋涙を流した。

すぐに立ち上がって上空で戦う二人を見る。そして身体が固まった。理解出来なかったのだろう。私たちが束になっても敵わないあの星井美希が今、たった一人の少女と少なくとも遊び感覚ではなく本気で戦っている。

「一体、あの娘は……？」

「春香、まだ頑張ってくれてたのね。」

旧校舎から歩いて水瀬さんが出てきた。我那覇さんと謎の双子も続く。そして律子を見て私の表情が変わる。何故ここに彼女が居るのだろうか。仇を討つと言って律子を追った水瀬さんが冷静になっていることも不思議に思う。警戒や敵意をむき出しに律子に向かって睨みながら立ち上がる。

「大丈夫よ千早。その律子は本物だから私たちの味方よ。」

水瀬さんがすれ違いながら、そう口にした。

本物の律子だなんて何を根拠に信じれば良いの？

もしかするとみんな封印術で記憶を封じられてる？

「美希。あなた・・・」

双子に肩を借りた律子が空を見て、か細く呟く。

美希の戦いに律子の顔にも微かに畏怖の色が浮かぶ。

どうやら律子から見てもあの二人の戦いは異常に写っているようだ。

「なんでこんなことになったのかしらね。・・・貴音、あなたは・・・。」

みんなが寝かされた貴音さんの顔を見る。

何故かみんなが律子の話を理解しているよう見えた。

話が見えない私は静かな声で問いかけた。

「一体何があったと言うの？」

「それについては千早、あなたに話しとかなきゃいけないことがあるの。私を信じて聞いてくれるかしら？」

水瀬さんが真剣な眼差しで私の目を射ぬいた。

力強い眼光は信じて欲しいと言う気持ちが現れていた。まさに此刻、私が水瀬さんに話す機会を得るために必死に説得した、あの時の強い思いのように。

「水瀬さん。私はあなたとよくケンカもしたし、良い印象なんて殆んど無いわ。」

水瀬さんが少し萎縮した。

私は水瀬さんとは決して仲良くなかった。入学から変わった目付きで見られ、防御型と言うだけでバカにされたこともあった。その都度、口では嫌味の言葉が溢れだし態度に表れることもしょっちゅうだった。

確かに嫌な関係だった。

「でも・・・」

だけど、一つだけ私は水瀬さんに一度も伝えたことがない気持ちを今、口にした。

『私は真っ直ぐにぶつかってくるあなたを、一度も疑ったことなんて無いわ。』

水瀬さんは顔を上げた。驚きと何故と言う疑問が彼女の頭の上を回っている。

私はこの言葉で、水瀬伊織と再び1から関係をやり直す。そのつもりで私は彼女の目を見て、声を低く強く言葉を放った。

「あなたの直向きさは本物だった。努力の為に学ぶことを怠らなかった。知らなかったのかしら？」

水瀬さんの目尻に水滴が溜まる。

今まで素直になれず、いつも口から出るのはお互いを侮辱するものばかり。

でも、例え関係は険悪のままでも、信じてもらえなくても、出来ればこの言葉だけは卒業までに伝えたかった。

『私はずっと、あなたに憧れていたのよ?』

そう。私は彼女に、水瀬伊織に憧れていた。

考えを止めない頭の回転。努力を苦と思わない直向きさ。難しくても果敢に挑戦する精神。一度口にしたら最後までやりきる行動力。どれも私が彼女から見出だして彼女に学んだ部分。

険悪であろうと犬猿であろうと、そんなことは些細なこと。口喧嘩をしてもその本質は向上心から来るものだった。とても羨ましかった。

水瀬さんは俯いてしまった。肩を揺らして水滴が地面に落ちる。彼女の左肩に私の右手を乗せた。

30秒ほどの時間だけ水瀬さんは涙を溢し、そして顔を上げた。

「さあ、聞いてもらおうよ。春香が頑張ってるうちにね！」

その顔はスツキリしたような、吹っ切れたような清々しく自信に満ちた笑みを浮かべた。

私たちの関係は、もう前のように険悪になるような事はないだろう。仲の良い友人になる。そんな未来が見えた気がした。

私は水瀬さんの言葉に耳を傾けた。

私と別れた後、地下で何があったのか。

律子に化けていた貴音さんの話。本物の律子と戦い最終的にはあずさんが地下の戦いを終わらせたことを簡単にだが要点をしつかり伝えてくれたので解りやすかった。

それほど長い時間でもなかったはずなのに、内容の濃さに少し現実味のない感覚になる。

あらかたの説明が終わった後は律子が話を引き継いだ。

双子に支えられていた律子は私の前に座り、その話を始めた。

「あなたが千早ね。私は……って、自己紹介は知らないか。さつきその伊織にも驚かれたんだけど、あなたもきつと知らないのよね？」
「一体何を……」

勿体ぶった言い方をする律子だが、すぐに本題を口にした。

『貴音は私の教え子で、美希とは元々この学院で仲の良いクラスメイトだったのよ。』

律子のこの言葉には当然の如く絶句した。

貴音さんは学院に入学して数年教えてもらった師をその手にかけて、苦楽を共にした仲の良いクラスメイトを実験材料にした。

狂気と言う他がない。

「そりゃ言葉も出ないわよね。私もそうだったもの。」

私も水瀬さんも、恐らく他の誰もが同じ反応に陥るだろう。

どこの世界に師を手につけて、仲の良い友人を実験に使う人間がいると言うのか。その結果がとつともない悲劇を生むと言うのに。

「貴音は目的の為に狂気に取り付かれていた。間違いに気付いたときにやっと正気に戻ったのよ。」

想像を絶する。人間は強い目的や意思を持つとそこまで周りが見えなくなるものなの？

貴音さんにとって律子や美希、春香は一体どんな存在だったのかしら。

きつと大切だった筈。未来での暮らしに比べれば、受けた悲しみに

比べれば、この世界での暮らしはスゴく幸せだったはずなのに。

「こんな話、誰も浮かばれないわ」

「まったくよ。貴音も、そこに居る娘も、それに美希も。」

そこに居る娘と言う言葉はもちろん、今は芝生の上で胸に手を組み眠る高槻さんのこと。

美希も高槻さんも同じく貴音さんの実験の被害者だ。貴音さん、出来るなら最後と言わんばかりの高槻さんに対する実験は止めて欲しかった。

「やよい・・・？」

その声に私を含めみんな彼女の方を見た。

フラフラとおぼつかない足取りで高槻さんの側に近付き、その左隣にドサツと膝から崩れ落ちた。

こちらに背を向け顔は見えないが、月明かりに照らされキラキラと光る雫が膝と上に一つ、二つと濡らしていく。

「・・・なんで・・・やよい。」

高槻さんの額を撫でた後、我那覇さんは両手で自分の顔を覆ってうずくまった。静かな嗚咽、震える背中が一層悲痛に感じた。

我那覇さんもずっと高槻さんと一緒に居たのだから彼女の悲しみも当然だった。毎日遊び、お茶をし、笑いあったあの時には、戻ることがないのだと自覚するには十分だった。

「私が殺したのよ・・・」

いつもの高い声が気持ちに比例した低さで自然と耳に入ってきた。

水瀬さんは前へ一步、また一步と我那覇さんへ近付いて後ろに立った。我那覇さんは水瀬さんの言葉に嗚咽も震えも止まって固まっている。

「私がやよいを殺したの。私が——」

バチインツ!!

激しい音と共に我那覇さんの右の平手が水瀬さんの頬を捉えていた。

その勢いで水瀬さんは横へ倒れ込む。

「我那覇さん！ 違うのよ、高槻さんは——」

「良いのっ!! 良いのよ千早。どんな言い訳や理由を並べても、私はやよいを殺した事実が変わらない。さあ、響! 殴りたければ殴りなさい!」

そう言つて水瀬さんは目を瞑り無抵抗の意を示した。

我那覇さんは目から大粒の涙を幾度となく流し、水瀬さんに近づく。

「……!」

我那覇さんはそのまま水瀬さんを強く抱き締めた。

「良いわけないぞ!!」

我那覇さんは今までに聞いたこともない怒りと悲しみの混じった声で大きく叫んだ。

「良いわけない。伊織とやよいの仲の良さは自分が一番よく知ってるから。だから伊織がやよいを簡単に殺すなんてこと絶対はない。」

涙声で話す我那覇さんは水瀬さんの肩を持って引き離し、真正面から水瀬さんの目を見た。お互いの頬に涙を伝わせて続ける。

「伊織は今、きつとスゴく苦しいはずさ。強がつてたつてそれくらいわかる。でもその苦しみを受け入れなきや前に進めなくなっちゃうから。ここで逃げたらやよいに怒られるぞ。」

我那覇さんは手を話す。二人は正座を崩した座りかたで地面におしりをペタつとつけた。

そして今度は水瀬さんの顔を自分の胸に引き込み優しく抱き締めた。

「なんでこんな時にまで素直になれないかなあ……。やらなきやいけない事があるのはわかるけど、伊織はちよつと気持ちに嘘をつきすぎだぞ。今なら大丈夫だから……。やよいの事、思いつきり思つてあげよ。」

「……ふっ……うう……。あああああ。」

我那覇さんの腰に手を回していた水瀬さんの手が、服を強く握りしめて彼女は大声で泣いた。

何度もやよい、と名前を呼んで胸にしまっていた気持ちを全て吐き出した。

我那覇さんは静かに涙を流し、抱き締めたまま優しく水瀬さんの頭を撫でた。

「さて、伊織はしばらく気持ちの整理をつけてから行動させるとして。」

律子が我那覇さんと水瀬さんをしばらく戦線に出さない考えを私とあずささんに伝えた。

魅力の消耗もあることだし、私もそれには賛成だった。

あずささんも異議はないようで、コクンと頷く。

「千早お姉ちゃんも亜美と真美とでちよつとお留守番だね。」

そう言って双子の一人。黒いシユシユで髪を左側サイドテールにしている女の子が提案した。黒いドレスを身に纏っていてメイド服にも見えるその風貌は袖や首元、丈が膝まであるスカートに白いヒラヒラがついていて白のニーソックスにフォーマルシューズを履いている。

そして何故か二人揃って口にくわえているおしやぶりが異常な存在感を示していた。

その二人が私の後ろで両肩に手を置いた。

「となると、私とあずささんでやるしかないわね。」

「そうですね。あの戦いに加わって戦力になるかは判りませんが、何もしないでいるわけにはいかないですもの」

今の状況だとマトモに魅力が残ってるのは我那覇さんとあずささん。何らかのダメージが残ってるのだろうけど律子も戦えるみたい。

今まで結構無茶をした私と水瀬さんは休憩のようで、正直ありがたかった。

私も高槻さんを護りながらだったから少し魅力に余裕が無くなってきた。今の彼女達はスゴく逞しく見える。そして空で未だ戦う彼女も。

「しかし、あのリボンの子スゴいわね。美希と互角に渡り合ってるなんて。」

私は耳を疑った。

終 第十一章

第十二章 ― 激戦のカギ ―

今は何時頃だろう。

少なくとも少しずつ朝に近付いている。

本来なら今ごろは部屋でゆっくりと眠りにつき、十人十色な夢を見て翌日も変わらない日となるはずだった。

だがその日々もきつと終わったのだろう。

未だに燃える木々と丸く大きな月明かりで空はとても明るい。

校舎はもう原型を留めず、どこから崩れてくるかわからない。

その校舎の中庭で世界の命運を掛ける戦いが繰り広げられていることなど、当事者以外に知りほしくない。

空で戦う二人と地上で思考を凝らす三人。気持ちに吹き出して涙を流す二人と。少女たちは今、全てをかけて戦う時に直面していた。

「律子……今、なんて。」

私は律子の言葉に耳を疑っていた。

空で戦う彼女の事を、まるで知らないような口ぶり。

美希と貴音さんの先生だったのなら、彼女を知らないわけがない……ないのに。

「あのリボンの女の子、アイドルみたいだけど相当強いわね。実戦経験があるのかしら。」

「り、律子？ 彼女のこと……わからないの？」

まるで自分に異常があるような言われ方をした事で少しムツとした律子は振り向いた瞬間に困惑に変わる。

何故なら、私の顔が目に見えて青ざめていたからだ。

当の律子からしてみれば、私の顔はさつきまで話していた女の子とはまるで別人のように色が消えていた。

しかし、律子は私がそうなった訳を理解していた。

その問題を解決するために再度、空へ目を向けて春香の姿を確認する。

かなりのスピードで武器を弾かせ合い、能力を使い戦う二人を目で追って数秒。

私に向き直り首を横に振った。

「まず間違いなく、私の知らない女の子よ。」

この答えに私は酷く大きな衝撃を受けた。あまりの出来事に右手で額を抱える。

春香は美希とずっと一緒だった。そして貴音さんも。なら春香のことを律子が知らないわけがない。

さっきの水瀬さんの説明だとこの律子は別の世界から来た律子だと説明を受けた。

その中から一つ考えられるとすれば・・・律子の世界に春香がいない、という可能性。

「・・・律子、あなたの世界の美希の出身は？」

「・・・あの子、美希は都の侯爵の娘よ。両親ともに健在で姉が一人。たまたま家を抜け出して街でアイドルの話聞いたらしいの。興味を持って親に話したら喜んで、泣きながら連れて来たわ。さすがに引いたけど。」

「この世界の美希は施設に入ったらしいの。そこで今戦っている天海春香に出会って一緒にこの学院に入学。同時期にアイドルとして卒業したらしいわ。」

私の顔を見て質問の意図を察したのか、必要な情報をもたらした私はこの世界の美希と律子の世界の美希が大幅に違う道を進んでいることがわかった。

律子の世界の美希は家族が健在で施設に入っていない。つまり、春香と出会うことがない。そして春香もアイドルを目指すことはなかったということ。これから出会うのか、それとも一生出会うことはないのか。それはわからないが二人の運命は大きく変わっていた。

そこへあずささんがタイミングを探していたように会話に混ざる。

「あ・・・あの」

「どうかしましたか？」

「その・・・春香ちゃんのことなんだけど――」

ドガアーンっ!!

突然、春香が目にも留まらない勢いであずささんの後ろを通過し旧校舎の支柱に激突した。

あずささんも律子も私もその轟音に心臓が跳ね上がり、我那覇さんと水瀬さんは身体ごと跳ね上がった。いた。

パラパラと支柱の破片が散らばって砂ぼこりが舞う。

春香は上体を起こすも両手を地面について四つん這いになってしまふ。

「イタタタ。」

「春香!」

春香に駆け寄った。かなり痛烈だったのか春香は左の脇腹を押さえる。激しい戦闘を物語るように擦り傷に切り傷が絶えない。

「春香・・・無茶してはダメよ。身体が持たないわ。」

「えへへ、大丈夫だよ千早ちゃん。私今、100年ぶりの痛みで正直ちよつと嬉しいんだ。」

春香の身体は実体化していた。昼間に触れられなかった腕にちやんと触れるし温かさもある。

今の春香は傷も付き、痛みもある。普通の人間と何も変わらない。

『ありがとね。響ちゃん』

く 回想 く

月が輝く森の中。能力によって作られた狼が、絶えず涙を流す主人を乗せてゆつくりと歩いていた。

ここは旧校舎の北側。いつの間にか緑の森林から桜の森林へと移

行している。

迷いもなく進む足取りがスツと止まった。鼻をピクピクとさせて、一言「ガウツ！」と吠えた瞬間。

ドガシャーッ!!

地面が揺らぐほどのとてつもない音が旧校舎の方から鳴り響いた。爆発のような、雷が落ちたようなその音は3秒ほどで聞こえなくなったが、響はこの音に驚いて一つ、忘れていたことを思い出した。

「あ……千早っ!」

友人の死という強烈な印象と悲しみですっかり忘れていたが、その前に雪歩を追いかけると言ってくれたのは千早だ。眠り姫の、山をも貫かんとする一撃を防いだ後なのに、もしまだ戦っているのだとしたら千早の命も危機にさらされているに違いない。

血の気が引いて嫌な汗が額を伝う。脳裏にさっきの悲惨な光景が浮かぶ。今の轟音が千早に向けられたものだとしたらと思うといてもたつてもいられなかった。

「千早ちゃんなら大丈夫だよ!」

走り出そうといぬ美にしがみついた時、謎の声に呼び止められた。少し高めの澄んだような声。風のように耳に入るその声が出した方にいぬ美は反応した。

響が月明かりを頼りに目を凝らすと、そこには見覚えの無い女の子が一人立っていた。一瞬で印象に残ったのはリボン。彼女の第一印象だ。髪は肩にかからないくらいの長さで頭の左右に短いリボンをつけている。紺色の服は肩から胸に掛けて白いラインが入っている。その下に赤いスカーフをこれまたリボンのように括っている。今はあまり見ない洋服でかなり昔に『セーラー服』と呼ばれていた洋服だ。紺色の少し長めのスカートはシンプルというに相應しい格好で、一言に『純粹』という言葉が彼女を見て頭に浮かぶ。

「……誰?」

「私は天海春香。我那覇響ちゃんだよね?」

右手を胸に軽く触れて名乗った彼女を少し警戒したが、いぬ美が威嚇しないところを見ると悪意が有るわけではなさそうだ。警戒心が

軽くなったのがわかったのか春香が近づいてくる。

「春香・・・千早が無事って本当!？」

「本当だよ。・・・能力でわかるの。千早ちゃんは大丈夫。焦らないで。」

「そ、そうなのか。なら良かった・・・。」

どんな能力なのか少し気になったが、実際アイドルの中には千里眼や標的の捕捉能力をもつ者もいる。

その類なのだと思って、疑う気持ちはあるものの一先ず心は落ち着いていた。

「響ちゃん。いつもみたいにハム蔵を造り出してみて?」

「う、うん・・・。でもどうして自分の能力を?」

「千早ちゃんに聞いてたから。魅力で動物を造る心の優しい女の子が居るって。」

千早にそう思われている事に少し照れる。言われるがままにハム蔵を手のひらの上で魅力からイメージで造り出し、10秒ほどで光輝くハムスターが出来上がった。

ハム蔵はまるで本当のハムスターのように両手で頭をこすってから、腕を駆け上がり肩を登って頭の上まで到達して止まった。

「響ちゃん。あなたにお願いがあるの。」

響に春香の声が低く響いた。眼光からもその真剣さは痛いほど伝わってくる。春香が何を考えているのかはイマイチわからないが、今のこの状況でとても重要な事であるのはわかった。

「響ちゃんは魅力を実体化出来るんだよね。そのこのワンちゃんみたいに。」

「・・・出来るけど、何を実体化するんだ?」

春香の手が響の手を掴もうとする。

そのままスツと通り抜けた手は、手首から先がグワンとマーブル模様みたいに変んだ。それを見て驚いた響は反射的に後退りした。

人間じゃないことに響は強い警戒心を示す。

「私を・・・実体化してほしいの。」

「・・・何で実体化するんだ!? 目的は!」

「私はあなた達を護りたい。もうこれ以上眠り姫に、美希に人を殺めてほしくないの!」

春香の頬が一筋光る。

それを拭って頭を下げられた響は戸惑った。

信じて良いのかがまず分からないし、何となく眠り姫と関係がある人なのかとも思える。

しかし、声も表情も一言に切実と言わざるを得ない。それほど必死さが伝わる。

「一つだけ、訊いていいか?」

「・・・」

「春香とその・・・美希とはどういう関係なんだ?」

「家族だよ。」

ハツとした。響にも家族には強い思い入れがある。入学が決まって実家を離れてから寂しいときは能力でハム蔵やいぬ美とよく添い寝をした。もちろん、眠れば能力は解除されるのだから朝には一人の起床だったが。

実家に帰るとみんなの優しさに心配をかけまいと強がったりもした。

家族は誰しも心の支えとなることはあるはずだ。

少なくとも響にはそれが家族の定義だった。

顔を上げた春香の真剣な声と真剣な眼差しは一層強く放たれ、響の両目を一切揺らぐことなく見つめ続けている。

なるほど、人の目を見て話せとはよく言ったものだ。たったこれだけの事で春香の言葉が真実かどうかがよく分かる。

響にも兄がいる。仕事が嫌いで気かつけばサボる事を考えている兄だが、もしもその兄が豹変して殺人鬼になったとしたら自分は止めるか逃げるか。いや、きつと必死に止めるだろう。逃げたとして赤の他人が被害に遭うことは身内として断固避けなければいけない。

それを考えると春香の気持ちは痛いほど分かる。

間髪いれずに返ったこの言葉に、響の気持ちは言うまでもなく固まった。

疑う気が無くなったと言えば伊織に怒られてしまいそうだが、それでも春香の願いを聞き入れても悪い方へと進む気は不思議としなかった。

「いぬ美、ありがとう。しばらく休んで。・・・春香、自分の手の上に手を重ねて。」

響はいぬ美に礼を言った後、手のひらを空に向けて指示をした。春香もすぐに手のひらを重ねる。

響の後ろに居たいぬ美が胴体から少しずつ光の粒子に変わり、その粒子が少しずつ春香の身体にくっついていく。

いぬ美は尻尾がなくなり、首から顔に鼻先と耳が完全に光となって姿を失い、春香の身体は腕から足に胴体と頭まで完全に光に包まれた。

「自分の姿を強くイメージして！」

光はどんどん強くなって目も眩むほどの輝きを放つ。

そして今度は光の粒子が足先から徐々に離れて消えていく。足から膝、胴回りと胸に両手に顔。そして頭。

完全に光が離れた春香の姿は、アイドルの衣装に身を包んでいた。真っ赤な薔薇のヘアアクセサリを乗せ、白い生地を彩るピンクの縦のライン。黄色の袖にボタン留め、肩のエポレットも同じく黄色で軍装飾のような仕様になっており、ピンク・白・黄色とヒラヒラのスカートを履いている。

右手にはそれこそアイドルの象徴とも言えるスタンドマイクが握られていた。

「ホントに魅力体だったんだな。」

「正直、不安ではあったけどね。私も今までただの精神体だと思ってたから。でも良かったよ。これで少しはマトモに戦える。」

グツと握ったスタンドマイクの上下から桃色から赤へと炎のように揺れ動く刃が姿を現した。

驚いた響からおお、と小さく声が漏れる。

「いいか？　自分が気を失ったり眠ったりしない限りは実体を保っていられる。今の実力じゃ実体化させられるのは一体だけだし、自分は

戦闘には参加できなくなるから不便だけど、その分みんなを助けてね！」

「うん、もちろんだよ。私は旧校舎で戦ってる千早ちゃんのところに行く。響ちゃんは出来るだけ身を守ってて。」

そう言い残して姿が消えるように空へと飛び立った。

桜並木に残された一人と一匹はこれからどう逃げ隠れするかを考える。

突然、頭の上に居たハム蔵が飛び降りて旧校舎へ向かって走り出した。

「あつ！ どこに行くんだハム蔵！」

振り向いたハム蔵の着いてこいと言うジェスチャーに、響は必死に追いかけて木々の間に消えていった。

〜現在〜

「せっかく響ちゃんがくれたチャンスなんだから。頑張らないわけにはいかないよ。」

「春香……」

私は一人納得していた。我那覇さんの能力で実体化出来た春香は本当に水瀬さんの命も私の命も背負って戦ってくれている。大したことが出来ない自分に不満を感じつつ、春香を支えて立ち上がらせる。

上空を見ると美希の周りに陣が出来上がって止まる直前だった。

実のところ、今は心に多少の余裕がある。さっきの攻撃と同じ威力なら一発くらいなら耐えられるし、状況が違って二発目を撃たせないだけの戦力もある。おかげで少しくらいなら無理することも問題はないと思った。

大技ではあるが、あの技が好きなのかしら？ とか呑気な事を考え

ていると急に魅力が大きく回復したように思えた。

「まさかつ!? 千早ちゃん、魅力のサポートするから急いで分厚いシールド!」

「え、ええ。わかったわー!」

魅力が回復しているのは春香の能力のおかげだった。

美希の陣が停止したと同時にかなり分厚いシールドを作る。驚いたことに私が調子いい時と同等か、もしかするとそれ以上の硬度を持っていた。これなら・・・と自信が気持ちを後押しする。

しかし美希の攻撃がまだ来ない。さつきと同じなら陣が停止した時に強力な閃光が放たれていた。

シールド越しにうつすら見える美希の姿を見て私は背中がゾワゾワする感覚に襲われた。

緑色に発行する三角形の3つの陣が一つに合わさって再び高速で回転し出した。

嫌な予感がして急いでもう一枚、同じサイズのシールドを造り上げる。その瞬間に、まるで爆弾が爆発したような音が空と大地に響き渡り巨大な閃光がシールドに直撃する。シールドは瞬く間にヒビが入り簡単にシールドが一枚破壊されてしまった。

信じられなかった。今のシールドであれば陣が停止する砲撃なら一枚でも凌ぎ切れる自信があつたというのに。

閃光は勢いを衰えずに二枚目のシールドに襲い掛かって同じくヒビが入る。

「ダメっ!! 抑えきれないっ!!」

もうシールドが破壊されようとしていた。今破壊されてしまったらこんな大規模な閃光、みんな致命的なダメージは避けられない。

そしてとうとう二枚目のシールドも粉々に碎け散った。

その時、私の視界は世界がスローモーションで動いていた。

水瀬さんを護ろうと庇うように抱きしめる我那覇さん。転移しようとして私と春香の肩に手を置くあずささん。

消滅覚悟で私たちを庇おうとする春香。それぞれがお互いを守ろうと動いている中、それとは別のことを考えて動いている人がいた。その人は私の右側から両腕を伸ばして美希の特大閃光を受け止めた。

ドドドツと激しい重低音を響かせながら停止した閃光は彼女の手を熱で焼き始めた。

「ぐう・・・真美っ!!」

「合点承知の助え!!」

その声を合図に私たちの目の前から美希と閃光は消えた。

何が起こったのかわからないまま耳の鼓膜が破れるかと思う爆音と爆風に辺り一面が吹き飛ばされる。

その爆風に吹き飛ばされないようみんなが必死に堪えている。地面に寝かされたままの高槻さんと貴音さんは亜美が必死にしがみついて飛ばされないようにしてくれていた。

爆風が落ち着いた頃になってようやくその場所がどこなのか理解できた。

美希の閃光が直撃した場所はいさつきまで私達が居た旧校舎。建物は跡形もなくなり隕石でも落ちたように巨大なクレーターとなつて抉れた地面を燻らせている。

我那覇さんと水瀬さんはまだ抱きしめあっている。あずささんは何が起こったのかわからないと酷く混乱していた。私の右側から伸びた腕がゆつくりと降りていき、彼女は地面に膝をついたのを見て春香が慌てて駆け寄った。

「ティーチャー律子!!」

春香が咄嗟に肩から倒れそうになる律子を支えた。

「ティーチャー律子、無茶し過ぎですよ!」

「はあ、はあ・・・あなた春香ね。ありがとう・・・」

「良いんです。また会えて・・・嬉しいです。」

「あ、あのね・・・うぐっ」

律子の手はヒドイ火傷でただれ、肘近くまでに及んでいる。

あの攻撃を受け止めるといふことは、律子の能力もかなり攻撃力が

高い。しかし、それでも今の美希の攻撃力の密度はハッキリ言って律子を凌駕していた。両腕の火傷で済んだのが奇跡と言ってもいい。

「真美、ダイジョーブ？」

「大丈夫じゃにゃくい．．．すつからかなりいい。」

真美がヘナヘナと座り込み、身体を手で支えられずそのまま上体と頬を地面にペタンとつけた。

「どうやら真美の能力で助かったらしい。」

亜美が真美を放って律子に駆け寄る。

「律ちゃん、腕伸ばして腕。」

「どうしてこの状況で腕を伸ばせと言えるのか。動かすどころか空気に触れるだけでも激痛が走るだろう。」

それでも律子はゆっくり痛みに堪えながら腕を伸ばす。

ハッキリと見えた律子の腕を見て思わず両手で口を押さえた。律子の焼けた腕は人のものとは思えないほど赤黒く腫れ上がり。それが肘までに及んでいる。

律子の咄嗟の判断で私達は助かったけれど、そもそも私が油断せずシールドを何重にも張っていたら防げたかもしれない。春香のサポートを無駄にする結果にしてしまい、真美と律子には申し訳がたない。

猛烈なネガティブ思考をしていると亜美が律子の腕をかぎすように光で包んだ。光の粒がその腕の周りを回転している。

「治療術なのかと少し期待した。」

「亜美、なにを．．．。」

「集中するからシャラップ律ちゃん。あずさお姉ちゃん、律ちゃん押さえてて。」

「わかったわー！」

あずささんが律子の左横に座って突き出した赤黒い両腕を肩の近くで強く押さえる。

「律ちゃん、メツチャ痛いから我慢してね！」

グルグルと回る光の粒を見ると、なんだか穏やかな気持ちになっっていく。

そして律子の腕が少しずつではあるが焼けた皮膚が再生を始めた。治療術にこんな現象があるとは聞いたことがない。

「くっ……あああああっ!!」

突如として律子が叫ぶ。それと同じくして腕から煙が上がる。……いや、腕に煙が戻っている。腕は治って行ってるのにどうしてこんなことが起こっているのか。亜美を見ると額から滴る汗がコメカミから頬を伝って顎からポタポタと地に落ちていく。

そして律子の叫び声で美希がこっちに気付いた。

「……千早ちゃん私、もう一回行ってくる！ ティーチャー律子をお願い！」

いち早く美希の感知に気付いた春香が空へ飛び立つ。さっきのように閃光を撃たれてしまつては次に回避する術がない。この状況では最善ともとれる春香の判断に感謝する。

せめて真美と律子が動ける状態になるまでは何としても守らなければいけない。

「亜美、これは——」

「亜美は今、律ちゃんの腕の時間を戻してるんだよ。」

私の質問を遮って気の抜けた声が聞こえる。真美が地面に頬をつけたままぐつたりと教えてくれる。

「治すじゃなくて戻す」だから、ケガしちやつた時の痛みも再生されるんだよね。慎重に戻さないといけないから時間かかるし、その間は超地獄だけだね。」

「うぐっ……くううううううっ」

「律子さんも亜美ちゃんも、頑張つて！」

気絶してしまった方が楽だろう……。いや、常に激痛に晒されるのだから気絶してもまた飛び起きる。

私たちを守ってくれた恩人に残酷な仕打ちと言わざるを得ない。痛みに堪えるのには体力が必要だ。治療が終わっても体力の消耗が激しすぎるなら戦いには参加させられない。

そして亜美も、時間の操作という特別な能力なら一度の使用で大量の魅力が必要なはず。

彼女の夥しい汗を見て、部分的には言えそれが例外ではないことを物語っている。

これでは律子の回復後に亜美が真美のように動けなくなることも考えなくてはいけない。

「無茶し過ぎだよ律ちゃん。真美が能力使えなかつたらどうするつもりだったのさあ。」

「その時は・・・みんな揃って黒焦げだった、かな。」

それを聞いて身体の芯から凍るようだ。確かに今のを律子と真美が助けてくれなければ、その場にいた私たちは閃光の熱量で炭にされていたことだろう。想像すると汗が背中を這う。

普通ならありえない。

たった一人の少女に何時間、何人がかりで戦っても常に劣勢。

状況を好転させる方法が未だ見つからない上に、全力で戦っているのはこちらだけ。

既に春香ですら押され始めている。

旧校舎跡からは少し離れて新校舎の前にいる私たちは態勢を立て直すことも難しい状態だった。

現時点で戦えないのが我那覇さんと律子、真美と亜美も戦闘には参加できない。

出来れば今、春香と話をしたいところだけど時間稼ぎもままならない。それに、ここでこのまま一塊になっていると一網打尽だ。

どうする？ どうすれば？

「私が行くわ。」

いつもの高い声が低く聴こえた。腰まで伸びる長い髪をなびかせて私の前に歩み出たのは、煤けた桃色の戦闘衣装を身にまとして力強く立つ水瀬伊織の姿だった。

赤く腫れさせている目は何かとても強い意志を感じる。

「なんとかして私が時間を稼ぐわ。」

「ダメよ伊織ちゃん。一人で戦うのだけは絶対にダメ。」

律子を押さええているあずささんが強い口調で水瀬さんを止めた。

星井美希こと眠り姫をこの中で一番よく知っているのは彼女だけ。その彼女がこれ以上ないほどの真剣な声で警告する。

「今一人で戦っても時間稼ぎにもならない。それくらい、伊織ちゃんもわかってるはずよ。」

やってみなければわからない・・・とは到底言えない。

あずささんの言う通り美希と水瀬さんとの実力差は例えるならライオンとうさぎ。

例え全力を出しても、たったの一撃受けるだけで致命になるほどの力の差を彼女も感じていないわけがない。

水瀬さんもわかってる。

“もしもあの時の一発が遊びでなかったら”

今も彼女の命があるのは、あの時の美希が遊び半分お試し半分で攻撃したから。

じゃないと水瀬さんは私の前に立っていない。

そして水瀬さんとの合流で戦った時。あの時、もしも春香が居なければ水瀬さんの身体は真つ二つだった。

この数時間で同じ相手から2度も九死に一生を経験している彼女が美希との差を理解していないわけがない。

それでも彼女は立ち向かう。そこにあるのは、世界の危機か。親友への罪滅ぼしか。

間違いなく後者でしょうけど、それを確かめる気はない。

これは薬物を投与された彼女が完全に眠り姫としての変異に成功していればの話になるけれど、空にはもう一つの影があつて貴音さんの隣で寝かされているのが水瀬さんだったかもしれない。

もう一つの影は私の氷のシールドを簡単に叩き割るほどの怪力を使って攻撃してきたことだろう。

未来で暴れるのは、私ではなく高槻やよいに変わっていたかもしれない。

高槻さんにはそれがわかっていたのだろうか。

更なる悲劇を引き起こさないための、命の決断。それを親友で家族である彼女に託した。

その思いを、水瀬さんは背負っている。

「じゃあどうするって言うの？ このまま大人しくしてろって言うつもり？」

「いいえ、そうじゃないわ。私の話を聞いて判断してほしいの。」

時間がないことはあずささんも承知している。

いつ美希が襲ってくるか。いつ春香が倒されてしまうか。それでも話を聞いてほしいというからには何か訳があるはず。それがこの状況を打開するヒントになればと、耳を傾ける。

水瀬さんも一旦あずささんに向き直り話を聞くことを無言で了承する。

それを見て私はあずささんに話すよう促した。

「さつき千早ちゃんに言いかけたことなんだけど・・・春香ちゃんのこと。」

「春香のこと？」

そういえばさつき、あずささんは何かを言いかけてすぐ春香が降ってきたのよね。

あの時に言おうとしたことがそれほど重要なことなのかと思いつ話を続けてもらう。

「さつき律子さんは春香ちゃんのことを知らないって言ってたけど・・・実は私も知らないの。」

いまいち何が言いたいのかがよくわからなかった。

あずささんが春香のことを知らないとか何か問題があるのかとも思うけれど、水瀬さんも同じくわからないようで難しい顔をしていた。律子が春香を知らないのには確かに問題がある。世界は違えど同じ時間軸で生きている人間でありこの世界ではちゃんと出会っている。ただ、色んな経緯が全く違っていているから会っていないだけ。

「つまり、何が言いたいわけ？」

「それは・・・」

「居ないんだよ。」

言葉を詰まらせたあずささんの代わりに真美がようやく普通に座って会話に混ざる。

位置的に少し遠く、空で飛び交う戦闘音が真美の声を遮ろうと鳴り響く。

まだ立ち上がれない彼女は声を大きくして驚愕の内容を口にした。

「あずさお姉ちゃんが知らないってことはさ、未来にはるるんのは伝わってないってことっしょ？ それってあずさお姉ちゃんが生まれる前からはるるんはこの学院に来てないってことになんじやない？」

その瞬間、私たちは凍り付いた。

あずささんが何を話そうとしているのかがしつかり理解出来て、絶句した。

律子の世界では春香がこの学院に来ていない。だから律子は春香のことを知らない。

「ただどそれならあずささんが春香を知らないなんてことは」あつてはいけない。」

何故ならあずささんの世界では、美希が復活したときに我那覇さんはこの戦いに参加していたはず。そして私も。なら、一緒に戦っていたはずの春香のことをあずささんに話していないなんてこと、あるとは思えない。

「…あずささん。眠り姫復活の当時の話は全て聞いたんですよね!」
「ええ。何度も聞いたわ。でもみんなの名前以外で春香という名前は聞いたことがないの。」

これで確信した。あずささんの世界ではまず間違いなく美希が復活したときに、春香は戦いに参加していなかった。

だからみんな、容易くやられてしまったんだわ。そして偽の律子であった貴音さんを止めることも出来ず、そそのかされ薬を使って私は眠り姫として殺戮を繰り返した。

律子の世界でもあずささんの世界でも、春香はこの学院に来ていない。もしくは存在してない。

その考えを巡らせたとき、私は一つの答えに行き着いた。それ

は……。

『春香がこの世界のカギであること。』

他の二つの世界になくてこの世界にあるたった一つの大きな違い。他を探しても恐らくこの学院での大きな差異はこれだろう。

美希を倒すためには春香の力がある。そして実体化している我那覇さんを護らないといけない。

私と同じ考えに行き着いたのか水瀬さんも我那覇さんを見る。

我那覇さんはその視線に疑問を浮かべていた。

「えつと……なに？」

「あずさと亜美真美。律子の治療が終わったら響を守りなさい。私は春香を守る。」

「水瀬さん。春香にこのことを説明しなければいけないわ。任せて……いいかしら？」

水瀬さんは腰まで伸びる長い髪を右手でかき上げ、上空で戦う二人を見る。

赤と黄緑が交互に飛び回ってぶつかつたと同時に衝撃と轟音を放ち、上昇や下降に左右と縦横無尽に飛び回っている。

さつきから気になってはいたけど、遠距離攻撃がこちらに飛んで来ない。美希が遠慮するわけがないのだから、当然春香が気を使ってこちらに攻撃が来ないようにしてくれている。

本気で戦えていないのは間違いないと思う。彼女が本気で戦おうと思つたら、きつと私達も周辺の住民もこの大陸から離れなければならないだろう。

それほど、あの二人の戦いは人間離れしている。

覚悟が決まっていたとしても、その恐怖は計り知れない。

「誰かがやらないといけないんですよ。やってやるわよ。その代わりに約束して……」

水瀬さんは私達に振り向いて。

「絶対に時間を作ってあげる。だから私に何があっても、気にせず突き進みなさい。」

それだけを言い残して空へと赴く。

彼女も覚悟している。なら、私達が覚悟を決めないわけにはいけない。今の彼女ならそう簡単にやられることはないだろう。

春香と交代しても、水瀬さんが抜かれて美希が私たちに迫る可能性は常に持つておく。

今までもに対抗できるのは春香だけなのだから、我那覇さんを優先的に守らなければいけない。

例え、水瀬さんやあずささんが危機に陥っても。

私にその決断ができるのだろうか……。

覚悟は出来そうになかった。

覚悟なんてしていない。

私はただ、半分はやよいのため。もう半分はただのヤケクソ。

世界なんて大層なものを守るつもりもないし、自分にそれほどの力があるとは思っていない。

だけど、目の前の人を救う力ぐらいは欲しい。

それがどれだけ難しく、どれだけ望んでも手に入れづらいものであるのか。それだけは心底思い知らされた。

二度とあんな思いをしないように。大切な人を全力で守れるように。そして……

私が救いたいと思う人を救ってあげられるように。

そのために、私は空にいるあいつをぶっ飛ばす。

かなりの高さまで到達した私はもう一度しっかりと視認する。

飛び回っていた二人は現在は滞空してお互いの出方をうかがっている状態。そんなときに第三者がどう攻撃するのがベストなのか……。相手が格上なのだから普通に攻撃したところで気取られ避

けられる。避けられれば反撃のタイミングを与えてしまう分、下手に攻撃しない方が無難なのではと考えた。

私は春香の横へと飛んだ。近づくにつれて空気が緊迫していて息が詰まりそうだった。

「何のつもり、デコちゃん？」

私 came 来たことで少し不機嫌になったらしい。声が低い。邪魔者を見る目ではなく生理的嫌悪の強い虫を見る目。

私では相手にならないとすらも言わない目の前の眠り姫は武器を下す。

「交代よ春香。あんた、千早のところに行きなさい。」

「・・・任せてもいいの？」

私は自信のない笑顔で強く頷き感謝した。

その返事をしてすぐ春香は千早の下へ降りていく。

それを追いかけてようとする美希に広範囲の電撃を放って進行を阻止する。

美希の目の前を通り過ぎる電撃を美希は避けて進まずその場で止まった。その隙に私は美希の目の前に回り込む。

私に今にも刺し殺そうかという視線を向けて武器をクルクルとまわす。

「今の美希は遊ぶ気ないんだけど。・・・デコちゃんじゃ美希には勝てないよ？」

まったくこの子は人を思いっきり見下してくれちゃって、と言いたところだけど実際勝てないだろうから口には出さない。今の私じゃ美希のスペックにはどれも敵わないのだから。

正直、1分すら時間稼ぎ出来るかもわからない。だけどそうならそうだったよね。だから・・・。

『死ぬ気で稼いであげるわ。未来の時間を！』

水瀬さんと交代した春香は思いがけないスピードで降りてきた。とか降ってきた。重力の降下に加えて浮遊術の速度も足して来たので一瞬過ぎて誰かわからないほど。

地面との激突寸前に浮力を下から上に戻したことでものすごい土埃を跳ね上げる。同時に突風も巻き起こしながら着地した。

「けほっ。おまたせ〜。」

「は、春香。危ないじゃない。」

「ていうか、まだ律ちゃん治療中なんだかんね！ 亜美がミスったらどうすんのさ、もお〜！」

「ご、ごめんなさい」

あれ、なぜ私まで謝らないといけないのかしら。

律子を見ると悲鳴を堪えているのか歯を食い縛っている。両腕の火傷は何とか半分近くは元に戻ってきたけれど、痛々しい光景と律子の地獄はまだ続く。水瀬さんも一人で戦うにはあまりにも厳しい相手。何とかもう少しでも戦力があればと思わずにはいらなかった。

その時、私の後ろで草を踏む音が聞こえた。

足音はザツ、ザツと早くもなく遅くもない速度で私たちに近づいている。

急いで振り向いた私は身体の芯が一気に冷めていくのがわかった。その存在に気付いたみんなが一斉に青ざめる。

春香は目を瞑って顔を背けた。我那覇さんは俯いて涙を静かに流した。真美は目を離せないでいた。あずきさんは大粒の涙を流しながら嗚咽を漏らした。

足音は私たちの傍を通り抜けて高槻さんの隣でしばらく動かなかった。

盛大に啖呵を切ったけれど、それが恥ずかしくなるほどの劣勢だった。

中距離攻撃型の私と美希の遠近距離攻撃型とはそこまで相性が悪

いわけではないのだけど、力量差がモノを言っている。そこその距離で電撃を放てば向こうは閃光を。近距離で放電すると鎌のように鋭い魅力を放ったスタンドマイクで直接攻撃。気まぐれに投げたかと思えば、それは慌てて耳を塞ぎたくなるほどの、言ってみれば鉄と鉄を擦り合わせたような嫌な音を発しながら飛んでくる。離れすぎたら問答無用で陣を使った砲撃。どの距離も実践経験不足過ぎてギリギリで避けるのが精一杯だった。

魅力は響のおかげでそれなりに回復していたけれど、余裕があるわけでもない。無くなれば誰かと交代してまた回復するのに時間がかる。

一撃当たるだけでも瀕死になりかねない攻撃を無尽蔵に打ち込んでくる。反則よね、あんなの。

今、美希との距離はだいたい30メートルほど。私の電撃の射程距離は約200メートル。十分に届く距離だけどそれは相手も同じ。しかも30メートルなんて美希の速さを考えたら在って無いようなものだ。瞬きをするだけで目の前には鎌を振り上げた美希。

「くっ・・・!!」

横に薙がれた刃を仰げ反って避けると前髪が数本舞い散る。蹴り飛ばされないようにそのまま数メートル落下する。それを追いかけて頭上から真つ二つにしようとして縦にまっすぐ振り下ろす。身体を左に捻って回避して一気に放電する。周囲に飛び散る電撃の雨が数発美希に直撃するもダメージが薄くてすぐに体制を立て直される。つまり追撃が出来ない。攻撃した私が逆に追撃される始末。振り回す鎌を寸前で何とか避ける。

人間とは咄嗟や瞬発的な集中を發揮すると意外に避けられたりする。左から右への上段横薙ぎを屈んでかわし、続いて切り返して下段をジャンプのような形で足を屈めて避ける。そのまま美希は身体を回転させて右下段から左上段への斬り上げを屈んだまま無理やり側転でギリギリかわしてオーバーヘッドキック。驚いたことに振り上げていた美希の左肩に直撃して落下した。落下したのに蹴られたのと反対の右腕を伸ばして閃光を放ってくる。

その一撃を私も右肩にカスってしまい少量の血が舞う。痛みで一瞬両目を閉じてしまった。

その一瞬の隙が私の目に“終わり”を映していた。目を開いた時には目の前に美希の手のひら。

「バイバイ。」

ああ……。これで終わっちゃうんだ。

時間稼ぎにもならなかったな……。

ごめんね、千早。ごめんね……。やよい。

頭の中にはそんな言葉しか出てこなかった。大きく丸くて明るい月が私たちを照らしていた。

私が上空へ飛び上がって僅か6分弱。春香と交代して3分半ほど。戦い始めて2分強。思ったよりも持った方だろうか。もう私の命は1秒もないのかもしれない。

私はそっと両目を閉じる。涙がゆっくり流れる。

恐怖は不思議とない。でも、形容出来ないほどの悔しさが私の心に渦巻いている。

悔しい……。スゴく悔しい。

勝てなかった……。

守れなかった……。

防げなかった……。

命を諦めるのがこれほど悔しいことだなんて思わなかった。

しかし、それを理解したところで今更どうしようもない。

きつと一瞬だろう。私の身体が塵も残らないほどに焼き尽くされて夜空を舞う。

そんなイメージが出来てしまうほど私の傍に死が寄り添っていた。

熱かった。

目を開けると視界には一面の青。

でも、その青はすごく熱かった。

それが通り過ぎた後、美希の姿はそこには無く・・・代わりに。

「苦戦してるみたいじゃないか。手を貸すよ。」

真が居た。

第十二章

終

第十三章 ―神の気まぐれ―

月明かりが地上をまるで昼間のように照らす。

いつもに増して巨大な月はこの戦いを見守る、まるで神のような存在だ。

しかし、厳然としてそこにあるのはただ見守るだけの月。助けられるわけでもなく、ただそこにある世界の行方を傍観する。だが、それがこの世界の神だ。

本当にそれが神だと言えるのだろうか。いや、きっとそれが神なのだろう。

手を出さず、口を挟まず、しかし目を瞑ることもしない世界の創世者。

こんなちっぽけな宇宙のちっぽけな星のちっぽけな生き物が戦っていたところで神には気にも留めない。

我々人間がアリとアリの戦いを見ても戦っていることすらわからない。戦っているのが別のアリでも気づきもしない。別にそれに手を出すつもりもない。たまに気まぐれに巣を潰したりア리를潰したり、飽きたらまた傍観。どうでもよくなるとその場を離れる。

きっと神も同じだろう。人間が死のうが人間の世界が潰れようが神にはどうでもいいことなのだ。

だからただ傍観するだけ。必死に戦う人間たちの命が、世界が、未来がかかった戦いでも。神は無関心なのだ。

ただ、それでもたまに助けてくれる時もあるのは事実だ。
他のアりに食べられそうな生き物を助けて安全な場所までもっていく。

そんな気まぐれがああのに起きれば・・・そんなことをつい思ってしまう。

なんであの時、助けてくれなかったの。神様？

そう思わずには、居られなかったの。

私の前に真が立っていた。正確には浮いていたけど。

4, 5メートルと言ったところか。私からその程度の距離しかないのに、月明かりで青く照らされる真は神秘的と言ってもいいほど画になっていた。握り拳は腰の横に置かれ、回避して飛び上がった美希を強い眼差しで見つめている。

今までどこに居たかもわからない真の攻撃が美希に回避させた。

近距離で放つ私の電撃ですら身体で受けてそのまま攻撃してくるような奴が避けた。

さっきの青い炎は幻でも偶然でもない。正真正銘のこの子の攻撃。あの夕陽のように眩しく血潮のように赤かった灼熱の炎が、まさか雲一つない青空より青く迸り何でも溶かしてしまいそうな程の熱量を持つなんて、一体何があったと言うの？

真の能力が変化したのか、何故ここに居るのか。今まで何処に居たのか、どれも何もわからなかった。

ただひとつ、私がわかったのは。

また、命を拾えたと言うことだけだった。

「真……あんた、なんで？」

「……なんて顔をしてるのき。らしくもない。」
「う……。」

身体を軽くこちらに向けた真の言葉に声が詰まる。

それはそうだろう。だって、自分でだってどんな顔をしているのか

なんてわからない。でもそれ以上に恥ずかしかった。真に照れているのでは決してない。生きることを諦めたことにだ。

やよいにケジメをつけると言ったけれど、それが仲間に大見えきつて死ぬことだなんてありえない。あつてはいけない。それはただの責任を放棄することと同じだ。

そんなことしたらやよいに怒られる。

今の真の言葉で気付いたことだけど、私はこんなにも卑屈になったことはない。いつでも、どんな時でも不安と一緒に自信も満々で挑んできた。そして私はいつだって勝ち残ってきた。

どこからこんなに怖くなってしまったのだろう。

私の自信は、プライドは、努力は、こんな安っぽい恐怖や痛みに負けるほどちっぽけだったのか。

・・・冗談じゃないわ。

今までの努力も気持ちも自身だって、どれだけのものを引き換えにして今の私があると思ってるの。

この程度で怖気ずくなんて、そんなの私が許さない！

これじゃ私に憧れていたやよいと千早に申し訳がないじゃない。

ふざけるんじゃないわよ!!

「なんだ・・・いつもの顔に戻ったじゃないか。伊織。」

「ふん、余計なお世話なんだから。でも・・・・・・ありがと。」

真とは仲は悪くないけどよく口喧嘩をしていたから普通に礼を言うのはこれが初めて。よくよく考えてみたら千早ともケンカ、真ともケンカ。やよいのことにも気付いてあげられなかったし、つくづく自分のことしか考えてなかったんだなと自分に呆れてしまう。

こんな自分をずっと傍で支えてくれたやよいにもう一度強く、今までで一番強い気持ちで感謝した。

ありがとうと、やよいを見て口に出そうとしたのに、呼吸も忘れて別の言葉が口から出た。

「・・・・・・・・真・・・あんだ。」

「……………」

後ろから歩いてきた真は私たちの隣を通り過ぎて、高槻さんの傍でしばらく動かなくなる。

20秒ほどでようやく動いた真はその腕に抱えた彼女を下した。

私の目の前で腹部を貫かれ、さらに追い打ちで上空から吹き飛ばされた彼女は無残としか言えない姿になっていた。純白だった戦闘衣装も胸部にまで赤黒く染まり、息絶えているにもかかわらず汚れ一つないその顔とはあまりにもかけ離れた姿だった。

ゆっくりと彼女を下した真は空に向かって一層強く睨みつける。そして空へと飛んだ。

奥に貴音さん。その手前に高槻さん。そしてその手前に……。

「萩原さん……………」

純白の戦闘衣装に高く澄んだ声。屈託のない笑顔と真のことを熱く語る彼女に気おされたり、男性と犬が嫌いで我那覇さんのいぬ美によく追いかけてられて悲鳴を上げていた。か弱いを体現したような彼女の能力のコントロールには自然とため息が漏れたこともあった。水を扱うという繊細で多様な能力にうらやましいと思うこともあった。みんなの前で能力を披露しては恥ずかしがっては穴を掘って埋まろうとする彼女。

もうどれ一つも見ることが出来ない。

「……………めんなさい。」

一言つぶやく。

その声は呻く律子の傍で発せられた。

「……………めんなさい。ごめ……………なさい……………」

肩が震えている。頬から顎にかけて流れる水滴。その主は今までに見たこともないほど痛々しかった。もちろん彼女が悪いわけでは

ない。それでも水滴が止まらない。

あずささんはきつと、今こう思っているだろう。

『何も変わっていない』と。

未来で物心ついた頃から能力を鍛えてきた。未来の眠り姫に太刀打ち出来ず、両親を失い、師を犠牲にして過去に戻り、眠り姫の復活を阻止するどころか倒そうとしても手も足も出ない。あずささんのこの2年間。いや、人生は一体何のためにあるのだろうか？

2年間共にした同年代の友人を巻き込み、狂気に取り込まれた妹を自らの手で殺め、なぜ彼女がここまで悲劇に見舞われなければいけないのか。それが運命というにはあまりに残酷だ。幸せに生きる権利すらもないと、神に烙印を押されたような人生。そう考えてしまった今、彼女のこの2年はどんな気持ちだったのか。想像に難くない。戦っても守れず、守りたくても戦えない私たちは、目の前で消えていく命にどう報いればいいのだろう。

一体どれほどの涙を流さなければいけないの。

ほんの数時間で何度も命の危機を経験し、ほんの数時間で学び舎を失って、ほんの数時間で友人を・・・仲間を2人も失った。

日付が変わったと同時の開戦。今はまだ空すら明るくならない時間。たったそれだけの時間しか経っていない。

たったそれだけの時間で失うものがあまりのも多すぎた。

「・・・あずささん、交代しよう。少し休んだ方が良いでしょう。」

見ていられなかったのか、近づいた我那覇さんがあずささんと交代を進言した。

声もなく入れ替わる二人は、あずささんはその横で顔を両手で覆って声もなく肩を震わせた。

我那覇さんはそんなあずささんを見て涙目ながら律子の両腕を押しさえる。律子自体も出来るだけ腕を動かさないよう意識しているだろうけど、痛みが酷いのか時折上半身が跳ね上がる時がある。

亜美の汗量もかなりのもので地面の色が変わっているほどだ。それほどまでに緻密な作業をするような子には見えないのだけど。腕はようやく肘まで到達したところで、あと数分ほどで治りそうだ。

思ったより早い回復に驚きはするけどこの状態の律子と亜美を戦闘に参加させるわけにはいかない。二人とも体力の消耗がかなり酷いのだから当然。律子は万が一の時に美希を止めるための貴重な戦力なのだから。

しかし、これほどの能力差があるにも関わらずまだここで食い止められているのは奇跡と言ってもいい。

春香がまさか、眠り姫である美希と同等の力を有していたから戦いが大きく崩れることなく続けられていた。

100年前の在学当時、恐ろしいほどの努力を重ねたに違いない。それはとても学院を卒業したばかりの女の子の武器捌きとは思えなかった。そして美希も同じく、惚れ惚れするほどの武器捌き。きつと数えられないほどの訓練を二人で積み重ねたのだろう。

高槻さんを護りながらその戦いを見ていた私はこんな印象を受けた。

それはまるで、二人が月夜の晩に久しく遊んでいるように。

律子とあずささんの話が本当なら、春香はこの世界にとって何より重要な役割を担っている。

そして春香を実体化させている我那覇さんも、何としても守り抜かなくては。

「・・・春香。これから話すことをよく聞いてほしい。」

つらい現状を慰めたいのは私もだけど、話さないことには前に進むことも出来ない。今、世界の未来を勝ち取るために後ろを向くのは後回し。嘆き悲しむのは、あとでも出来る。

「春香、律子とあずささんの話を聞く限り、どうやらあなたはこの世界でしか存在していないみたいなの。」

「え・・・と、それはどういう・・・?」

「あ・・・端折りすぎたわね。律子の世界ではあなたは居ない。律子にすら出会っていない。そしてあずささんの世界で春香は伝えられていない。よって、あなたは美希と戦っていない。つまり今、あなたが美希と戦っている世界はここしかないのよ。」

「なっ!?!」

当然、こんな話を聞いて驚かないわけがない。別の世界があるということ自体が一般の人からすれば信じ難い内容だけど、さらにそこから自分が存在していないと言われればショックを受けられない人間はいないだろう。ただ単に存在していないだけならまだ受け流せる。しかし最も信頼している先生が自分のことを知らないと言うのは割とキツイ。そして冷静に考え始めると、ある疑問が生まれる。

自分がここにいる理由だ。

この時間軸にしかない自分にどんな意味があるのか。その答えはきつと春香もわかつてる。

「春香、あなたならわかるはず。あなたが何故ここにいるのか。」

「何となくだけどわかるよ……私が美希と出会ってこの学院に来たこと。そしてこの能力のせい……でしょ。」

すぐにその答えに行き着いたことに心から称賛する。

そう、この世界で春香は美希と深い絆で結ばれている。他の世界ではきつと出会ってすらいらない。良くても友人程度の関係だろう。家族と思えるほどの意識を持っている二人がこの学院に来たのはこの世界だけだ。

だから春香はここにいる。美希を止めるために。

そして特質型に分類される能力『支配』

人間はもちろん、動物や草木にも魅力は存在する。その魅力に干渉できる『支配』には自分以外の魅力を吸い取ったり、送り込んで操ったり、他者の魅力と融合させることができる。この話を聞いた時には俄かに信じられなかったけれど、それもそのはず。今までどんな本を読んでもそんな能力は聞いたことがなかった。

相手の魅力を支配するという春香の能力は前例の無い最強クラスの能力。

そういった意味では間違いなく特別。国軍や一部の組織が春香の能力を知ったら喉から手が出るほど欲しい人材でしょう。もしかすると、もしかしなくてもきつと『支配』の能力者はこの世界で春香一人なのだろうと理由のない確信があった。

「ええ。あなたの『支配』が、この世界を救うカギだと私は思ってるわ。」

その能力で眠り姫を止められないかしら。」

春香は右手を持ち上げて人差し指をこめかみに当てる。考えるときの癖なのか、そのまま思案する。およそ10秒ほどで何故かどんどん、眉を寄るほど苦い顔になっていく。

そして何か思いついたのか、一言ボソつと口にする。

「一つだけ・・・方法がある・・・かもしれない。」

「どういうこと?」

「私にも何が起こるか分からないんだよ。人には一度も試したことがないから・・・。」

「春香、まさかあなた・・・。」

「うん。私が思いつくのはそれしかないかも・・・。」

なるほど、それは確かに試せないでしょうね。春香の能力は相手の魅力を吸い取ったり、逆に送り込んで操ったりと反則級の能力を持っているけど、もう一つ。彼女にはあった。

“ 魅力の融合 ” というものが。

この絶望的な状況を打開できるのなら何でも構わない。と、言いたいところだけれど、本人が試したことがないというのは正直なところ不安でしかない。

いや、試したことがないというより試せないと言った方が正しいのかもかもしれない。自身の魅力を他者に融合させるなんて、幽霊が他人に乗り移るのと同じ。後で分離できればいいけれど、二度と離れられなければ・・・あとは想像できる。

「分離出来ないのね。一度でも融合すると。」

「うん。」

「でも何故、あなたは試したことがない能力をそこまで知っているの?」

「いやー・・・実は私、昔一度この融合を使ったことがあって・・・いや、偶然使っていた・・・かな?」

そこで私はぴんときた。話に聞いた春香の過去に起こった忌まわしい悲劇の中で、たったの一度だけそうしてしまった瞬間があった。さつき春香は“ 人には一度も使ったことがない ” と言った。つまり

人以外なら使ったことがあるということ。

そしてその使った、いや……春香も気付かないうちに使ってしまったのが……。

あの桜の木だ。

私がいつも本を持って読んだり昼寝をしたりするお気に入りの場所。春香は美希を眠らせた後、その木に自分の魅力をすべて流し込んだ。このすべての魅力を流し込むことが、春香の言う融合だった。

相手に自分の魅力を全部渡すのだから、融合というのは語弊があるかもしれないけど間違っていないとも私は思った。

融合のおかげで春香は桜の木と一体になった。桜の魅力が有効である範囲しか自由に移動できない。それは桜の木の魅力と一体になっっているのなら桜の森から深緑の密林に入ると消えてしまうのは当然のことだった。

桜の木に宿った春香の魂を木が魅力体として現わしてくれている。彼女の意思は彼女のものでもあり桜の意思でもあるということ。私は2年間、ずっと春香と一緒に居たのだと気付いて少し嬉しかった。

だけどそれとは別に当然と疑問が浮かび上がる。春香がさっき言った方法を使うのであれば、今でも他人と融合することは可能だということ。しかし一度融合して分離出来ないというのにそれは可能なことなの？

空がひと際青く輝いた。

水瀬さんと真が美希と戦い始めたらしい。さっきも目にしたけれど、真の炎が青く変化している。萩原さんが亡くなったことで真の心に何か変化が生まれたのかもしれない。水瀬さんも、高槻さんが亡くなってやはり魅力の総量や回復速度なんかも段違いに変化している。心の変化がもたらすものは、どうやら偉大なもののように。

あの眠り姫である美希相手に、ぱっと見て善戦しているように見える。

もうしばらく、もうしばらくだけ時間を稼いでほしい。

「春香、あなたの能力で魅力を融合させるのなら早い方がいいわ。私を———。」

「ダメだよ。」

不意に聞こえたその言葉の顔を振り向ける。視線の先に、立ってヨロヨロ歩く真美がこちらに向かって来ていた。

「ダメだよ。はるるんは融合しちやダメ。」

「真美、何故止めるの？ あなたは融合することで何が起るのか知っているの？」

「まあ確実とは言わないけど。でもそれはあずさお姉ちゃんも知ってるんじゃないかな？」

少し落ち着いたのかあずささんが涙を拭う。少しだけ額を押さえ、大きく息を吸い込み、続いてゆっくり吐き出す。彼女の心が持ちこたえてくれたのか、少し安心したところで真美があずささんに問う。

「あずさお姉ちゃんもわかるよね。何が起るのか。」

数秒の沈黙のあと、再度大きく深呼吸をしてこちらを向いたあずささんは目を赤く腫らせて落ち込んだように小さな声で答えを発した。

「まだ・・・千早ちゃんに教えてなかったわね。眠り姫が何故生まれるのか・・・。」

眠り姫が生まれる理由。それをあずささんが知っているということとは、つまり80年後の未来では眠り姫に成り得る原因が既に突き止められているということ。それを貴音さんも知っていて実験を繰り返していたのか。残念な話ではあるが、それが解明されなければもしかすると100年前から続いた実験と殺戮の悲劇を止められたかもしれない。

「眠り姫は・・・」自分の魅力と別の魅力が体内で混ざり合うことで生まれるの。そして元々持つ能力とは全く違う能力になって暴れだすらしいわ”」

その情報は知らなかったのか、私よりも春香の方が驚いていた。春香が知っていたのは性質と能力が変化して特質になると言うことだった。

だがまさか・・・春香の言った方法がまさか眠り姫になるかもしれない方法だとは夢にも思わなかった。

2つの魅力が混ざり合い眠り姫と化す。それが本当だとしたら、逆

に春香の能力は眠り姫を生み出してしまう致命的な能力ということになってしまう。春香の能力がこの世界を救うカギだと思っていたのに、再び振り出しに戻る現実を突きつけられた。

「お姫ちゃんが前に言っていたんだよね。人間の中にある魅力を生み出す核、それを液化化させた薬を作っているって。」

魅力を生み出す核は心臓の中にあるとされている。神経と血管の張り巡らされた臓器の中に、一見して異様な塊があることが数十年前に医療発展のための遺体解剖で見えられた。以降、その塊の研究が進んでそれが魅力を生産源であることがわかり、血管を通して血液と一緒にに体中を巡りまた心臓に戻るといふ循環が発見した。

そして、心臓。つまり『心の臓器』である心臓には魂もそこにあるとされている。そして春香の存在が魅力と魂の関係を証明してくれた。春香が融合を使用したと同時に“魂までも桜の木と融合”してしまったのだから。

これで魂の存在が証明された。

そしてもう一つ、春香の存在が証明してしまったものがある。

『魂にも心がある』ということだ。

魂＝心と考える人もいるかもしれないけど、私はそうは思わない。

少し哲学的なことになってしまふけれど、もし魂と心が同じものであるのなら文字を別にする必要性がない。

魂は云（うん）と鬼（おに）を合わせたもの。云は雲の元字であるとされている。鬼は人が死んだ霊であること。死後、人の魂は雲になつて霊界へ旅立つとされた。

それが『魂』

そして心は私たちが思う感情や精神。それによつて心は魂と別のものであると考え得る。

ここで区別されるのが幽霊だ。良い霊は心が有るもの。悪い霊は心がないもの。

人間が悪いことをすると“心無い行い”と言われるように、心の有り方で人は変わる。と言う、まさに完全オカルト専門書的なものを偶然読んだことがあつただけけれど、思ったよりも侮れない内容だった

のでよく覚えている。私が心を磨くという答えに行き着いたのも、これがあったからと言ってもいいかもしれない。

魅力の核と魂が同じ心臓の中に存在していることは、心を磨くことで魅力や能力が向上するという仮説が立証されたも同然だ。これは人類にとつて大事件。

昼間、春香との会話がまさか当たっていたとは思わなかった。

春香が幽霊みたいなものであり魅力体であり精神体。

こんな状況でなければ笑って話したいものだけれど、当然それころではない。

「なるほど。一人の身体に魅力が二つ存在することになってしまいうから、結果的に私も眠り姫になってしまいうということを言いたいわけね。」

「そうだよ。可能性は0じゃないと思う。」

思わないところで私が眠り姫になってしまいう可能性が出てきた。それを聞いたあずきさんが俯く。彼女の未来に私は眠り姫として存在しているのだから止めない訳がない。

美希だけならまだしも、もう一人眠り姫が生まれてしまつたらそれこそ終わりなのだから。そうなつてしまいう可能性がある以上、魅力の融合は使うことが出来なくなつてしまつた。

切り札が封殺された今、これ以上の打開策がいつ何処から出てくるというのか。戦つて勝てる可能性ももちろん0ではないけれど、絶望的なのは変わらない。

空ではまだ二人が奮闘してくれている。早く考えないと・・・。

「千早ちゃん。」

あずきさんが立ち上がつて私の方へ歩いてくる。彼女は私の前で止まり、ジツと目を見てきた。その目には力がこもっていた。これから起こるすべてを受け入れることを、見つめる目から感じた。

そして、彼女の今までの人生とこれからの人生を賭けた言葉を私に放った。

「千早ちゃん。私はこの世界が大好き。あなたがいて、みんながいて、私の今までの人生で一番平和だった時間。それももう終わつてし

まいったわ。」

彼女の中で何かが変わった気がした。それは平和ボケした私たちとは何か違う。そう、気構えと言うのだから。もしくは覚悟と取るべきか。あずささんの目からはそんな意思と迫力があつた。

この目には見覚えがある。もう遙か昔にも思える昨日の昼間に、私が眠り姫だと言い放った時の迫力。でもそれとは比べ物にならないほどの気迫だった。

しかし、優しい笑顔だけは何一つ変わることはなく。安心をもたらしてくれる。

「だから私はこれ以上失わないようにみんなを守る。千早ちゃん、これからの判断はあなたに任せるわ。春香ちゃんの魅力と融合するのも私は止めない。私は、あなたたちを信じる。」

そう言つて空へと飛んだ。

あずささんの身体から紫色の魅力が視覚化されてあふれ出している。

ボルテージ現象。見るのは初めてだけど、それが発生したあずささんの魅力が急激な速度で回復してくのがわかる。そしてその現象が現れたということは、彼女の中で何か大きな覚悟を決めたという現れだった。

ボルテージ現象は本人の心が限界点を超えて高ぶった時に発生する現象。意図的に出来るようになるまで早くても凡そ5年。小さな頃から訓練していたのなら使えて当然だろうとも思った。

だが、意図的に使えたとしても最低限の高ぶりは必要だ。さつきまでの悲しみは涙で流れたのか。そんな訳がない。それを払拭する何かがあつたのだろうか。そうであればいいと思う。

上空には水瀬さん、真、あずささんの三人が美希と対峙してくれている。戦いに赴いてくれてる三人に報いる策を、そして命を落とした三人に報いる結果を、私たちは出さなければいけない。

何とも重いものを背負つたものだ。けど、悪くない。

「亜美！」

「うっ……はあ……はあ。」

亜美が地面に両手をつけて息が乱れてうずくまる。そんな亜美を真美が背中を摩っている。

律子の両腕は完全に治っていた。肩近くまで破れた服の袖から露出していた腕。あれほど痛々しかった皮膚のただれも赤黒い腫れもキレイになくなって元の艶やかな肌色に戻っている。

痛みに堪えるため体力を使い切ったのか律子は気を失っていた。

「亜美、おつかれ。めっちゃ頑張ったじゃん!」

「はあ、はあ。こ、こんくらい・・・よ、よゆー・・・じゃ、ないかも。も・・・魅力、す・・・からかん。」

それはそうだろう。律子の腕を治している間ずっと魅力を消費し続けていたのだから。

苦しそうな亜美の元へ春香が歩いていく。

そうして亜美の額に手のひらを当てた。

「は、はるるん?」

「ジツとしてて。すぐに済むから。」

春香の手のひらがぼうつと光りだす。その光は赤から桃色に変わり、だんだんと黄色く変化していく。

亜美は目を瞑ってその光に身を任せている。苦しそうな表情は徐々に取り除かれ、頬の血色が戻って桃色に、やがて良い夢を見ているように安らかな顔になっていく。

「ああ・・・すんごく・・・気持ちいい。」

「なに? どうなってるの?」

「亜美の中に私の魅力を分けてるんだよ。最初はくすぐったいと思うけどすぐに馴染んで楽になると思うよ。」

光っていた手のひらはスーツと音もなく消えていく。手のひらが離れて亜美は数秒の幸福感を味わった後、突如の身震いをして、まるで寒い肌を温めるように両手で両腕を摩る。

「にやははっ! ひやわっ! くすぐった!? ちよっ、こちよばい!」

「んっふっふ。かかったね亜美。真美のハンドパワーに。」

「ふひつまっ真美関係なあは・・・やあくまだくすぐりたいよお。はるるん何これえ。」

「ああ、魅力を渡したら何でもか攪られたみたいになるみたいで。多分、私の魅力が身体を巡っちゃうからだと思う。」

「え……!?!」

亜美と春香のやりとりに強い違和感を覚えた。例えるなら、分かっているのに頭に答えが出てきてくれないときのようなかしさ。今のやりとりでの違和感……いや、どちらかと言うと既視感に近い。この答えが出るまで、頭を回してひねり出すしかなさそうだった。

下では律子の治療が負ったみたいで心配事が一つ減ったことに軽く安堵する。

どれほどの時間が稼げるかという心配もしていた私だったのだが、私の電撃とあずさの転移がうまく機能していて今のところ、そこまで劣勢というほどではない。美希の攻撃を何とか避けては電撃での反撃を繰り返す。

危ない時にはあずさがキツチリと転移で助けてくれる。何度かの攻撃の後、あずさは私を美希と200メートル程離れた。美希のところへ戻ったあずさは、流石と言わざるを得ないほど俊敏でキレのある攻撃を避けて避けて避けてまくっていた。

縦に振り降ろされた鎌を左に避けて首を掴みに来る右手を転移で避けて美希の後ろへ。すかさず美希が後ろへ足刀蹴りを繰り出す。それを宙返りでかわして繰り出した踵落としを美希は左腕で受け止めた。そのまま足を掴んでグルンとあずさを投げ飛ばす。体制整わないあずさに追い打つべく鎌のスタンドマイクを投げて回転させる。回転速度が速すぎて電動カッター状態の武器があずさを分断しようとするところで再び転移。左のストレートパンチが美希の腹部に命中して吹っ飛んだ。吹っ飛んだ先に真が剣を振り上げて待っていた。

流石の美希もこの一撃必殺の剣が直撃するとただでは済まないだろう。飛んできたところで斬り降ろす。なんと頭の上に目でもある

のかと言わんばかりのタイミングで身体を捻って避けた美希は後ろ宙返りで真を蹴り落とそうと足を伸ばした。真もその行動が読めたのか頭を下げての宙返りで美希とは足裏を合わせる形で一撃。衝撃でお互いに距離が出来る。そしてあれだけ近距離戦で戦っていた真がまさか炎による中距離攻撃をしかけている。

しかしその炎を掻い潜って真の懐に入り込む。速度が乗った美希のパンチが空を切った。紙一重で避けた真が美希の腕を掴んで勢いを乗せたまま背負い投げ。飛んでいく美希に炎の砲撃を飛ばした。それに対して体制整わない美希は、咄嗟に放出したにしては高威力の閃光で真の炎を圧倒していく。

迫る閃光に驚いた真をあずさが転移で助けに入った。安全のためかなりの距離をとる。

その行動を美希が不審に思ったのか、上空を見て私の目が逢う。私の両手に溜まりに溜まった電力は突如としてバチバチと耳がつんぎくほどの金切り声をあげ、力いっぱい振り下ろした両手の電撃を一気に打ち放った。雷でも落ちたかのような雷鳴と光と衝撃が辺りを巻き込む。

電圧と電流は人が死ぬには十分の量を打ち込んだ。人が受けると黒焦げになるのではと思うほどの威力の雷にも似た電撃が美希に直撃したのだが、やはりそれくらいでは倒れてくれない。服や肌にも多少の煤けはあるものの美希は無表情で立っていた。

「はあ・・・はあ・・・冗談じゃないな。これだけ打ち込んでも涼しい顔して。」

真が汗を拭ってそう口にした。

確かに、今のはこの水瀬伊織様の渾身の一発。それ以前から何度かダメージになりそうな攻撃を当ててはいるものの効いているのかイマイチ判断できない。

戦闘速度が速すぎて、体感ではもう1時間以上戦っているように思ってしまう。実際は私が空へ飛んで15分ほど、真が現れて5分と少し、あずさが空へ飛んでまだ3分弱しか経っていない。

たったこれだけの時間しかまだ経っていない。

ホント、笑っちゃうわ。

私の電撃も真の炎も殆ど通用していない。何故なのかは私はすぐに理解した。

それには属性が深く関係している。真の炎、そして私の電撃も『熱量』だけは凄く高い。そして目先50メートルに浮いている怪物お嬢さんの攻撃も恐ろしいほどの熱量。

つまり、あの娘には熱量にかなりの耐性があるということ。さつきから真の炎を避けているのはその耐性以上の攻撃力を有しているから。対して私の電撃は真の炎ほどの熱量はないにしても電気信号の邪魔をするくらいなら出来るはず。大したことがない電撃ならすぐに反撃されてしまうけど、今のようにならぬように100万を超える電撃なら動きを止められる。しかしそれも大したダメージにはなっていない。さらに言うところは何故かマトモにダメージは通っていない。この二つの違いは物理であるかないかだけど、そのどちらの攻撃も通らないというのは、どう考えてもおかしい。となれば、私たちの知らない“何か”がまだ美希にはあるということ。

それを何とかしない限り、私たちに勝ちはない。

「あずさ、未来のあいつもこんなにタフなわけ？」

「ええ。未来でも何故か大したダメージを与えられていなかったと思うわ。」

「そう・・・。つまりあんたも知らない“何か”があるわけね。」

そうなるかと待っているのは今よりも常時劣勢の戦い。

その何かを解明しない限り倒せない。でも解明するための手がかりが何一つない。未来で戦っていたあずさですらわからないのならこの時代の誰にも分らない。いや、もしかすると春香がわかるかもしれないけれど、今この話をしに行っている余裕はない。

「伊織ちゃん。行って。」

「なっ、何言ってるのよ！ 今そんな余裕があるわけないでしょ。」

「確かに、ボクたち3人でギリギリ渡り合ってる状態だね。でもこのままじゃいずれ負ける。やるなら今しかないよ。」

「殆どダメージを与えられていないのに渡り合えている訳ないじゃないな

い。あいつにはまだまだまだ余裕があるわ。ないのは私たちの方。ここで私が抜けたら簡単にやられるわよ。」

「よくわかってるねデコちゃん。」

と、目の前に笑顔の美希が一瞬現れて消えた。

次にとんでもない衝撃が背中を襲った。両隣ではあずさと真も短い悲鳴を上げる。

美希の速さがまた上がって目で捉えきれないほどになってきた。私の目の前に現れたあと、後ろに回り込んでそれぞれに重い一撃をお見舞いしてくれたようだ。

一瞬の激痛と止まらない落下に抵抗できない。何とか浮遊術で落下速度を落とすけれど気休め程度でそのまま背中から地面に叩きつけられて転がった。

数秒呼吸を奪われて苦しくて咽る。やよいの手加減のない一撃ほどではないにせよ、もう消化されたであろう夕食に食べたものを吐き出してしまったかった。

両手を地面につけていた私は自分の影が一層濃く、そして周囲の地面が黄緑色に発光している。

危機感に襲われ空を見上げる。

絶望を見た・・・。

私の目に映ったのは、空も大地も桜の木たちもすべてが黄緑色に見えるほどの高密度のエネルギー。

美希を中心に燃え上がるような魅力。それが本当に魅力なのかと思えるほどの膨大な力。

私たちどころか世界を、この大地すらも消し去ってしまいそうなほどの絶望が空を覆っていた。

これはボルテージ現象なのだろう。私が知ってるものとは規模が違う。さつき見た律子のボルテージ現象が赤ちゃんの遊びレベルに思える。それが美希に起こって、どんどんその身体に凝縮されて取り込まれていった。

「そうか……そういうことだったのね……ははは。」

今更になって理解した。美希に何故こちらの攻撃が効かなかったのか。

いや、それは言葉の間違いだ。正確には美希にダメージは通っていた。でなければ私の電撃で動きを止めたりせず攻撃してくるはず。でも、そうじゃないときの彼女は一体どうしていた。

より強力な攻撃を受けるたびに数秒止まっていたじゃないか。それが何を意味するのか、私たちは理解するのが遅すぎた。

取り込まれた魅力が今度は巨大な陣になって美希の背後に現れる。丸い線の中に三角の形。その中に四角。四角の中にバツが描かれ、右上と左上と下の隙間の中にもここからでは見えない文字がズラツと並べられていて、それが徐々に回転し始める。陣が回転し始めたことで周囲に暴風が起こる。

「あんなのに……勝てるわけない……じゃない。」

たった一つ、やよいいに支えられていた私の心が木の枝を折るようにポツキリと音を立てた。

眠り姫である美希が何故今までダメージを負っても傷もつかず立っていられたのか、それは……。

「吸収していたのね……。」

私の思考を代弁してくれたのは、いつの間にか隣で空を見上げていた千早だった。

「水瀬さん、大丈夫？」

「何とかね……だけど、もうダメだわ。あんなのを撃たれちゃ……。」
諦めの言葉が口から洩れる。本当はこんなこと思いたくない。口にすら出したくない。だけど、折れた心が私の口を閉じてくれない。あずさも地面にへたり込んでいるのが視界の端で見えた。真も身体が動かないのか倒れたまま美希を見ている。響も亜美も真美もお互いにすり寄ってその時を待っているようだ。

律子も気が付いているのかいないのかわからないが目を閉じて遠目から口元が少し笑っているように見える。

その横で春香が空へと飛んだ。これ以上の抵抗はきつと無駄だ。

攻撃すれば吸収され、止められなければあれを撃たれて世界が一瞬で消滅するだろう。

弱気がこれでもかと言わんばかりに私に不安と恐怖を持ってきて自然と俯いてしまう。

「ごめんなさい千早・・・止められなかった。」

「大丈夫。」

その言葉にどんな意味がこもっているのか。それを今は理解出来ずにいた。顔を上げて千早の顔を見る。その顔は今まで見たことがないほどの自信と慈愛を感じるほどの優しい笑顔だった。

何かをするつもりなのは雰囲気理解出来た。そして彼女に何か変化があったことも。

「千早・・・あんた、何を？」

「水瀬さん・・・私はあなたも、あずささんも、我那覇さん、真、亜美、真美、律子、春香、そして美希も・・・みんなを守る。」

青い。

とても青い炎が私の目に映る。

違う。炎じゃなく魅力。千早の身体から溢れ出しているその力は、さらに大きさが増して私の身体も包む。

心地いい。

表現のしようがないほどの安心感が心を満たしてくれる。数秒その心地よさに身を任せ、そして気付くとその魅力はどんどん千早に取り込まれていく。すべての魅力が彼女の中へ消えていった。

「行ってくる。」

飛び立った。

如月千早は空へと飛んで、小さくなっていく。

無意識に手を伸ばした私は掴めるはずもない彼女を、ぎゅつと握った。

第十三章

終

第十四章 — 決意と覚悟 —

この能力が嫌いだった。

ごく普通の家庭で育った私は、10歳の頃に弟が急な病で亡くなって、それ以降はオシドリ夫婦と言われた両親はずっとケンカしていた。最後には突然私の前から姿を消した。

家族も家も失った私は、彷徨う内にいつの間にかスラム(貧困街)に迷い込んでいた。

空腹から物乞いをしたり人のものを盗んだこともあった。

そんな生活を1年続けて11歳になった時だった。

暇つぶしに暴力行為で遊ぼうと警官達がスラムを訪れた。普段は絶対に見つかってはいけない彼らに不意を突かれて見つかったしまい、泣き叫ぶ私の服を脱がし始めた。

泣き叫ぶ声がキツカケだったのか、他に何がキツカケだったのかはわからない。けれど、私が次に目を開けた時には襲っていた警官たちが吹っ飛んでいて、かわりに私の周りにはシールドがドーム状に出来上がっていた。

呆然とする警官達の一人が警棒を持ち出してシールドをたたき。他の警官達も殴る蹴るを続け、ついに怒りが頂点に達した一人が銃を持ち出して私に発砲した。発砲した弾はシールドに護られた私には届かず、なんと跳弾してその撃った本人の胸に命中した。

そのおかげで警官達は退散して周りからは拍手と喝采が起こっていたが、私はたまたま発動した能力と警官達の報復が怖くて逃げだした。

彷徨って彷徨って、行き倒れた私は薄れる意識の中で伸ばされた手を掴んだ。その手はとても暖かくて優しく、一生忘れることがないだろうと思う。

起きたらもうその人は居なくて、代わりにその人の執事が私の目覚めを待っていた。少し大きいお屋敷の一室で目を覚ました私は綺麗な服と食事を与えられた。最初は警戒して食べないようにしていたが、空腹には勝てず1分もしないうちに口に運ぶ。おいしくておいし

くて夢中で食べた。

どうやらその屋敷は奥様の別宅らしく、たまたま街で彷徨っていた私を拾って介抱したそうだった。それから私は執事さんに街ですごくいい部屋を紹介されて、見合わないほどすごく安い部屋で、世の中には親切な人って本当にいるんだと思つたのと同時に、両親が居なくなつてからの自分の生活を思い返して涙が止まらなかつた。

街の食堂で働き始めて、屋敷に通い執事さんに能力の使い方も教えてもらった。

数年後にとうとう一度も御目にかかれなかつた奥様が老衰で亡くなつて、その後はこの学院へ入学した。

入学試験の時に200人近くの人数が受験したらしいけれど、中に居たのは恐ろしいほどレベルの高い人が数人と後は付け焼刃やその場しのぎの程度の人しかいなくて、私は部屋の真ん中にシールドを張つて受験生側と試験官側で完全に分断した。試験官、ことに律子なのだが、彼女の攻撃を防ぐことで合格した。アイドルになつて奥様の許で働きたかつたのだけれど、今はもうその恩も返せそうにない。

そして私がアイドルになることはもうないだろう。この戦いは私のすべてを変えるには十分だったから。

私は言い知れない感覚に襲われていた。今の会話の中で何かそんなに違和感だったのが自分でもわからぬ。だが確かにその違和感存在して私の心に引つかかつた。額に右手を当てて考えるがやはり思いつかない。何が言いたいのかわからない私を見て春香と亜美真美はポカンとしている。

「どうしたの千早ちゃん・・・?」

「いえ・・・何か・・・何かを見落としているような・・・。」

「・・・大事なこと?」

春香の声色が低くなる。私自身が重大だと感じていることを察し

たのか答えを聞かず思考を巡らせ始める。

先ほどの会話を頭の中で再生させて僅かでもおかしなところを探す。

しかし、何がおかしかったのかが解らないので直ぐに煮詰まった。

「大丈夫よ。」

その声は亜美でも真美でも、春香でもなく視界の端で横たわる彼女から聞こえた。

両腕が完全に治った律子はそのまま気を失ったと思っていたのだが、彼女は今うつすらと目を開けて私たちを見て微笑んでいる。

「ティーチャー律子、起きていたんですか？」

「まあね。あと律子でいいわよ……。あんたたちは、私の生徒って訳じゃないんだし。……さすがに身体は、動かないか……。」

さつきまで火傷で爛れた腕を無理に治したばかりなのだから、これで機敏に動かなくてもしたら人間かどうかを疑ってしまう。と言うか私のシールドですら受け止められなかった美希の一撃を見事に受け止めたのだから最早人の領域ではない。この若さで能力者を育てる講師の任に就いているだけのことはある。私たちを守ってくれたために負った傷だったのだから、あとは任せてゆっくり休んでいて。と気の利いたことを一つでも言いたいけれど、手詰まり状態の今は少しでも案が欲しい。

亜美の助けでゆっくりと身体を起こす彼女の顔が苦悶に歪むがすぐに凜とした顔を取り戻した。

「それより……。千早、あんたに確認したいことがあるのよ。」

案が欲しいのに、むしろこちらが質問される側になっていた。

「千早、あなたたちは“アイドル”をどう認識しているの？」

「え……。どういう意味かしら？」

この質問の意図がつかめない。私の認識としてアイドルは“一生の榮譽”という正直どうでもいいものだった。仮初の榮譽が一生あったところで心が満たされる訳ではない。金と地位があろうが不自由は不自由だ。イザとなれば招集され場合によっては戦に駆り出され命を賭して国を守らなければいけない。そんな価値のない榮譽

に何の意味があるというのか。しかし貴族の中ではそれを目当てで能力を持つてこの学院に入学したり、コネクションを使って役に立たない木偶の坊がアイドルを名乗ることも少なくない。まあそういう人は決まって現場で実力不足の烙印を押されるので溜飲が下がることこの上ないのだが。

「そう・・・今の問いがわからないと言うことはアイドルは既に廃れたと言うことね。」

「……………」

その言葉は寂しさを含み悲しみを感じ取れた。私は頭には言葉が浮かんでくるのに息が詰まったように声が出ず、縫い付けられたように口が動かなくて反論できなかつた。律子の言う“アイドル”はきつと私が知っているものとはまた別なのだろう。

一般的な認識としてアイドルとは職業だ。今や世界の人々が目指す一生の榮譽が国によって約束された職業。国家公務執行統括事務局所属のアイドルは現在の総勢で約220人ほど。その3割はコネスタートの役立たずさん。諜報能力者と防御型が圧倒的に少ないというのは耳にしている。攻撃型はかなりの数で特質型もそれなりの人数を占めている。特質型はそれだけでアドバンテージになるので意外と多い。局の高尉官にもなれば、戦に出ることもなく安息の生活が待っている。今思えば何と腐ったシステムだろう。偉くなればなるほど戦いから遠ざかる特別扱いの烏合の集。そんな人たちを守つて命を落としていった人たちを積み上げると山一つ出来てしまうだろう。私が知っているのはそんなアイドルと言う職業だ。

ここまで考えてみると私と律子のアイドルというものの有り様は全く違うのだと思う。春香の話聞いた私が失望すらしているものに、この律子が心酔しているとは思えない。

「ねえ千早。あなたの一番大切に思っていることはなに？」

「大切に？」

「ええ。今まで考えなかつた訳ではないでしょう？　あなたが能力を使う上で感じ、考え、終に思い描いた大切なものはなに？」

「それ……………」

能力を使う上で自分が思い描いた大切なもの。それは理想。能力を使う上でこうしたい、こうなればいい。こうあって欲しいという理想と願望。

頭の中にふと思い描く。雲のない青空。微風になびく綺麗な草原の中で笑う、短い青髪の小さな少年。その後ろに笑顔で立つ優しいような女性と真面目そうな男性。そこに走り寄る青髪の少女。眼前で見れば何とも穏やかな家族の風景だろう。

そして灯りを消したように唐突とその家族を包む草原も空も真っ暗な闇に変わる。少女がその場に止まり、戸惑う中で青髪の少年の姿が消えた。次に微笑んでいた女性と男性は剣幕になりお互い別々の方向へ歩き出した。

それを走り追う少女は徐々に速度を落として止まり、そして反対方向へと歩き出す。

少し歩いて気付けば左手が瘦せた右手に繋がれていた。見上げると高齢の綺麗な白髪の女性に手を握られ歩いていた。急に暗闇が晴れて目の前に大きな屋敷が現れた。広大な敷地に橋の架かる小川と色とりどりの花咲く壇では蝶がひらひらと飛んでいる。見惚れていると左手に繋がれた手がいつの間にか離れていて、周りを見ても誰もいなかった。再び屋敷を見ると、屋敷とは別の建物になっていた。周囲には桜の木が密集していて湖と草原、古い建物もあってその奥の丘にはひと際大きな桜がある。建物の前には2年間共に過ごした彼女たちが笑顔で立っている。

「どう？ 思い出した？」

後ろを向くと、セーラー服を着た春香が私に話しかけてきた。横にはとうとう、あの桜の木が相変わらず花びらを散らせて物静かにその存在を示している。

ここは私の心の中だろう。心が映し出したのは、特に大事に思っている場所と人々の姿だった。

そして……。

「ええ。思い出したわ。」

私が何のために能力を、アイドルを目指そうと思ったのか。あの屋

敷で執事さんに教わって、私が防御型で特性が守護防壁であることを知った時に初めて考えたこと。

「千早ちゃん。私たち能力を使う人は、決意や覚悟を確かなものにすることで使用する能力に何かしらの変化が起こる。それはやがて強い意志となつて突き進むための矛となるの。」

水瀬さん、真、そしてあずきさんが何か大きく変化したのは心に確固たる決意を抱いたからだ。

水瀬さんはいつの間にか魅力の回復が異常なまでに早い。それはボルテージ現象を発現させたあずきさんよりも数段早い。電撃の威力も前に比べて段違いに上がっている。いや、魅力のコントロールが更に上手くなったから出力が上がったのだろう。

真は炎の色が赤から青に変わっている。原理として炎は燃える酸素の量で色を変えるし熱量も上がる。最初、真の炎の変化を見たとき空気中の酸素を急激に燃焼させているから青くなっているのだと思つたのだが、ならば赤や白に紫と別の色が混ざっていなければおかしい。だが真の炎はどこから見ても夜空に溶け込むような青。熱量も大幅に上がっているし、彼女の心に一体どんな変化が及んだのかは後で訊いてみることにしよう。

あずきさんは恐らく前々から心による覚悟の重要性はわかつていたはずだ。既にボルテージ現象を発現させていたであろう彼女は大きな変化は見られなかったが、やはり魅力の回復速度は上がっている。これなら早々に転移できなくなることもないだろう。

みんながそれぞれ、この戦いで格段に強くなっていた。実戦と訓練の経験の差は何よりも得難いというのはよく言つたものだと思つて納得する。

しかし、失つたのはその代わりにすらもならないものばかり。対価や代償が釣り合わないのは世の常だが、それも今更ながら恨めしく思う。

「ティーチャー律子は能力と心の在り方を教えてくれる人だった。どれだけ荒んだ心を持っていても、気が付けば人を思いやる優しい子になつていた。どの世界でも変わらないね。私たちが慕つてた人と別

世界の律子さんは何一つ変わらない。私たちの先生……。」

「私も律子に教えてもらいたかったわ。きつとアイドルを目指すことがとても楽しかったと思うもの。」

「ティーチャー律子がアイドルには大切なことが2つあるって言った。“アイドルは常に人の心と共に”……それが最も大切なことなんだって。」

今までの違いに思わず苦笑してしまう。私たちはそんなこと一言も言われなかった。能力を使うための基礎から始まり訓練で鍛えて律子の、いや偽律子だった貴音さんの定めたアイドル抜擢を甘んじて受ける一つの作業と化していた。全ては自分で辿り着くこと。それが貴音さんの教育だった。

100年前、私が本物の律子に教えを乞うていたらどれほど彼女を尊敬し、アイドルとしての活躍を励みにしただろう。今の時代、アイドルは単なる争いの職業として成り下がり、終には国の上層に弄ばれるほどに堕ちてしまった。律子たちの時代で目指したものと比べれば、廃れてしまったと言われても致し方ない。

この尊厳を取り戻すことは容易ではない。いや、もしかするともう既に不可能なのではないか。今生きている人々全員にアイドルと言うものの認識を変えさせないといけない。たったの100年でこれほどまで変わってしまう。人の心は変わらさずにはいられないのだと、分かりきっている答えを改めて意識した。

「千早ちゃん。あの時答えられなかったこと、今なら自信をもって言えるんじゃない?」

「……そうね。日々に流され、目的を忘れてただ力を伸ばすことだけに必死だった私だけ……今なら言えるわ。思い出した私なら……。」
私の心は今、自信に満ちている。どんな人でもその道に慣れてくると忘れがちになるものだが、初心に返ることがこれほどの効果を生むとは思わなかった。

お屋敷を出て一人暮らしをしてから、執事さんに能力を学んだあの頃。どん底から立ち直らせてくれた人たちに恩を返したい一心で学んで生まれた決意。

私を支えてくれた弟の笑顔も、私を拾ってくれた奥様も、もうこの世にはいないけれど……。

「もう一度訊くね千早ちゃん。」

一度は恨みさえした世界だけど

「あなたはアイドルになりたいの？」

悪いことばかりじゃないこの世界を

「なりたいわ。」

あの笑顔があつた世界を

「どうして？」

優しく包んでくれた温かい手のある世界を

「それは……」

『大好きな笑顔を、守りたいから！』

瞬間。それは爆発にも似た、しかし静かで穏やかな力が流れた。

ここは能力を育成するための学院の新校舎前。目の前に心配そうに見つめる亜美と真美。そして優しく笑う律子がいて、右の肩にはたったの一日で深く理解し合えた命無き友人が手を置いてくれる。

青い炎のように燃え上がる魅力が身体から溢れ出している。これほど視覚化されていると言うのに、しかし内部の魅力はどんどん増えていって今ならシールドで空を覆うことすら出来そうだ。

身体に纏う魅力を、意識的に一気に取り込む。

「どう？ 千早ちゃん。」

「・・・静かだわ。すごく落ち着いていて、まるで波紋一つない湖の水のよう。」

「そっか。」

「千早・・・ちよつと手を貸してちょうだい。」

律子が私の左手をとる。

目を瞑り、意識を集中させた彼女は私の左手をジッと見つめてよくわからない質問を投げかけてきた。

「・・・千早、今は何も感じていないかしら？」

「・・・暖かくなったり冷たくなったり、かしら。それ以外は特に何も・・・。」

「そう・・・いいわ。もう私が言うことは何も無い。」

心の中での出来事は、現実世界でのホンの十数秒程度だったらしい。周囲の状態として春香が私の肩に手を置いたことくらいで大した変化はない。空では水瀬さんとあずささんと真が固まって会話をしている。

そして瞬きをする合間で美希が水瀬さんの眼前に現れて瞬間、背後

からそれぞれ一撃を浴びて地上へと落下してくる。

目にしたのはそれこそ爆発。美希の身体からは黄緑色の魅力が空
いっぱい広がったかに見えるほどの密度と大きさだった。

ボルテージ現象と言ってもこれほどまでだと、どんな強力な攻撃が
来るかわからない。

「行こう千早ちゃん。」

「ええ。．．．あ、春香。」

「ん？」

「アイドルとして大事な2つ。人の心と共にと．．．あと一つは？」

「ふふ．．．それはね。」

地面に打ち付けられたであろう水瀬さんが空を見て絶望の色を表
していた。次に下を向いて諦めたような表情で笑っている。少し怖
い。

「吸収していたのね．．．。」

空を見た私も納得していた。見るからに美希は自分の魅力も相手
の能力も、魅力を含むものはすべて吸収しているように見える。だが
吸収していても一定の力以上だとダメージは受けるようで、打撃に関
しては普通にダメージを与えられているが2秒程度で回復している
ようだ。

つまり一定の能力は吸収して、ダメージは即座に回復している訳
で、これの対処法に関しては言うのは簡単だが実行は難しい。

今の私にその力はない。防御型である以上それはあまりにも難し
い要求だ。

巨大な陣を描き、それが回転して起こっている爆風に目を細めて、
恐ろしいほどの力を肌で感じ取る。

あれを撃たれては、この学院の敷地どころかこの国ごと危うい。

「水瀬さん、大丈夫？」

「何とかね．．．だけど、もうダメだわ。あんなのを撃たれちゃ．．．。」

諦めの言葉が次々と溢れ出す水瀬さんの顔は目に涙を浮かべて悔しさを隠しきれないでいた。

本当はそんなこと言いたくないのだろうと、心中を察する。彼女の性格からして当然だろう。本来の彼女なら諦めるなんて選択は存在していない。常に果敢に攻めて来たのだから、今の悔しさは経験がないほどだろう。

高槻さんを護れなかった自分の力不足も含めて、自棄がどんどん強くなっているに違いない。

「ごめんなさい千早……止められなかった。」
「大丈夫。」

私は彼女を笑顔で見つめる。謝罪なんて必要ない。今を一生懸命に次へ繋ごうとしている彼女たちを誰が責められよう。例え、原因の発端だとしても後の対応が正しければ責めるべきではないのだ。

今、一つの決意と覚悟することで過去に経験がないほど自信に満ちていた。

それがわかったのか、水瀬さんの顔が呆気に取られている。この顔を見るのは2度目だろうか。前にあずささんが唐突に空を飛んで尻もちをついた水瀬さんも同じ顔をしていた。

「千早……あんた、何を？」

「水瀬さん……私はあなたも、あずささんも、我那覇さん、真、亜美、真美、律子、春香、そして美希も……みんなを守る。」

口にするとはとても大事なことだ。それだけで力が溢れてくる。

今まで収まっていたボルテージ現象が再発し、止めどなく広がって水瀬さんも覆う。

気持ちよさそうに浸っている彼女には悪いけれど、一気に身体へと取り込んで握り拳に力を入れる。

「行ってくる。」

身体を浮かせて飛び立つ。空では美希がどんどん力を上げて今にも放とうかと言うほどだ。

先に空へ到達していた春香の左横へと向かい、止まる。

目の前には黄緑色の巨大な陣を回転させて周囲を黄緑色に染め上

げている脅威の怪物、眠り姫。

きつとこれが最後の戦いになるだろう。未来のために、そして世界の笑顔のために、全力で戦おう。

「終わりだよ、春香。もう止められないの！ 美希、もう止められないよ！」

美希の後ろの陣が徐々に速度を落とし、やがて止まった。

バツと両手を前に出して砲撃の構えを取る。陣は収縮しながら美希の手の先に集まり、ボーリング玉と同サイズの黄緑色に輝く玉となつてその時を待っている。

「千早ちゃん、私も知らない強力な攻撃が来る。・・・大丈夫？」

「大丈夫よ。私たち二人なら、絶対に。」

私たちの後ろには守るべき友人たちが、そして未だこの戦いを知らない数多くの命が居る。背負うには重すぎるけれど、私がアイドルを志したのはそんな人たちを守るため。その人たちが日々を笑顔で過ごすことの出来るように。突如として大切な人や生活がなくなならないように。

刹那、それは放たれた。

光の玉からは爆発的な砲撃が私たちに向けて放たれ、さらに地上へ降り注ぐようとしている。私と春香は両手を前に身構えた。

巨大な閃光が迫る中、私の意識は自分の身体と春香の身体を守ることに集中した。そして意識した訳ではないけれど、地上にも私のシールドが展開される。ドーム状のシールドは地上で行く末を見守る友人たちを包んだ。

これだけ大規模な能力を使ったにもかかわらず、体内の魅力は減つた瞬間から一気に湧き上がり戦う力をくれる。まるで自分が眠り姫にでもなつたかのように魅力は無限に湧き続けるように思えた。

私たちは、どんなものでも焼き尽くしてしまうだろう閃光を受け止めた。

さつき律子が受け止めたものとは比較にならないほどの熱量。衝撃で後ろに逸らされた力は地上に降りかからず、ドーム状のシールドが弾け飛ばし霧散させてくれている。

さらに、この強大過ぎる力を防いでいることに誰よりも驚いている者が一人。

「そんな……。人間に……。ただの人間に防げるはずがない……。っ！」

光の砲火の隙間から、美希の表情が一瞬見て取れた。

美希が放射する閃光の威力が上がった。目の前の出来事にテンションが上がったのだろう。眠り姫とて力が心に左右されないということはないはずだ。頭で分かっているも心が否定するのであれば能力は本来の力を発揮できない。この場合、美希は私たちが防いだことをありえないと否定したのではなく、『負けない！』という気持ちが強くなったのだろう。だから威力が上がった。

「この力……。お前もアイドルの器を持っていると言うの!?!」

春香と同じく美希も律子の教えを覚えているのであれば、この言葉は本来のアイドルのことだろう。その器が私にあるのかはわからない。ただ必死なだけだ。無理をせずにこれほどの強大な力と質量を簡単に受け止められる訳がないのだから。

こちらを守るために魅力を消費し続けているのだから魅力の回復が追い付かなくなればその時点でゲームオーバーだ。

そうならないために、今最善で出来ることをしよう。

右手を春香に伸ばし、それに春香も笑みをもって頷く。

賭けよう、私のすべてを……。

「ダメっ！ 新たな眠り姫が生まれてしまう!!」

未だTPOを弁えず異常な存在感を醸し出すおしゃぶりを啜えた双子が叫ぶ。

何故空へと二人で挑んだのか。今この状況でそれが分かっている者はいないだろう。

春香と千早はお互いに魅力を融合させる道を選んだ。地表でその行動を起こさなかったのは、単に美希がいつ攻撃を放出してしまうか

が分からなかったことも含めて、私たちを守るため。

そして二人は理解している。融合することで自分たちがどうなってしまうのか。千早はまだその代償に想像が追いついていないだろうけれど、春香はもう理解している。これが自分の意味を賭けた最後の戦いであることに。

確かに亜美と真美の言う通り、新たな眠り姫が生まれちゃうだろう。体内に2つの魅力が存在し、混ざり合うことで眠り姫として覚醒すると言うのであれば、これから行うことは間違いなく眠り姫として生まれ変わる危険な行為だと言える。

しかし私は、彼女が美希のように魅力に人格を囚われ暴れまわることは絶対ないと確信している。

この場の誰一人として気付いていなかったことに私が真つ先に気づき、そして大丈夫だと後押ししたのだ。

適当や推測ではなく説明できる現象だ。何も問題ない。

あとは本人たちがやるかやらないかの問題だけなのだから。

空では春香が左手を、千早が右手をお互いに握り合ってその時は訪れた。

この世界が救われるその瞬間が徐々に迫っていることを、私は懐かしく胸を高鳴らせて一際輝く空を見守った。

第十四章

終

第十五章 —最後の奇跡—

賭けよう、私のすべてを……。

世界のために、私の今までの人生すべてを使ってこれからの未来のためにすべてを使う。

春香の魅力と融合することで、私はきつと命と言うものはなくなるのだろう。二つの魅力が私の中で交わって、人間ではなくなる。そこに私の自我があるかは判らない。最悪、美希と同じく暴れまわる眠り姫として世界の敵となるかもしれない。

“でも、気持ちで負けるわけにはいかない。”

こうなってしまうと言う考えは実現し得る。例え負の思考が廻つたとしても、それを覆すだけの力を放てばいい。恐怖に気持ちが負けてしまつては終わりだ。

今はただ、身を任せて全力で美希を打倒する。そのために私はここで皆を守るために戦っているのだから。

暴走する世界の敵だろうと何だろうと、どちらにしる今ここで美希を倒せなければ後に世界は死の道突き進む。これだけの力を持っている美希が本気で世界を破壊するのなら、彼女を止められる者なんていない。もし美希を打倒出来る者が現れたなら、あずささんの世界の二人は既に倒されているはず。そうでないのは、神が奇跡を起こしてくれなかったから。脅威が一人だろうが二人だろうが結果が変わらないというのであれば躊躇する必要なんかない。

やらないで後悔するよりやって後悔した方が何千倍もマシだ。

自分の信じるがままに、進みゆく流れのままに。私の心のままに。私にはもう生まれ持った家族はいない。仕えるべき恩人もいない。

あるのは、それぞれの道を進む友人たちと喜怒哀楽の織り交ざる思いだけ。

なら、私はその思い出を未来へもつていこう。一つの脅威の前に僕
くも崩れ去った数ある未来の代わりに、今こそあるべき未来へと。

美希の攻撃は未だ衰え知らずに放たれ続けている。これほどの威
力の攻撃をこんなに長く放っているのにはスゴイと言う思いの中に
呆れすら感じる。

美希の閃光はまだ私たちには届いていない。春香と何とか防げて
いるくらいで、手のひらは熱く感じる。前の私ならとつくに燃え尽き
て灰すら残っていないかっただろう。本当に覚悟一つでここまでの力
が出せるものなの？

「それだけじゃないよ！」

「春香！」

「千早ちゃん、あなたが今までの人生でどれほどの経験をその身に蓄
えたのか私には想像もつかないけど、世界を心で見してきた今のあなた
はかつての私や美希をもう超えている。たぶん・・・」

「私をも超えている。」

確かに私はまだ数えても20年と少ししか生きていない。能力と
心が関係していることに気付いたのは入学1年目の秋。これでも恐
ろしく早い方。心に触れるものなんて意識しなければ感じるもの
じゃない。

けれど、彼女はとても幼い頃から自分の心に常に触れてくれる何か
があった。恐らく、彼女にとって誰よりも大切な人との触れ合い。そ
の触れ合いのおかげで自然と心で感じる事が出来るようになった。

そして彼女はどれほど嫌なことでも最後には思い返して心で受け
止める強さも持つてる。そんな人が、ただか数十年生きた中でどれ
ほどの力を得られるのだろう。いや、年齢など関係ない。50年生き
た能力者と10歳の能力者が戦って子供が勝つことだってある。

その差は身体のパイクと経験の違い。

身体のパイク時、それは人それぞれではあるものの大半は15歳か

ら20歳の間に訪れるとされている。体力を始めとしてバイタリティがピークだと、その人の人生で一番能力を発揮できる時期でもある。だが魅力に関しては未熟故に全力を出すと魅力不足に陥りやすい。だがもし、身体がピークであると同時に魅力を使い放題で尚且つ心が様々な経験を積んでいるとしたら。

その様々な経験の内、一般的な普通の生活や金持ちなどの高貴な人たちが最も経験しづらく受け止め難いもの。

“どん底”、つまり絶望だ。

その経験があるか無いかで、さらにはその経験を受け止められるかどうかでも心の在り方が変わる。

この世界の美希も一度どん底を経験しているからこそ、これだけの力を手にした。その心を支え美希を強くしてしまったのは春香だ。春香も恐らく大きな絶望を経験して美希と出会ったことで生きる目的を見出した。“美希を守ること”で自分の存在意義を確立した。この二人の絆はとても強い。例え私の世界の美希が眠り姫になったとしても、ここまでの力はきつと備わらない。あの子はすごく厳しく育てた方だけど、本物のどん底からは多分抜け出せないだろう。

普通の生活をしているだけでは能力は育たず、高貴な生活をしているだけでは心は育たず、どん底から這い上がってやっと能力と人と世界を理解できる。当時の講師にも国のお偉方にも鼻で笑われたが、それが私の学生時代に組み上げた一つの理論だ。

千早は一般的な普通の生活も、どん底も、高貴な生活もきつと経験している。更にそこへ、大切な人の死や命のやり取りと言う誰もが経験しえないことをしている彼女が幼い頃から常に心で感じる生活を送っていたとしたら、彼女の力は想像できない。

どれだけ強力な攻撃をしても如月千早は全てを防ぎきってしまうだろう。

さつき私が千早の手を取って何をしたのか。あの場に居た誰もが理解できなかつたはずだ。

あの時私は彼女を、“如月千早を殺すつもりで能力を使った。”
一か八かの選択だったけれど、あれで生きていなければ美希と戦っ

ても春香と融合したとしてもきつと勝てない。それほどまでに美希の攻撃は強すぎる。私の炎が相殺できないほどの熱量なのだから、早との相性は最悪と言っている。

だけどもあの子は私から、燃え尽きてしまうほどの力を受け、その上凍らせる能力を受けたにもかかわらず不思議そうな顔で温かくなったり冷たくなったりと言った。

正直驚きを通り越して呆れた。不本意にも天才と持て囃された私との力の差が歴然だったのだ。

これは即ち、彼女の能力が進化して出来た“絶対防御”の力。しかも無意識でそれなのだから意識的に力を使っている今、美希の攻撃が通るなんてことは億に一つもありはしないだろう。

それほどの力を有しながら本人はまだ無自覚。その強大な力の理由を理解させてあげれば、それは必然的に最高にして最強の能力者が誕生するだろう。

それを春香も理解している。だから……。

「あなたはアイドルに成るべくして生まれてきたような人だもの。」

物心ついた頃から私は幸せの中で暮らしていた。温かい父と母の笑顔と生まれてきてくれた弟の笑顔。私の歌をずっとずっと聴いてくれて嬉しいことも嫌なことも分かち合ってくれた弟。その弟が死んで全てが壊れて、あれほど笑顔を与えてくれた両親からは常に睨まれて捨てられた私。頼る人もいないまま空腹と暴力が支配する貧困街で明日にも命尽きようかと言う崖っぷちを1年も生き抜き、永遠に続くかと思つた地獄を命ながら逃げ出して、彷徨つた先で温かい光に手を差し伸べられた。身の丈に合わないほどの衣服と食事を与えてくれた奥様と執事さん。一人での生活の中で能力のことを教えてくれた執事さんと、とうとう謁見叶わなかった奥様への恩。そして私を生かしてくれた世界。その恩を返すために入ったこの学院で出会い別れた友人たち。

この戦いで本物のアイドルは何たるかを教えてくれた彼女たち。

全て私の心の中にある。
今の私に守れないものはない。
優、お姉ちゃんのこと許してね。
奥様、私は見つけました。あなたへの恩の返し方。

「千早ちゃんなら、大丈夫！」

私は

「春香！」

世界を

「私、アイドルになるわっ!!」

護る！

春香の伸ばされた左手と千早の伸ばされた右手が指を絡めてガツ
チリと繋ぎ合わさった。

瞬間、空を満たす温かい光が地上にも降り注いだ。目を開けてられ
ないくらい眩い輝きは地上と空を繋ぐ桃色の柱になって更に輝く。

光の柱の中に一人、青い髪の少女がまるで溶け合うように光に包ま
れ衣服が変化していく。

膝近くまである白いブーツの足首が光に包まれて弾けると共に青
いリボン現れ、青いラインの入ったスカートはピンクと白と黄色が交
互になびく六重層のフリルスカートに変わり、腰部についた青いベル

トが消滅して一瞬でピンクのリボンが姿を現し、服の側部にもピンクのラインが縦に入っている。黄色のボタン留めが胸の前で上中下と3つ並んでいて上服の裾は二股に分かれて脛脛ほどまで伸びている。首元に光が密集して、み空色のスカーフが現れ、同色でバラの形をした花飾りが左頭部に現れる。両手を前に密集していく光が弾けたら、そこには重量ある長いスタンドマイクが、まるで主人が現れるのを待っていたように彼女に身を委ねる。片側は足を三本持つていて反対側にはマイクが2本ついている。

光の柱の中で生まれ変わった新たなアイドルがその両目を開く。強い意志を滲ませる目は左側だけ赤く光を放っていた。

彼女は今感じていた。春香の魅力の中にもう一つ、穏やかながらも強大過ぎる魅力が存在していることを。

この光の柱は地上から吹き出している。周囲にこの戦いをずっと見守ってくれている桜たちの光。

驚くことに今、千早と春香の魅力が混じり合ってそこへ桜の魅力まで合わさっていく。

一つの胴体に3つの魅力を宿すという奇跡が世界の命運を決定づけた。

「・・・キレイ。」

その一言以外にこの光景を表現出来る言葉を伊織は持ち合わせていなかった。

空の暗闇から真っ白に変わって桃色の光の柱の中に2年と少しを衝突しながら一緒に過ごした彼女がいた。

地面に力なく座って見守っていた伊織は、その光景はまさに女神が降臨したように錯覚するには十分な壮麗さがあつた。千早が春香と共に空へと向かうとき、思わず彼女に向かって手を伸ばした。無意識ながら伊織は、千早に“待つて”と声も出ずに引き留めたくて、千早に死んでほしくないと心の奥底で思っていた。

大規模と言わざるを得ない千早のボルテージ現象を見て、その魅力

に包まれても美希に勝てるというイメージは湧かなかつた。

しかし今、この光景にはそれを確信づけるだけの希望が瞳に映し出していた。

あずさも真も響も、律子も亜美と真美も、この空に現れた希望を見て言葉を失っているように見える。開いた口が塞がらないとはまさにこのことである。

そして彼女たちが希望を見ている時、その場の一人はまさに絶望を見ている。

「うああああーっ!!」

千早の変化と光に圧倒されて攻撃の手を止めていた美希が我に返り激昂する。本能的に危険だと感じ取ったらしく、この戦いで初めて眠り姫が心の底から焦っていた。

敵対している相手が自分の命を脅かす力を手に入れたのなら、まさに当然の反応だ。

眉間を寄せて、まるで親の仇のように睨む彼女は叫びを上げて再び両手の中心にあるボーリングの玉サイズの黄緑色の球体から閃光が放たれた。さつきよりも更に太く、更に熱い。

今度は何もせず直撃を受けた千早を見て多量の汗を流しながらも息を切らせて笑みを浮かべた。

「どこを狙っているの?」

背後から声がした。頭の実験速度が追い付かず一瞬身体が硬直し

た。

即座に飛び退いた美希は目に見えるほどに青ざめている。距離を置かず2、3度と手のひらから閃光を放ち千早に直撃するも、効果はない。

動かない千早を見て攻撃の力を蓄えようと再び背後に陣を形成する。

しかし、今度は上下左右と4つの陣を出現させて黄緑色の丸に見えるほどの速度で回転させた。その力を全て自分の前に挙げた両手に集中させる。先ほどとは比べ物にならない、一人が軽々入るサイズの黄緑色の玉が出現した。

その間に千早は全くと言っていいほど動かない。地上の少女たちもさすがの律子でさえ焦りと不安が過る。それほどまでに強大な力を肌で感じ、この世のものとは思えないほどのエネルギーが周囲に衝撃をまき散らしながら集まっている。

それは熱く、まるで太陽が傍にあるようなほどの熱量。大気の温度は100を下らなく超えている。

そのエネルギーを乗せた球体がどんどんと小さくなっていき、そして。

「うあああーっ!!!」

咆哮と共にその力は放たれた。最終的にボーリング玉ぐらいにまで収縮した球体は建物ですら飲み込むほどの巨大な閃光として放たれ千早の身体を包み込んだ。

爆音が7キロも離れた街に到達するほどの衝撃があり、爆風が周囲の少女たちと桜や植物たちを吹き飛ばそうかと言わんばかりに揺れさせる。

その閃光は20秒足らずも放たれ続け、徐々に細くなって消えた。両手をだらんと下げて息も切れ切れの美希は千早が居た場所を見つめる。そこは黒い煙がかって千早の姿が未だ見えない。

美希は整わない息を気にもせず口元には笑みが現れていた。

黒い煙が徐々に霧散していき、そして美希の笑みはたちまち恐怖に変わる。

間違いなく灰と化し跡形もないはずの千早が傷一つなく平然と宙に立ち美希を見つめていた。

「そ．．．んな．．．。」

最大出力だったのだろう。全力を出し切っても尚、無傷の相手がいる。そんな状況で冷静で居るなんて例え神でも無理な話だ。

かすかに首を左右に振りながら後退する。千早とどう対峙しているか分からず混乱していた。

そこへ千早は手に持つスタンドマイクをグルグルと軽々回してグツと持ち直した。三本の足は美希に向かって開いている。足を肩幅より少し広く開き、右足を後ろに下げて腰を落とす。左手がスタンドの足近くを持ち、右手をスタンドの首元をもって腰に据える。しっかりと固定した後、三本に開けた足の中心に薄桃色の球体が徐々に膨らんで明滅を打ち始めた。

ボーリング玉より二回りほど大きく膨らんだ球体は今度は少しずつ小さくなっていく。まるで凝縮していくように今度は手投げ玉ほどの大きさになって明滅は止まった。

「．．．ごめんなさい。」

その一言を放って薄桃色の光は爆発した。

「ひっ．．．。」

さっきの美希の閃光の倍は太く速い。

世界中に響き渡りそうな轟音を発して。

小さく漏れた声はそれ以上発されることなく、1秒もない速度で美希の身体を包み込む。

空を切り裂くように光が横切った。

光に包まれたの。

身体が容赦なくボロボロになっていく。でも、不思議と痛くない。一瞬にして身体がなくなって、全てが解放されたみたいに軽くなる。

終わったんだ。終わらせてくれたんだ。この地獄を。

別の魅力に身体を操られて、何より大切だった人を死なせて、どれだけの時間を閉じ込められたかわからないけど、もういいんだ。

きっと天国には行けないけど、仕方ないよね。

これから行くところは、もしかしたらもつと苦しい場所かもしれないけど、仕方……ないよね。

ごめんね。

……バイバイ。

「美希っ!!」

閉じかけた目を見開いた。

真っ白い視界の中に一人。世界で誰よりも大切な人が一糸纏わない姿で自分に手を伸ばしてくれていた。

「春香っ!」

同じく一糸纏わない姿で手を掴もうと腕を伸ばす。

神はどこまで意地悪なのだろう。二人の手は後少しで触れあえるところまで来ているのに、まるで擦り抜けるように何度も空振って一切触れられない。

「後、少しで……!」

美希とこのまま永遠の別れとなってしまうのか。『冗談じゃないっ!!』と心が叫ぶ。目の前のたった数センチ。その数センチで最後の願

いが叶うのに、それを諦めてしまうような後悔しか残らない終わり方なんて望んじやいない。

確かに、もう一度最愛の義妹に逢えて解放されてこれ以上の奇跡はない。でもこれだけの奇跡を起こしてくれたのなら最後の1回だけ奇跡を起こしてほしい。肉体でもないのに身体が、腕がバラバラに千切れてしまいそうだ。前に進みたくても不思議な力が邪魔をしているように進めない。

こんな嫌がらせのような神の行為を恨み始めた時だった。

トンツ

春香は微かに、しかし確かにホンの僅かだが背中を押された気がした。視界の端に糸のような髪のような銀色の何かが映る。フワツと押された身体は数センチの前進を経てやっと目的の手をつかみ取る。

「春香っ！ 春香あっ!!」

お互いの身体を引き寄せ合って強く抱きしめる。

神への恨みが一瞬にして感謝に変わった。

美希は春香の胸の中で泣きじゃくっていた。春香も静かな涙を流して美希の感情を受け止めた。

「美希！」

「春香、ごめ．．．ごめんなさいっ!! 美希．．．美希はっ!」

「美希、もういいんだよ。もう絶対離さないから。ずっと、ずっと一緒にだよ。」

「うん．．．うんっ!」

二人はこれまでの時間を埋めようとするように、温かく抱きしめあった。もう二度と離さない。そう願いながら足元から光の粒になって徐々に消失し始める。これから先、魂だけの存在になろうと二人はかつてあったはずの時間を必ず取り戻すだろう。

それが例え永遠であっても、二人一緒ならその道中もきつと楽しいはずだ。

春香は目をゆっくり開く。美希の頭を消えゆく手で撫でながら、遠

くで見つめる青い髪の少女に向かって笑顔を返した。

．．．．．ありがとう．．．．．

二人は完全に、光となって消えた。

第十五章 終

第十六章 —あの空見上げて—

星が輝く夜。微風になびく草原。取り戻した静寂と出てきたばかりの虫たちの小さな鳴き声を証拠に周囲は平和を取り戻した。

全てが終わった空の上では、如月千早が取得したてのスタンドマイクを右手で持つて正面を見つめている。

何もないその場所にひとつ、深く礼をしてから地上を見渡した。

あずさと伊織は呆然と千早を見ている。真は戦いが終わったことを理解して緊張の糸が切れたのだろう。左手で顔を覆って大きく肩を震わせていた。律子は大きく息を吐いてホツとしたのか笑みを浮かべる。その横では亜美と真美が両手をを上げて大喜びしていた。我那覇さんは両膝について手を組んでいる。祈りを捧げるように見えるその恰好は月明かりにも照らされて凄く聖らかに見えた。

千早はゆっくり、ゆっくりと降下して地上に降りた。

少し焦げた草の上に立つ。空から見るのと地上で見るとはやはり違いが凄まじい。

周囲の桜は根こそぎ焼け焦げ、斬り倒れ、旧校舎は跡形もなく吹っ飛んでクレーターのようになっていた。新校舎もところどころ壊れ、無事な部分も大きくヒビが入って完全に立て直し案件になってしまっている。

だが、あれだけの攻防の中でよくこれだけの被害で済んだものだと感心半分と呆れ半分の感想を持つ。

「千早—」

千早に一早く駆け寄ったのは伊織だった。ボロボロで所々が擦り傷が目立ち、打ち身の痣はパツと見でもよくわかる。伊織に続いてあずさも駆け寄ってきた。伊織同様に傷だらけで綺麗な身体だけに痛々しい。

走ってきた勢い任せで千早に抱き着いた。突然のことで倒れそうになるのを何とか踏ん張る。

「ありがとう……ありがとう。」

耳元で涙声ながらに囁く感謝の言葉に何だかむず痒くなって少し

頬を紅潮させた。

その姿を見てか、伊織もやはり目尻に涙を溜めて素直な称賛の声を発した。

「やったのね、私たち。ホントに・・・よかった。」
彼女もとうとう頬に一筋、流れる雫を堪えきれずに次々と落ちていく。

この時、千早はやっと実感した。長く短く、悲しい戦いが終わったのだと。未来へと続くはずだった凄惨な物語が道筋を変えて走り出したのだと。

たまらず千早の目にも涙が溜まる。

少し息苦しくなり始めた頃合いであずさが千早を離した。その時の二人の顔を千早は忘れることはないだろう。一瞬の驚きの後に見えた異質なものを見る目。あずさと伊織が同時に千早の目の変化に気付いたのだ。右目だけが赤く輝いて今までとは違う不思議な雰囲気を感じる。それは二人とも同じように感じていて、千早であって千早ではない、という根拠もハッキリしない感覚的なもので、その感覚をうまく言葉に出来ず口籠もる。

そんな一瞬の静寂と入れ替わりで今度は亜美と真美と響が何やら騒いでいるのでとりあえず集まることにした。響の許へと歩み始めると亜美と真美が何かを言い合っていて響が頭を抱えている。

こうして観ると双子に責められている褐色少女と言う構図に妙な安らぎを感じてしまっていた。

「うぎや〜っ！」

響が悲鳴のような怪獣のような声を上げて頭をブンブン振り回す。それを真似るように亜美と真美も頭を抱えた。

「どうしたのよ、何があったの？」

伊織がすかさず訊いてくれたことで頭を抱える少女たちと地べたで座る眼鏡娘がこちらを向いてその異常事態を話始めた。騒ぐ三人が同時に喋るため訳の分からない音だけが耳を通り抜けて内容が全く入ってこない。

伊織が一喝して静かにさせると代表して真美に状況を説明させる

ことにした。

「あれを見れば分かるよ。」

何とも面倒くさそうに言葉でなく視覚に説明させようと指さした先には、地面に横たわったまま目覚めぬ少女たちが居た。手前に雪歩が横たわり、その奥には伊織の大切な人であるやよいが眠っている。そしてその奥にはあずさの妹である貴音の姿が……。

「……ない。」

あずさが急激に混乱し始める。頭がオーバーヒートしたのか思考停止状態になってフラついた。

倒れそうな彼女の肩を抱くように支えたのは、いつの間にか近付いていた真だった。

「あずささん、大丈夫?」

「ま、真ちゃん。……ごめんなさい、……大丈夫よ。」

真の支えで何とか再び立つあずさに周囲もホツとする。こういう時には頼れるというかすぐさま駆け付けてくれると言うか、少女なのに紳士だと矛盾じみた感想を改めて持つ。

それでも変わらず混乱状態のあずさは、何故貴音だけが居なくなっってしまったのかと双子に視線で問いかける。彼女は間違いなく地下にてあずさに身体を貫かれ絶命した。死体が勝手に動くなどB級ホラー映画ではないのだから何か明確な理由があるはずだ。そしてそれについては律子が口を開いた。

「推測でしかないんだけど、多分未来が変わったことで貴音の存在自体にも何か変化が起こったんじゃないかしら?」

「それってあれだね! タイムパラダイスボックスってやつつしよ?」

「違うよ亜美。タイムパンドラボックスだよ。」

「嫌な箱ね。」

「タイムパラドックスだぞ。確か過去への干渉が未来を変えてしまうことだったかな。」

なるほど、可能性は捨てきれないと千早は頭の中でその推測が一番可能性が高いだろうと思った。

もしあずさの未来がこの世界の延長の時間軸なのだとしたら、貴音に何か影響があつたことも頷ける。

「その、貴音さんに変化があつたなら、あずささんにも何か影響がないとおかしいんじゃない？」

と、真が最もな意見を口にした。確かにそれならばここにいるあずさにも何か変化がなければいけないはずだ。見た感じでは特に何か変化した訳ではなさそうで、本人も変化には気付かなかつた。

その謎には亜美が推測ながら答えてくれた。

「多分、まだ影響が出てないんだと思う。」

「どんな影響が出るのか予測出来たりしない訳？」

「で、できなくはないけど・・・。」

「亜美ちゃん。私が教えて欲しいの。」

言うのを躊躇う亜美だが、影響があるであろう本人からの申し出とあれば流石に教えない訳にもいかなかった。

聞くとあずさ自身が迷ってしまうと思つたからと言う亜美なりの気を使った行動だったが、それもどうやら意味は成さなかつたようだ。

「・・・これも推測だけど、あずさお姉ちゃんは本当はこの時代に居ちゃいけない人なんだよね。もしパラドックスが起こつた未来に戻つたら、その瞬間に・・・この時代での記憶は全部なかつたことになると思う。」

この推測にみんなが驚きを隠せない。この時代に来た3年近くの記憶や経験が根こそぎ無くなってしまう。それはあずさにとつて途方もなく酷な選択となつてしまった。未来の世界が本当に変わったのかを確かめたい。だがその未来に戻ればこの世界でのことが全て消えてしまう。

いくら推測と言つても可能性があるのだから、それを踏まえて未来へ戻る選択肢があずさにあるのか。それを問おうと伊織はあずさに向いた。

そして頭の中に出来上がっていた問いかけがすぐに消えていく。

「やっぱり・・・そうなってしまうのね。」

彼女の顔は迷いなど少しも抱いていなかった。ただ、どんなことがあろうと自分の責任を果たそうと心に決めていたのだ。そんな彼女にどうするのかと言う問いかけは決している覚悟をバカにするのと同義で、到底口にははいけないことだった。

「私、未来に戻るわ。」

「そ、そんな！ あずささん——」

「響——」

伊織の声が響く。静まり返る周囲の音は風と葉音で月夜には相應しい。

みんなにしてみれば当然ながら、この世界での思い出が消えると言うのに、迷いなく簡単に決めてしまえるものなのか・・・とも思わなくもない。だが、未来を変えたいがためにこの世界に来たという大きな事柄に対して自分たちとの思い出を秤にかけるなど出来はしない。あずさも本当は記憶や経験を消したいとは思っていない。でもわざわざ秤にかけないのは迷いたくないからだ。その気持ちを酌まなければみんな笑って彼女を送り出せなくなってしまう。

それが一番酷であると、伊織は思った。

「迷わせちゃダメよ。あずさの決意を無駄にするつもり？」

「でも・・・でも。」

響の目から涙が零れる。人一倍、人との繋がりを大切にしている彼女があずさの記憶と未来への帰還を悲しまない訳がない。心の準備も整わないまま別れることになってしまうのは誰にだって堪えがたい。

そんな別れの悲しみは時間が解決してくれる、などと言う者もいるが、時間が解決すると言うのは単に忘れてしまうということだ。人は時間が経つにつれ古い記憶は軒並み忘れていく。大切な人との思い出を忘れないようにするには、その人との思い出を時折思い出すことだ。それだけで、その人も自分も笑顔で居られるだろう。

だからこそ、最後の思い出は悲しい顔ではなく笑顔で別れなければならないのだ。

「ありがとう響ちゃん。伊織ちゃん。・・・みんなには申し訳ないけれ

ど、それが私の選択なの。」

伊織は心の底から感服する。この言葉だけで、引き留めようなどと言う無粋な真似をする微かな気持ちもなくなった。そして彼女が初めから持つ信念と共に自分の場所へと戻るのであれば、自分も前へ進まなければいけないと固い決意を抱く。

「亜美、真美。あずささんを未来へ戻してあげて。」

「でも、魅力がまだ・・・。」

「大丈夫よ。」

千早は亜美と真美の手を握って意識を集中させた。うつすら視覚化されるほどの魅力が身体を纏い、ゆっくりと二人に移っていく。青色ではなく桜色の魅力は繋いだ手から黄色く変わり亜美と真美の身体へと入っていく。

「こ、これ・・・。」

「はるるんの・・・?。」

春香の能力である『支配』。彼女との融合は彼女の能力も受け継ぎ、更に長樹の桜の魅力をも受け継いだ。今の千早の中には自然や太陽、月光から魅力を吸収してくれる桜の魅力と繋がっている。そして眠り姫となり能力が変化してしまったことで元から持つ防御の能力は強化され絶対無敵の盾と化し、攻撃力は申し分ないほどの威力を持ち、『支配』の能力で相手の魅力を吸い取ったり譲渡したり融合したりと、魔王も泣いて謝る勇者状態と言う最強のアイドルが誕生してしまった。

そこまで理解した律子が満足そうな顔をして千早に近づく。

「これで魅力の心配はないわね。さ、帰るわよ!。」

「じゃあ、あずさお姉ちゃんから送るね。未来の世界は変わってるから、イメージしないで。代わりにあずさお姉ちゃんがよく知っているお姫ちゃんを心に思い浮かべて。」

「真美がお姫ちゃんのところへ降り立たせてくれる。亜美は80年後の未来へ跳ばしてあげるね。」

亜美と真美が両手を前に突き出して身体から黄色の魅力が視覚化される。ボルテージ現象ほど沸き立つものではないので能力を使う

ときの現象なのだろう。徐々にあずさの身体が白く光り始める。あずさは千早と伊織に向き直った。

「千早ちゃん、あなたにはどれほど感謝しても足りないくらいの希望を貰ったわ。伊織ちゃんも、一緒に戦ってくれて本当に感謝してます。二人とも、ありがとう。」

「あずささん、お元気で。きつと、良い未来が待ってます。お幸せに……。」

「あんたのゆったり口調がもう聞けなくなると思うと清々するわ。……元気でいなさい。」

二人と短い抱擁を交わす。

あずさは心地いい幸せを感じていた。引き留めたいだろう二人は笑顔で送り出そうとしてくれている。本来ならこういつた形で家族が送り出してくれるのだろう。新たな門出を初めて祝ってくれる人たちの事を、未来に戻っても決して忘れまいと思う。

もう少し別れの感慨に浸っていたいが、彼女にだけは言わなければいけないことがあった。

「真ちゃん……あなたたちを戦いに巻き込んでしまったのに、雪歩ちゃんを守れなくて……本当に……ごめんなさい。」

「あずささん……。」

こればかりは誰も慰めの言葉を軽々しく口には出来ない。美希の攻撃を防ぎきったと思えば油断したために目の前で流さなくても良い血が流れ、果てに萩原雪歩はその純白の戦闘衣装を真っ赤に染め上げ命を落とした。

守れなかったという点では千早が一番責任を感じている。

そしてその場に居なかった伊織はやよいの死を経験している分、真の気持ちが届きにくいほど分かる。伊織は自らやよいを手にかけてしまった。真にとつて雪歩は誰よりも守りたい存在だったはずだ。眠り姫を解き放ってしまった伊織からすれば、間接的にだが雪歩を殺したのは自分のようなもの。例えいつか伊織じゃない誰かによって眠り姫が解き放たれたとしても、それを言い訳には出来ない。この罪はあの世に行つて雪歩に謝罪するまで背負わなければいけないなど、密かに

思う伊織だった。

「・・・あずささん、ボクはあなたを責める資格はありません。ボクは雪歩を守れなかった。なのに人を責めるなんてこと、それこそ雪歩に怒られてしまいます。」

「真ちゃん・・・。」

「雪歩が死んで、ボクの中で大きな変化があった。今までずっと赤かった炎は青くなって更に熱くなった。眠り姫に太刀打ち出来るほどの力を、雪歩がくれたんです。」

掌から炎を出す。小さく揺れる炎は月の光でも判るほどの深い青だった。勢いよく炎を握りつぶす。

千早は真が何を言いたいのかが何となくわかった。赤から青へと変化したのは炎だけではなく、心がその色に変わったのだ。赤く熱い炎ではなく、青く静かな炎へと。

彼女の死が真を成長させた。それは、雪歩が命と引き換えに真と伊織、そして世界の命を繋いだのだ。

高槻やよい。彼女も伊織の力を覚醒させる発端になった。それはまるで甘えていた親が居なくなつて巣立つ鳥のように遅く、守るべき対象が変わつた伊織は死したやよいに成長した姿を見せようとするように皆と協力して戦つた。二人の命が未来への懸け橋になった。すべての発端である貴音も、やり方が間違つていたが運命を変えようと美希に対抗するため制御できる眠り姫を作り出そうとしていた。その貴音を手にかけてあずさは妹と友人二人の死をキツカケにかつての自分を取り戻した。死が渦巻く世界での立ち向かう意思。その意思はこれ以上誰も死なせないと言う決意に変わり美希と戦えるまでに成長した。

伊織が春香と千早の時間を稼ぎ、その伊織が危機の時は真が守り、伊織と真が危機に瀕したときはあずさが助ける。そして春香と千早は世界の未来を救つた。それは多分、あずさの世界も。

死した者も生きた者も誰一人欠けてはいけない戦いだった。

「結果的に世界は救われました。だから・・・雪歩には、”ありがとう” と言つてあげてください。」

明るく、しかし笑顔のまま頬を滑るものを見てあずさも同じく笑顔で雫が頬を伝う。

そうだ。最後の別れくらい暗い顔をしてはいけない。それが例え生者であろうと死者であろうと、そこに感謝があるのなら言うべき言葉は“ありがとう”だ。

「そうね……。真ちゃん、雪歩ちゃん。そして、律子さんとやよいちゃんも……。ありがとう……。ございました。」

真と律子の顔を一瞥して今は目覚めることのない友人二人に深く長い一礼をして、顔を上げる。そこにはもう涙はなく、満面の笑顔に包まれた美しい女性が居た。お腹の前で組んでいた手をそのまま胸の前に持つてきて、みんなの顔を忘れないように瞳に強く焼き付けた。

身体がどんどん白く光り輝いてきた。もう時間がないことをその場の全員が察した。

「みんな、本当にありがとう……。元気だね。」

未だ涙を流す響に向いたあずさは、少し子供っぽく愛情に満ちた笑顔を見せた。

その顔を見て響の涙も止まった。

「会えて良かった。ありがとう、響おばあちゃん！」

最後と言わんばかりにあずさの全身が白く輝く。その光は空へと飛び立ち、光の柱となつて夜空へ消えていった。

響は握った手をソツと胸に置いて、何かが報われたように小さく微笑んだ。

「……さて、それじゃ私も帰らせてもらうわね。亜美、真美、頼んだわよ。」

「待って！」

意気揚々と律子が自分の世界へ帰還しようとするところで、まさかの待ったをかけられた。

彼女の顔は、特別な何かを決意していた。ゆつくりと律子の前に立

つ。そしてまさか、プライドの高い彼女が深く頭を下げ、胸の内にある言葉を口にした。

「私も連れて行ってちょうだい。」

「・・・なんのために？」

「わからない。けど、そうしないといけない気がするの。」

頭を上げた伊織がもう一度、律子の顔を見る。律子も伊織の目を見て本気であると感じ取った。何かはわからないが強い目的があるように思える。

「伊織も・・・行っちゃうのか？」

「ええ。」

「高槻さんのためかしら？」

その言葉に響き伊織の顔を改めて見る。伊織も言い当てられたから驚くような呆れるような顔で千早に返答した。

「まったく、あんたには敵わないわ。聞けば律子はこの世界とは違う時間軸の世界に居たらしいじゃない。なら、亜美と真美に頼まない限りこの世界とは干渉になるわけよね。」

「そだね。」

あずさを送り終えた二人が手を下ろして若干の休憩をとる。魅力の消費が激しく額から汗が流れ落ちていた。

千早も二人に魅力を送り続けている。『支配』の能力が無ければどれ程時間がかかることかと、汗を拭いながら溜息が出そうになるのを何とか堪える双子だった。

「未来や過去にも跳ばせて時間軸の違う平行世界にまで跳ばせるのは世界中探しても真美たちだけだよ？」

「時間跳躍は亜美の仕事だけど、平行世界の移動は次元的に空間操作できる真美の仕事だし。」

律子は顎に指を置いて、なるほど・・・と呟いている。響もこの手の本はよく読んでいた方でSFチックな話には軽々とついていっていた。しかし千早に至っては何とかついていけているレベルで時間跳躍や平行世界などの話は分かるが、あっちの世界やこっちの世界が時間軸の干渉だけと言う触れることの少ないワードに少し混乱

気味になっていた。アイドルになってもボキャブラリーは変わらな
いなと思わぬ弱点を発見して少し馬鹿らしく笑いそうになる。

「律子に能力を教わりながら私も能力者を育てたいの。もちろん、正
しくね。そしていつかどこかで生まれる私とやよいを守りたい。そ
れが理由よ。」

千早は何とも伊織らしいと思った。一時は見損ないもしたけれど、
やはり彼女は沈んだ顔より自信に満ちた顔の方が似合っている。あ
ずさのことで伊織も思うところがあつたのだろう。自分なりに前へ
進もうとしている。

伊織が無言で歩き出す。そして向かった先は高槻やよいの傍だつ
た。そのまま腰を落としてその亡骸を持ち上げる。華奢な腕でやよ
いを持ち上げ、お姫様抱っこ状態になつて再び律子の許へ戻つた。

「この子はあつちで埋葬する。もしも未来でやよいに逢えたとして
も、私にとってのやよいはこの子だけなもの。」

「・・・良い墓を作つてあげるわ。亜美、真美！」

「あいあいさー！」

あずさの時と同じように二人は両手を前に突き出した。

100年前の別次元に送るのだから、あずさを送つたときよりも魅
力を消費することは容易に想像できる。千早もより集中して二人に
魅力を送つた。

律子たちの身体が白く光り始める。

それを合図に真が伊織に握手を求めた。差し出された右手を照れ
臭く一呼吸置いて握り返す。

「伊織、よくケンカもしたけど良い友人に出会えた。もしあつちの世
界のボクたちに会つたら、良くしてやってよ。」

「何年先だと思つてんのよ。だけど、このスーパ―美少女の伊織ちゃ
んに任せなさい！ 必ず見つけて面倒を見てあげるわ。にひひ。」

「伊織！」

響が駆け出した。走り寄つた彼女は伊織とやよいを一緒に強く抱
擁する。思えばこの三人はいつも一緒にいた。朝はパンと紅茶で一
緒に食事を摂り、尽きない話に花を咲かせ、休日には14里も離れた街

へ遊びに行ったり、夜はそれぞれの部屋でお泊り会。この学院で誰よりも仲の良かった彼女たちが簡単な挨拶だけで終わるはずがない。

最後の抱擁と言葉もあって、ありったけの感情を乗せて響が伊織の耳元で囁いた。

「伊織………ありがとうだぞ。」

これ以上ないほど心のこもった友人の感謝の言葉を通じて伊織の中へ流れ込む。堪えきれぬはずもなく伊織の心があらゆる感情を爆発させ、顔をくしやらせて涙を見せた。誰だって友人や親しいものは別れたくなかない。けれど、それぞれの道を進むにつれて必ず違える。その違い方が今生の別れと同義なのだと思えば、いくら伊織でも気持ちを抑えておくことなど出来ない。

響の言葉で難なく決壊した涙腺からは止めどなく、あたたかい雫が溢れていた。

「響、ごめんね。こんな別れ方でごめんなさい。だけど私、行かないといけないから。ここで行かないと、きつと後悔するから。絶対忘れない。みんなのこともあなたのことも。ずっと！　ありがとう！」

「伊織、自分も絶対忘れないぞ！　楽しかった。ありがとう！」

「うん。………千早！」

響の抱擁越しに伊織の目は千早へ向いた。

この時の伊織の目を千早は一生忘れることはない。涙に滲む自信と不敵な目は、この学院に来て誰よりも衝突して誰よりも憧れた水瀬伊織そのものだ。そんな彼女が旅に出ようとしている。二度と再会することのない果て無き旅路へ行こうとする彼女の最後の言葉を心して待った。

「この世界を、頼んだわよ。」

一層強い光に包まれて、響の腕を擦り抜け空高く飛び上がり、水瀬伊織は新たな世界へ旅立った。地面に膝と手について蹲る響を真は、その両腕で優しく包みこみ泣かせた。落ち着かせようと、まるで子をあやす様に頭を撫でる。

「真はどうするの？」

「ボクは……故郷に帰るよ。雪歩を連れて。」

「大丈夫なの？」

「大丈夫・・・じゃないだろうね。雪歩の親は町の統治者だ。父さんもボクも町を追い出されるだろうね。どれだけ責め立てられるかはわからないけど、そんなのは何てことない。」

やはり前のような陽気さがない。今の真を一言で表すなら“一匹狼”がピッタリだと言うほどにクールな性格になっていた。笑顔を見せず、今にもどこかへ行ってしまうような雰囲気を出している。

さつき心の色と魅力や炎の色が同調していると思ったが、あながち間違いでもなさそう。真の心は雪歩が死んだことで一度壊れて再び息を吹き返した。その時、もしかすると色んなものが抜け落ちたのかもしれない。表面上の変化で分かりやすいのはやはり明るさだろう。今の真を人に見せて、とても明るい乙女チックな娘だったのだと言ったら思わず嘘だと言われそうなのほどだ。

「ボクは雪歩を届けたら、どこかでひっそりと生きていくよ。もうアイドルになる理由がないし。」

真は落ち着いてきた響を離して最後に頭にポンポンと手を乗つける。

立ち上がった真は雪歩の許へゆっくり向かう。そして月の光に照らされたその光景はさながら眠る姫君を抱き上げる王子と言ったところか。物語であれば良い幕引きにでもなるのだろうか、現実としてはこれほど悲しいことはない。

数秒、雪歩の顔を見てから月を見上げる。何を思ったのか、それを訊くなど野暮だったので千早はその衝動を無理矢理静めた。1分ほどその場で立ち尽くした後、雪歩と共に千早に近づく真は目を伏せている。

「じゃあ、ボクたちは行くよ。」

「そう・・・達者で。」

「きつとまたどこかで会うだろう。響も亜美も真美も、君たちはボクたちの数少ない友人であり恩人だ。いつまでも元気でいて欲しい・・・またね。」

彼女は歩き出した。今となっては真の心はわからない。あの頃の

分かりやすいくらいに真に戻ることはもうないだろう。これから先、彼女に待ち受けるのはきつと過酷な道だ。その先に幸せがあることを祈って見送る。

響もいつの間にか涙を止めて真の背中を見送っていた。

「いいの？ 何も言わないで。」

「また会えるって言ったんだ。あずささんや伊織とは違う。また会える。なら、その時に話すさ。．．．それに頭をポンポンされた。表情はあんなでも根っこは全然変わってない。優しい真のままさ。」

「．．．そうね。」

後ろから草を踏む音が二つ。亜美と真美はこれからどうするのか。貴音に見つかる前の二人がどんな生き方をしていたのか分からないし、操られていた二人はこの世界で生きていく術を持たない。

そして浮遊術などの基本的な能力すら出来ない二人は完全な陸路で移動することになる。

「亜美、真美、二人はどうするんだ？」

「真美たちは世界を見て廻るよ。400年前と違って面白そうなモノがいっぱいありそうだし。」

「．．．二人は400年前の人なの？」

思わず訪ねてしまう。どれだけの時間を生きているのかは気になつてはいたけれど、まさかそこまでだとは思つてもいなかった。400年前と言えば歴史上この世界が大きな大戦に見舞われていた頃だ。能力者も一般的ではなく、魔女狩りと称し能力者を無差別に処刑したと言う時代。その時代を生き抜いてきた二人にしてみれば、今は平和なことこの上ない。

楽しみで仕方がないと言わんばかりの笑みを見せ、二人で顔を見合わせて笑い合う。

「そうだよ、ビックリしたっしょ。まあ昔のことはもう断片的にしか覚えてないけどね。」

「昔みたいな危険はなさそうだし、今度こそ思いつきり楽しんじゃうもんね！」

こうして見ると、年相応の少女なのだと思わされる。常に持ち続け

ている童心に火が付いた二人はこれから何をするかや何処へ行くかと、まるで旅行の行き先を決めるように幸せそうな笑顔がとても輝いていた。

しかし、二人はスツと残念そうな笑みを浮かべて千早と響に向き直った。

「・・・千早お姉ちゃんもひびきんも、元気でね。」

「・・・もつとお話したいけど、長くなると別れが辛くなるし亜美たちも、もう行くね。」

少しの静寂が訪れる。二人が歩を進めようと足に力を入れたとき、それよりも先に千早の足が前へ出た。迷いのない足取りで亜美と真美の前に立つと、そのまま二人を抱き締める。

「この世界はまだまだ安全じゃないから、気を付けてね。・・・ありがとう。」

「助けてくれてありがとな。また会おうね。」

千早に続いて傍に来た響は抱き締められた双子の頭をソツと撫でて別れの言葉を口にした。亜美と真美は照れ臭そうに頬を少し紅潮させて笑う。

千早が二人を解放して頭を撫でる。

「えへへ。なんか照れるね。」

「そだね。今日のこと、真美たちは絶対に忘れないよ。」

「二ありがとう。絶対、また会おうね！」

幼いながら遥かに歳上の彼女たちは、子供がはしやぎ追いかけるように楽しみながら走っていく。

手を振る彼女たちが見えなくなるまで、こちらも手を振って応える。

残された千早と響は無言のまま強めの風が草木を騒がせ、少し冷える春の夜風に今日と言う日の思いを馳せる。

みんながみんな、それぞれの気持ちと覚悟を持って歩き始めた。未来、過去、そして現在。幾重にも折り重なる平行世界は一分一秒が違う世界。みんなが口にして言う『if』の世界。それが平行世界だ。

それは自分の生き方次第で何にでも変わる世界。

その世界にみんな生きています。

静寂の中、隣で哀愁帯びる同じ歳の褐色の少女はこちらに手を差し伸べ、千早はその手を優しく握り返した。

その手は少し震えていて、放したくないと言う気持ちが密かに伝わっている。

「千早も行くんだろ？」

「ええ。いつまでもこうしてられないもの。」

「そうだな・・・ちよつと早い卒業さ。」

手を放して両手を頭に組む響は空を見る。あれだけ黒に染まっていた空は少し白みがかつてようやく長い夜が明けようとしていた。

恐ろしく長かったのにその間はたったの5時間程度。本当に苦しく悲しい夜だった。それが今終わりを告げ、新たな朝が始まろうとしている。

「その・・・千早はこれからどうするんだ？」

「私は・・・世界を変えてみようと思ってる。」

「世界を？」

先日の昼に春香との話を思い出す。貴音はこの世界に来て美希を倒すために眠り姫を自ら作り出そうとしていた。この世界で美希と同じ眠り姫を作り出し、亜美と真美の力で未来へ戻って討伐すると言う計算上では不可能ではないその企み。それが原因で未来が崩壊すると言うことも頭に過らず後悔の人生を歩むことになってしまった。そんな貴音の企みを利用しようとしていたこの国をみすみす放っておくことなど出来ない。

間違った教えを受けたアイドルは今も国に従事し、人によっては戦いに身を投じている。しばらく小規模の戦いが何年も続いているが、これがもし世界的な戦いに発展してしまわないように、世界を変えよう。それが今の千早の目標になった。

「世界には悪も貧困も大きく渦巻いている。それを可能な限り減らしたい。そして春香、美希、萩原さん、高槻さん。死んで行った人たちの分も困ってる人の助けになりたい。みんなの描いていた夢も、希望も私が全て未来へ持っていく。みんなが笑って過ごせる世界にしたい。」

そう思うわ。」

響には、それが千早であれば可能だろうと思った。並みの人間やアイドルでは到底できやしない。思いもつかないようなその考えに未来を見た気がした。みんなが笑って日々を過ごさせる世界を。

そこでようやく、一つの答えが響の中で生まれた。

「そっか……。ひよっとしたら、それがアイドルなのかもしれないね。」
「どういうこと?。」

「千早の中で夢や希望が生まれたみたいに、色んな人たちに夢や希望、生きるための笑顔を与える。そうすれば、例え死んだとしても受け継がれた夢や希望は誰かの中に残り続ける。誰かの心に残ること。誰かの記憶に残り続けること。誰かを笑顔にし続けること。それがきつと、アイドルなんだよ。」

響の思いもよらない言葉に少し胸が締め付けられるようだった。

あの時、春香と律子のおかげでアイドルを目指したキツカケを思い出し、決意と覚悟を持って新たな気構えで美希へと臨むその時、春香と話したことがフラッシュバックを起こす。

「……あ、春香。」

「ん?。」

『アイドルとして大事な2つ。人の心と共にと……。あと一つは?』

『ふふ……。それはね。』

『色んな人たちに笑顔を与え続けることだよ!』

数秒、記憶の回想に少し微笑む。もうその会話が遠い昔のように感じて、少しセンチメンタルになってしまった。

その答えを自ら導きだした響に強い敬意を表する。優しく人を思いやる彼女だからこそ行き着いたアイドルにとって大切なもの。その考えを世界に広められれば、きつと未来は明るいはずだ。

「……なら、みんなアイドルね。」

「そうさ。みんなアイドルだ!」

二人で笑い合う。この答えは千早にとって一つの救いとなった。

数奇な運命の渦に巻き込まれた12人の少女たち。その中で自分だけがこれだけの力を手にしたことには少なからず戸惑いはあった。美希を止めるのは到底自分などではないと本気で思っていたのだから。しかし普通に老いて死ぬことのない人生となった千早には死んで逝った者と生き残った者の意思を継ぐと言う道を選んだ。悲痛な運命のレールはこれからも続くだろう予感はある。だが今の響の言葉で千早は自分が死なない限り、今夜この場で戦った者達を誰一人として忘れなければみんなが千早の中で“アイドル”として生きていられる。そのことは今の千早にとって先へ進むための足枷の鍵となつて重い鉄の輪は外れて地に落ちた。

心が軽くなるのを感じながら、今度は千早が響に同じ質問を投げかけた。

「我那覇さんはこれからどうするの？」

「……自分は今回の戦いで、いろんなことを思った。やよいや伊織のこと。雪歩が死んだときやその時の真。春香に美希やあずさや貴音。ティーチャー律子。みんなが自分の大切なもののために戦った。それはとても大事なことで、とても尊いことだと思う。ティーチャー律子みたいにはいかないけど、人の心の在り方をこれから生まれてくる子供たちにちゃんと教えてあげたいと思うんだ。」

響もちやんと自分の考えを持っていた。そして千早は思う。白い大きな建物の広い庭先。その場所で子供たちに囲まれながら本を読み聞かせる白いローブを来た優しい笑顔の老婆の姿。肩にはハムスターが乗っていて前後に揺れる安楽椅子に座っている。きつとそんな未来が彼女のたどり着く人生の末端だろう。

そんなことを想像して目尻にジワツと来るものを感じつつ響に微笑みかけた。

頭の後ろに両手を組んで笑顔の彼女を一生懸命、目に焼き付ける。

「そう……あなたとの戦いは、まだ続くのね。」

「どの道長い人生だし。こんなに大切な目標も出来た。自分的には望むところさ。」

「強いわね。でも、とてもあなたらしいと思うわ。」

「ぎつき散々泣いたからな。でももう、くよくよしなんてしてらんない。みんなのために、自分も出来ることをする。」

とても固く強い決意を千早は感じた。響は元々戦闘が好きじゃない。むしろ嫌いでアイドルになったら戦場には立たずティーチャー律子のように後続を育てる仕事をしたいと言っていた。それが今、子供たちをはじめ様々な人たちに心の在り方を教えようとしている。彼女なら出来る、そう思わせてくれるほどの自信に満ちていた。

そんな響を見て、もう大丈夫ね。と一人残していく響の心配も消えた。名残惜しくはあるけれど、千早の時間がどれほどあるのかもわからない中、ジツとしてもいられない。それを響も感じて、微笑む。

最後と言わんばかりに重みのある足を動かして響に近づいた。そのまま力強く、しかし優しい抱擁を数秒交わして離れた。

「頑張つてね。あなたならきつと出来る。・・・元気で。」

「うん。今までありがとう。・・・バイバイ。」

「さようなら。」

千早は身体を浮かせる。響に背を向けて東の空へと身体を向ける。その瞬間に顔を出し始めた太陽の光を一身に浴びながら響の声を後ろに飛び続ける。

「千早あー!! また・・・また、会いに来なよー!! 自分達、いつまでも友達だからなあー!!」

千早も響も込み上げる涙を拭い去り、青い空を見上げながらそれぞれの旅路についた。

たった一つの夜の出来事で何もかもが変わってしまった彼女たちの行く末は、この太陽の光のように明るい道が続いている。

一人はひたすらに太陽へと飛び続け、一人はその姿が見えなくなっても手を振り続けた。

瓦礫の中から一枚の紙が風に飛ばされて空へと舞った。所々がカビや虫に食われて読めない箇所が多いその紙が、徐々に変化して少し古びて端つこが茶色く変わった紙に変わる。

そこには今まで書かれていた言葉は一つもなく、全く別の言葉が書かれていた。

世界は広く、人の人生の時間だけでは到底成し得ないことが星の数ほどある。その中からたった一つの道を選ぶ難しさと厳しさをこれから彼女たちは全て経験するだろう。

それでも大切なものを心に持ち続け、励みになる何かを、自分が大切だと言う明確な何かを持つことで道は常に永く続いていく。時には揺らぐこともあるだろう。しかしそれを乗り越えても尚、心を持っている者こそ、人を幸せにする“アイドル”である。

記：水瀬 伊織より

第16話

終

エピローグ ― 眠り姫 ―

かつて、人類の脅威となる少女が解き放たれ、世界の命運をかけた戦いがあった。

たったの一晩で全てが始まり全てが終わったその戦いが、本当に実在したと言うことを知っている者は殆どいない。みんなが物語として記憶している。その理由は一冊の本にある。今や誰もが家に持ち、一度は読んだことのある厚さ4センチ、縦が約21センチ、横が約15センチで表紙の表面が青く裏面が赤い少し大きめの本。その本は著者の生まれた故郷の事から遠くの学院へ入学して想像を絶する戦いを経験し、本が完成するまでの約30年の人生を綴った本。壮絶たる人生が記されたその本は瞬く間に反響を呼んで世界的に出版され、その時を制した。

あの戦いから70年。

世界からは大きな争いがなくなり、平和と言えるレベルにまでになつていた。未だ小さないざごじはあるものの、当人たちだけで解決できるものが多くなり、日々を笑顔で終える人たちが多数を占める。

ここは大きな町の外れにある大きな修道院。

丘の上に創設されたその修道院は、西洋風の小さなお城のような建物で、周囲には自然に覆われた森や湖、川もあれば控えめではあるが草原もある。その森は年中通して桃色の花びらが舞い散る桜の森と呼ばれている。

少し南へ歩けば人々が賑わう大きな街があり、修道院へは街の北にある草原を進む。桜の森のさらに南には普通の森があつて今は緑に色づいて暖かい季節の象徴とも言える。

桜の木々に囲まれているその修道院は白い壁で覆われた建物で、この建物の入り口は両開きの癖に意外と狭く、大の男が二人ならんで丁度いいサイズだ。2階建てになっており屋根は青く三角形のため雪などは簡単に滑り落ちてくれる。

もちろん住み込み製の修道院とあつて2階は食堂と浴場。談話スペースなどがあつて、同階層には修道士たちの部屋が10ほどある。

修道院の裏には約1ha（ヘクタール）程の大きさの円を描いた湖があり、畔に4人ほどが乗れる手漕ぎの小船が2隻置かれている。現在の修道院は数十年前に出来た建物で、この場所にはかつて能力者を育てるための学院があったとされている。

その西側には何故か巨大なクレーターがあつて、その場所から北に行くと、周りの桜とは比べ物にならないほどの立派な一際大きい桜の木が生えている。樹齢幾百年という太い幹に力強く咲き誇る白桃色の花からヒラヒラと花びらが宙を舞っている。

古くそびえる修道院の東側にある庭。そこには一人の老婆と数人の子供の姿があつた。

その老婆はずっとそのお話を語っていた。70年前に起こった悲劇の戦いの語り部として今ではこの修道院を創り子供を導く教師の道を選んだ魅力具現の使い手。

前後に揺れる安楽椅子に座って本を読んでいる老婆と草の上に座って物語を聴く子供たち。

10歳にもならない紺色の髪の子供と銀色の綺麗な髪をした女の子が老婆に一つ質問をする。

「おばあちゃん。そのお話ってホントのお話？ それともただのお話？」

どうやら孫である二人の質問に本を手を持つ彼女も少し黙ってしまったが、本当のお話よと言って答える。表面は青く裏面は赤いその本は彼女が書いたものに他ならなかった。

70年前に起こった戦いの生き証人。あの戦いで魅力体だった少女を実体化する重大な役割を持っていた。彼女が居なければ、その戦いはきつと惨敗を喫しただろう。

本の音読を再開しようとしたら、遠くに見える懐かしい顔に気付いた。パタンつと本を閉じて子供たちに修道院や街に戻るよう指示を出す。

「もう夕刻だから続きはまた今度ね。あなたたちも修道院の中にお入りなさい。」

「はい。」

8人ほどいた子供たちが一斉に立ち上がって歩き出す。街に戻る者もいれば、そのまま修道院の中へ戻ったり、しばらく庭で追いかけてこすると言う子供もいる。

一人動かずに残った院長と呼ばれる彼女は、既に視界にしっかりと捉えられて歩いてきた一人の少女に話しかける。

「・・・こんなつまらない話だったけど、私の夢や希望は果たせたのかしら？」

一人の老婆は笑顔でハムスターを具現化した。かつての姿と変わらないお腹が白く背が薄茶色の毛並みをしたハムスターが彼女の肩に登る。

今度は客人である少女が口を開いた。その声は少し震えていて無理に笑顔を作っているようにも見える。

「充分すぎるほどです。あなたは人々に心の在り方を説き、あの戦いを伝えてくれた。今を生きる様々な人たちに。そして二人のお孫さんにも。でももういいの。もう、十分すぎるほどにあなたの夢も希望も人々に伝わっている。だからもういいのよ、我那覇さん。」

少女が老婆の名を口にする。我那覇響はこの修道院の院長をしていた。千早と別れた後、彼女は一度故郷に戻り自分に今出来ることは何かと思ひ筆を執った。働きながら少しずつ物語を進め、この修道院を建設すると同時に完成した本を表に出した。最初は手にすら取ってもらえなかった本ではあったが、手に取り読み終えた人々の話から話題を呼び、大が付くほどの人気を博した。

最後のページにはこう書かれている。

『この物語は著者の経験した事柄全てが事実であった。人々の知られざる戦いがあり、今もどこかでそれが起こっている。それを止められなくても争いのない世の中を願うことは誰にでも出来る権利だ。その願いがいつまでも心にあることを強く願う。』

ここで本を閉じることになる。

その本を膝の上に乗せて千早の顔から視線を本へ移す。ゆっくりと口にする言葉は喜びが満ちていた。安楽椅子を軽く前後に揺らし、千早に言葉を返す。

「そう・・・ならお言葉に甘えようかね。」

目を閉じて揺られる彼女の目尻に少々の水滴が見て取れる。今までの人生を振り返っているのだろうか。

今や当時のことを知っているのは響と千早の二人だけ。亜美と真美は行方知れず、真は二人より先に逝ってしまった。何歳になろうと親しい者を失うのはとても寂しく心が痛む。だが彼女たちの進んだ道の先で、人生にちゃんと満足出来ていたのかなと真の安らかな死顔を見てそう思った。そして響も、今までの人生をとっても満足に思っている。

それを千早に伝えようと、しつかり声を出した。

「この70年間。辛いこともたくさんあったけど、それでも子供達のために尽くした時間はとてもいいものでした。とても良い人生だったわ。ありがとう千早。・・・これから一人にしちゃうけど、ごめんね。」

千早は優しく揺れる椅子に向かって歩き近づいた。響の目の前に立ち、今の響に思いを告げる。

「いいのよ我那覇さん。今まで本当にありがとう。あなたの人生を懸けて伝えたものは決して無駄にはならない。あなたの心はこれからの世界を担う人たちの力に必ずなる。私がそれを保証するわ。だから・・・！」

ハツとして口を止めた。頬に一筋雫が流れる。それからもう千早は響に話しかけることはなかった。ただ、椅子に座る二度と眼を開けることのない唯一無二の友の安らかな顔を見て深々と一礼し、その場を後にした。

妙齢の修道女に響のことを伝え、太陽が粗方沈んだ丘の上で一人サクラの木にもたれ掛かって古い記憶を呼び起こす。

学院に入学したころ、みんなが浮遊術に一生懸命だった懐かしい光景。成功しても失敗しても笑っていたみんなと悔しがる伊織や真。それを見て笑うやよいと雪歩。彼女たちをしり目に空を飛び回るあずさ。みんなを励ます響。

そんな楽しく幸せな時間が遙か遠く。心の中で煌めいている。

千早の命は一体いつ尽きるのか。それは神のみぞ知るものだ。しかし、みんなの許へ逝く日もきつとそう遠くない。

色褪せない思い出を終結させ眼を開き、みんなが守った未来のために、眠り姫は再び夜空へと飛び立った。

エピローグ

終

この日。何の祭日でもなければ、ましてや記念日ですらない。ただの肌寒い春の日。ただの月が大きい星の出る夜。

そう、ただの春の一日だ。

なのに、一体誰が世界の命運を決める日だと思っただろうか。

全てが変わり、何も変わらない二日間。いや、何も変えてはならない二日間。

変わってしまうとは即ち、世界の滅亡。それがたった一人の少女によってもたらされるなど誰が信じられよう。それを誰も止められないなどと、それこそ戯言だ。子供が言ったらただの悪い嘘。大人が言うと気が触れたと誰一人として耳を傾けなくなる。しかしその戯言が事実だと知るのは凡そ数十年後。世界が崩壊してからに他ならない。

しかし、その未来は大きく変わった。

始まったばかりの世界の滅亡はその日を最後に終わりを告げ、一人の生者と一人の死者によってすべてが守られた。

いや、それは結果にすぎない。

その二人がその戦いに行き着くまでに、神の気まぐれと運命のいたずらが起こした絶望と、人の心が繋いだいくつもの奇跡があった。

そんな奇跡の結末を見た者に送る、その後のちよつとした物語。

「ん．．．」

強い光で目を覚ました。

うつすらと目を開くと、青い空が視界に広がり白い雲が所々に流れていた。

暖かくなり始めた太陽に少し肌寒い微風になびく草花。小鳥の声
が耳に入る。少しずつ取り戻していく意識にそつと触れたのは鼻先
に乗った白桃色の花びらだった。

目を覚ましたのは、まさに美麗という言葉が最も相応しい女性。

艶やかな紺色のショートヘアに足も長く女性にしては高めの身長
で、恐らく男性から見れば大変魅力的なスタイルをしているだろうと
思う。

ゆつくりと身体を起こしていくと、途中で痛み思わず歯を食いし
ばる。全身に痛みがあるものの、特に背中中の痛みが強い。頭の中は痛
みを我慢することと、何故身体が痛むのかに対する疑問符が浮かぶ。

次に気が付いたのは足に腕にと身体中に細かい擦り傷切り傷があ
る。そしてボロボロになった衣服。紫色の生地が所々破れて肌が出
ていることに少し頬が熱くなる。肝心なところが破れてないだけよ
かったものの、人目に優しい姿ではない。

ゆつくりと立ち上がって、周囲を見る。

目の前150メートルほど先に街の入り口がある。左右に街を覆う石の塀が広がり、それに沿って桜の木が並ぶ。不思議なことに、この光景は“日常の光景”として覚えている。決して一度たりとも見たことがないはずのこの光景は、頭の中に一つの単語が自然と浮かび上がる。“日常”だと。

何故か解らないままで居ると、後ろから白桃色の花びらが前へと通り過ぎる。

意識した訳でもないのに、自然と左から後ろに向いた。

「……キレイ。」

そこには惚れ惚れするほど美しく、驚くほど大きな桜の木が静かに立っていた。その存在感は圧倒的で、周りに生える他の木がまるで土から芽吹いたばかりの苗のように思えるほど、その差は歴然だった。

更に不思議なことに、世界に自分とその木しかないような錯覚を起こした。

視界に映る景色ではなく、背景のない白い空間に桜の木のみが映っている。

風の音も、それに揺れる枝や葉の擦れる音さえなく。ただただ静かだ。

でも2秒もない世界だった。神秘的ともいえる感覚はすぐさま現実に引き戻された。

今、一体何に引き戻されたのか。風でも花びらでもない……そう、声だ。

呼ばれるように、もう一度後ろの街を見た。

「……誰なのかしら？」

見覚えがある。しかし記憶にないその後ろ姿は何故か涙腺を刺激される。

流れるような長い髪。空や海よりも濃い青。白と桃色の服を着た少女が街へ入っていく。

「あっ……待って。」

150メートルも離れた場所にいる人を呼び止める、と言うにはあまりにも小さいその声はもちろん聞こえるはずもない。青い髪の少

女はどんどん街の中へ入っていく。

痛む身体を必死に引きずって彼女を追いかけた。

街に入った途端、濃い霧が辺りを覆った。視界が悪く、10メートル先がかるうじて見える程度で普通に歩いたら小石に躓いて転んでしまいかねない。

周囲を見回してあの青い髪の少女を探す。実際見失っているもおかしくないほどの距離と濃霧で10メートル先も見えにくい中、その少女の姿だけはハッキリと見える。その後ろを急いで追いかけた。

あずさは今までに経験のない不思議な感覚にとらわれていた。

濃霧のせいもあるが、見るもの全てに靄がかかったようで建物の色や形に道の広さや地面の色、様々な情報があるにも関わらず頭が認識しようとしなない。

夢だと気付いている夢の中のような感覚だった。もしかすると本当に夢で、目を覚ませば今追いかけている少女も街も桜も何もかも忘れていくかもしれない。それほどに現実味が感じられない世界だった。

何故追いかけるのか理由すらわからないまま、ただ本能的にそうしなければいけない気がした。

「・・・？」

追いかけている少女は、まるであずさのペースに合わせるかのようにゆっくり歩く。妙なことに、方向音痴を自覚しているあずさが迷うこともなく付いていけている。

人と“一緒に歩く”のであれば迷うこともないが、“付いていく”となるとよく明後日の方向に進んではぐれることが多い。そのあずさが見失わない程度に付いていけている。これだけでも一つの不思議な出来事なのだ。

「待って・・・お願い！」

声をかけるも少女はこちらに気付いてくれない。何度も何度も声を大きくして呼び止めても止まる気配が全くない。ただまっすぐ歩いているだけで距離が縮まっている気もしない。

そこでようやくあずさは気付いて思わず立ち止まってしまった。

街に入ってからまっすぐ歩いて、もう15分ほどの時間が経っている。

15分もまっすぐ歩く街なんて存在しない。

道と言うのは必ず曲がっている。歩く人間が曲がっているつもりがなくても道に沿って進んでいく以上、そこに微かな湾曲があってもそれが“まっすぐ”であると思いついてる。

つまり日常的に道を歩いていて、まっすぐ歩いているなんてことは絶対にありえないのだ。

例え直線の道があっても15分もまっすぐ歩く直線など街道でもない限りまっすぐありえない。もし街でまっすぐ歩こうものなら15分もしない内に何かにぶつかったりと必ず進めない状況になる。

なのにあずきは今まで一度も曲がらず、斜めにすら移動していない。濃霧に消えゆく彼女を追って歩きはするものの、その彼女も一度として曲がったりと進む方向に変化はなかった。

額に嫌な汗が滲む。自分が一体どこに来てしまったのか。ここがどこのかが分からなくなってきた。

そんなことを考えていると、いつの間にか彼女を見失った。

焦った時には既に遅く、濃霧の中で一人取り残されて動けない。

周囲を見回しても一面真っ白でさっきよりも霧が濃くなっているのが分かる。

心に唐突な恐怖が芽生えて後ずさりすると、ドンつと何かに踵が当たって躓いた。そのまま後ろに倒れて尻餅をついてしまう。

臀部の痛みを感じつつ、足に何が当たったのか確認して言葉を失う。

それは人だった。

いや、全く無反応のそれをもう人と言うには時間が経ちすぎている。目は瞼と瞳孔がこれでもかと言うほど開かれ、口や胴体が赤黒く染まり地面も同じ色をしている。

そして気付けば、周囲の霧は薄くなってやがて消えた。街だと思っ

ていた場所は家など無く、ただ瓦礫と燻る火種があるだけで人が住むための街だなんて到底言えない。

しかしそれが“日常の光景”であることは認識出来た。ボロボロの家屋に干上がる小川、人だった肉塊が日常的に目に入り激しい戦いがあったのだと一目でわかる。

背後から瓦礫の欠片が転がる音を聞いて後ろに振り向いた。二つの影が立っていた。かろうじて見えるのは金色の髪と青い髪。顔は見えず、腰に手を当ててこちらを見ている。

呼吸が荒くなる。二つの影を見ただけで、恐怖が何倍にも膨れ上がって身体が震えだした。

どうして忘れてたのかしら？

戦ってたんだったわ。この二人と。

金髪の少女と青い髪の少女が歩き始めて、咄嗟に身構える。恐怖の存在の前に、身体の震えは止まってくれどどこか酷くなる。

背中や足が痛む。打撲に切り傷、どうしてこんな怪我を負っているのか全然わからないが、それを理由に相手が止まってくれるわけがない。痛みを堪えるために歯を食いしばって動こうとするも、今まで歩いていたにも関わらず今度は痛みで動けない。

ズキッと、まるで電流のように走る背中 of 痛みに一瞬目を閉じてしまった。

しまった。と頭の中で思っても遅く、今の一瞬で青い髪の少女が目の前にまで距離を詰めていた。

ここまで・・・ね。

諦めが頭を過ぎった。目を閉じてただ死を待つ。額から頬に汗が数本流れる。そのままの態勢で数秒、何故かまだ死を感じない。それともそれを感じないほど一瞬で命を奪われたのか。わからないまま薄っすらと目を開いていく。ドンッと軽い衝撃が走った。やっと攻撃してきたのだと思った。身体が痛くて何をされたのかが分からないが、あずきの戦いはここで終わったのだと僅かに口元から笑みがこ

ぼれる。

妙に温かい。腕を首に回され、手を頭の上に乗せられている。まるで抱き着かれているかのような感覚……いや、ようなではない。これは間違いなく抱擁だ。驚いて思わず目を開く。

「どうしたのですお姉さま？」

身体が硬直する。幻聴を聴いているのか、よく知った声と口調に何が起こったのか思考が追い付かない。

ゆつくり、後ろにお化けがいるように恐る恐る振り向く。

目に映ったのは美しく長い銀色の髪。牡丹色のカチューシャがよく似合う清楚な顔立ちに女性にしては少し高めの身長。襟付きの白いワンピースを着て左手には果物が複数入った籠を持っていた。

足元も白いヒールを履いていて崩壊した街には似つかわしくない格好をしている。

「……貴……音ちゃん……？」

「お姉さま、どうかされたのですか？」

紛れもない、妹の貴音だった。

いつの間にか抱き着かれていた腕はなく、周囲は小鳥の飛ぶ綺麗な街並みがあった。石を敷き詰めた道にレンガを使った家々、煙突なんかもあってそれぞれの家に瓦のように青や橙なんかの色とりどりの屋根がある。

広場になっっているその場所に貴音とあずさは向かい合っていた。

「今のは……一体？」

最早何が現実なのかわからない。今までの霧が嘘のように晴れ、姿を現したのは瓦礫の山に死体の数々、脅威の二人が現れたと思えば抱擁された途端に後ろからかかった妹の声。貴音の姿を見た後の周囲の状況の変化。

何が起こっているのかあずさには理解し得なかった。

ボロボロだった服が紫色のワンピースに変わり、背中や身体の痛みが消えている。そして一つ理解した。

これは“日常の光景”であること。

平和そのものの街並みに果物を買って道を歩いていたあずさと貴

音。今までの光景も今の光景もあずさは知っている。

呆けていると、貴音に頬と突かれた。

「そんな顔していては、失礼に当たりますよ。お姉さま。」

「失礼・・・？」

「左様です。私たちはこの果物をお供えに来たのですよ？ お忘れですか？」

呆れたような顔で目を閉じた貴音は右手で左を指さす。あずさから見て右側のそれは、今まで何故気付かなかったのかと思うほど大きくその場にいた。

広場の大きな噴水の上に立っている一人の少女の銅像。貴音はこの銅像に果物を備えに来たのだ。

「・・・あ。」

見たことがある。知っている。声も顔も性格も。

「おばあ様の友人だったのでしょうか。」

知らない訳がない。2年と少し、同じ場所で過ごした友の顔を。

「如月千早様は。」

そして私の両親も私達を逃がして死んじゃった。13歳のときの話よ。攻めてきた彼女達に両親は私達をおばあちゃんに預けて困らなかった。

あずささん！ 大丈夫ですか!?

ち、千早ちゃんありがとう。助けられちゃったわね

いえ、それよりもアレがそうなんですわね。

ええ。あれが・・・眠り姫。星井美希。

お姉・・・さま。ごぼつ・・・わたくし・・・は。

ごめんなさい・・・。ごめんなさいっ。

謝ら・・・ない・・・で。わたくし・・・こ、そ・・・。

こんな頼りない姉でっ！ あなたにこんな仕打ち・・・。

良いの、です。今まで・・・いのち・・・を、弄んだ・・・わたく

しには・・・幸せ過ぎ・・・結末です。ありがとう・・・ごさいます・・・。

ありが・・・と・・・。

貴音ちゃん、あなた・・・。

ああ・・・やつと・・・やつと、死ぬ・・・ことが・・・

・・・。

ごめん・・・なさい・・・。お姉・・・さま。ごめ・・・なさ・・・

美希。・・・はる・・・。

っ!!

その、貴音さんに変化があつたなら、あずささんにも何か影響がないとおかしいんじゃない？

・・・これも推測だけど、あずさお姉ちゃんは本当はこの時代に居ちやいけない人なんだよね。もしパラドックスが起こつた未来に戻つたら、その瞬間に・・・この時代での記憶は全部なかつたことになると思う。

会えて良かった。ありがとう、響おばあちゃん！

激流。

それは記憶の激流だ。

今まで忘れていたものを全て思い出す激流。

それと同時に溢れ出す感情が心を押しつぶしそうなほど渦巻いている。

頬に熱い雫が伝う。

止めどなく流れるそれは今あずさが感じている様々な感情の現れだ。

「貴音、どうしたんだ？」

「早くお供えしちやいなさい。」

「あ、お父様。お母さま。その、お姉さまが……。」

溢れる涙を止められず、あずさは今日の前に居る最愛の人たちを強く、強く抱き締めた。

あずささん、お元気で。

きつと、良い未来が待ってます。

お幸せに……。

終 眠り姫
THE
@FTERS
BE@UTY—三浦あずさ—

静かな朝。

鳥たちが鳴きながら空を飛び、太陽が黒い空を青く染める雲一つない日。

部屋数が60を超えるほどの大きな屋敷の一室。庭に面した大きなガラス窓があつて、花に水をやる侍女たちを眺めながら紅茶を嗜む一人の老女が居た。

背は小さく150センチといったところか。年齢が年齢だけに細身の手だが筋肉も少しついていて皺は多くない。実際の年齢と見た目で20歳近くは差があるうかと言う高貴な雰囲気のある女性だ。薄い桃色のワンピースを身にまとい、左手の薬指に一つだけ磨かれた指輪をつけている。

白い髪は背中まである直毛で前の髪はピンで止めて横に流している。

デコが少し広い彼女はこの屋敷の主で、服を作る会社を設立し手腕を大いに振るってここまでの財産を築いた。

「良い朝ね。」

「そうでございますね。奥様。」

奥様こと水瀬伊織。

彼女は律子と共に次元を跳び、元居た世界より100年前の平行世界へやってきた。学院の近くにある丘の桜の傍に高槻やよいを埋葬して、律子との修練に明け暮れた。

当時、学院に再び入学しようとしたのだが入ったところで意味がないと律子に言われ1年間、律子の教えに従って実力も人間性も伸ばした。新たな学生が入学したところで、律子と共に講師として勤めて9年。25歳になった伊織は律子に戦闘衣装の制作を持ちかけた。ある生物の糸を使えば可能であることを告げ、その制作のために一つの会社と提携を組んで作り上げた戦闘衣装は当時のアイドルたちの間

で話題になり、国が伊織に対してスポンサーの話を持ち掛けた。

伊織はそのまま企業し、戦闘衣装と共に一般市民や貴族の嗜む衣服の制作を手掛けて瞬く間にその財を成した。

水瀬ブランドは言いたいことはハッキリと吐き出すのがモットーで、容赦のない指示と優しい性格を持つ彼女の手腕があったからこそ成功と言える。

そしてその隣で腕に紺色のファイルを抱えている執事は水瀬ブランドの立ち上げから助力している人で、代々執事の家系だ。若い頃は背中まであるオレンジ色の髪を前髪ごと束ねていた彼も、今では短く艶のある白髪になっている。

現在水瀬ブランドの社長を務める伊織の息子の執事を彼の息子が務めており、その奥さんはメイド長として一族総出で仕えている。

「私も今年で109歳。いい加減、身体も思うように動かないわ。」

「何をおっしゃいます。社を息子様に託されてからは世界貢献のために動かれておりますのに。」

「それはあなたが居るからでしょ。」

伊織は自社を息子に譲ってからと言うもの、さらに元気になり世界を廻って人助けを繰り返していた。

幼い頃から律子に鍛えられたことを習慣化していたので今でもその習慣は抜けていない。適度の教養と適度の運動と気を使った食事は、今となつてはこれを変えると逆に調子を崩すほどだ。優秀な医者やエリクシーを傍に置いているおかげで100歳を超えても元気としか言えないほど丈夫だった。

その伊織を鍛えていた律子も十数年前に他界してやよいの隣で静かに眠っている。

「あなたが居なかつたら世界なんて巡ってないわよ。まったく、人を乗せるのが上手いんだから。」

「恐縮です。」

伊織が世界を巡るキツカケは執事にあつた。水瀬の社長と言うポジションを退任して名目上は会長になったものの毎日が退屈だった。会社の仕事は殆ど息子が取り仕切っていたためだ。

時間を持て余していたそんな時に、世界を巡って貧しい人や問題を解決する手伝いをしませんか、などと言う執事の案に乗ってしまった。最初は国を巡れるとあつて喜んでいた伊織だったが、思わぬハードワークで見事に手のひらを返して執事に文句を連発したものである。

しかし、貧しい町の改革や国に対して口を出したり、民間によって運営され住民の様々な依頼を預り実力に応じた所属者に仕事を斡旋するギルドの設立。その生活の中でやりがいを感じ始めた伊織は、今ではそれが余生における最後の仕事として得られているため大変満足している。

「それから奥様。例の件なのですが、無事滞りなく済みました。」

「あら、思つたより早かつたわね。」

「こちらが、今回の費用全額記載書類でございます。」

執事が手に持っていたファイルの中から一枚の紙を取り出す。高級羊皮紙を使ったもので金の装飾が施され、これ一枚で一般家庭が10日間を普通に生活できるだけの値段が付いている。

それを贅沢に使つた内容を手にとつて一瞥する。

しばらくの沈黙後に高級羊皮紙を紅茶の隣にソツと置いた。

「意外ね。もう一桁くらいにはなるかと思つていたけれど。」

「それが、元々は9桁だったのですがどういう風の吹き回しか唐突にこの額で結構だと申してきました。」

伊織は少し思案する。相手方に一体どんな意図があつてこの額で結構だと言つたのか。妙な企みが無ければ良いと思うが相手もそれなりに手腕を持つ。何せ人望と自分や他人に厳しいスタイルで水瀬には及ばずも一財産を築いた人物だ。今では街の統治者である彼が、その街を買収されようとしているのに見合わない額を提示してきた。しかも低く。

「ねえ、私には一つしか考えられないのだけど・・・あなたは どう思う？」

実際のところ、この執事は伊織とは考え方がかなり違う。伊織が雪を白か黒という2択を迫つてもマジピンクとか言つてしまう天邪鬼

だ。人の揚げ足を取るのが大好きな奴ではあるが、ここぞと言うときは伊織よりも適格な言葉を口にする。そのおかげで水瀬ブランドの危機を回避したことは一つや二つではない。その執事が羊皮紙の内容を見て伊織と意見が合わない訳がなかった。

「どう考えても後ろ盾でしょう。こちらの提示した好条件に対して破格とも言える値段で街を売ろうとしている。一見見合いそうではありませんが、ただ単にこんなバカなことをしてくる相手ではありません。つまり……」

「万が一、有事の時は良くしてやってくれ……と言うことね。バカバカしい。」

伊織は執事から既に差し出されていたペンを奪い、羊皮紙に走り書きでサインした。ペンを置いたところで若干の不機嫌を執事にぶつける。

「もう少し対等に話してくるかと思っていただけけど、とんだ意気地なしね。あの子たちが居なければ即刻破り捨てるところだったわ。」

あの子たち。つまり伊織と縁のある人間がそこには居た。辺境の街道に時代遅れにも追剥ぎが出るとの情報で向かった先。警護強化のついでに息子の依頼で水瀬ブランドの店舗展開をしようと訪れた街にその二人は居た。記憶に残る懐かしい声。目に焼き付いている懐かしい光景。一人の少女が穴を掘って埋まり、その上から笑顔で声をかけて引つ張り上げようとしている少女。古い記憶を鮮明に蘇らせてくれるその光景は伊織の感情を高ぶらせるには十分だった。人が多かったその場でひっそりと物陰に移動し、声を上げたい衝動を必死に抑え咽び泣いた。

そして、その二人の親と掛け合い水瀬ブランドの店舗を作ることと併せて街の買収の話を持ち掛けた。

もちろん最初は統治者も猛反対したのだが、伊織の出す条件は唾を飲み込むほどの好条件だったのだ。

羊皮紙に明記された条件は3つ。

一つ、街の所有権は水瀬にあるも特に口を出さず、街の統治と権限は現状変わらず引き続き行っても良い。

二つ、水瀬ブランド及びギルド設立による街道と街周囲の随時警備強化。費用は水瀬が持つこととする。

三つ、やむを得ない事情がない限り二ヶ月に一度の会合に出席すること。会合は水瀬邸にて行い統治者の家族、並びに子供の友人一人まですらば同伴を許可するものとする。

「デメリットが殆ど無い条件なのよ？ もはや後ろ盾になっっているも同然だと思うのだけど。」

「世の中、ハッキリ言わなければ解らぬ輩も居ります故。」

「面倒くさいわね。今度来たときにキツチリ言つてやるわ。」

会話で少し冷めた紅茶を一気に飲み干しカップを置いて一息つく。

執事が再び空になったカップに紅茶を注ごうとして、それを伊織が右手で制した。二人の間で無言のやり取りが行われ、ティーポットを置いた執事はテーブルと同じ高さのカートの下から100%オレンジジュースの入ったガラスのピッチャーとカップを取り出す。ピッチャーの湾曲した取手と蓋は金で出来ていて腹部分のガラスにもバラの装飾が施されている。新たなカップに100%オレンジジュースを注いで伊織の前に静かに置いた。

それを一口つけて甘く、少し酸っぱい味を楽しむ。

「そういえば、この前のあの子はどうなったの？」

「はい、別宅にて私の監視の許で過ごさせております。」

「そう。」

先日、大きなスラムのある街を訪れた時にその少女は居た。所々が破けて煤や泥だらけの服を着たまま伊織の前で倒れたその子は、伊織の中で歓喜の感情が渦巻いていた。

見つけたのだ。その少女を。

フラフラと歩いてきた彼女は倒れた時に伊織の手を掴んだ。急いで執事につれさせて屋敷に戻り医者とエリクシーを付けたので大事にも至らず、単に空腹と栄養失調であると聞いたときは大きく息を吐いたものだ。

今ではちゃんとした食事と服を着させて体力が回復するのを待っている状態なのだが。

「どうしても、会う気にはなれないのですか？」

「まあね。会ってどうしろって言うのよ。」

「いえ、どうせまた恥ずかしがっているだけなのでしよう？」

ぐつと声が漏れる。何故なら凶星を突かれたからだ。

その青い髪の少女はかつての友人であることが伊織にはわかってきた。少女からすれば初対面になるわけだが、自分は決してそうではない。幼い彼女に会って平静を装うことが難しそうだった。何かと世話を焼いてあれやこれやと買い与えてしまいそうだった。その彼女に会うこともだが孫娘たちに逢わせることも躊躇っていた。

当時の伊織もやはり最初は彼女に好感をもてなかったことで二人もそうなるのではと危惧していたのだ。

「そこまで頑なにならずとも、何なら御自分の孫として育てられたらいかがですか？」

一瞬思考が止まる。執事の提案に悪くないと思ってしまった。

もしこの巡り逢わせがあの世界にもあったのだとしたら、伊織は早速と出会ったのは学院で。つまりそれまでは出会うことなく、二人を引き合わせる当時の奥様とも会わなかったということになる。

今ここで会っておくのも悪くはないし、孫として養子にするのも悪くはないと思ってしまったのだ。

「・・・あなた、私があの子と会わなかったらどうするつもり？」

「そうですね。近くの町で一人暮らさせます。いくらかの手助けはするものの奥様とは会わせないようにします。」

「・・・んんん。ああもう、仕方ないわね！」

一人葛藤する伊織をニヤニヤしながら見ている執事に上手く転がされたようで少しばかり腹が立つ。

しかし、この執事が居たからこそその葛藤だと思おうと強くも言えない。人間性に問題はあるものの、根は優しく意外にも正義感が強い。人をからかいはするものの怒らせるまでは決してしない。だからこそこの歳まで付き合えたのだ。

伊織にはこのような態度でも青髪の少女には頗る優しくしていることだろう。

そして執事の言うことももつともで、その少女に会いたいし別世界の彼女に対しての恩や義理もある。

「・・・後日連れてきなさい。」

「承知致しました。」

その時、コンコンと扉を叩く音がした。

執事に任せて扉を開かせる。

入ってきたのは可愛い可愛い孫娘たちだった。今は9歳になった彼女も礼節をしっかりと弁えている。

伊織が祖母に教わったように、自分の孫娘にも礼儀作法はしっかりと伝えていなのだ。

「おばあ様。おはようございます。」

「はい、おはよう。」

着衣であるワンピースの裾を持ち上げて挨拶をしたのは桃色がよく似合う少女。長い後ろ髪は腰まであって、前髪は左右に開いてデコが広く見える。

ウサギのぬいぐるみを持ち歩き、幼さが抜けないのが最近の悩みだったりする。

桃色のドレスシックなワンピースを着ている。どちらかと言うとドレスをあまり好まないこの子は誰に似たのか伊織も同じ趣向があるためドレスを着ると強く言えない節がある。

言ってしまうと、お婆様も着てないじゃない。と言われてしまいうだ。

「おはようございますー！」

「あなたは今日も元気で結構なことね。」

次に入ってきたのは孫娘のメイドになる少女。オレンジ色がよく似合う彼女は髪を左右に結んでツインテールで髪を括るのに伊織がプレゼントしたオレンジ色のシユシユを使っている。

衣服は何故か重みのあるオレンジのパーカーを着ることが多い。公の場でなければ衣服は自由にさせているが、キツチリした服より一般的な格好の方が好みだと言ったこともある。

オレンジのパーカーに薄紫のスカートを履いているこの子はとて

も明るく元氣のいい子だ。毎日孫娘と遊んではしつかりと屋敷の手伝いもするとてもいい子に育っている。

この子が執事の孫娘だと言うことが未だに信じられないほどの天真爛漫さだ。

「えへへ、私って元氣だけがとりえですから！」

「ちよつと、おばあ様の前なのよ？ もう少し落ち着きなさい」

「あ、そうだね。すみませんでした大奥様。」

「いいのよ。言葉遣いや気遣いなんて無用だから、もつと私とお話しましょう。」

その言葉に少女はパアつと明るい笑顔を見せる。それを見て嘆息する孫娘は仕方ないわね、と言った顔で片目を瞑り微笑んでいる。

「おばあ様。またお母様に叱られますよ？」

「大丈夫。本気で怒れやしないわよ。二人ともこつちにおいで。」

二人が伊織に近づいた。両方の頭を優しく撫でる。笑顔いっぱい少女とは対照的に自分の孫娘は何故か少し暗い笑みを浮かべていた。

その顔を見て伊織は少し考える。自分自身がこういう顔をしたときは一体どういうことを思っていたのか。そんな考えをしていると孫娘が一步引いて伊織の顔を見ながら両手を胸の前で組んだ。

「あの・・・おばあ様。」

「持っておいで。」

「・・・え？」

一瞬何を言われたのかを認識できなかつたのか、若干の間のあとに何とも間抜けな声が孫娘の口から発せられて伊織は思わず苦笑いしてしまう。

すぐに気を取り直して微笑みながらも一度、今度はちゃんとやりたいことを伝えた。

「本を持っていらつしやい。読んで欲しいんですよ？」

ようやく何が言いたいのかが伝わったようで、理解した瞬間の目の輝きが何とも可愛らしく若さを感じさせる。

孫娘のメイドである彼女も両手を上げて喜んでいた。どうやら伊

織に本を読んでもらうつもりで二人はこの部屋を訪れたのだと、この時に伊織もようやく思い至っていた。

本を読むだけで大はしゃぎする二人を愛おしく見守る。

「は、はい！」

「うっうー！ うれしいかもー！ ハイターツチ、いいい！」

「もう、ハイターツチ！ にひび、今日もいっぱい遊ぶわよ！」

「大奥様に能力の使い方も教わらないとだね！」

「そうよ。私だっておばあ様みたいに凄い能力者になるんだから。負けないわよ！」

「私だって！ あ、でもー。ちよつとだけやりかたを教えてくださいかなーって……えへへ。」

「仕方ないわねえ。じゃあ御本の後でね！」

「うん!!」

「……ああ、お嬢様。そんなに走っては転んでしまいますよ。お前も少し落ち着きなさい。」

賑やかな少女たちと何故か執事も部屋の外へ行き、ガチャンツと扉が閉まる。少しの静寂が訪れ、外には春の強い日差しと窓際を訪れる複数の鳥たちが室内を見てチュンチュンと会話を楽しんでいる。

数秒して飛び立った中に、見慣れない青い鳥が一匹混ざっていた。少しの驚きと安らかな気持ちで伊織の中で温かく留まる。

千早、響……。私はちゃんと、夢を叶えたわよ。あなたたちはどうかしら。

近々みんなのところへ逝くことになるかもしれないけど、あなたたちと交わした日々と言葉は永遠に私の宝物。

あのときのようにこの桜の花吹雪が、ずっと私の背中を押してくれる。

また会いましょう。

賑やかな声と共に扉が開いた。二人の少女が入ってきて、かつての

自分の親友であり家族であり妹だった少女と同じ顔の彼女が両腕に本を抱えて走ってくる。まるで太陽のように輝く二人の笑顔は不思議とあの青髪の少女と仲良くなれるだろうと思わせてくれた。

「大奥様、持って来ました!!」

「お願いします。いとお婆さまー!」

「はいはい。じゃあ今から読みますよ。伊織、やよい。お座りなさい。」

「はーい!」

「じゃあ始めるわね。『眠り姫』ここは異能の能力を持つ者たちが…」

眠り姫 THE @FTERS BE@UTY―水瀬伊織―

終

眠り姫 THE SLEEPING BEAUTY
Y―完結―

「ねえ、やめようよ。」

「ここまで来て何言ってるの?」

少女の一人が扉を開ける。

ギイイ・・・と重い木製の大きな扉を開いて薄暗い中に入る。もう一人も辺りを見回してから恐々と入って扉を閉めた。

ここは名も知れない古城。何百年も前の石で作られたもので、外壁には苔やツタが絡まり所々が砕けたり穴が開いたりしている。鳥の巣にもなっているのか所々飛び立つのが見える。

まさに棄てられた古城と言うに相応しい風貌である。

そして周囲にはこの城に似つかわしくない桜の木が満開の花を咲かせて花びらが舞い散っている。

ナム孤桜丘（なむこおうきゅう）

この場所の名称で世界でも有数の聖域として知られている。何故聖域とされているのか、それは普通の人間には古城はおろか桜の森すらも見えないのだ。ただの緑が生い茂る森にしか見えず、いつ通ろうがどれだけ探そうが全く見つからない。特別な人間にしか辿り着けない桜の森の中にある古城。そこに二人の少女が立ち入った。

果たしてそれが吉であるのか凶であるのか、誰もお御籤の結果はわからない。

二人はナム孤桜丘の南、7キロメートルも離れた街の子供でこの森を探検しに来た。

言い出さずの少女は先日15歳になったばかりで17歳であるもう一人の少女とは姉妹である。普段は寝てばかりなのに興味のあることには活発な妹と、それを世話する弱気な姉は真面目な性格のためか近づいてはいけないと言われたこの森に居ること後にはバレー怒られないかと言う心配をしていた。

何度やめようと言っても気にせず突き進む妹を放っておく訳にも

いかず、仕方なく付いてきた。

中に入った二人は暗いホールに少したじろぐ。

異様な雰囲気、薄暗いホールなのだが、恐怖より不思議という感覚の方が大きい。

蟻の足音すら聞こえてきそうなほど静かで、この城の中だけ時が止まっているような錯覚を覚える。

二人は何故か違和感に苛まれた。どこかで見たことがあるような城内。

足元には赤いカーペットがまつすぐひかれていて、ホールの中心で左右にも伸びている。左右に向かうカーペットの先は通路に続いていて暗闇に消えている。

ホールは左右に少し幅広の階段があつて2階まで続いている。天井には金色で12個の燭台が付いている大きなシャンデリアが微かにユラユラと音もなく揺れている。

姉は胸に手を当てる。何かが疼くような、だけど妙に苦しいような・・・しかしわからない。

この気持ちか一体どこから来ているのか。何故こんな気持ちになるのか。この古城を調べればそれが解るのだろうか。なんの根拠も保証もないが、進まなければいけない気がした。

隣では妹がカーペットの上を指でそつとなぞる。何十何百年と放置されていたはずの古城のカーペットには土や埃が全く積もっていない。それどころか、外と違い中の老朽がまったく進んでいないように思える。壁の石は冷たくサラサラでひび割れ一つなく、カーペットも昨日ひいたのだと言われたら信じてしまいそうだ。

「どうするの・・・？」

「行くよ。」

そう言つてカーペットの上を歩き出し、すぐに姉もあとを追う。

階段を素通りして、まずは奥へと向かった。階段の間を通過して白い扉が姿を現す。何の変哲もない普通の木製の扉で、ドアノブを回してそつと開ける。

中を覗き込んだ妹はそのあまりに壮麗な光景に産まれて初めて身

体を動かすことを忘れて見惚れた。

後から入る姉も小さなため息と共にその光景に見惚れる。
桜だ。

樹齢何百年・・・いや、もしくは何千年だろうか。とてつもなく大きな桜の木が吹き抜けの中庭で独り、花びらを散しながら白く光り輝いている。

その周りには色とりどりの花が咲き乱れ、まるで狭い空間に突然現れた天国ではないかと思わされる。

四方を壁に囲われて太陽など当たるはずもないのに、何故か輝くその桜に姉はとても懐かしい気持ちになった。

本人の意思とは関係なく心の中に一つの言葉が生まれる。

久しぶり・・・。

しかし、姉はその言葉を意識せずただただ桜に見惚れた。

それとは逆に我に返った妹は周囲を見回すも、扉も何もなくてただ壁があるだけだった。空を見上げると、今日は朝から文句のつけようもないほど晴れていたのに今では曇天が広がっている。一雨来そうな天気になんか少し気落ちしてしまった。

姉はしばらく桜を眺めて満足したのか笑顔で妹の後を付いていく。

ホールに戻った二人は次に階段を上がった。階段だけは何故か木製で、足を置いたたびにギンギンと音を立て、その音を13回踏み鳴らし二人同時に最後の一段を上った。

2階で最初に目にしたのはもちろん石の壁だった。次に左右には通路の入り口と金で出来ていると思われる水瓶の形をした蝋燭を刺す突き出し燭台が目映る。通路はどっちも北に向かって曲がっている。右の通路を進むことにした。

凡そ30メートルほどの通路で壁や床は四角い石で敷き詰められている。左の壁に中庭を見ることが出来る窓と右の壁に城の外を見ることが出来る窓が付いている。等間隔に3つずつ合計6個の窓が並んでいて薄暗い通路を少し明るくしてくれていた。数メートル歩いたところで最初の中庭側の窓から外を見た。

そしてその景色に二人は酷く困惑する。

位置的にさっきの中庭が見えるはずなのに、目にしているのは全然違う中庭だった。あるはずだった桜の大木がなく、無かったはずの支柱や植物の植え込みがあつてそこでは二人の少女が戦っている。

自分たちと年代か少し下くらい二人の少女。片やオレンジの服を着たツインテールの少女と片や髪が長く前髪を横に流したデコの広いピンクの服装の少女。

ピンクの少女は防戦一方でオレンジの少女は到底持てるはずもないサイズの支柱を砕いて振り回したり投げたりと戦い方がめちゃくちゃだ。ピンクの少女が何か叫びながら攻撃をかわしているがとうとう電撃で反撃をした後、なんと自分を攻撃してくる相手にわざわざ近づくなどと言う自殺行為に及んだ。

予想通り、見るからに腰の入った強烈な一撃を受けて遠くの支柱まで吹っ飛んだ。

激しく打ち付けられたピンクの少女が腹部を抑えて悶絶している。あれほどの攻撃だと呼吸困難になるのは必至だろう。それを気にも留めずゆっくり近づくオレンジの少女は、ピンクの少女の首を持ってそのまま持ち上げた。

首を締めあげて十数秒、このままでは息絶えてしまうピンクの少女は足をバタつかせて何とか放電した。電撃を受けたオレンジの少女はその衝撃で3メートルほど吹っ飛ぶ。ピンクの少女も地面に落ちて、お互い地面に突っ伏した。

今の攻撃では大したダメージにならないはずなのに今度はオレンジの少女が悶え苦しんでいる様子で地面に頭を打ち付け始める。それを見たピンクの少女がフラフラした足取りでその娘の許へ歩き、必死で彼女を止める。

この時、息を呑んで様子を見守る姉には二人の関係が何となくわかった。自分たちのように姉妹なのか、それとも親友なのか、それほどまでに仲の良い二人が殺し合っていたのだと。

姉は口元を手で押さえ涙が流れる。あまりに悲痛な光景に何が起こっているのかはわからないが心が理解していた。妹の方を見ると口も押えず両目から雫が流れている。

中庭の広い空間で小さくも強く抱き合った二人はいくつかの言葉を交わした後で突然窓全体が真っ白に光り、それ以降は何も映し出さなくなつた。

「ちよつと、どうなつてるの!？」

妹が真っ黒になつた窓の外を食い入るように見ているが何も映らない。

姉は反対側にある窓に近づいて外を見た。

今度は森の中で白い服を着た少女を抱き上げる少年がいる。いや、格好からして少女だろうか。白い少女は腹部が赤黒く染まり、力なく倒れていることから致命的であることが伺える。

黒い少女は必死に腕の中の彼女に呼び掛けている様子で、白い少女がようやく薄っすらと目を開けた。

きっとこの二人も仲がよかつたのだろう。しばらく動かない二人を見つめ続け、とうとう白い少女がゆっくりと目を閉じた。少女の命が尽きてしまったのだと姉妹は悟つた。

窓の端には大きな犬に乗つた少女が反転して離れていくのが見て取れた。

そこでこの窓も真っ黒に何も映さなくなる。

この光景は一体何なんだろう。何故こんなものを私たちに見せるのだろうか、姉は胸やけにも似たモヤモヤを解消したい衝動にかられていた。

妹が次の窓へと走り出すと、姉も急いで妹の後を追う。

中庭側の窓の外に見えるのは真っ暗な空間。銀色の髪の女性と紺色の髪の女性が対面していて、紺色の髪の女性の後ろにさっきのピンクの服の少女とおしゃぶりが異様な存在感を放つ二人の少女。同じ顔をしているところを見ると双子なのか。その横には大きな犬の上に乗っていた少女と眼鏡の女性がいる。

銀色の髪の女性は何か説得しているように見えるが、瞬きをする間もなく紺色の髪の女性が銀髪の女性の胸を右腕で貫いた。その瞬間に姉の胸にもよくわからない痛みが走る。

腕を引き抜いた紺色の女性はそのまま自分の腕の中に銀色の女性

を抱き落とした。

この二人も同様だ。前の窓と同じく関係はわからないが、お互いが掛け替えのない人なのだとわかる。

これほどまでに大切な人の死に別れを見せて一体何を伝えたいのだろう。そう思わざるを得ないほど、この光景は悲痛であり残酷であり苦しいものだった。

銀髪の女性が絶命したのだろう。紺色の女性は強く抱きしめて、この窓の光景は終わった。

姉も妹も動けずに数十秒、立ち上がった妹はフラフラと次の窓へ向かう。

次の窓が映し出したのは今までで一番驚くべき光景だった。

古い建物の屋根の上で相對している二人の少女。黒い服を纏い鎌のような武器を持った金髪の少女と頭にリボンを付けて変わった武器を持つ白と桃色の服を着た少女。

「そん……な……。」

「なんなの……何で……?」

にらみ合う二人は動き、人とは思えない速さで戦い始めた。

紙一重で避けたり当たらなかつたり、必死の表情と武器を打ち合う衝撃で桜の枝がガサガサと強く揺れている。お互い本気で相手を倒す気だということがすぐに分かった。

しかし、窓から視ている姉妹にはこれがスゴイ戦いだと言うことを全く気にしていない。

今二人の頭にあるのはたった一つの事柄だ。

なんで私があそこにいるの……?

そう、この窓に映し出していたのは他でもないこの二人だった。

月の大きな夜空に映る二つのシルエツトが目にも留まらぬ速さで飛び交い、武器を交じらせ、相手の倒すために命懸けで戦っている。

他でもない自分と同じ姿をした少女が。

春香はこの時、この窓が何を映し出しているのか直感的に閃き、その閃きがとても納得できたことで確信に変わる。

『前世』

この窓は前世を映し出している。

そして前世の自分たちが関わっていた出来事を映し出している。

もちろん確証など何もないし本来あるかどうかともわからない前世だが、それ以外に今視ているものをどう説明すると言うのか。

奥に進めばこの謎も解けるのか。考えれば考えるほど解らなくなる状況に窓の光景は変化した。

窓の外の戦いは増々激化していく中で黒くフェードアウトしていった。

完全に黒くなった窓の下淵に手をかけて美希はその場にへたりこんだ。

「なんで・・・美希と春香が・・・戦ってたの・・・？」

「美希・・・。」

「何なのこれ・・・何が・・・訳わかんない・・・。」

美希の涙が止まらない。拭っても拭っても涙はただ手を濡らすだけだった。

何とか頭だけでも撫でてあげたかった春香だが、正直なところ彼女自身も精神的な余裕はなかった。他人事から自身の問題に発展したことにまだ気持ちが付いていけてなくて、手を差し伸べてあげられない。

数分してようやく心が落ち着いてきた。頭を働かせて今の状況や自分たちの状態を整理して、春香はここが選択の時だと思っていた。

このまま美希と進むのか、それとも戻ってこの城を出るか。

進めばきつと何かとんでもないものを知ってしまう気がする。

戻ればきつともうこの城に入ることは叶わないだろう。そんな根拠のない確信が春香にはあった。

「進もう。」

美希は進む気だ。

確かにここまで来たのなら最後まで知りたいたいという気持ちはある。だが春香は、出来ればここで戻る方を選びたいところだった。一度言い出したら誰の言うことも聞かない美希だが、ここで言わなければいけないと思った。

どんな時でも口にするのと口にしらないのでは後の影響が変化する。

例えば、危険が迫っている状態で警告するのとしないので回避出来る確率が変わるように。好きな相手に告白するのとしないので後の人生が変わるかもしれないように。それほどまでに言葉は自己と周りに影響をもたらす。

今の美希にも、もしかしたら思いとどまったりしてくれるのではと淡い期待をしてしまう。

「美希、これ以上は・・・。」

「ダメだよ。」

即座に拒否の言葉がかかる。春香が何を言おうとしているのか美希にはわかっていた。それはつまり、美希自身もここが選択の時であることを意識したと言うことだ。そして春香とは逆に美希はここで戻ってはいけないと思った。

春香が思い至らなかつた美希のその理由を聞いて、息が詰まった。

「街の人たち、ううん。他の人たちには見えない桜の森と城が美希と春香には見えた。これって、美希たちがここに入るための特別な何かがあるってことだよ。」

ハツとする。まさか・・・しかしそんなことがあるのだろうか。

美希の言葉を聞いて、2年前の記憶が蘇った。

世界的な文化遺産とされている本がある。完全な形で現存しているのはたったの3冊で、この本によればこのナム孤桜丘は眠り姫と呼ばれる少女の復活よって、世界的な脅威に陥った。しかし今では失われた“能力”と呼ばれる力で応戦した数人の少女と、その中に居たあ一人の少女がその脅威を撃退し、世界を変革させ平和へと導いた。

2年前、家族で出かけたその展示場で見た一つの絵画。その絵画には、本に書かれている特徴から描き出した二人の少女が描かれていた。

その画は縦120センチ、横85センチで金色の枠に入った特大の絵だった。

左側にレースの付いた黒いドレスを身にまとい、頭に黒い薔薇を乗せて椅子に座る金色の髪を持つ少女。右側に同じくレースの付いた白いドレスを身にまとう髪短い少女。頭には桃色のリボンをつけて椅子に座る姿。

下の説明文にはこう書かれている。

右に座しは救済の鍵、天海春香。

左に座しは眠りし姫、星井美希。

その画があまりにも二人に似ていることから周囲の閲覧客から大きなよめきが上がった。両親も驚き、騒ぎを聞きつけた展覧会の主催がその絵画を背に二人を椅子に座らせて写真を撮らせた。記念に白黒の写真を貰ったが、それ以降特に何かあつた訳ではない。

そして窓から見える自分たちが戦う姿。それはまさしく、眠り姫伝説のワンシーンだったのではないかと思わずにはいられない。

ならば、今まで見た光景は全て眠り姫が存在した時に起こった出来事だともいうのか。

それを確かめるためには、この先へ進むしかないのだろうけど。

そう思っているところで美希が次の中庭側の窓へ向かう。春香もその窓を覗き込む。

そこでは空中で三人の少女が一進一退の攻防を繰り広げていた。美希は一人で閃光を放ち、それと対峙する春香ともう一人の青い髪の少女は二人でその閃光を防いでいた。

そこで春香は気付いた。自分と同じ顔の隣に立つもう一人の少女の姿と顔を。

「千早様・・・？」

「え・・・まさか？」

美希と相対し、春香の隣に居るのは確かに二人がいつも目にする如月千早だった。

眠り姫伝説の主人公にして街の広場の噴水の上に設置された等身大の石像。その像と瓜二つの少女が春香の隣に居る。

何という因果なのだろう。春香はこれが前世の記憶であることはわかってる。となれば、今となつては伝説となる眠り姫の物語に美希と自分が関わっていたと言う明確な証拠がここで映し出された。かつての自分が如月千早とどういふ関係だったのかは定かではないが、この光景は春香の心を締め付けるには十分すぎるものだった。窓はただそれだけを映して真っ黒に変わる。

「春香、大丈夫？」

様々な真実が浮かび上がって来てるが、春香は動揺が酷くなる。美希も動揺しているようだが、春香ほどひどいものではない。

胸元を強く掴んで浅い呼吸をする春香の背中をゆっくりと摩った。残すは後ろの最後の窓。それを見るには大きな覚悟が必要そうだ。現段階ですら精神的な消耗が激しいのに最後まで見ることが出来るのだろうか。

やはり戻ればよかったか。美希の心に迷いが生まれ始める。

落ち着き始めた春香はそのままゆっくりと立ち上がって後ろの窓へと向かう。

「は、春香ごめんなの。もう帰ろう？ このままじゃ……。」

「美希……ダメだよ。」

「……え？」

「進まなきゃ……これは……私たちの。」

まるでうわ言のように呟く春香は美希の静止も聞かず最後の窓を見た。

そして美希も、つられてその光景を見てしまった。

最後の窓から見えたのは、如月千早とおしゃぶりを啜っていた双子がこちらにも伝わるほどの緊迫感を放ちながら話す姿だった。彼女たちは戦ったのか、ただの話し合いではないだろうことは様子から見て伺えた。

その光景だけを映して窓はそのまま黒くなる。

ガシャンガチャリツ

奥の方で鍵でも開いたような音が聞こえた。

二人は立ち上がり、お互いの顔を見合わせて頷く。ここまで来たら

もう進む以外に道はない。踏み入れてしまった城も過去も全てを知るまで踵を返す気にはもうなれなかつたのだ。

通路はそのまま左へと曲がり、その先に少し広めの空間があつて左手にガラス窓があつて、そこにはさつき見た光輝く桜の太木と空に広がる曇天が目に入った。普通の窓だつたことに少し安心する春香の後方。窓と対面にある扉の前に美希が立つた。足元に転がる大きな鎖と錠前から、さつきの音の正体がこれだつたのだとわかる。

その扉を開くと螺旋階段が姿を現した。人が一人通れるくらい幅の石造り階段は灯りもなく、暗闇の中を上がらなくてはならない。

ガラス窓から光が中に差し込んだ。曇天のまま雨が降っていないのに雷だけが激しく轟音を放つ。差し込んだ光はそのまま螺旋階段も一瞬照らし、前が春香で後ろが美希と言う順で上っていく。

足元を確認しつつゆっくり上る二人は、20段を上つたところでやっと広い空間に出た。そこは窓も何もなく、ただ壁とその真ん中に大きな扉があるだけだつた。

シーン……と言う音がとても耳障りで正直この静けさがなければもう少し楽に進めるのだろうか。

二人は扉の前に立つ。

鉄の枠が嵌つていてとてつもなく古いその扉はシンプルで特に装飾の類は施されていない。錠前もなく、ただ開かれるのを待っているようだ。

周囲にも中にも音はなく。自分たちの息づかいだけが響くその空間は扉の音がとてもうるさく聞こえることだろうと思う。

春香と美希は扉の取っ手に手をかけて、重い扉を力いっぱい引いた。

ガガガ、ギギッ……と長く開かれてなかつた扉がゆっくり開ききつた。取ってから手を離して中に恐る恐る入る。

「わっ！」

「のっ!？」

中であつた5つの灯台にボツと炎がともり、その中心には黒い棺が置かれている。

その炎の明るさから棺より手前に2つのシルエットが浮かび上がる。そのシルエットはどうやら人のようで、棺の前に立って春香と美希を見ているようだった。

今まで何もいなかったところに人間の形をしたシルエットが浮かび上がったらそれはビックリもするだろう。

二人は身体が固まってどうすればいいのかわからなくなっていた。

「やつと・・・来たね。」

「そう・・・だね。」

前方から声が聞こえた。その声は中性的だが喋り方に幼さが残る。シルエットは春香と同じくらい的身長か。頭部は髪を束ねているように左右対称のサイドテールに見える。

徐々に目が慣れてきてシルエットの姿もハッキリ見えてきた。

黒いシュシュで髪を右側サイドテールにして左に立つ女の子。黒いドレスを身に纏っている。メイド服にも見えるその風貌は袖や首元、丈が膝まであるスカートに白いレースがついていて綺麗に敷かれた石の床にも拘わらず裸足で立っている。

そしてその右隣には同じく黒いシュシュで左側サイドテールをしている少女。

二人とも全く同じ服装で、違いとしては左の少女よりも少し長い髪の毛であることくらいだろうか。顔立ちは良く似ていて一目で双子であると判る。

この双子はさっきの窓から見た時に居た二人だ。あの窓を見たときにはおしやぶりをくわえていたのに今はくわえていない。その双子が何故ここに居るのだろう。見る限りどうやら敵意は無い様で身構えを解く。

「はるるん・・・みきみき・・・やつと・・・来たんだね。」

「待ってたよ・・・二人が・・・くるの・・・を。」

双子の少女が自分たちを待っていたと言って目が逢う。その目は何か愛おしそうにみるように、それに寂しそうな表情だったり。

今のこの双子の心中を一言で表すのなら。

『万感の思い』

だろうか。

彼女たちが何故そう感じているのかは定かではないが、どうやらそれを確認している時間は無いらしい。

双子の身体が足先から少しずつ光の粒となってゆっくり消え始めた。

「やっど……終わった。これで……これで……」

「ちはやおねえちゃん……やくそく……まもったよ……」

春香が走り出した。それに続いて美希も駆け出し、消えゆく双子に勢いよく飛び込んで強く抱きしめた。

何故そうしたのかはわからない。だけど、何故かそうしなければいけない気がした春香は、考えるよりも先に身体が動いてしまった。

それは美希も同じだったようで、頭では理解できない何か二人の心に渦巻いていた。

「何でかな……でも、こうしないといけないと思ったの。」

「みきみき……」

「ありがとう……ずっと待っていてくれて。もう……いいんだよ。」

「はるるん……」

双子は消えゆく。

抱き着いた時には脛辺りまで消えていた身体はどうとう腰まで到達し、次第に胸と腕を消失させて次には頭部まで完全に光の粒となって消えゆくだろう。

その中で双子は目から涙を頬まで流し、その儂い雫はすぐに粒となる。

「ありがとう……」

そして抱きしめる物質が完全に消滅し、あっという間に双子の頭部も光の粒となって空気に混ざった。

床に膝をついた春香と美希も静かに涙している。

確かに今の双子とは初対面だったはずだ。でも、あの窓の光景から過去に自分たちと何か接点があったのだらうと言う予想はつく。何より、自分たちの心が彼女たちの想像も出来ない頑張りを褒め称えてあげなければ、きつと満足に消えることも出来なかつただらう。

人では絶対に不可能である頑張りをしたであらう二人を何もなしにただ消えさせてしまうのはあまりに可哀想ではないか。

それが春香と美希には理解できたからの行動だった。

一体どれだけの時間をこの場所で過ごしたのだらう。

自分たちを待つために・・・いつ来るかもわからないのに・・・それまでこの場所と棺をずっと守ってきた。彼女たちにももし後世があると言うのなら、何かの使命や運命に囚われず自由に生きてほしい。そう心から願う。

春香と美希は棺の横に移動した。

黒い棺は成人の男性が入るには小さく、ならば入っているのは女の子だろうか。

もしあまり見たくもないものが入っていたらどうしようとも考えるが、開けないことにはきつとこの城に入ってから起こる様々な謎の答えがわからない。

棺の右側に立って蓋に手をかける春香と美希は、力いっぱい押した。

重い蓋はズズズとゆっくりズレはじめ、半分を開けたところで自重により床へと落ちる。

押すだけで息の上がる二人は棺の中を見た。

知っている。

この棺で眠っている少女を知っている。

青い髪、透き通るような白い肌、水玉の乗りそうな長い睫毛、閉じた桃色の唇、胸の前で組む細い指と手。

膝近くまである白いブーツ、足首の青いリボン、ピンクと白と黄色

の六重層フリルスカート、腰部にピンクのリボン、ピンクのラインが縦に入った服。上中下と並んだボタン留め、首元にはみ空色のスカート、同じ色でバラの形をした左頭部の花飾り。

そしてその身体の周りに敷き詰められた桜の花びら。

間違いなく、毎日祈りを捧げる噴水の上に立つ像と同じ姿。

その彼女を知っている。像ではなく、彼女自身を。

「・・・千早・・・ちゃん。」

「・・・千早・・・さん。」

「おはよう、眠り姫。」

棺の中で眠る少女はゆっくり、ゆっくりと目を開き。

二人の顔を見て、微笑んだ。

THE SLEEPING BEAUTY

完

小説 眠り姫 THE DANKAI BE@UTY
Y―質疑応答編―

春香

「みなさんこんにちは。小説 眠り姫 THE DANKAI BE@UTY。進行役は私、天海春香と！」

千早

「如月千早と！」

美希

「星井美希がお送りするの！」

春香

「そして765プロダクションの仲間たち！」

皆

「いえーい！ ドンドンドンパフパフ！」

ピンポンパンポーン…

※この座談会は小説 眠り姫 THE SLEEPING BE@UTYのネタバレがそこそこあります。

先に小説 眠り姫 THE SLEEPING BE@UTYのお読みいただくことをお奨め致します。

春香

「そして、今回の座談会のゲストはもちろんこの人！ 小説 眠り姫 THE SLEEPING BE@UTYを書き上げた自称『下手なモノカキ』つっかけさんです！」

つっかけ

「いやいや、どうもどうも。つっかけです。宜しくお願いします。」

春香

「宜しくお願いします！ では、まずはこちらのコーナーから参りましょう。題してー！」

美希

「1人1問質疑応答コーナーなのー!」

ドンドンドンパフパフ

テツテツテター テツテツテテター

テツテツテター テツテツテテター

千早

「こちらのコーナーではつつかけさんに小説眠り姫に関する疑問や謎な部分をお訊きしていいこうかと思っています。」

美希

「765プロのみんなから1人ずつ質問していってもらうの! まず

春香!」

春香

「え、私?!」

美希

「そうなの、ディレクターさんからは自由にやってって言われたから打ち合わせ通りにいくと思ったら大間違いなの!」

千早

「ほら、春香。」

春香

「最初は美希だったのにい。んーでは、つつかけさんに質問です!」

ジャジャン!

春香

『何故あの予告から小説を書くこうと思ったのか教えてください!』

つつかけ

「それは最初に映画館でTHE IDOLM@STER 輝きの向こう側へを観たとき、冒頭からインパクト大の映画眠り姫の予告が出ましたよね。映画を見終わった後であの眠り姫の映画はこう言う結

未だと良いなと思ったのがキツカケです。自分にはコメントが流れる動画サイトなどでノベマス（映像化）するほどの技術は持っていないのと、前から何か小説を書いてみたいと思っていたので書き始めました。」

春香

「なるほど、じゃあ書き始めたのは昨年の2月よりも前なんですか？」

つつかけ

「そうですね。初めて設定やプロットを書いたのはそれより半年以上は前だと思います。」

千早

「映画鑑賞直後と言うわけでもなかったんですね。」

つつかけ

「むしろ映画を視た直後では書こうとは思ってませんでしたね。こんな物語だったらいいな—的なきつくりした感じでした。」

春香

「ありがとうございます。では、次の質問は千早ちゃん！」

千早

「ええ、それでは質問させてもらいますね。」

つつかけ

「どうぞ。」

ジャジャン！

千早

『私の楽曲である眠り姫の歌詞からも物語を作っていたと言うのは本当ですか？』

つつかけ

「はい、確かに千早さんの歌う眠り姫の歌詞も使って物語を作りました。」

千早

「どういうところがそうなのか、少し説明していただいても？」

つつかけ

「あ、はい。じゃあまず最初の部分からですね。『ずっと眠っていられたら この悲しみを忘れられる そう願う眠りについた夜もある』
ここはあずささんと貴音さんのシーンで使わせてもらいましたね。」

あずさ

「あら、私ですか？」

貴音

「私も？」

つつかけ

「はい、この歌詞からあずささんの設定が悲しい過去を持つヒロインとなった訳です。そしてその妹である貴音さんも似た境遇の中に居たと言う設定を付けました。」

あずさ

「まあ、そうだったんですね。」

つつかけ

「続けて『ふたり過ぎした遠い日々 記憶の中の光と影 今もまだ心の迷路 彷徨う』

これは亜美さんと真美さんの歌詞ですね。」

真美

「これ、真美たちの役の設定で使ったの？」

亜美

「なるほど、だからあんなチーンが・・・」

千早

「これ以降もそれぞれのシーン作りに使われてるのですか？」

つつかけ

「使ってますよー。お話しします？」

千早

「よろしければお願いします。」

つつかけ

「わかりました。『あれは儂い夢そう あなたと見た泡沫の夢 たとえ100年の眠りでさえ いつか物語なら終わってく 最後のペー

ジめくつたら』

これは眠りから目覚めた美希さんが自ら終焉を望む内容です。

サビは基本的に千早さんのシーンです。

『眠り姫 目覚める私は今 誰の助けも借りず たった独りでも明日へ歩き出すために』までが、未来のために独り進む決意を持つ歌詞ですね。

『朝の光が眩しくて 涙溢れても瞳を上げたままで』

これは最後の響さんが千早さんを見送るシーンです。

『どんな茨の道だつてあなたとならば平気だった この手と手つないでずっと歩くなら 気づけば傍にいた人は 遥かな森へと去っていた 手を伸ばし名前を何度呼んだって』

これはお分かりの通り伊織さん、やよいさん、真さん、雪歩さんの4人の別れですね。

『悪い夢ならいいそう願ってみたけど たとえ100年の誓いでさえそれが砂の城なら崩れてく 最後のKISSを思い出に』

これは春香さんと美希さんの序章結末に使ったシーンです。

『眠り姫 目覚める私は今 都会の森の中で 夜が明けたなら未来見つけるそのため 蒼き光の向こうへと涙は拭つてあの空見上げながら』

最後の夜明けと共に千早さんが飛び立つシーンです。何ともわかりやすいですね。

『誰も明日に向かって生まれたよ 朝に気づいて目を開け きつと涙を希望に変えてくれたために 人は新たに生まれ変わるから』

アフターストーリーと完結編のヒントを得た歌詞です。アフターの二つは序章よりも先に書いていたので書くのが少し楽でした。その後完結編が頭に浮かんできたのでそのまま書いた感じです。

『眠り姫 目覚める私は今 誰の助けも今は要らないから 独りでも明日へただ 歩き出すために』

千早さんの歌詞ですね。

『そう 夜が明けたなら 未来見つけるそのため』

これが響さんですね。歌詞のイメージがピッタリだったので本編

の最後は必ずこの二人でメようと思っていました。

そして『蒼き光の向こうへと涙は拭い去り あ空見上げて』

これは戦いが終わり響さんと千早さんの別れのサブタイトルとして使わせてもらいました。

こんなところででしょうか。

パチパチパチ

雪歩

「もっと詳しく教えてほしいですう。」

千早

「そうね。つつかけさん、この座談会の後で詳しく教えてもらえますか?」

つつかけ

「もちろん。今のは簡単に説明しただけですから、詳しく話すと長くなりますからね。後程に。」

美希

「千早さん、今の質問はこれくらいでいいのかな?」

千早

「ええ、十分な回答だったわ。ありがとうございました。」

美希

「次は美希なの。よろしくなの!」

つつかけ

「宜しくです。」

ジャジャン!

美希

『この眠り姫でのテーマとか、拘った事を教えて欲しいの。』

つつかけ

「テーマは物語の中でも結構多く出てくるワードなんですけど、“心”が最大のテーマです。」

美希

「心だけなの？」

つつかけ

「いえ、心は一番優先するべきテーマであって次に人間関係、友情や愛情が来ます。そして拘ったのは道ですね。」

春香

「道？」

つつかけ

「そうです。夢への道、進むべき道、目的とも言うかな。役によってそれぞれ道が違います。最初に春香さんが何年経つても美希さんを助けると言う目的の道があり、他にもアイドルになるうとする少女たちが最後にはそれぞれの道を進むように書きました。」

千早

「確かにみんな違う道に進みましたね。」

つつかけ

「あれは何かのキツカケで閉ざされた道に対してそれぞれがどうするのかと言う、ある意味で現実的な部分を描写しようと思いました。千早さんはアイドルに、伊織さんはアイドルではなく別の道を自ら選択し、逆に真さんは雪歩さんとともに故郷へ帰ります。そう言った『夢を叶えた者』と『叶える必要がなくなった者』と『叶えられなかった者』を描いています。」

美希

「お、思ってた以上に生々しい答えが返って来てちよつと引いたの。」

つつかけ

「あれ、何だろう。ちよつとショック。」

春香

「あ、でも物語としては大事な描写だよね？」

千早

「そうね。あの別れがあってキャラクターたちのその後の生活が書けるのだから、とても大事なシーンね。」

つつかけ

「ありがとう二人とも。いや、確かにこの眠り姫はどちらかと言うと

生々しい作品かもしれない。少女たちの戦いと人生を描くのだから、あまり幻想的過ぎてもダメかなと。」

美希

「そうかも。えっと、リアリティー？　がある方が面白味が増すって誰かが言ってたの。」

春香

「あんまりリアル過ぎるのダメだけどね。」

つつかけ

「そうなんですよね。意外とその辺のバランスが保ててるのかがわからなくて。」

千早

「それは読者に委ねるとしましょう。」

つつかけ

「同感です。」

春香

「さて、これでようやく進行役の質問が終わったところで、みんなお待ちませー！」

亜美

「もー三人ともおっそいよー！」

真美

「そうだよ！　待ちくたびれて干からびるところだったよ！」

真

「屋内なんだから干からびるわけないだろ。春香、進めて進めて。」

春香

「あ、うん。じゃあ次は伊織だね。」

伊織

「やっとな、待ちくたびれて干からびるところだったわ。」

美希

「デコちゃんの場合は反射するから大丈夫なの。」

伊織

「どういう意味よ！　あとデコちゃん言うな！」

千早

「ほら水瀬さん、質問。」

伊織

「あ、ああそうね。文字数も少ないし。こほん、じゃあ質問するわ。」

つつかけ

「はい。」

ジャジャン！

伊織

『予告映像があるから仕方ないかもしれないけれど、死なせることはなかったのでは？』

つつかけ

「あー、なるほど。そう言えば撮影のときに言っただけみたいですね。」

伊織

「そうよ。予告のせいもあるけど、やよいや雪歩も貴音も殺すことはなかったんじゃない？」

真

「それはボクも思ったけど、そうした理由を教えて欲しいかな。」

つつかけ

「確かに、死なせる必要があったかどうかと云うとありました。」

伊織

「あつたんかい！」

つつかけ

「ええ。僕の持論になってしまいますが、人が大きく急激に変わるとしたらそれは身近な人の死だと思っています。良くも悪くもですが。」

真

「ちよつと極端かなって思うんですけど、その辺はどう思います？」

つつかけ

「逆に極端だから良いと思いました。物語はそれぞれが成長や変化をしなければ面白くない。特にこの眠り姫は伊織さんと千早さんの成長を強く描きました。」

伊織

「確かに私の出番、結構多かったわね。」

つつかけ

「はい、まさに眠り姫で一番成長させたかったのは伊織さんだからです。偏見を持つ伊織さんの役は一番身近なやよいさんを仕方なく死なせてしまうことにあります。そこから這い上がる人の強さをメインに書かせてもらいました。」

響

「でも、やよいが死んだら一番立ち直れなさそうだけど。」

つつかけ

「そりゃあ普通のままのやよいさんを手にかけてしまったのなら立ち直れないでしょう。」

伊織

「なんか引つ掛かるわね。」

つつかけ

「でもこの時、伊織さんは復讐する相手が居ました。」

律子

「私ですね。」

つつかけ

「そうです。しかし、地下で復讐の標的が貴音さんに変わります。そして怒りからボルテージ現象を発現させ、最後はあずささんが止めを刺した。地上に戻り復讐相手がいなくなったことと響さんの言葉でやっと伊織さんの心がやよいさんの死を本当に意識するわけです。」

雪歩

「あの〜。」

春香

「どうしたの雪歩？」

雪歩

「あ、あの・・・わかつてはいるんですけど、そのー。やよいちゃんの名前で死んだってばっかり言うのはあんまり・・・」

つつかけ

「あ、そうですね。気が回らず、すみませんやよいさん。」

やよい

「あ、いえ。大丈夫ですので続きをお願いします。」

つつかけ

「それでは。で、伊織さんはそこで1つのある可能性に思い至ります。」

律子

「私の世界に行けばやよいに逢えるかもしれない。と言う可能性ですね?」

つつかけ

「まさに。律子さんとあずささんがあの場に居たことで別世界の存在を知った伊織さんはアイドルになる夢からやよいさんと再会する夢に変わります。それが伊織さんの成長と進む道の全てですね。」

伊織

「なるほどね。それが『夢を叶える必要がなくなった者』なのね。」

つつかけ

「そうです。そして伊織さんは産まれた世界のすべてを捨てて新たな夢を追いかける訳です。やよいさんと再会すると言う夢に自分のすべてを賭けたと言うことですね。」

伊織

「・・・なんだか今でも泣けてくる設定なんだけど。」

やよい

「伊織ちゃん・・・。」

つつかけ

「これが伊織さんの物語の動線ですね。雪歩さんと貴音さんに関して、また後程で。」

春香

「はい、では次に行きまっしょう!」

美希

「ほらほら、次はあずさの番なの！」

あずさ

「あらあら、私の番なの？」

美希

「そうなの！」

千早

「あずささんの番なの。．．．こほん、質問をどうぞ。」

あずさ

「じゃあ、せつかなので訊いちゃいますね？」

つつかけ

「はい、どうぞ。」

ジャジャン！

あずさ

『つつかけさんは恋人がいらつしやるんで

伊織

「ストオオオーッツップ!!」

あずさ

「あらあら、どうしたの伊織ちゃん？」

伊織

「何を訊こうとしてんのよ！」

あずさ

『つつかけさんは恋人がいらつしや

伊織

「だからちがああーう！ 眠り姫のこと訊きなさいよ！ 個人的

なことは後にしなさい後に！」

美希

「自由だから別にいいんじゃない？」

伊織

「そこ、煽るな！ あずさ、眠り姫について質問しなさい眠り姫について

て！」

あずさ

「わかったわ。眠り姫のことね。」

伊織

「はあ・・・危うく放送事故になるところだったわ。」

美希

「じゃああずさ。今度こそ行ってみるの！」

ジャジャン！

あずさ

『私の役は設定が濃くて書くのが難しくなかつたですか？』

つつかけ

「答えだけを言えば難しかったです。」

貴音

「私とあずさは未来から来たと言う非常に難しい設定でございました。あずさのこの問、私にも多少は関わりがあるかと。」

つつかけ

「そうですね。では、あずささんと貴音さんのお二人に関わるこの質問に答えるとします。」

あずさ

「よろしくお願いします。」

つつかけ

「まずあずささんと貴音さんが未来から来たと言う設定は予告にあった千早さんの口に指を立てて、人が来ちゃうでしょ。というセリフで思いつきました。」

あずさ

「まあ、あれだけで未来設定が出来上がったんですか？」

つつかけ

「はい。あの場面は単純に二人が秘密の会話をするシーンだと解釈した僕は、まずその秘密が何なのかを考えました。秘密があると言うこ

とは何か目的があつてここに居るのだと思つたので、次にその目的を考えました。予告であずささんが貴音さんに羽交い絞めにされているシーンがその目的を決定させました。」

貴音

「なるほど。その目的と言うのは、私を見つけ出すことだったのでね?」

つつかけ

「ご名答です。あずささんの目的は行方不明である妹の貴音さんを探し出すこと。しかし、それだけでは未来設定を作るには少し足りませんでした。」

響

「あ、そっか。そこで眠り姫の歌詞が出てくるのか。」

つつかけ

「その通りです。よくわかりましたね。」

響

「え、えへへ。自分完璧だからな。それくらい簡単にわかるぞ!」

つつかけ

「そう、そこであの眠り姫の歌詞が出てくるわけです。あずささんと貴音さんが過去に悲しい出来事を経験したと仮定して、極端に考えて身近な人の死や戦争と言つた類で重いものにしようと思ひました。戦争が一番手っ取り早く、その相手がまだ復活していない眠り姫であるなら現在とは違う未来から来たと言う設定が一番しっくり来たのです。」

伊織

「とんでもない設定ね。あれだけでよくそこまで膨らんだものだわ。」

つつかけ

「悲しい過去を経験している二人は対極。つまり、正気か狂気かと言うことでした。これが本編で二人の運命を別つ結末に行き着くわけです。」

やよい

「でも、お話だと貴音さんも正気だったんですよね?」

つつかけ

「そうです。貴音さんは狂気の自分に気付いた。だけどその時には既に数多くの人間を実験で手にかけて後だったことで、後戻りも取り返しもつかない状態だったのです。だから最後には最愛の姉に与えてもらう死と、友を手にかけてこの謝罪で貴音さんの役は幕を閉じるわけです。アフターではそれらは全てリセットされ、貴音さんとあずささんが願った平和な世界になっていると言うことですね。」

響

「まさに発想の勝利ってやつだな。」

美希

「それじゃあサクサク行くの！」

春香

「次は亜美だね。」

亜美

「んっふっふ。亜美がつつかけ兄？に印籠を渡してしんぜよう。」

律子

「引導でしょ。」

やよい

「いんどう・・・？」

亜美

『亜美と真美の役がハッキリちなかつただけど、これって何で？』

つつかけ

「おっふ、痛いところを突いてきますね。」

真美

「やったね。ダメージ通ったみたいだよ亜美！」

亜美

「これで勝つる！」

つつかけ

「実は亜美さんと真美さんの役は謎が多いまま終わりました。これはわざとです。」

貴音

「はて、何故そのような？」

つつかけ

「それは、特に重大な役割を持っていたからです。」

真

「役割・・・ですか？」

つつかけ

「ええ。双子の役は身体の時間が止まって何百年も生きている設定で、能力も時間操作と次元空間操作とこれだけしか使えません。なので戦闘ではからつきし役に立ちません。能力を使っても魅力の消費が激しくて連発出来ないと言う役立たずぶりです。」

亜美

「おいしい！ 兄・が付けた設定でしょーが！」

つつかけ

「まあそれでも皆と同じで大活躍だったじゃない。」

亜美

「ん、まあ、そうだけどさ。」

真美

(あれ、これ真美が一番地味だったんじゃないや・・・いやいやまさか・・・)

つつかけ

「で、話を戻すと二人の役割は監視役です。」

真美

「監視？ 誰の？」

つつかけ

「眠り姫の。」

亜美

「え、意味わかんないんだけど。どゆこと？」

つつかけ

「まあこれはそのうち書こうと思ってるんですが、完結編で春香さんと美希さんが最後の窓で視たものに繋がってるんです。」

千早

「あの本編にはなかった亜美と真美と私が話してる場面ですね。」

亜美

「あー、あれだけ撮影してイマイチよくわかんなかったヤツだね。」

つつかけ

「そう、あのシーンは二人が千早さんに正体を告白したシーンなのです。なので多くは語れませんが眠り姫の監視と言う役割があったことだけは表に出しておきます。」

真美

「その辺の解説は今度ちゃんとやってよね！」

つつかけ

「オツケー☆」

春香

「さあ、続いては雪歩よろしく！」

雪歩

「は、はい。えっと、よろしくお願ひしますう。」

つつかけ

「どんとこいです。」

雪歩

『つ、つつかけさんの気に入ってる演出は何ですか？』

つつかけ

「全部」

雪歩

「あうう、そ、そうじゃなくて、あの、その・・・あ、穴掘って埋まっていますう!!」

美希

「んー、これも面白いけど話が進まないの。つつかけさん、特に好きな演出に変更なの！」

つつかけ

「わかりました。あ、雪歩さん。冗談ですから出てきてくださいね。」

雪歩

「うう、はい。」

つつかけ

「そうですね。ベスト3をつけるとしたら3位は“伊織さんとやよいさんの別れ”ですね。」

伊織

「ちよつと、そこは1位でしょ。」

やよい

「でも、3位でも嬉しいです！」

つつかけ

「あのシーンは伊織さんを想うやよいさんの言葉と伊織さんの心情を書きました。とても難しいものでしたが、自分としては良く書けた方かなと思います。」

律子

「確かに、あの表現の仕方は結構独特だなとは思いましたね。解りやすかった解りにくかったかは別として。」

つつかけ

「ぐふっ」

やよい

「第2位です。」

つつかけ

「第2位は“春香と美希の本当の再会”ですね。」

春香

「それは私たちの最後のシーンですか？」

美希

「素っ裸シーンなの。イヤッンなの。」

律子

「ちなみにあのシーンの撮影と編集は女性スタッフ総動員だったのでご心配なく。」

つつかけ

「律子さんありがとう。あのシーンは最も書きたかったシーンの一つだったので書いたのは嬉しかったですね。実際は裸でなくても良かったのですが、精神世界の表現として使わせてもらいました。」

真

「あの最後の一押しはボクも少し泣いちゃいました。」

雪歩

「私も、あのシーンはスゴく泣いちゃいましたあ。再会シーンのお話の作り方や演出面で勉強になりましたあ。」

つつかけ

「二人が再会するのは初めから考えていたのですが、書いてみて何かが少し足りないと思ったので最後の一押しを書きました。その役割はもちろん・・・」

貴音

「私です。」

つつかけ

「はい。春香さんと美希さんと貴音さんは仲の良い学友です。」

春香さんの居ない律子さんの世界では美希さんは貴音さんの能力を見て憧れを抱いていました。それは春香さんの居る世界でも同様で、二人を手にかけてしまった貴音さんの二人への罪滅ぼしと言う形にしました。

春香さんと美希さんは背中を押してくれたのは千早さんだと思っただけで終わりましたけど。」

貴音

「今までのことを思えば、お二人に顔を合わせられない。ですが助けたい思いから春香の背中を押し、去っていく。これは二人と私との永遠の別れも描かれていると読み取っておりますが。」

つつかけ

「はあー、感服です。春香さんを押すあのシーンは貴音さんの役の心情を凝縮したつもりです。今までの罪悪感や二人への罪滅ぼし。直接謝りたいけれど責められてしまうかもしれない怖さ。しかし再会を果たし泣きながら抱き合う二人を見て必要は無いと思いを消します。その表現を手押しと銀色の髪が微かに見えると言うものになりました。我ながら良いシーンだと思います。」

貴音

「仰せつかった大役を果たすことが出来たようで、私も感無量です。」

欲を言えば、今ならば更に上手くこなせるでしょうが、それも後の祭り。完成したものが最良であると思い、これからも精進して参ります。」

美希

「ありがとうございます。次、第1位！」

つつかけ

「これは僕としては“千早の覚悟”ですね。」

千早

「それは私が眠り姫になる前のシーンですね？」

つつかけ

「そうです。最初の春香さんと千早さんの出会うシーンはもう一度どこかで出せないものかと思いい、精神世界として使用しました。思い付いたのは眠り姫との戦いが始まった頃ですね。成立してるかは不安ですが。」

響

「自分で読むのと人が読むのはまた違うもんなー。」

つつかけ

「それなんですよね。だから自分がイメージしてるのと人がイメージしてる差がデカ過ぎるのではと思ったり……。」

伊織

「話が脱線し始めてるわよ。」

つつかけ

「おっと失礼。あのシーンは精神世界の導入の仕方が大好きですね。」

美希

「確かにあれはスムーズだったと思うの。目を閉じて昔を想像しながら……精……神世……界……に……zzzz。」

春香

「ちよっと美希!？」

千早

「精神世界ではなく夢の世界に入っちゃったわね。」

美希

「ん〜、なんなの〜？ あふう……………zzz」

雪歩

「あ、あのシーンはまるで映画のような切り替わり方がとっても好きですう。」

つつかけ

「ぐふう。雪歩さんに好きって言われた雪歩さんに好きって言われた雪歩さんに好きって……」

伊織

「なんでこんなのが作者なのかしら。」

つつかけ

「全くですね。」

伊織

「あんたが言うな！」

つつかけ

「まあここは本当に映画みたいにカットが切り替わるイメージで書きましたので、撮影でそのまま使ってくれたのも嬉しかったですね。」

千早

「監督も気に入ってるシーンみたいでしたので拘ったみたいですよ。」

つつかけ

「後で菓子折り持っていこつと。」

春香

「じゃあ、美希が寝ちやつたので私が代わるね。真、お願いね。」

真

「えっへへ、待ってました！ じゃあ僕から質問です。」

つつかけ

「オツケ。」

真

『書いていて一番楽しかったのはどのシーンですか？』

つつかけ

「おや、真さんにしては意外な質問ですね。もっと乙女チックな質問

かと思つてましたが。」

真

「そうしようと思つたんですけど、どうせだったらこれを読んでるみんなが知りたそうなことにしようって」

つつかけ

「真さん……。」

真

「雪歩が……。」

雪歩

「(・ω・)b」

つつかけ

「d(・ω・)!?」

伊織

(知らない間に妙な協定が出来てるわね。)

つつかけ

「書いていて楽しかったシーンですか。んーそうですねえ。やっぱり書いていて一番楽しく筆が進んだのは伊織さんアフターストーリーですね。」

伊織

「え、私?」

つつかけ

「はい。実はプロットを作る前に簡単な設定だけ作って一番最初に書いたのが、あの伊織さんがメインのアフターストーリーなんですよ。」

やよい

「それって、物語の……えーつと……ふ、ふくびき?」

千早

「伏線ね。」

やよい

「あ、そうですね! ふくせんも書いてたんですか?」

つつかけ

「と言うより、実はあのアフターストーリー全部が伏線回収の物語な

んですよ。」

響

「全部?」

つつかけ

「はい。読んだ方ならわかると思いますが、アフターで出てくる老婆役の伊織さんは本編で千早さんが言っていた『奥様』のことです。その奥様は名前を“いお”に変えて暮らしています。そして“伊織のおばあさん”であって戦闘衣装の第一人者であるわけです。これも実は本編にちゃんと書かれています。」

春香

「書いてましたっけ?」

あずさ

「確か、私が戦闘衣装に変身した時に書いてたと思うわく。」

つつかけ

「本編を書く前に伏線として先に書いていたのは青い髪の少女を助けることと、執事の孫がやよいさんだということでした。あの中で唯一書いてなかった内容は穴を掘る少女と傍で笑う黒髪の少女の住む街の部分はキレイさっぱり後付けです。」

真美

「何でそこを書いたの?」

つつかけ

「あのアフターは本編に伏線を数多く作るためにありました。その本編で悲しい結末を迎えた二人の一部を書きたいなと思ったんです。」

律子

「100年前の貴音のいない別世界では平穏に生きているシーンを書きたかった・・・と言うことですか?」

つつかけ

「半分はそうですね。」

律子

「半分なんですか?」

つつかけ

「はい。律子さんの言ったことを書きたかったと言うのも確かですが、あの物語はあくまで老婆役の伊織さんの話ですから伊織さんが思ったことを書かないといけません。だから本編で千早さんが関わった奥様との違いを出したかった。」

千早

「明確な違いは私と奥様が会うか会わないかですね。」

つつかけ

「そうです。そして世界を巡りながら産まれているであろう友人たちを集めます。穴堀少女と黒髪少女は街を買い取ったことで監視下に置こうとしました。」

そして2ヶ月に一回の会合で子供の友人一人まで同行を許可すると言うのは、学院ではなく伊織さんの屋敷で全員を集めて友人関係を作らせると言う目的があります。

でも青い髪の少女を見つけることが出来ても、下手をすれば孫伊織と仲違いしてしまうかもしれない。それを穴堀り少女と黒髪少女の加入で和を作りやすくしました。孫伊織が青い髪の少女とケンカをしても黒髪少女なら仲を取り持つことが出来るからです。つまり、あの街を条件付きで買うと言うのは穴堀り少女と黒髪少女の保護と同時に青い髪の少女が孫の伊織さんとやよいさんとの友人関係を築きやすくするためのものです。」

律子

「あの内容にそんな裏設定が……。」

つつかけ

「まあぶっちゃけこのアフターストーリーを読んで欲しいがために全部書いたようなもんですしおすし。」

千早

「本当にぶっちゃけたわね。」

貴音

「おすし……。」

響

「貴音、よだれよだれ。」

春香

「さておすしは・・・じゃなかった。お次は、やよい！」

やよい

「はーい！ それじゃ、質問しちやいます！」

千早

「・・・かわいい。」

やよい

『えーつと、へいこうせかいについて教えて欲しいです！』

つつかけ

「あれ、やよいさん誰かに教わったって言ってませんでしたっけ？」

やよい

「はい。伊織ちゃんに教わったんですけど、弟たちに質問されて上手く説明出来なかったので、もう一度教えて欲しいかなーって。」

つつかけ

「何度でもー！」

やよい

「よろしくお願いしまーす！」ガルウイング

つつかけ

「では改めて。僕の考える平行世界は常に生まれているものだと思っています。それこそコンマ秒単位で。」

律子

「それもスゴい話ですよ。壮大ではありませんけど無いとも言いきれない理屈がありますし。」

千早

「言い出すとキリがないほどの数が生まれていることになるのよね。」

つつかけ

「人は無意識的な選択と意識的な選択を常に行っている生き物です。無意識的な選択は直感。意識的な選択は判断。それを常に繰り返している訳です。」

やよい

「??？」

伊織

「良い？ やよい。あなたは今日のこのスタジオに遅刻せずに来たわね？」

やよい

「はい、もちろんです！」

伊織

「でも、もしかしたら今日やよいは遅刻をした世界が在るかもしれない。い。」

やよい

「!？」

伊織

「そしてそれは1時間の遅刻なのか1分の遅刻なのか、そして1秒の遅刻なのか。そんな世界が在るかもしれないのよ。」

やよい

「えっと、じゃあ時間の数だけ平行世界があるってこと？」

伊織

「そう。それに加えて人がやった行動が加わる。」

やよい

「あ、それが遅刻？」

伊織

「そう。やよいは遅刻したかもしれない。やよいじゃなくてもこのメンバーの誰かが、スタッフの誰かが遅刻したかもしれない世界があるってことよ。」

やよい

「ううう、頭がごちゃごちゃです。」

あずさ

「やよいちゃん。町内会の福引きってやったことある？」

やよい

「はい、それはもう毎週のように！ いつも5等なんですけどポケッタティッシュが貰えてとってもお得ですよね！」

つつかけ、響、伊織、千早

「(; ω ; ;) ぶわあ！」

あずさ

「そうねえ。でももしかしたら5等じゃなくて4等が当たった世界があるかも知れないわね。」

やよい

「え？」

あずさ

「3等が当たった世界とか2等が当たった世界なんかもあるかも知れないわ。」

やよい

「そんな世界があったら、家族にすごい景品を持って帰れちゃいます！」

つつかけ、響、伊織、千早

「(; ω ; ;) ぶわあ!!」

あずさ

「でも、やよいちゃんの前の人が1等を当てちゃうかも知れないわね。それとも後ろの人が。」

やよい

「あつ・・・そっか。」

つつかけ

「そう。ガラガラを回すのがあと1回転多ければ1等だったかもしれない。もしくは半回転。前の人が1人少なかったらと、そんなどれだけあるか分からない可能性の数だけ平行世界が在るのだと僕は思います。」

貴音

「とても空想的ではありますが、それもまた物語の楽しみかたの一つなのですね。」

つつかけ

「平行世界なんてものは人の数だけ考えがあるもんです。それを持論として物語に使うのは完全に好みが別れるだろうと思いましたが、それでも今創れる自分の世界を目いっぱい出してやろうと思って出来

上がったものです。」

伊織

「ふん、読みやすい読みにくいとは別として完結まで作りきったのは大したものじゃない。」

つつかけ

「いやあー、そう言ってもらえるとありがたいですねえ。」

真

「やよい、これで弟君たちに説明できそうかい？」

やよい

「はい！ メモもしたので大丈夫です！ ありがとうございますーす
！」ガルウイング

春香

「じゃあ次は律子さん！」

律子

「そうねえ。これは質問じゃなくてどちらかと言うとクレームなんだけど。」

真

「それって前に言ってたやつ？」

雪歩

「と言うより、ずっと言ってますう。」

つつかけ

「律子さんもなかなかシツコイですね。」

亜美

「リツコイ？」

律子

「だ〜れ〜が〜リツコイよ！」

つつかけ 亜美

「ひっ！」

千早

「ほら律子、とりあえず言ってみて。」

律子

『まったく・・・どうして私の出番があんなに増えたんですか。』

真

「出番の延長が決まった時もずっとブツブツ言ってたよね。」

律子

「そもそも私はプロデューサーなんだから出演すること自体がおかしいのよ。」

つつかけ

「それはティンと来て当人の知らないところでキャスティングに組み込んだ高木社長に言ってくださいよお。」

律子

「前に事務所でじっくり絞らせてもらいました。」

伊織

「そういえばこの所えらく落ち込んでたわね。」

やよい

「えー、そうなの？」

真

「床に正座させられて律子の説教が終わったところで、やよいのおはようハイタッチにはさすがに吹き出しそうになったよ。」

響

「伊織とやよいは事務所についたばかりで状況が呑み込めてなかったさ。」

貴音

「まさにうわやよいつよいですね。」

真美

「お嬢ちゃん？」

雪歩

「ごころなしか、色素も薄くなってたように思いますう。」

千早

「みんな言いたい放題ね。」

春香

「ま、まあそれくらいに。」

美希

「でもあれは社長が悪いって思うな。」

春香

「あれ、いつの間に起きてたの!？」

美希

「・・・実は起きてたの。」

春香

「嘘おっしやい！」

真美

「でも確かにあれは社長が悪いっちゃあ悪いよね。」

亜美

「そうだよ。律ちゃんにだけ言わないから。」

律子

「待ちなさい。・・・今、私”だけ”って言ったわね。」

亜美

「あ・・・。。。」

律子

「みんな知ってたのね・・・？」

全員

「のワの」

つつかけ

「ま、まあこの質問・・・というかクレームに関しては、次の各話ごとの座談で回答しますから。」

春香

「あ、じゃ、じゃあ次に行きましょう。響ちゃん！」

響

「はいさー！　じゃあちよつと小耳にはさんだ質問いくぞー！」
つつかけ

「はいさー！」

響

『生き残るのは千早と自分の二人だけだったってホント?』

つつかけ

「フアツ!？」

響

「・・・その反応・・・ホントだね？」

つつかけ

「え、いや、あのそのえーと・・・・・・チガウアルヨ。」

伊織

「なにその聞いてほしそうな反応。」

つつかけ

「いや、むしろ聞いて。」

響

「めちやくちや素直だぞ。」

つつかけ

「実は最初、これは伊織さんのアフターを書く前のことなんですけどね。頭の中だけで考えてたのはみんな死んじやう設定だったんですよ。だけど伊織さんと真さんが死ぬ理由が無くてですね。」

千早

「私にはその二人の方が理由を作りやすいと思ったのだけど、違うのね。」

つつかけ

「ええ。ぶっちゃけ二人を戦いで死ぬ内容にするとビックリするくらいつまらなかつたんですよ。だからと言って自殺は論外ですし。じゃあ生かしちゃえって出来た設定が美希さんの質問で答えたそれぞれの道です。」

美希

「なんだつけ・・・あふう。」

あずさ

『夢を叶えた者』と『叶える必要がなくなった者』と『叶えられなかった者』・・・ですね。」

つつかけ

「はい。おかげで伊織さんと真さんの生存に意味を持たせることが出

来ました。」

響

「でも律子もあずささんも死ななかつたよね。その理由は？」

つつかけ

「最初は貴音さんと伊織さんが相打つ予定でした。ですが、二人の力量差を考えても真つ向勝負で相打ちは難しい。逆に伊織さんを生還させるのなら戦力が必要でした。そこで、律子さんを参戦させて貴音さんを討つことになりました。そして貴音さんの悲運の救済として、あずささんが生きたまま未来に戻り本来あるべき未来を幸せに生きる流れに持つていきました。つまり、律子さんとあずささんが生きてないと貴音さんの役が活きなかつたんです。面白いのは伊織さんを生還させることで皆の生死に意味が出て来たことですね。」

響

「そっか。それから伊織のアフターを書いたんだね。」

つつかけ

「そうです。そこまで考えてラストの展開をイメージしたらアフターを書くのは楽でした。」

貴音

「さて、それでは最後に私から質問させていただきます。よろしいですね、春香。つつかけ殿。」

春香

「あら、進行取られちゃった。ではラストの質問どうぞ！」

貴音

『戦いが終わってから響お婆様が亡くなるまでの凡そ80年。この空白に何があったのかを語ることはあるのでしょうか？』

つつかけ

「そうですね。正直書きたいと言うのはあります。実際まだ亜美さんと真美さんの話が残ってますし、僕自身がそういう空白の物語が大好きですから、時間があれば書くかもしれせん。」

雪歩

「あのお、ストーリー案はあるんでしょうか？」

つつかけ

「ない訳ではないです。他の人を出演させて外伝を作ったり、千早さんがどんな80年を送ったのかなどをラストシーンから作ればそう難しくもないと思います。」

伊織

「でもそれは新作の途中で書くことになるんでしょ？」

千早

「時間が大変そうね。」

つつかけ

「ま、何とかなるでしょ。」

亜美

「うわ、ちょー適当なんですけど。」

真美

「その適当さで真美たちの話作らないでよね。真面目に書いてよつつかけ兄？」

つつかけ

「わかってますよ。ご心配なく。」

春香

「私的には、美希や貴音さんとの学院生活を書いてほしいかなーなんて。」

美希

「あ、それ美希も思ってたの。100年前の物語、凄く気になるの！」

貴音

「それは私も是非目を通してみたいものですね。」

つつかけ

「いいですねえ。考えときますよ！」

やよい

「私たちが入学した1年生の時のお話も見てみたいかもです！」

真

「いいね！ それボクも読んでみたいよ！」

響

「そろそろ時間じゃない？」

律子

「そうね。この時点で残りの文字数が200を切ったわ。」
あずさ

「あらあら。それじゃあ、前半はここまでですね。」

春香

「それでは！ 小説 眠り姫 THE DANKAI BE@UT
Y。1人1問質疑応答コーナーは私、天海春香と！」

千早

「如月千早と！」

美希

「星井美希と！」

つつかけ

「つつかけと！」

春香

「765プロダクションの仲間たちがお送りしました！」

皆

「いえーい！ ドンドンドンパフパフ！」

春香

「お次は、小説 眠り姫 THE DANKAI BE@UTY 後
半戦。各章ごとにつっかけさんにお話しを聞いていきますねー！
次回もよろしくお願いします！ 以上、天海春香でしたー。」